

授業科目	英語コミュニケーションⅠ	担当者	近藤 未奈		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

この授業では、語彙、リスニング、会話、文法の各技能の演習をバランス良く行い、医療実務に役立つ総合的な英語力の養成をはかります。基礎的な英語文法の確認をしつつ医療関連の語彙を増やし、ロールプレイ方式での会話練習を行うことにより、実際の現場で英語を使うことのできる能力の習得を目指します。

■ 到達目標

医療専門分野に関係した基礎的な英語表現に慣れ、現場で実際に英語が必要とされた時に適切な対応ができる英語運用能力を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション：受講にあたっての諸注意／イントロダクション：医療現場で英語を使えることの意義を知る
- 第2回 Getting to Know the Patients (1) 患者のおおまかな症状を知る
- 第3回 Getting to Know the Patients (2) 患者の外科症状を知る
- 第4回 Getting to Know the Patients (3) 皮膚の症状を知る
- 第5回 Getting to Know the Patients (4) 患者の生活習慣を知る
- 第6回 Examination (1) 検査に際して指示をする
- 第7回 Examination (2) 同意を得る
- 第8回 Instructing Medication 服用法を説明する
- 第9回 Treating the Patients (1) 回復中の患者に対応する
- 第10回 Treating the Patients (2) 患者の心情を理解する (1)
- 第11回 Treating the Patients (3) 次回の予約・電話対応
- 第12回 Operation 手術を受ける患者に対応する
- 第13回 In the Hospital 病院内を案内する
- 第14回 Emergencies 患者の心情を理解する (2)
- 第15回 Living a Healthy Life 健康的な生活を指導する

■ 評価方法

受講態度（予習・授業への取り組みなど:40%）、小テスト（20%）、筆記試験（40%）を総合的に評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書の予習指示があった場合、指定の箇所の英語を読み、必要に応じて英和辞書を使い、内容を日本語で理解・説明できるようにしておく。小テスト対策の勉強は教科書の内容をスムーズに理解するための予習も兼ねているので、範囲の語句の意味を覚えておくこと。

■ 教 科 書

書 名：実践看護英語 ― 専門用語の習得と英会話能力の養成 ―
 著者名：竹林修一
 出版社：英宝社

■ 参考図書

書 名：医療者のための総合英語

著者名：勝井伸子

出版社：ピラールプレス

■ 留意事項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語以上に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。

成績評価基準の詳細やその他諸注意については初回授業で伝えるので、必ず初回から出席してください。

授業科目	英語コミュニケーションⅡ	担当者	近藤 未奈		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

この授業では、英語によるコミュニケーションのために不可欠な、英語の聞き取りと発音のトレーニングを行います。また、音声英語の特徴に関する基本的な理論を系統的に学び、その知識を実践・応用できる能力の養成を目指します。授業中のアクティビティー（演習）に積極的に参加し、予習や復習に取り組むことにより、さまざまな状況下で英語が必要になった際にも対応できる力が身につくことが期待できます。

■ 到達目標

日本語を母語とする英語学習者が特に苦手とする、リスニングと発音に関するトレーニングを行い、実際に正しい発音で話す練習をすることで、英語を正確に聞き取る能力と話す能力を同時に高める。

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション：受講にあたっての諸注意／イントロダクション：日本語話者の苦手な英語の音・英語と日本語の音の違いについて知る
- 第2回 英語のアクセント（単語・句）
- 第3回 英語のリズム（内容語と機能語）
- 第4回 紛らわしい母音（1）
- 第5回 紛らわしい母音（2）
- 第6回 紛らわしい子音（1）
- 第7回 紛らわしい子音（2）
- 第8回 つながって聞こえる音（連結）
- 第9回 変化して聞こえる音（同化）
- 第10回 聞こえなくなる音（単語間の音の脱落・短縮形）
- 第11回 英語のイントネーション（1）
- 第12回 英語のイントネーション（2）
- 第13回 世界のさまざまな英語
- 第14回 数字を使う表現（1）
- 第15回 数字を使う表現（2）

■ 評価方法

受講態度（予習・授業への取り組みなど：40%）、小テスト（30%）、実技テスト（30%）を総合的に評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

発音、聞き取りの力は日々の継続的な練習によって確実に向上します。教科書付属の音声資料を聞いて、反復練習を欠かさずおこなってください。実際に声に出すという練習は不可欠です。また、聞き取りの訓練と同時に英語の語彙、文法についても強化する必要があります。教科書に出てくる語句や表現は確実に覚えるようにし、語彙を増やす努力をしてください。

■ 教 科 書

書 名：English Sounds, English Minds『英語音声の基礎と聴解トレーニング』
 著者名：杉森幹彦，大塚朝美，杉森直樹，Paul Evans
 出版社：金星堂

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。

成績評価基準の詳細や、その他諸注意については初回授業で伝えるので、受講の意思のある場合は必ず初回から出席してください。

授業科目	英語コミュニケーションⅢ	担当者	近藤 未奈		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

この授業では、医療の現場で使われている英語表現や基本的用語、また、専門用語の単語の成り立ちを学びます。英語文献・論文の内容を正確に読むために必要な文法項目を復習し、ある程度の長さの英文や、英語論文の抄録を読む演習も適宜行います。

■ 到達目標

医学英語に特有の語彙や表現に慣れ、国際的な学術雑誌やデータベースに掲載されている英語文献の内容を正確に、かつ効率的に理解できる力を身に付ける。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション（受講にあたっての諸注意）／医学英語の基本構造
 第2回 接尾辞と接頭辞
 第3回 英文法の重要項目（1）
 第4回 身体部位の用語
 第5回 骨の用語
 第6回 英文法の重要項目（2）
 第7回 筋肉の用語
 第8回 神経の用語
 第9回 英文法の重要項目（3）
 第10回 英文読解（1）症例を読む
 第11回 英語論文の基礎知識（1）
 第12回 英文読解（2）論文の抄録を読む
 第13回 英語論文の基礎知識（2）
 第14回 カルテに関する用語
 第15回 英文読解（3）

■ 評価方法

受講態度（予習や授業中の発表など：30%）、小テストおよびレポート課題（30%）、筆記試験（40%）の結果を総合的に評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎回の授業で学んだ新しい内容はすぐに復習し、覚えるべき内容を確実に定着させていくこと。語句についての学習事項は特に、意識して覚えるようにすることで後の授業内容にも役立ちます。英文読解の予習課題が出た場合は辞書や用語集でわからない語句の意味をあらかじめ調べ、適切な和訳を作成しておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

前期「英語コミュニケーション1」のテキストを小テスト出題元とする。テストの詳細は初回授業で説明します。

授業中に英和辞典（電子辞書可／高校英語に対応できるレベルのもの）が必要となるので、毎回必ず持参すること。また、毎回配布される資料は教科書として扱い、過去に配布されたものも毎回持ってきてください。

成績評価基準の詳細や、その他諸注意については初回授業で伝えるので、受講の意思のある場合は必ず初回から出席してください。

授業科目	国語表現学	担当者	岡崎 昌宏		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

レポートの作成など、大学では、自身の考えを練り、それを正確に、過不足なく表現する能力が一層求められる。そしてそれは、社会の様々な場面でも必要となる能力である。この授業では、正確な表現のために必要な知識や技術を習得するとともに、レポートの作成方法を実践的に学ぶ。また、優れた文章を読み、表現技術への意識を高める。

■ 到達目標

自身の考えを整理し、それをレポートなどの形で正確に表現できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 概説―正確な表現の重要性
- 第2回 文章を書くための知識 (1) ― 表記など
- 第3回 文章を書くための知識 (2) ― 原稿用紙の使い方、段落など
- 第4回 正確な文章のために (1) ― 説明不足の文をなくす
- 第5回 正確な文章のために (2) ― 過度な説明、重複説明をなくす
- 第6回 正確な文章のために (3) ― 長くなってしまった文を、短くする
- 第7回 正確な文章のために (4) ― 句読点への意識を高める、語彙力を高める
- 第8回 論文・レポートの文章を読み、その表現の特徴を学ぶ
- 第9回 レポートを書く (1) ― 様々な事実を集める
- 第10回 レポートを書く (2) ― 意見の方向を定める
- 第11回 レポートを書く (3) ― 自説の明確な根拠を考える
- 第12回 レポートを書く (4) ― 基本的な展開方法を知る
- 第13回 レポートを書く (5) ― レポートを書き、推敲する
- 第14回 様々な文章に接し、表現への意識を高める
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

平常点（授業中の課題への取り組みも含む）100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

前回までの内容をよく復習したうえで授業にのぞむこと。

■ 教 科 書

授業中に配布するプリントを用いる。

■ 参考図書

必要に応じて授業中に紹介する。

■ 留意事項

授業科目	論理学	担当者	辻 虎志		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

大学の講義やゼミでは、レポート・意見の発表・ディベート・卒業論文などが課されます。この講義では、こうしたこと全体に必要な「考える」技術、および「読む・書く」技術の習得を目指します。特に、この「論理学」では、①問題解決に必要な資料や文献を分析し、それらを活用して発信する技術（コミュニケーション・リテラシー）と、②文章作成に関わるより実践的な技術や知識、つまり「論証のテクニック」といった論理的で説得力のある文章を書くためのスキル（ロジカル・コミュニケーション）を身につけることが目標となります。

■ 到達目標

現代社会において、どのような仕事もコミュニケーションなくしては成り立ちません。将来社会人になった際、友人・知人・上司・部下・同僚と、実に様々な相手とのコミュニケーションが必要になってきます。こうした多様な相手にたいして、自分の考えを分かりやすく伝え納得してもらい、実行を意思決定してもらうことが今まで以上に求められるようになります。この講義で紹介する技術は、大学生活を有効に使うために役立つのはもちろんのこと、将来社会人となっても、自分自身の問題解決のためや、社会に貢献するために役立つでしょう。

■ 授 業 計 画

- 第1回 はじめに
- 第2回 「メッセージ」とは何か
- 第3回 「メッセージ」を見抜く（1） — 内田樹を読む
- 第4回 「メッセージ」を見抜く（2） — 村上龍を読む
- 第5回 「メッセージ」を作る
- 第6回 「要約」とは何か
- 第7回 論理的な文章を書こう — 論文・レポートの「形」
- 第8回 わかりやすい文章を書くために（1） — 接続詞
- 第9回 わかりやすい文章を書くために（2） — パラグラフ・ライティング
- 第10回 思考の整理術 — MECE と So What? / Why So?
- 第11回 説得力を上げるために（1） — 論証とは何か
- 第12回 説得力を上げるために（2） — 妥当な論証形式（演繹）
- 第13回 説得力を上げるために（3） — ちょっと弱い論証形式（帰納など）
- 第14回 注の付け方、引用・参考文献の挙げ方
- 第15回 論文・レポートを書いてみよう

■ 評価方法

平常点 :30%（出席点・課題を含む）、筆記テスト :70%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- 前回の講義内容を復習しておくこと
- 決められたレポートは必ず提出すること

■ 教 科 書

--

■ 参考図書

書 名：『論文の教室 レポートから卒論まで』

著者名：戸田山和久

出版社：NHK ブックス、2002

書 名：『レポートの組み立て方』

著者名：木下是雄

出版社：ちくま学芸文庫、1996

■ 留意事項

特に無し

授業科目	人間関係学	担当者	有賀 喜代子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

人間関係の形成は保健医療分野に携わるものとして基盤となる。そのために必要な基礎知識を習得する。

■ 到達目標

「アサーション」「面接技術」等を理解すること。授業での体験学習に加えて学生の日常場面での課題を経験し、学生自身が対人コミュニケーション技術を練習し、身につけること。

■ 授業計画

- 第1回 自分自身について考える。ジョハリの窓について。
- 第2回 自己開示とは。自己紹介のグループワーク
課題①
- 第3回 アサーションを学ぶ必要性について
- 第4回 アサーションとは①；アサーションの3つの型
課題②
- 第5回 アサーションとは②；アサーション権について
- 第6回 アサーションとは③；メンテナンスのアサーションとタスクのアサーション
課題③ 読書感想の提出
- 第7回 アサーションとは④；非合理的思い込みについて
- 第8回 バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーションについて
課題④
- 第9回 アサーティブになることを難しくしているもの
- 第10回 感情を上手に表現する
課題⑤
- 第11回 障がいのある人との関係を考える
- 第12回 交流分析について
課題⑥
- 第13回 面接技術について
- 第14回 傾聴について
課題⑦
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

定期テスト；60％ 課題の提出、授業態度；40％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

体験学習・課題についてはその意義をよく理解して、真摯に実施すること。また、授業に欠席した場合の体験学習・課題については、各自で実施して定められた日時には提出のこと。毎回の復習を必ずして次に臨むこと。

■ 教 科 書

書 名：自分の気持ちをきちんと伝える本
著者名：平木典子
出版社：PHP 研究所

■ 参考図書

書 名：相手の気持ちをきちんと聞く技術

著者名：平木典子

出版社：PHP 研究所

書 名：改訂版アサーション・トレーニング

著者名：平木典子

出版社：金子書房

書 名：深く聴くための本

著者名：森川早苗

出版社：日本精神技術研究所

■ 留意事項

授業科目	コミュニケーション・リハビリテーション学I	担当者	山口 忍		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

コミュニケーションの基本的なスキルを身に着ける練習と、意味を考える

■ 到達目標

初対面の人に、不快感を与えず近づいてい行けるようになる 医療者としての発言の意味を知る

■ 授業計画

- 第1回 挨拶は何のためにする？
- 第2回 「聴く」とはどういうことか
- 第3回 コミュニケーションにおけるポジショニングと「聞く」
- 第4回 やまびこのレッスン
- 第5回 声を出す、話すということ
- 第6回 医療関係者に言われて嫌だったことば
- 第7回 医療関係者に言われて嫌だったことばーグループでまとめ発表
- 第8回 人間の本能

■ 評価方法

出席を重視する

最後に講義内で行った言語・聴覚・平衡・嚥下に関する小テストを行う（20％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義の中で、聴覚・平衡・嚥下・発声発語機能に関連した事項を学ぶので、毎時間ごとその復習をしてください。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	コミュニケーション・リハビリテーション学Ⅱ	担当者	森岡 悦子・井口 知也		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、認知症、失語症など、コミュニケーションに障害をもつ方々とのコミュニケーションのとり方について学び、臨床で応用できるように演習する。

■ 到達目標

臨床で求められるコミュニケーション能力を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 認知症の概論（1）
- 第2回 認知症の概論（2）
- 第3回 臨床場面における認知症患者とのコミュニケーションのとり方（1）
- 第4回 臨床場面における認知症患者とのコミュニケーションのとり方（2）
- 第5回 失語症の概論（1）
- 第6回 失語症の概論（2）
- 第7回 臨床場面における失語症者とのコミュニケーションのとり方（1）
- 第8回 臨床場面における失語症者とのコミュニケーションのとり方（2）

■ 評価方法

レポート50%、演習への取り組み50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に、重要ポイントとして指摘した箇所は、次の授業までに復習をして下さい。

■ 教 科 書

適宜資料を配布

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	心理学	担当者	鈴木 暁子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

心理学は人間の心や行動を客観的に理解するための学問である。人間の心というブラックボックスを科学的に解き明かしていく心理学の研究方法は、私たちの身の回りの事象を客観的に理解する事にも役立つ。この広く深い学問の魅力をできる限り伝えたい。

■ 到達目標

人を援助する職業に必要な人間理解の糸口となる心理学の基礎知識を学習するとともに、国家試験科目である臨床心理学の基礎となる知識も身につける事を目標とする。

■ 授 業 計 画

第1回 心理学の考え方①
第2回 心理学の考え方②
第3回 ト라우マについて
第4回 コーチング入門
第5回 人の性格①
第6回 人の性格②
第7回 知能と記憶
第8回 学習①
第9回 学習②
第10回 動機づけと情動①
第11回 動機づけと情動②
第12回 グループワーク
第13回 社会心理学入門①
第14回 社会心理学入門②
第15回 人と音楽

■ 評価方法

期末試験80% 提出課題10%、出席・授業態度10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講師の指示に従ってください。

■ 教 科 書

書 名：改訂版 はじめて出会う心理学
著者名：長谷川寿一 他
出版社：有斐閣アルマ

■ 参考図書

書 名：心理学概論
著者名：山内弘継・橋本幸監修
出版社：ナカニシヤ出版

■ 留意事項

私語厳禁。講師の指示通りの席に着席すること。配布資料が多いので整理方法をよく考えて下さい。

授業科目	言語学	担当者	松井 理直		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

医療ミスを引き起こす原因の1つとなる論理判断の錯誤について、言語学の立場から考察を行う。

■ 到達目標

医療現場におけるコミュニケーション・ミスについて理解を深めることを目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 導入：医療ミスを引き起こす原因について
- 第2回 ことばと論理の関係 (1)：連言判断における過誤
- 第3回 ことばと論理の関係 (2)：選言判断における過誤
- 第4回 ことばと論理の関係 (3)：排他的選言をめぐる過誤
- 第5回 ことばと論理の関係 (4)：含意判断における過誤
- 第6回 ことばと論理の関係 (5)：「言い換え」とトートロジー
- 第7回 ことばと確率：医療診断におけるエビデンス
- 第8回 擬陽性問題について
- 第9回 前提確率から見た患者の立場と治療者の立場の違い
- 第10回 仮説と錯誤
- 第11回 第一種のエラーと第二種のエラー
- 第12回 統計学の基礎
- 第13回 有意水準と第一種のエラー
- 第14回 検定力と第二種のエラー
- 第15回 授業のまとめと到達度の確認

■ 評価方法

授業内に毎回行うミニテスト：50% 到達度の確認試験：50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

基本的に授業中に全て理解することを目標とするが、復習に必要な時間として 50 分程度を目安とする。予習に関しては、特に必要としない。なお、授業内容に関しては教科書を用いず、適宜プリントを配布する。

■ 教 科 書

不要

■ 参考図書

■ 留意事項

分からない点があれば、すぐに授業を止めて、質問をしてください。

授業科目	情報処理学	担当者	永井 文子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

Microsoft Windows[®] および Microsoft Office[®] アプリケーションを使用し、ファイル・フォルダの管理、文書作成、レポート作成、表計算、グラフ作成、発表資料作成等、学習に必要なコンピュータスキルを学習する。さらに、セキュリティと情報モラルの基礎を学習する。

■ 到達目標

- ・講義支援システム「Moodle」へのアクセス方法とファイル提出方法を理解し利用できる。
- ・PC上のメールシステムを使用し、学校発行のメールアドレスでの送受信ができる。
- ・文書作成ソフトを使用し、見やすく体裁の整った文書やレポートを作成できる。
- ・表計算ソフトを使用し、数式や書式設定を応用した表やグラフを作成・操作できる。
- ・プレゼンテーション資料作成ソフトを使用し、簡単な発表用スライドを作成できる。
- ・レポートの特徴と作成の流れ、ルールとマナーの存在を理解してレポートを作成できる。
- ・セキュリティと情報モラルの一般的な事例における、適切な対応／対策を理解し各自のID、メールアドレスおよびそれぞれのパスワードの管理ができる。

■ 授業計画

- 第1回 授業概要。ブラウザの利用。学校メールアドレス／パスワード設定。eメール送受信。フォルダ及びファイル作成。メールへのファイル添付。タイピング練習方法。
- 第2回 情報倫理、講義支援システム Moodle のID／パスワード設定、ログイン／ログアウト。ファイル取得と提出操作。
- 第3回 文書作成①
Word2013概要、日本語入力（変換操作）、文書作成における書式設定①
- 第4回 文書作成②
文書作成と書式設定②、表の作成と編集、印刷機能紹介
- 第5回 文書作成③
各種オブジェクトの利用と文書構成支援機能
- 第6回 文書作成課題（Word 課題）
作成・提出
- 第7回 表計算①
Excel2013概要、入力、集計表作成、シート操作
- 第8回 表計算②
集計表における数式（四則計算、関数）
- 第9回 表計算③
グラフ作成、文書ファイルとの連携利用、データベース機能紹介
- 第10回 表計算課題（Excel 課題）
作成・提出
- 第11回 プレゼンテーション①
PowerPoint2013概要、入力、保存、各種オブジェクトの利用
- 第12回 プレゼンテーション②
発表資料作成と特殊効果の設定
- 第13回 プレゼンテーション③
画像の加工とスライドショー関連機能
- 第14回 総合演習準備
文書及び集計表の作成と連携利用、ファイル管理操作
- 第15回 総合演習課題
作成・提出

■ 評価方法

提出課題(8～10回)50%、総合演習課題50%(但し、受講態度に著しく問題がある場合は減点対象とします)

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

PCキーボードのタイピングスキルを各自時間と環境を工夫してトレーニングすることを時間外の学習として必須とする。期初に案内する「オンライン上の練習サイト」上での「目標レベル」に到達するよう継続して練習すること。

■ 教科書

書名: 30時間アカデミック 情報リテラシー Office2013 (ISBN978-4-407-33253-7)
著者名: 杉本くみ子／大澤栄子
出版社: 実教出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	医療情報学	担当者	星 雅丈		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

現代の保健・医療・福祉の分野において ICT の活用は必須となっており、将来、医療・福祉現場で働く者として、最低限習得が必要とされる基礎知識がある。本講義では医療情報システムが現場で如何に利用されているかについて解説し、さらに今後の調査研究活動に必要なデータ解析の基礎知識についても講義する。

■ 到達目標

- ・ ICT の活用に必要な基礎知識を修得する。
- ・ 医療情報システムが実際にどのように利用されているかを理解する。
- ・ 調査研究におけるデータ解析の基礎知識について学ぶ。

■ 授 業 計 画

- 第1回 情報学（Ⅰ） 情報と社会の関わりについて
- 第2回 情報学（Ⅱ） 情報の表現と処理について
- 第3回 情報学（Ⅲ） 情報処理技術について
- 第4回 情報学（Ⅳ） ネットワーク技術について
- 第5回 医療情報システム（Ⅰ） オーダーエントリーシステムについて
- 第6回 医療情報システム（Ⅱ） 電子カルテシステムについて
- 第7回 医療情報システム（Ⅲ） 医用画像システムとリハビリテーションについて
- 第8回 医療情報システム（Ⅳ） リハビリテーション関連情報システムについて
- 第9回 医療情報の倫理 情報倫理・関係法規について／小テスト
- 第10回 小テストの解説、教室講義のまとめ
- 第11回 演習：医療統計（Ⅰ） 医療評価指標について
- 第12回 演習：医療統計（Ⅱ） 尺度と度数分布・基本統計量について
- 第13回 演習：医療統計（Ⅲ） 仮説検定について
- 第14回 演習：調査研究（Ⅰ） 精度と真度／コホート研究とケースコントロール研究について
- 第15回 演習：調査研究（Ⅳ） 因果関係について

■ 評価方法

出席 20％／小テスト 30％／課題提出 20％／期末課題 30％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

皆さんが医療現場に入職した際、新人として期待されることのひとつにコンピュータを扱う技術があります。四年制大学から病院に入る皆さんは、技術を中心として学んできた専門学校生とは異なり、研究活動や演習などで身に着けた、より幅の広い知識やアカデミックな経験が求められるのです。本科目ではその一端を学びますので、情報処理用語やセキュリティ・情報倫理に関する小テストでは、それまでの講義の内容を配布資料を元にしっかり復習してください。演習では、できる限り他人の力を借りずに、試行錯誤の労をいとわず毎回真剣に取り組んでください。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：新版 医療情報 医療情報システム編（第2版）

著者名：日本医療情報学会編集

出版社：篠原出版新社

書 名：新版 医療情報 情報処理技術編（第2版）

著者名：日本医療情報学会編集

出版社：篠原出版新社

書 名：第3版 医療情報サブノート

著者名：日本医療情報学会医療情報技師育成部会 編集

出版社：篠原出版新社

■ 留意事項

授業科目	医療情報学	担当者	周藤 俊治		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

現代の保健・医療・福祉の分野において欠かせない ICT の活用に必要な基礎知識として①デジタルデータがどのように発生しネットワーク上を流れているのか、②医療機関にどのようなシステムが導入・利用されているのか、③情報の収集や活用に関して講義を行なう。

■ 到達目標

医療に関する情報がどのように発生し記録・活用されているのか、ICT の発展により医療環境がどのように変わったのか理解し、最適な医療環境の構築に必要な情報活用能力を身につける

■ 授 業 計 画

- 第1回 情報学（Ⅰ） 情報とは
- 第2回 情報学（Ⅱ） 情報量の計算について
- 第3回 情報学（Ⅲ） ネットワーク技術について
- 第4回 情報学（Ⅳ） 情報セキュリティ
- 第5回 保健医療情報システム（Ⅰ） 医用画像について
- 第6回 保健医療情報システム（Ⅱ） 電子カルテについて
- 第7回 保健医療情報システム（Ⅲ） 施設内の情報システムについて
- 第8回 保健医療情報システム（Ⅳ） 施設間の情報システムについて
- 第9回 統計基礎（Ⅰ） 尺度・度数分布について
- 第10回 統計基礎（Ⅱ） 代表値について
- 第11回 統計基礎（Ⅲ） 散布度について
- 第12回 医療統計（Ⅰ） 病院の統計資料
- 第13回 医療統計（Ⅱ） 比と率と割合
- 第14回 医療統計（Ⅲ） 相対危険度
- 第15回 医療情報の倫理 医の倫理・情報の倫理・関連法規について

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義情報（<http://www.medbb.net>）および、講義中に配付した資料を基に予習・復習すること。特に計算問題は、問題の内容が変わっても対応出来るよう、しっかり理解しておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

講義資料は適宜配布します。また講義情報は <http://www.medbb.net> に掲載します。

授業科目	統計学	担当者	周藤 俊治		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

取得したデータを集計し有効に活用するには、統計の基礎を理解するとともに取り扱う能力を身につける必要がある。そこで、本講義ではPCを利用しデータを実際にとり扱う。具体的には見やすい表の作り方やグラフの作り方から、検定・推定などの手法について講義していく。

■ 到達目標

代表値や散布度を算出できる
わかりやすい表・グラフを作成できる
推定や検定の内容を理解し適切な検定法を選択できる

■ 授業計画

第1回 データ整理 (1) - 代表値
第2回 データ整理 (2) - 散布度
第3回 データ整理 (3) - 度数分布表・図
第4回 確率と分布 (1) - 確率とは
第5回 確率と分布 (2) - 確率分布とは
第6回 中心極限定理
第7回 推定と検定 (1) - t分布を使った母平均の推定
第8回 推定と検定 (2) - 対応のないt検定
第9回 推定と検定 (3) - 対応のあるt検定
第10回 推定と検定 (4) - カイ二乗検定
第11回 推定と検定 (5) - Fisher の直接確率法
第12回 相関 (1) - 相関係数
第13回 相関 (2) - 相関係数の有意性の検定
第14回 回帰
第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義情報（<http://www.medbb.net>）を参照の上、教科書を用いて予習・復習すること。その際PCの利用法そのものよりも統計手法の理解に重点を置くこと。

■ 教 科 書

書 名：医学・保健学のためのやさしい統計学（第3版）
著者名：正井 栄一 / 片山 修
出版社：金原出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

講義情報は <http://www.medbb.net> に掲載します。

授業科目	文学	担当者	伊東 和幸		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

日本の近現代の文学史を振り返りながら、明治期、大正期、昭和期（戦前、戦後）の代表的作家の作品を紹介しながら、その一部を鑑賞する。

■ 到達目標

日本の近現代の文学史の大枠を把握することにより、今後の学生生活、社会生活の中で、「日本の文学史上に残る代表的作家」、あるいは「知る人ぞ知る作家」の作品を読書するきっかけづくりとなること

■ 授業計画

- 第1回 授業ガイダンス（15コマの計画と大まかな授業の流れ）
- 第2回 明治期の自然主義小説と反自然主義小説
- 第3回 大正期の耽美派文学、白樺派文学、新現実主義文学
- 第4回 昭和期（戦前、戦後）文学全般について
- 第5回 夏目漱石文学について
- 第6回 夏目漱石「夢十夜」 CD 鑑賞
- 第7回 芥川龍之介文学について
- 第8回 芥川龍之介「蜘蛛の糸」、「トロッコ」、「尼堤」CD 鑑賞
- 第9回 川端康成、梶井基次郎文学について
- 第10回 梶井基次郎「檸檬」、「桜の木の下には」、「K の昇天」CD 鑑賞
- 第11回 三島由紀夫文学について
- 第12回 三島由紀夫「金閣寺」CD 鑑賞
- 第13回 寺山修司短詩形文学について
- 第14回 太宰治文学について 「ヴィヨンの妻」CD 鑑賞
- 第15回 レポート課題について まとめ

■ 評価方法

半期の授業を通して、1～2回課題を与え、その提出されたレポートの内容と出席率により評価する。（レポート50%、出席率50%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で紹介した作家の作品（CD鑑賞外の作品）を少しずつ読み進め、半期の間に1～2冊は読むこと

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：日本文学史—近代から現代へ
 著者名：奥野健男
 出版社：中央公論新書（212）

■ 留意事項

授業科目	教育学	担当者	加藤 啓一郎		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

本人の主体性の尊重、関係性の重視という視点に立って、発達、成長の過程を捉えなおし、教育的な働きかけについて実践研究を通して検討する

■ 到達目標

教育についての問題を、社会とのかかわりの中で捉えなおすことを通して、医療関係者に必要とされる教育学的思考や手法を身につけることを目的とする

■ 授業計画

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 主体性、関係性の重視と教育
- 第3回 生涯発達の視点と障害について1
- 第4回 生涯発達の視点と障害について2
- 第5回 生涯発達の視点と障害について3
- 第6回 生涯発達の視点と障害について4
- 第7回 生涯発達の視点と障害について5
- 第8回 エピソード記述の方法
- 第9回 教育における主体性の問題を捉えなおす
- 第10回 家族、地域の問題について
- 第11回 実践的検討1
- 第12回 実践的検討2
- 第13回 実践的検討3
- 第14回 実践的検討4
- 第15回 エピソードの発表と討議

■ 評価方法

学習態度20%（出席状況・授業への取り組み）・レポート80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

前もって配布するプリントの内容を熟読し、授業後は進んだ箇所について、理解できないところがないかどうか、チェックすること。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	法学概論	担当者	家 正治		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

「社会あるところに法あり」と言われている。社会規範には、道德規範、宗教規範、習俗規範、法規範があるが、それらの中で法規範はどのような特徴を有するかを把握し、また今日の国内法と国際法が直面する主要問題と課題を考案する。

■ 到達目標

本講義を通じて、国内社会における「人の支配」に対する「法の支配」、また、国際社会における「力の支配」に対する「法の支配」について理解する。そして、その中でリーガル・マインド「法的ものの考え方」に接する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 法（学）を学ぶにあたって
- 第2回 法とは何か（法と道德）
- 第3回 法の発展と法の体系
- 第4回 近代国家と憲法
- 第5回 日本国憲法と国民主権主義
- 第6回 日本国憲法と基本的人権尊重主義
- 第7回 日本国憲法と平和主義
- 第8回 日本国憲法と権力分立（三権分立）
- 第9回 法と裁判
- 第10回 国内法と国際法の関係
- 第11回 戦争の違法化と安全保障
- 第12回 人権の国際的保障（国際人権保障）とその発展
- 第13回 人民の自決権とその発展（とくに経済的自決権について）
- 第14回 地球環境の保護とその発展（展開）
- 第15回 国内社会と国際社会における「法の支配」

■ 評価方法

筆記試験 70%
出席を含む平常点 30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎回授業の始めに若干の時間を割り、社会で生起している法的問題の1つあるいは2つを取り上げて、話し合いを行います。一般新聞の政治、社会、経済面に留意しておいて下さい。

■ 教 科 書

書 名：法学入門〔第6版〕
著者名：末川博 編
出版社：有斐閣

■ 参考図書

書 名：現代法学入門〔第4版〕
著者名：伊藤正巳・加藤一郎 編
出版社：有斐閣

■ 留意事項

問題意識を持つとともに日常的な勉学の努力を望みます。

授業科目	国際社会と日本	担当者	家 正治		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

国際社会の構造と現状を理解し、現代国際社会が直面する「戦争と平和の問題」「途上国問題」「人権問題」「地球環境問題」等の全人類的課題をとり上げながら、その中で占める日本の位置と役割について考察する。

■ 到達目標

国際社会の構造や実態を把握し、国際社会を規律している原則や規範について理解・認識するとともに、現代国際社会において日本の占める立場と係わりについて理解できるようにする。

■ 授業計画

- 第1回 国際社会の成立と近代国際社会ならびに日本の位置と関わり
- 第2回 国際社会の発展と現代国際社会ならびに日本の位置と関わり
- 第3回 国際社会を動かす主要なアフターと日本の事例
- 第4回 戦争の違法化と国際紛争の平和的解決（日本との係わりを含めて）
- 第5回 勢力均衡政策から集団安全保障体制へ（日本との係わりを含めて）
- 第6回 平和維持活動（PKO）の役割と日本
- 第7回 軍縮の現状と阻害要因および日本の役割
- 第8回 日米安全保障体制の展開と現状
- 第9回 先進国と途上国をめぐる経済問題①
- 第10回 先進国と途上国をめぐる経済問題②
- 第11回 人権の国際的保障（国際人権保障）とその発展
- 第12回 人権の国際的保障（国際人権保障）と日本
- 第13回 難民問題とその庇護と保護および日本
- 第14回 地球環境の保護と国際協力（とくに日本の役割について）
- 第15回 今後の国際社会と日本

■ 評価方法

筆記試験 70%
出席を含む平常点 30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

具体的な事例を取り上げながら授業を行ないたいと思います。できるだけ、毎日、一般新聞の国際面を読むように努力して下さい。

■ 教 科 書

書 名：国際関係〔全訂版〕
著者名：家 正治、岩本 誠吾、桐山 孝信、戸田五郎、西村智朗、福島崇宏 著
出版社：世界思想社

■ 参考図書

書 名：国際機構〔第四版〕
著者名：家正治、小畑郁、桐山孝信 編
出版社：世界思想社

■ 留意事項

問題意識を持つとともに日常的な勉学への努力を望みます。

授業科目	物理学	担当者	非常勤講師		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

医療に携わる者に求められる「正確に状況を把握し、分析する力」・「厳密な論理的思考力と課題解決力」を育成する。そのために、リハビリテーションの基礎となる力学分野と医療機器と関連が深い電磁気学分野の演習を行う。

■ 到達目標

革新的リハビリテーション技術を開発が出来る人材を育成するために、物理学における研究開発のスキーマを伝え、課題解決のスキーマを修得させる。合わせて、専門科目への移行をスムーズにさせる。

■ 授 業 計 画

第1回	物理学の発想と方法 (P.1～14)	講義ノート (1)
第2回	ベクトルによる力の表記 (P.15～18)	講義ノート (2)
第3回	運動の解析 (Ⅰ) (P.19～22)	講義ノート (2、2')
第4回	運動の解析 (Ⅱ)、運動の法則 (Ⅰ) (P.22～25)	講義ノート (2')
第5回	運動の法則 (Ⅱ)、演習 (P.26～30)	講義ノート (3)
第6回	運動の法則 (Ⅲ)、運動量、エネルギー (P.29～41)	講義ノート (4)
第7回	モーメントと応力 (P.42～47)	講義ノート (5)
第8回	回転運動 (Ⅰ) (P.48～52)、前半部分についてのテスト	講義ノート (6)
第9回	回転運動 (Ⅱ) (P.53～55)	講義ノート (6)
第10回	流体 (P.189～200)、テスト解説・結果連絡	講義ノート (7)
第11回	電気力と電場 (P.59～71)	講義ノート (8)
第12回	電場のエネルギー (P.71～80)、コンデンサー (P.81～94)	講義ノート (9)
第13回	電流回路 (P.95～110)	講義ノート (10)
第14回	電流と磁気 (P.111～136)	講義ノート (11)
第15回	放射線 (P.201～218)、医療機器	

■ 評価方法

試験 70% (前半30%、後半40%) 平常点 30%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

プレ学習：事前に配布された講義ノートを、教科書をもとに出来るだけ完成させておくこと。
講 義：講義ノートの解説をもとに自己採点をして完成させる。
アフター学習：講義終了時に配布される復習用講義ノートを完成させ、次の時間始めに提出する。

■ 教 科 書

書 名：生命科学のための基礎シリーズ 物理
著者名：監修：大島泰郎 著者：川久保達之 他3名
出版社：実教出版

■ 参考図書

■ 留意事項

第8回の前半部分のテストは、必ず受けること。

授業科目	生物学	担当者	林 研		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

細胞・遺伝子など生物の基本的な仕組みを踏まえつつ、人間の身体のはたらきを学ぶ。

■ 到達目標

生物学の基礎を習得し、日常の事柄とミクロの世界を結びつけて理解できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 ガイダンス、生物とは何か
- 第2回 細胞の構造
- 第3回 細胞のはたらき
- 第4回 発生と分化
- 第5回 神経・筋・骨の細胞
- 第6回 遺伝
- 第7回 遺伝子と DNA
- 第8回 タンパク質の合成
- 第9回 酵素と代謝
- 第10回 呼吸とエネルギー
- 第11回 免疫
- 第12回 内分泌系と自律神経系
- 第13回 生体調節
- 第14回 刺激の受容
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験（80%）、小テスト（20%）、および出席状況の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義で配布する復習問題を、次の週までに解いておくこと。

■ 教 科 書

書 名：生物学 ヒトと環境の生命科学
 著者名：川崎祥二・古庄律 編著
 出版社：建帛社（けんぱくしゃ）

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	生活科学（福祉住環境論）	担当者	山田 隆人		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

OT・PTの職能の一つとして、日常生活活動の支援がある。環境因子である居住環境を改善することで、対象者の生活機能の維持・向上を計ります。本講義では、居住環境の改善に関連する制度や施策、関連する職能との連携および居住環境改善を行う為の基礎知識を学びます。

■ 到達目標

居住環境改善に関する法制度や社会状況を理解する
 高齢者や障害者の暮らしの状況を理解する
 障害の特性を理解し、環境支援の方法を理解する

■ 授 業 計 画

第1回 高齢者を取り巻く社会状況と住環境
 第2回 介護保険制度の概要
 第3回 障害者を取り巻く社会状況と住環境
 第4回 相談援助の考え方と福祉住環境整備の進め方 1節・2節
 第5回 相談援助の考え方と福祉住環境整備の進め方 3節・4節
 第6回 福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識 1節 AB
 第7回 福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識 1節 C～J
 第8回 福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識 2節 A
 第9回 福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識 2節 B
 第10回 福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識 2節 C
 第11回 福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識 2節 D
 第12回 福祉住環境整備の基本技術と実践に伴う知識 2節 EFG
 第13回 補節 福祉住環境整備の実践に必要な基礎知識 A
 第14回 補節 福祉住環境整備の実践に必要な基礎知識 BC
 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験（70%）、課題・確認テスト（30%）、出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前に教科書の該当ページを全て読んでくること。
 確認のための課題・テストなどを実施する。

■ 教 科 書

書 名：改訂2版 福祉住環境コーディネーター検定試験 2級公式テキスト
 著者名：東京商工会議所 編
 出版社：東京商工会議所

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	自然科学概論	担当者	林 研		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

物理・化学の基礎を学ぶとともに、様々な科学の分野の現状について広く見渡す。

■ 到達目標

人間の身体を理解する土台となる基礎知識と科学的素養を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 ガイダンス、科学の歴史
- 第2回 ニュートンと力学
- 第3回 運動と仕事
- 第4回 宇宙と物質
- 第5回 原子
- 第6回 イオンと分子
- 第7回 化学反応
- 第8回 エネルギーと環境
- 第9回 地球科学
- 第10回 進化とゲノム
- 第11回 医学の歴史
- 第12回 脳科学
- 第13回 新しい科学
- 第14回 科学の哲学
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験（100%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習プリントを出したときは、各自問題を解いておくこと。

■ 教 科 書

使用しません。適宜プリントを配布します。

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	栄養学	担当者	仲村 祐江		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

五大栄養素の糖質・脂質・タンパク質・ビタミン・ミネラルと食物繊維について概説し、更に各栄養素の消化器管での消化と吸収に関連する消化酵素などの働きについて学ぶ。ライフステージごとの食事摂取基準についても理解する。

■ 到達目標

栄養素の種類とその働きについて説明できる。そして、食品にどのような栄養素が含まれているのか理解する。各栄養素がどのように消化吸收されるのかを理解する。ライフサイクルと栄養摂取を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーションならびに栄養学の概念
- 第2回 健康と栄養
- 第3回 栄養素の種類と働き 糖質 1
- 第4回 栄養素の種類と働き 糖質 2
- 第5回 栄養素の種類と働き タンパク質 1
- 第6回 栄養素の種類と働き タンパク質 2
- 第7回 栄養素の種類と働き 脂質
- 第8回 栄養素の種類と働き 脂質 2
- 第9回 栄養素の種類と働き ビタミン・ミネラル
- 第10回 栄養素の種類と働き 食物繊維・水
- 第11回 栄養素の消化吸收 糖質・脂質・タンパク質 1
- 第12回 栄養素の消化吸收 糖質・脂質・タンパク質 2
- 第13回 一般成人と妊婦・授乳婦の食事摂取基準
- 第14回 成長期（乳幼児・小児期）と高齢者の食事摂取基準
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験（70%）、出席状況（10% ※無断欠席や遅刻はマイナス評価）、提出課題（20%）の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前にテキストを読んでくること。

■ 教 科 書

書 名：イラスト栄養学総論
 著者名：城田知子・田村明・平戸八千代 著
 出版社：東京教学社

■ 参考図書

不要

■ 留意事項

授業科目	基礎ゼミナール	担 当 者	複数専任教員		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

自分自身の療法士として将来像を具体化し、求められる学習態度・学習方法、療法士としてのコミュニケーション技能、対象者の理解、リスク管理の概要、プレゼンテーション方法、レポートの書き方などについて、講義とグループ活動を通して学ぶ。さらに、自己の生活を見直すセッションも設ける。

■ 到達目標

1. 自分の将来像をイメージし、早期に大学生としての学習方法や学習に対する構えをつくることのできる
2. 療法士として求められる態度・知識・技能を知り、一歩でも近づくための方向付けを行うことのできる
3. 他者の意見を理解する能力、自分の考えを整理して表現する能力、情報を収集し整理する力、問題解決能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を修得する

■ 授 業 計 画

- 第1回 違法薬物について学ぼう（薬物乱用防止講演会）
- 第2回 ソーシャルネットサービスの利用時のマナーと防犯について学ぼう
- 第3回 在校生の話：高校と大学の違い、ノートの取り方など
- 第4回 先輩セラピストの話を聞いてみよう
- 第5回 先輩セラピストの話を聞いてみよう（ディスカッション・まとめ）
- 第6回 先輩セラピストの話を聞いてみよう（ディスカッション・まとめ）
- 第7回 医療職を目指す学生としての基本的資質
自分の生活（生活リズム、学習時間や方法、社会的な態度など）を振り返ってみよう①
- 第8回 障がいのある当事者の話 1 身体障害を有する方
- 第9回 障がいのある当事者の話（ディスカッション・まとめ）
- 第10回 障がいのある当事者の話 2 知的障害を有する方
- 第11回 障がいのある当事者の話（ディスカッション・まとめ）
- 第12回 医療職を目指す学生としての基本的資質
自分の生活（生活リズム、学習時間や方法、社会的な態度など）を振り返ってみよう②
- 第13回 療法士としてのリスク管理について学ぼう（一次救急救命法 AED の使用方法）
- 第14回 療法士としてのリスク管理について学ぼう
- 第15回 自分自身のマナーについて見直そう（マナーアップ研修）
- 第16回 国家試験の問題を解いてみよう 勉強の方法を学ぼう
- 第17回 ハラスメントについて学ぼう
- 第18回 障がいのある当事者の話 3 精神障害をお持ちの方
- 第19回 障がいのある当事者の話（ディスカッション・まとめ）
- 第20回 障がいのある当事者の話 4 高次脳機能障害をお持ちの方
- 第21回 障がいのある当事者の話（ディスカッション・まとめ）
- 第22回 医療職を目指す学生としての基本的資質
自分の生活（生活リズム、学習時間や方法、社会的な態度など）を振り返ってみよう①
- 第23回 医療職を目指す学生としての基本的資質
自分の生活（生活リズム、学習時間や方法、社会的な態度など）を振り返ってみよう②
- 第24回 障がいのある当事者の話 5 発達障害をお持ちの方・ご家族
- 第25回 障がいのある当事者の話（ディスカッション・まとめ）
- 第26回 障がいのある当事者の話 6 障害者スポーツに取り組んでおられる方
- 第27回 障がいのある当事者の話（ディスカッション・まとめ）
- 第28回 医療職を目指す学生としての基本的資質
自分の生活（生活リズム、学習時間や方法、社会的な態度など）を振り返ってみよう①
- 第29回 目指すセラピスト像となすべきこと ディスカッション
- 第30回 目指すセラピスト像となすべきこと ディスカッション 発表

■ 評価方法

授業への貢献度（講義・ディスカッション時）：60%，課題（レポート）：20%，発表点：20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

提示された「次回の課題」に取り組んで授業に臨むこと

特に、ディスカッションの前には、自分に考えをまとめておく（各回考えておくべき事項を伝えます）

各授業終了後には、リアクションペーパーを作成し、授業内容を振り返る

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：知へのステップ 第3版

著者名：学習技術研究会

出版社：くろしお出版

書 名：アカデミック・スキルズ-大学生のための知的技法入門

著者名：佐藤望 他

出版社：慶應義塾大学出版会

書 名：大学基礎講座 充実した大学生活をおくるために

著者名：藤田哲也

出版社：北大路書房

書 名：広げる知の世界 大学でのまなびのレッスン

著者名：北尾謙治 他

出版社：ひつじ書房

■ 留意事項

積極的に参加し、取り組みましょう

講師の都合により日程を変更する可能性があります

授業に欠席した場合は、該当回の出席・態度、課題、発表点は0点となります。

授業科目	医の倫理（医療倫理学・生命倫理学）	担 当 者	浅野 遼二		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

「医の倫理」の思想的系譜を明らかにし、「医の倫理」の中心問題を講義する。

■ 到達目標

理学療法や作業療法などのリハビリテーション医療を学ぶ者に必要な「医の倫理」の知識を習得することにある。

■ 授業計画

- 第1回 「医の倫理」思想史
「ヒポクラテスの誓い」から「リスボン宣言」までの「医の倫理」の系譜を簡潔に講義し、「医の倫理」の学的原点を明らかにする。
- 第2回 理学療法士・作業療法士の倫理綱領
理学療法士と作業療法士の倫理規定の位置と内容を明らかにする。
- 第3回 「医の倫理」の中心問題～死生観～
末期患者の心理過程を示し、末期医療における医療者と患者の死生観を論究する。
- 第4回 「医の倫理」の中心問題～恩恵と自律～
「医の倫理」の諸原理～自律、恩恵、正義、無危害～を講義する。
- 第5回 「医の倫理」の中心問題～医師患者関係・パターナリズム～
医師と患者関係を規定した過去の「パターナリズム・父権主義」思想を講義する。
- 第6回 「医の倫理」の中心問題～医師患者関係・インフォードム・コンセント～
医師と患者関係を規定した過去の「インフォードム・コンセント」思想を講義する。
- 第7回 「ケア倫理」としての「医の倫理」
20世紀後半において一躍注目を集めた「ケア倫理」を語り、療法士の職業倫理のあり方を講義する。
- 第8回 これからの「医の倫理」
「ケア倫理」に基礎をおいて、現代医学が直面したエボラ出血熱の流行、iPS細胞の移植等を含む倫理的諸問題を検討する。

■ 評価方法

筆記試験 70%
授業態度（出席点を含む） 30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

プリントと参考図書は読んでおくこと。

■ 教 科 書

プリントを配布する。

■ 参考図書

書 名：「医の倫理と法」

著者名：森岡恭彦 著

出版社：南江堂

書 名：「医の倫理－ミニ事典」

著者名：畔柳達雄 監修

出版社：日本医師会

書 名：「医の倫理とは」

著者名：アンドレ・グアゼ

出版社：産業図書

書 名：「医療倫理学の方法」

著者名：宮坂道夫 著

出版社：医学書院

■ 留意事項

無断欠席や遅刻、特に授業態度には注意すること。

授業科目	チーム医療論	担当者	井上 悟		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

今改めて、チーム医療が求められる理由とチーム維持・発展のための条件を探る。
具体的なチーム医療の事例、現状について知る。

■ 到達目標

チーム医療の基本と具体的事例を知る。

■ 授業計画

- 第1回 チーム医療とは？
- 第2回 今更、なぜチーム医療が求められるのか？
- 第3回 チームモデルとメリット／デメリット
- 第4回 チーム医療の条件（心得）と事例1
- 第5回 チーム医療の条件（心得）と事例2
- 第6回 チーム医療の条件（心得）と事例3
- 第7回 チーム医療の条件（心得）と事例4
- 第8回 チーム医療の条件（心得）と事例5
- 第9回 チームメンバーの専門性とスキル
- 第10回 チーム医療実践具体事例1：医療安全・感染制御
- 第11回 チーム医療実践具体事例2：NST・がん
- 第12回 チーム医療実践具体事例3：リハビリテーション・チーム
- 第13回 チーム医療実践具体事例4：リハビリテーション・チーム
- 第14回 チーム医療の課題1：
- 第15回 チーム医療の課題2：患者参加

■ 評価方法

筆記試験またはレポート 70%、授業態度 30%（遅刻・欠席は減点対象）で総合評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業前には、教科書の授業該当範囲を予習しておくこと

■ 教 科 書

書 名：チーム医療を成功させる10か条
著者名：福原麻希
出版社：中山書店、2013年、3150円

■ 参考図書

書 名：チーム医療推進協議会ホームページ
著者名：（公社）日本理学療法士協会
出版社：<http://www.team-med.jp/>

■ 留意事項

各回の講義テーマ、内容については関連する講義の進捗状況により変更することがあります。
指定の教科書は後期開講のリハビリテーション医学の教科書としても利用される予定。

授業科目	チーム医療論	担当者	今井公一・藤岡重和・木村晃大 他		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	4 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

患者の治療という共通の目的を達成するために医療現場では様々な職種がそれぞれの専門を生かし協調して働くことが必要である。これがチーム医療である。皮相なチーム医療の解釈では、医師によるパターンリズムを排して、職種の上下なく協調して医療をすることとされている。本講義では、各自が、実習中の経験をもとにチーム医療について実践例をレポートにまとめ報告する。また、文献を活用して現代のチーム医療の課題を抽出し、自身の着眼点について考察を加える。

■ 到達目標

チーム医療とは、チームリーダーの下に、自己の専門性を十分に理解をした応分の技量をもつ専門職種が各々の役割を認識し、問題点と療養目標を共有することの重要性を正しく認識し、各専門職種間の緻密な連携・協働を行うことである。こうした認識を踏まえた上で、本講義の目標は、各自の経験と講義からチーム医療の本質について論じることができ、医療チームとして機能するために必要なことは何かについて説明できることにある。

■ 授 業 計 画

- 第1回 チーム医療の実際 (1) 今井
- 第2回 チーム医療の実際 (2) 今井
- 第3回 チーム医療の実際 (3) 今井
- 第4回 チーム医療の実際 (4) 今井
- 第5回 チーム医療論 概論 (1) 今井
- 第6回 チーム医療論 概論 (2) 今井
- 第7回 チーム医療論 概論 (3) 今井
- 第8回 セラピストに求められる基礎知識 (1) 木村
- 第9回 セラピストに求められる基礎知識 (2) 木村
- 第10回 セラピストに求められる基礎知識 (3) 木村
- 第11回 セラピストに求められる基礎知識 (4) 木村
- 第12回 チーム医療実践のために必要な能力 (1) 藤岡
- 第13回 チーム医療実践のために必要な能力 (2) 藤岡
- 第14回 チーム医療実践のために必要な能力 (3) 和田
- 第15回 チーム医療実践のために必要な能力 (4) 和田

■ 評価方法

出席 30% 症例報告 30% 筆記試験 40%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

求められる基礎知識や必要な能力については、国家試験に準じたテーマを取り上げて学習します。講義後できる限り早期に復習すること

■ 教 科 書

--

■ 参考図書

書 名：実践チーム医療論

著者名：水本清久 他

出版社：医歯薬出版

書 名：チーム医療を成功させる10か条

著者名：福原麻希

出版社：中山書店

書 名：チームマネジメントの知識とスキル

著者名：篠田道子

出版社：医学書院

書 名：チーム医療とは何か

著者名：細田満和子

出版社：日本看護協会

書 名：チーム医療論

著者名：鷹野和美

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	スポーツ医学	担当者	中村 憲正		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

スポーツ医学の急性および慢性の内科的・整形外科的疾患について学ぶ。スポーツ選手の健康管理、トレーニングによる生理的適応現象、トレーニングによる病的現象、外傷、スポーツによる内科的・整形外科的障害とその対策。生活習慣病、フィットネスについて知識を得る。

■ 到達目標

スポーツ活動の場において、医療スタッフ、教育者、指導者として必要なスポーツ医学の知識を体得する。

■ 授業計画

- 第1回 スポーツ医学概論 スポーツと健康、治療について学ぶ
- 第2回 運動の生理、病理学 力学刺激による生体反応を学ぶ
- 第3回 スポーツ現場におけるメディカルサポートの実際1(外部講師)
- 第4回 部位別スポーツ障害 頭頸部・体幹
- 第5回 メディカルサポートの実際2(外部講師)
- 第6回 部位別スポーツ障害 上肢
- 第7回 メディカルサポートの実際3(外部講師)
- 第8回 アンチドーピング
- 第9回 スポーツ障害総論1 内科的なスポーツ障害について学ぶ
- 第10回 スポーツ障害総論2 外科的なスポーツ障害について学ぶ
- 第11回 部位別スポーツ障害 下肢
- 第12回 スポーツ傷害の予防とは
- 第13回 熱中症
- 第14回 スポーツと栄養
- 第15回 子供たちへのスポーツ指導

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後に教科書を精読し該当内容の復讐を行うこと。

■ 教 科 書

書 名：新板スポーツ外傷・障害の理学診断・理学療法ガイド

著者名：臨床スポーツ医学編集委員会

出版社：文光堂

書 名：アルレティックリハビリテーションガイド 競技復帰・再発予防のための実践的アプローチ

著者名：福林 徹

出版社：文光堂

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	リハビリテーション概論	担当者	井上 悟		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリという言葉は、一般社会でも非常によく使われるようになった。通常、疾病や外傷によって生じた障害に対する機能回復のための治療・訓練として用いられてきている。しかし、この解釈は、リハビリテーションの中の極めて狭い領域を示しているに過ぎない。リハビリテーション本来の理念を歴史的背景を含め紹介する。

■ 到達目標

リハビリテーション (rehabilitation) を正しく理解する。正しい知識をもって、リハビリテーション医療の対象や現状、各専門職の役割について知る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 リハビリテーションとは？ その概念
- 第2回 リハビリテーションの理念・定義
- 第3回 健康・疾病・障害の概念と分類
- 第4回 障害論
- 第5回 廃用症候群とは
- 第6回 障害の心理と障害受容
- 第7回 リハビリテーションの諸段階：医学的・職業的リハビリテーション
- 第8回 リハビリテーションの諸段階：社会的・教育的リハビリテーション
- 第9回 医療と各職種に関わる諸問題
- 第10回 リハビリテーション専門職とその役割
- 第11回 チーム・アプローチ：評価と記録の重要性
- 第12回 ADL, QOL の概念と評価法
- 第13回 地域リハビリテーションと高齢者対策
- 第14回 リハビリテーションを支える社会保障制度と法律 1
- 第15回 リハビリテーションを支える社会保障制度と法律 2

■ 評価方法

筆記試験 70%、授業態度 30%（遅刻・欠席は減点対象）で総合評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業前には、教科書の授業該当範囲を予習しておくこと

■ 教 科 書

書 名：リハビリテーション概論（第3版）
 著者名：上好秋孝・田島文博
 出版社：永井書店，2014年，3000円税別

■ 参 考 図 書

書 名：リハビリテーション総論（第2版）
 著者名：椿原 彰夫
 出版社：診断と治療社：2011年、3600円

■ 留 意 事 項

各回の講義テーマ、内容については関連する講義の進捗状況により変更することがあります。
 指定の教科書は後期開講のリハビリテーション医学の教科書としても利用される予定。

授業科目	リハビリテーション医学	担 当 者	非常勤講師		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーション医学の目的は、病気や外傷により生じた障害を医学的に診断・治療し、機能回復と社会復帰を総合的に提供することです。その目的を、どのように達成したら良いのかを受講者とともに考えたいと思います。

■ 到達目標

講義を参考にして、リハビリテーションに対する自分の考えを持つことができ、リハビリテーション関連職種の特任者を目指すための明確な動機付けができることを期待しています。

■ 授 業 計 画

- 第1回 障害の評価（主に神経学的所見の取り方・診かた）
- 第2回 脳卒中各論①（脳梗塞・診断）
- 第3回 脳卒中各論②（脳梗塞・治療）
- 第4回 脳卒中各論③（出血性脳卒中）
- 第5回 脳卒中各論④（脳卒中のリハビリテーションⅠ）
- 第6回 脳卒中各論⑤（脳卒中のリハビリテーションⅡ）
- 第7回 脊髄損傷①
- 第8回 脊髄損傷②
- 第9回 末梢神経障害
- 第10回 神経変性疾患
- 第11回 骨・関節疾患
- 第12回 内部疾患（循環器・呼吸器）
- 第13回 小児疾患
- 第14回 まとめ①（高齢者における諸問題）
- 第15回 まとめ②（補遺）

■ 評価方法

筆記試験（100％）。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前に教科書の該当箇所を読んでおくこと。授業後も、教科書（資料が配布された場合はその資料も）を参考にして復習すること。

■ 教 科 書

書 名：リハビリテーション医学テキスト 改訂第3版
 著者名：三上真弘、出江紳一（編）
 出版社：南江堂

■ 参考図書

書 名：リハビリテーション概論 改訂第2版

著者名：上好昭孝、土肥伸之（編）

出版社：永井書店

書 名：神経の病気

著者名：図説カラダ大辞典編集委員会 編

出版社：金沢医科大学出版局

■ 留意事項

私語など、他の受講者および講師の迷惑になる行為は、言うまでもなく厳禁です。医療業界で働くための最低限の常識を身につけて講義に臨んでください。

授業科目	作業療法概論	担当者	辻 郁		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

より良いチームアプローチが実践できるよう，歴史や理論的背景，種々の展開例から，作業療法実践の枠組みと実際を学ぶ

■ 到達目標

1. 作業療法の枠組みを概観できる
2. 作業療法の実践例を知ること，その専門性を理解できる
3. チームアプローチについて具体的な考えが持てる

■ 授業計画

- 第1回 作業療法の歴史
作業療法の生い立ち
- 第2回 作業療法の歴史-2
我が国における作業療法の発展
- 第3回 作業療法の対象者理解 1. ライフステージからみる 2. 病期からみる
- 第4回 発達過程における作業療法の実際
- 第5回 精神障害者に対する作業療法の実際
- 第6回 身体障害者に対する作業療法の実際
- 第7回 高次脳機能障害者に対する作業療法の実際
- 第8回 職業（就労）支援における作業療法の実際
- 第9回 老年（高齢）期における作業療法の実際
- 第10回 地域における作業療法の実際
- 第11回 社会保障外にある人たちへの作業療法の実際
- 第12回 作業療法の“作業”の意味
- 第13回 作業療法実践の枠組み 環境調整から
- 第14回 作業療法の理論的背景
- 第15回 まとめ 作業療法の全体像をまとめる

■ 評価方法

筆記試験（100%）
欠席は，5点減点，遅刻早退は，3点減点

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

作業療法に関連するトピックを読んでおくこと（授業時に配布する）
授業終了ごとに，授業内容を振り返り，リアクションペーパーを作成する

■ 教 科 書

--

■ 参考図書

書 名： 標準作業療法学 作業療法概論
著者名： 岩崎テル子 編集
出版社： 医学書院

書 名： 作業療法の世界
著者名： 鎌倉矩子
出版社： 三輪書店

■ 留意事項

実践例を知ること、作業療法の専門性を理解し、よりよいチームアプローチが出来るような学習を進めてほしい。

授業科目	理学療法概論	担当者	今井 公一		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法の歴史、概念、理学療法の実践についてを理解するため、リハビリテーションや生活機能といった周辺との関連性を重視しながら、なおかつ理学療法の原理についても学びます。

■ 到達目標

1. リハビリテーションと理学療法の歴史について説明できる。
2. 理学療法の実践について説明できる。

■ 授業計画

第1回 リハビリテーションと理学療法
第2回 理学療法に必要な基礎知識（1）
第3回 理学療法に必要な基礎知識（2）
第4回 理学療法に必要な基礎知識（3）
第5回 理学療法に必要な基礎知識（4）
第6回 姿勢と歩行
第7回 理学療法プロセスと評価
第8回 物理療法概論
第9回 運動療法概論
第10回 高齢社会と理学療法
第11回 理学療法研究（1）
第12回 理学療法研究（2）
第13回 理学療法研究（3）
第14回 理学療法研究（4）
第15回 総括

■ 評価方法

出席 30% 提出物 30% 筆記試験 40%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜提示される課題に対して、自己学習を十分に進め授業に臨んで下さい。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	言語聴覚概論	担当者	山口 忍		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚障害について基礎的知識を学び、言語障害者とのコミュニケーションを実際に経験する

■ 到達目標

失語症・運動性構音障害を有する方の実際について知り、良好なコミュニケーション手法を学ぶ

■ 授業計画

- 第1回 言語聴覚障害概論：コミュニケーションの障害とは何か
- 第2回 小児領域：発達遅滞
- 第3回 小児領域：発達遅滞発達障害
- 第4回 嚥下障害：基本的なメカニズム（解剖・生理）
- 第5回 嚥下障害：実際の対応（体験学習）
- 第6回 聴覚障害：難聴の疑似体験と補聴器機
- 第7回 失語症：発症のメカニズム症状の特徴
- 第8回 失語症：特徴に応じたコミュニケーション
- 第9回 言語障害を有する方とのコミュニケーションの工夫
- 第10回 疑似患者とのフリートーク
- 第11回 対話会
- 第12回 対話会
- 第13回 対話会
- 第14回 対話会
- 第15回 まとめ・レポート

■ 評価方法

出席 特に「対話会」の出席を重視 レポートと併せて評価する

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義の中で学ぶ言語障害や嚥下障害について、復習してください。対話会前には、言語障害の方とコミュニケーションするための補助資料などを用意してください

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

資料を講義中に配布する 対話会は土曜日に実施 日程は開講後連絡する

授業科目	介護学概論	担当者	橋本 卓也		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

近年、重視されている「キュアからケアへ」という概念に内包されている「治療から全人間的ケアへ」「医学モデルから生活・社会モデルへの転換」という視点を共有するとともに、介護・介助実践におけるジレンマについても考察・言及する。また、重い障害をもつ人たちから提起された「介助者手足論」という考え方を通して利用者の尊厳を支えるケアのあり方や自立（自律）支援を目指すケアについて理解を深める。さらに「認知症」800万人時代といわれている現代における認知症高齢者に対する「家族介護」「在宅介護」のあり方を考える。

■ 到達目標

- ①日本が抱える介護問題の実態及びその要因について理解することができる。
- ②利用者本位、当事者本位の視点にたった介護・介助のあり方について考察することができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
日本が抱える介護問題の背景（日本の近代化と少子・高齢化問題）
- 第2回 現代の家族と介護問題
- 第3回 介護の原理性（介護の本質及び全人間的視点にたったケアのあり方について）
- 第4回 介護・介助実践を通じて生起する「ジレンマ」について
- 第5回 「介助者手足論」という理論から見えてくる利用者本位の視点に立ったケアのあり方とは
- 第6回 アシュリー事件を通して見えてくる重い障害をもつ人たちに対する介助のあり方・価値等について
- 第7回 感情労働としてのケアワークについて
- 第8回 認知症高齢者に対する家族介護・在宅介護のあり方について

■ 評価方法

レポート 100% その他、出席率、授業中の態度等も評価の対象とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

日頃から介護問題に関する記事・ニュース等について関心をもつこと。
第5回、第6回の授業については、予習する書籍を指定するので読んでおくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：母よ殺すな
著者名：横塚晃一
出版社：生活書院

書 名：アシュリー事件
著者名：児玉真美
出版社：生活書院

■ 留意事項

授業への積極的参加を望む。他者に迷惑をかける等の態度については退出を求めるとともに減点の対象とする。

授業科目	疫学・公衆衛生学	担当者	白井 文恵		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①地域で生活する人々の健康の保持・増進・向上のために必要な公衆衛生学について学ぶ。
- ②健康に関する研究手法である疫学について学ぶ。

■ 到達目標

- ①健康に生活するとはどのようなことかを理解する。
- ②健康に生活することを保障する社会の仕組みを理解する。
- ③健康に関する統計データを理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 公衆衛生とは、保健予防概念
- 第2回 疫学
- 第3回 人口動態・人口静態
- 第4回 地域保健
- 第5回 生活習慣病と健康増進対策
- 第6回 母子保健
- 第7回 高齢者保健
- 第8回 精神保健
- 第9回 感染症対策（法律、予防接種）
- 第10回 感染症対策（性感染症）
- 第11回 感染症対策（結核、インフルエンザ）
- 第12回 生活環境（食品安全行政）
- 第13回 産業保健
- 第14回 環境保健
- 第15回 学校保健

■ 評価方法

筆記試験80% レポート20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前に教科書の該当ページを読んでくること。
授業後に教科書、プリントを読み復習すること。

■ 教 科 書

書 名：厚生省の指標 増刊 国民衛生の同行 2015/2016
著者名：一般財団法人 厚生労働統計協会

■ 参考図書

書 名：標準 公衆衛生・社会医学
著者名：岡崎 勲、豊嶋英明、小林廉毅 編
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	救急医学・救急措置法	担当者	藤岡 重和・岡本 文雄 木村 晃大・福山 智子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、救急医学の概要と救急措置法について学ぶ。そして、蘇生法、止血法、体位保持法、固定法、運搬法を学習する。リハビリテーション医療の対象者は、脳血管障害、循環器疾患、呼吸器疾患等の基礎疾患を有しており、対象者の評価、リスク回避についても広く学習する。

■ 到達目標

救急傷病の各病態を理解し、救急措置を理解するための基盤とする。そして、蘇生法、止血法、体位保持法、固定法、運搬法等の救急措置法を修得する。また、リハビリテーション医療における対象者の評価、リスク回避について理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 救急医学総論 (1) 救急医療システム (岡村)
- 第2回 救急医学総論 (2) 心肺停止、ショック、循環不全の病態 と処置法 (岡村)
- 第3回 救急医学総論 (3) 意識障害の病態と処置法 (岡村)
- 第4回 救急医学総論 (4) 吐下血の病態と処置法 (岡村)
- 第5回 救急医療・看護の基本技術的知識 (福山)
- 第6回 救急医療・救急時の観察ポイント (福山)
- 第7回 救急医療・看護の基本技術的技術 (福山)
- 第8回 循環器疾患の救急病態と処置法 (木村)
- 第9回 呼吸器疾患の救急病態と処置法 (木村)
- 第10回 消化器疾患の救急病態と処置法 (木村)
- 第11回 代謝疾患、内分泌疾患の救急病態と処置法 (藤岡)
- 第12回 感染症、アナフィラキシーの救急病態と処置法 (藤岡)
- 第13回 外傷の救急病態と処置法 (藤岡)
- 第14回 急性中毒の救急病態と処置法 (藤岡)
- 第15回 総復習 (藤岡)

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業では、学習すべき課題を提示しますので、事前学習を必ずしておいてください。
次回授業までに、前回の授業内容を復習しておいてください。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：救急診療指針 改訂第4版
著者名：日本救急医学会監修
出版社：へるす出版

■ 留意事項

授業科目	地域医療実践学	担当者	辻 郁 他		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	4 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

講義により、地域の医療や保健福祉領域での実践例を知る
臨床実習で担当した事例（症例）の居住地の社会資源等の概況を確認し、ニーズを充足するサービスや施策等を企画する
以上を通して、地域で理学療法・作業療法を実践するために必要な知識や方法を学ぶ

■ 到達目標

1. 実践例を聞くことでその現状を把握し、課題が推測できる
2. 実習で担当した事例が暮す地域の現状がわかる
3. 実習で担当した事例が豊かに暮らすためのニーズが抽出できる
4. 3. のニーズを充足できる実際的なサービスを企画できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 実践例を知る 1
- 第2回 実践例を知る 2
- 第3回 実践例を知る 3
- 第4回 実践例を知る 4
- 第5回 実践例を知る 5
- 第6回 地域概況の捉え方を学ぶ
- 第7回 臨床実習で担当した事例が暮す地域の概況を明らかにする 1
- 第8回 臨床実習で担当した事例が暮す地域の概況を明らかにする 2
- 第9回 担当事例のニーズを明らかにする
- 第10回 ニーズを充足するためのサービス企画 1
- 第11回 ニーズを充足するためのサービス企画 2
- 第12回 ニーズを充足するためのサービス企画案プレゼン準備
- 第13回 ニーズを充足するためのサービス企画案プレゼン準備
- 第14回 企画書のプレゼンテーション 1
- 第15回 企画書のプレゼンテーション 2

■ 評価方法

出席と取り組み態度：50% 課題レポート：30% 報告内容の相互評価点：20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

第1回から第6回の講義終了後は、その内容を振り返り、自己学習内容を含めてレポートを作成する
第6回から第15回は演習でありその回の終了後は、実施内容を振り返りリアクションペーパーを作成する。
予習課題は定めないが、期間内に課題を終了させるよう準備をすること

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	障害者福祉論	担 当 者	橋本 卓也		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

障害者福祉に関する理念・価値・法制度及び障害構造等を体系的に理解するとともに障害をもつ人たちの生活・教育・雇用・施設環境等の実態を通して彼らを排除する社会構造への関心と支援のあり方を模索する。また、障害をもつ人たちがおかれている現状を把握し、「医学モデル」という狭義の捉え方ではなく、「生活・社会モデル」の視点からこの問題を考える。

■ 到達目標

- ①障害者福祉の理念・価値及び障害をもつ人たちの生活実態を把握することができる。
- ②障害をもつ人たちの生活ニーズを解決するための制度・施策等を把握し、支援のあり方を考察することができる。
- ③障害者福祉に関する医学モデルと生活・社会モデルの差異を理解できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
障害者福祉の理念及び価値
- 第2回 障害の概念及び障害構造について（ICIDH モデルから ICF モデルへ）
- 第3回 障害者の法的定義と日本の障害者の実態
- 第4回 障害者福祉の史的展開及び動向（欧米と日本の差異）
- 第5回 日本の障害者福祉施策体系
- 第6回 障害者の雇用・就労の現状と課題
- 第7回 障害者の所得保障と経済的負担軽減
- 第8回 障害者総合支援法Ⅰ（旧：障害者自支援法）
- 第9回 障害者総合支援法Ⅱ
- 第10回 特別支援教育の変遷と課題
- 第11回 障害者施設論（世界の情勢と課題及び地域移行について）
- 第12回 障害者の権利擁護と障害者虐待防止法（権利侵害の実態と要因）
- 第13回 障害者のセルフヘルプ運動（理念と機能・役割）
- 第14回 障害者ケアマネジメントと障害者の意思決定支援について
- 第15回 ゲストスピーカー（障害当事者）による講義と交流（意見交換）

■ 評価方法

定期試験（筆記試験）85％ 出席率 15％ その他、授業中の態度等を加味し総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回の授業項目について「参考図書」その他の当授業に関連する書籍を読んだ上で、授業に臨むこと。

■ 教 科 書

■ 参 考 図 書

書 名：よくわかる障害者福祉
著者名：小澤 温（編）
出版社：ミネルヴァ書房

■ 留 意 事 項

授業への積極的参加を望む。

授業科目	高齢者福祉論	担当者	橋本 卓也		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

現代日本の高齢者を取り巻く現状と福祉課題を考察するとともに、介護保険制度について理解する。また、高齢者に対する虐待等の要因を探るとともに権利擁護の視点から虐待防止の実践及び 関連施策についても学ぶ。

■ 到達目標

- ①高齢者福祉の社会的背景、理念、目標等について理解することができる。
- ②介護保険を中心とする高齢者福祉施策と、それに基づいた具体的実践について理解することができる。

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
現代における高齢者の生活課題と福祉ニーズについて
- 第2回 高齢者福祉制度の体系と各施策について
- 第3回 介護保険制度Ⅰ（在宅サービスを中心に）
- 第4回 介護保険制度Ⅱ（施設サービスを中心に）
- 第5回 介護保険制度におけるケアマネジメントと他職種連携について
- 第6回 高齢者の権利擁護について（高齢者虐待の実態と防止について）
- 第7回 高齢者の権利擁護について（孤立死・孤独死について）
- 第8回 地域包括ケアシステムについて

■ 評価方法

定期試験（筆記試験）100% その他、出席率、授業中の態度等も評価の対象とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

参考図書等を用いて各授業項目に関する予習（読んでくる）をしておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：高齢者に対する支援と介護保険制度
 著者名：岡田進一・橋本正明（編著）
 出版社：ミネルヴァ書房

■ 留意事項

授業に積極的に参加すること

授業科目	健康科学概論	担当者	大槻 桂右		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本授業では、健康と人間の生活にかかわる心身の諸問題を課題として、生涯にわたり積極的な健康を保持増進させていくという Positive Health の観点から多様化した現代社会に対応できる健康処方について説明する。

■ 到達目標

現代社会における人（ヒト）の適応とライフスタイルについて理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 健康科学とは何か がんを科学する
- 第2回 健康に影響する因子 喫煙の科学
- 第3回 健康に影響する因子 アルコール依存症の科学
- 第4回 生活習慣病と健康 メタボリックシンドロームの科学
- 第5回 生活習慣病と健康 血圧の科学
- 第6回 精神の健康 うつ病の科学
- 第7回 精神の健康 不安障害の科学
- 第8回 栄養と健康 ダイエットの科学
- 第9回 第9回 運動の身体的効果 ①筋力トレーニングの科学と中高年のための運動法
- 第10回 第10回 運動の身体的効果 ②骨粗しょう症の科学
- 第11回 各種疾患に対する運動処方 ①首の痛み・肩の痛み
- 第12回 各種疾患に対する運動処方 ②股関節の痛み
- 第13回 各種疾患に対する運動処方 ③膝の痛み
- 第14回 各種疾患に対する運動処方 ④手のトラブル・踵の痛み
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

小テスト40%、学期末試験50%、出席点10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義前に、次回の講義内容について概説し、テキストと合わせて予習すべき内容を指示します。講義配布資料をきちんと理解し、次の講義に臨むこと。

■ 教 科 書

書 名：『生き方としての健康科学』
著者名：山崎喜比古，朝倉隆司編
出版社：有信堂

■ 参考図書

■ 留意事項

講義中の私語は厳禁とする。講義中に注意を何度か受け、かつ改善が認められな場合は講義を妨害したとみなし、対象学生に対して退室を指示することがある。真剣に取り組む姿勢を求める。

授業科目	感染症学	担当者	藤岡 重和		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

感染症と人・微生物との関わり、感染防御機構、感染症の検査と診断、治療、そして感染予防策について学習する。感染症は、リハビリテーション領域において、特に注意が必要であり、各種感染症について基本的理解ができるように解説する。

■ 到達目標

1. 微生物と感染症、感染防御機構について基本的理解ができる
2. 代表的な感染症について、病原微生物とその感染経路、臨床像、診断と治療法を理解する
3. 院内感染および感染予防対策について説明できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 感染症総論 (1) 微生物と感染症、感染防御機構
第2回 感染症総論 (2) 感染症の検査と診断、感染症の治療
第3回 感染症各論 (1) 呼吸器感染症、結核
第4回 感染症各論 (2) 消化器感染症、食中毒
第5回 感染症各論 (3) 肝炎
第6回 感染症各論 (4) 尿路感染症、性感染症
第7回 感染症各論 (5) 皮膚、粘膜の感染症
第8回 感染症各論 (6) 人獣共通感染症、寄生虫感染症
第9回 感染症各論 (7) 小児の感染症、母子感染
第10回 感染症各論 (8) 高齢者の感染症、日和見感染症
第11回 感染症各論 (9) 新興感染症、感染症トピックス
第12回 感染制御学 (1) 院内感染、標準予防策、感染経路別予防策
第13回 感染制御学 (2) 術後感染症、カテーテル関連感染症、針刺しと感染症
第14回 感染制御学 (3) 薬剤耐性菌による感染症、その他
第15回 総復習（国家試験対策）

■ 評価方法

定期試験 70% 小テスト 10% 出席、態度 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業では、次回までに学習すべき課題を提示しますので、事前学習を必ずしておいてください。
次回授業までに、前回の授業内容を復習しておいてください。

■ 教 科 書

書 名：臨床微生物、医動物（NURSING GRAPHICUS 疾患の成り立ち 3）
著者名：矢野久子、安田陽子
出版社：MC メディカ出版

■ 参考図書

書 名：病原体・感染・免疫 第2版
著者名：藤本秀士
出版社：南山堂

■ 留 意 事 項

授業科目	医療安全学	担当者	藤岡 重和		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

頻発する医療事故を概観し、医療現場の現状と医療職を取りまく社会的環境を理解する。次に、事故発生のメカニズムと事故分析、事故対策について学習する。また、事故事例の分析を通して医療機関における安全対策のありかたについて考える。

■ 到達目標

1. 医療事故の実際を知り、安全対策の必要性について理解する
2. 事故の発生要因について説明できる
3. 医療機関における安全対策を説明できる

■ 授業計画

- 第1回 医療事故の疫学、頻度、医療事故事例の紹介
- 第2回 医療事故の定義、分類、医療事故の報告制度
- 第3回 医療事故発生のメカニズム
- 第4回 医療事故分析、事故対策
- 第5回 医療機関における安全対策 (1)
- 第6回 医療機関における安全対策 (2)
- 第7回 医療事故後の対応、医療事故に関する法的責任
- 第8回 リハビリテーション業務における安全対策

■ 評価方法

定期試験 60%、提出課題 20%、出席、態度 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業で、次回までに学習すべき課題を提示しますので、事前学習を必ずしておいてください。
次回授業までに、前回の授業内容を復習しておいてください。

■ 教 科 書

書 名：医療安全（NURSING GRAPHICUS 看護の統合と実践 2）
著者名：松下由美子、杉山良子、小林美雪
出版社：MC メディカ出版

■ 参考図書

書 名：リハビリテーション医療における安全管理・推進のためのガイドライン
著者名：日本リハビリテーション医学会診療ガイドライン委員会編
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	基礎解剖学	担 当 者	柴田 雅朗		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

人体および人体を構成している細胞・組織・器官の形態・構造の基本を系統的に学ぶ。

■ 到達目標

人体の構造を理解するための基礎的知識を身につけ、説明することが出来る。

■ 授 業 計 画

第1回 解剖学総論

1. 細胞・組織・器官・系
2. 肉眼解剖と組織学
3. 系統解剖と局所解剖学
4. 発生学
5. 体表解剖学
6. 人体の正常・異常・個体差
7. 解剖学的姿勢
8. 基本的な解剖学用語

第2回 骨学総論

1. 骨の肉眼的構造
2. 髄腔と骨髓
3. 体腔

第3回 関節靱帯学総論

1. 線維性連結
2. 軟骨性連結
3. 滑膜性連結
4. 関節の一般構造（関節包、滑膜、滑液）

5. 関節の特殊構造（関節円板、関節半月、関節靱帯、関節唇）

第4回 筋学総論

1. 筋の分類（平滑筋と横紋筋）
2. 随意筋と不随意筋
3. 骨格筋の基本形態
4. 腱と腱膜
5. 筋の付着（起始と停止）
6. 筋の作用（屈曲・伸展、内転・外転、内旋・外旋）
7. 主動筋、拮抗筋、協力筋
8. 骨格筋の補助装置（筋膜、支帯、筋間中隔、筋滑車、滑液包、腱鞘）

第5回 神経学総論1

1. 中枢神経系と末梢神経系
2. 求心性神経と遠心性神経
3. 白質と灰白質
4. 神経細胞（神経細胞体、樹状突起、軸索、髄鞘）
5. 神経線維と神経

第6回 神経学総論2

1. 脊髄の白質と灰白質（前柱、後柱、前索、側索、後索）
2. 脊髄の区分（頸髄～尾髄）
3. 脊髄髄節と脊髄神経（髄節、前根と後根、前枝と後枝）

第7回 組織および胚葉

1. 組織（上皮組織、支持組織）
2. 胚葉（外胚葉、中胚葉、内胚葉）
3. 三層性胚盤と器官・組織形成

第8回 循環器系総論

1. 血管系の役割
2. 血管（動脈・毛細血管・静脈の構造）
3. 動脈・静脈と動脈血・静脈血
4. 吻合
5. 終動脈

第9回 心臓

1. 心筋細胞
2. 心臓の位置
3. 心臓を包む膜
4. 心臓の内腔（心房と心室）
5. 肺循環と体循環

第10回 心臓

1. 房室弁（腱索と乳頭筋、左房室弁・右房室弁）
2. 動脈弁（肺動脈弁・大動脈弁）
3. 心臓の血管（冠状動脈、冠状静脈洞）

第11回 動脈系

1. 大動脈
2. 大動脈弓（腕頭動脈、左総頸動脈、左鎖骨下動脈）
2. 頭頸部に分布する動脈
3. 上肢帯と上肢に分布する動脈
4. 胸部内臓・腹部内臓に分布する動脈

第12回 動脈系（続き）

1. 脳の動脈

静脈系

1. 右心房に注ぐ静脈
2. 頭頸部からの静脈
3. 上肢帯と上肢からの静脈
3. 奇静脈
4. 門脈

第13回 胎児循環

1. 胎盤
2. 臍静脈と臍動脈
3. 静脈管（アランチウス管）
4. 卵円孔
5. 動脈管（ボタロー管）

- リンパ系
1. リンパ管とリンパ節
2. 胸管
3. 右リンパ本幹
4. 脾臓

練習問題配布

第14回 総復習1

復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説

第15回 総復習2

復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習は必要ありませんが、復習を必ず毎回やって、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ、解決が見つからない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教科書

書 名：PT・OT・STのための解剖学

著者名：渡辺正仁 監修

出版社：廣川書店

書 名：ネッター解剖学アトラス

著者名：相磯貞和 訳

出版社：南江堂

書 名：消っして忘れない解剖学 要点整理ノート

著者名：井上 馨・松村譲児 編集

出版社：羊土社

■ 参考図書

■ 留意事項

欠席や遅刻をしないように心がけること。

授業科目	解剖学基礎実習	担当者	柳 千磨・伊禮まり子・島 雅人 (P1, P2) 山田隆人 (P3, O)		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

上肢の骨・関節・筋・体幹の骨・関節・筋について、骨実習や組織実習、体表解剖学などを通して学ぶ。

■ 到達目標

運動器系解剖学の基礎的知識を身につけ、それを骨標本・身体に適用することができるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 全身骨格とその分類
 1. 骨の標本を使って全身骨格を作る。 2. 全身骨格を軸骨格と付属性骨格に分ける。
 3. 付属性骨格をさらに分類する。 4. 海綿骨と緻密骨を区別する。
- 第2回 脊柱と体表解剖学
 1. 椎骨の基本構造。 2. 頸椎・胸椎・腰椎・仙骨・尾骨について観察する。
 3. 自分自身の体で椎骨を触知する。
- 第3回 上肢帯骨と体表解剖学
 1. 肩甲骨の各部を観察する。 2. 鎖骨の各部を観察する。 3. 肩甲骨と鎖骨を触知する。
 4. 肩甲骨と鎖骨の動きを理解する。
- 第4回 胸郭と体表解剖学
 1. 胸骨の各部 2. 胸骨角 3. 肋硬骨と肋軟骨 4. 真肋と仮肋 5. 肋骨の各部
 6. 第一肋骨（前斜角筋結節と鎖骨下動脈溝） 7. 頸肋と腰肋 8. 胸骨と肋骨の触知
- 第5回 自由上肢と体表解剖学
 1. 上腕骨の各部 2. 橈骨の各部 3. 尺骨の各部 4. 手の骨 5. 手根溝
 6. 自由上肢骨の触知
- 第6回 脊柱と胸郭の連結
 1. 椎骨間の連結 2. 椎間板 3. 環軸関節（正中環軸関節と外側環軸関節、環椎十字靱帯）
 4. 胸郭の連結 5. 肩鎖関節 6. 胸鎖関節
- 第7回 上肢の関節と靱帯
 1. 肩関節 2. 腕尺関節 3. 腕橈関節 4. 上橈尺関節 5. 下橈尺関節 6. 手関節
 7. 手根中手関節 8. 中手指節関節 9. 指節間関節
- 第8回 下肢帯骨と骨盤
 1. 寛骨 2. 腸骨 3. 坐骨 4. 恥骨 5. 骨盤
- 第9回 自由下肢骨
 1. 大腿骨 2. 脛骨 3. 腓骨 4. 膝蓋骨 5. 足の骨
- 第10回 股関節と仙腸関節
 1. 股関節の構造と動き 2. 仙腸関節の構造と動き
- 第11回 膝関節、脛腓関節と足関節
 1. 膝関節の構造と動き 2. 脛腓関節の構造と動き 3. 足関節の構造と動き
- 第12回 頭蓋骨その1
 1. 頭蓋を構成する骨 2. 頭蓋骨の連結 3. 泉門
- 第13回 頭蓋骨その2
 1. 眼窩 2. 鼻腔 3. 副鼻腔 4. 側頭下窩 5. 翼口蓋窩 6. 顎関節
- 第14回 総復習1
 復習のための練習問題とその解説
- 第15回 実技試験

■ 評価方法

小テスト：40％ 実技試験：10％ 筆記試験：50％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後各自復習を行い、その知識定着度を測る為、次の授業で小テストに臨んでももらいます。

■ 教科書

書 名：PT・OT・ST のための解剖学

著者名：渡辺正仁 監修

出版社：廣川書店

書 名：ネッター解剖学アトラス

著者名：相磯貞和 訳

出版社：南江堂

■ 参考図書

■ 留意事項

身体に触知などを行うので、身体に触り易い服装で臨んでください。

授業科目	運動器系の解剖学	担当者	柴田 雅朗		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動器系のうち骨・関節靱帯については、解剖学基礎実習で既に学んだ。本科目では運動器系を構成しているもののうち、筋について詳細に学ぶ。

■ 到達目標

身体の一部を構成している筋の名称、支配神経、主な作用を説明することが出来る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 体幹の筋
1. 固有背筋
- 第2回 体幹の筋（続き）
1. 胸部の筋
- 第3回 体幹の筋（続き）
1. 腹部の筋 2. 骨盤の筋
- 第4回 上肢の筋（軸骨格から上肢帯への筋）
1. 僧帽筋 2. 肩甲挙筋 3. 菱形筋 4. 前鋸筋 5. 鎖骨下筋 6. 広背筋
7. 大胸筋 8. 小胸筋
- 第5回 上肢の筋（上肢帯から上腕骨への筋）
1. 肩甲下筋 2. 棘上筋 3. 棘下筋 4. 小円筋 5. 大円筋 6. 烏口腕筋
7. 三角筋
- 第6回 上肢の筋（上肢帯から上腕骨への筋）（続き）
1. 上腕前面の筋 2. 上腕後面の筋
- 第7回 上肢の筋（上肢帯から上腕骨への筋）（続き）
1. 前腕前面の筋 2. 前腕後面の筋
- 第8回 手の筋
1. 母指球筋 2. 小指球筋 3. 中手筋
- 第9回 下肢の筋
1. 寛骨筋 2. 大腿前面の筋 3. 大腿内側の筋 4. 大腿後面の筋
- 第10回 下肢の筋（続き）
1. 下腿前面の筋 2. 下腿外側の筋 3. 下腿後面の筋
- 第11回 下肢の筋（続き）
1. 足底の筋
頭部の筋
1. 表情筋 2. 咀嚼筋 3. 舌筋
- 第12回 頸部の筋
1. 広頸筋 2. 胸鎖乳突筋 3. 舌骨筋群
- 第13回 頸部の筋（続き）
1. 椎前筋群 2. 斜角筋群
総復習のための練習問題配布
- 第14回 総復習1
復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説
- 第15回 総復習2
復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習は必要ありませんが、復習を必ず毎回やって、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ、解決が見つからない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教科書

書 名：PT・OT・STのための解剖学

著者名：渡辺正仁 監修

出版社：廣川書店

書 名：ネッター解剖学アトラス

著者名：相磯貞和 訳

出版社：南江堂

書 名：消っして忘れない解剖学 要点整理ノート

著者名：井上 馨・松村譲児 編集

出版社：羊土社

■ 参考図書

■ 留意事項

欠席や遅刻をしないように心がけること。

授業科目	神経系の解剖学	担 当 者	柴田 雅朗		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

中枢神経系および末梢神経系の各部について学習し、上行性および下行性伝導路についてを学ぶ。

■ 到達目標

中枢神経系および末梢神経系を構成している各部の名称や機能を説明でき、上行性および下行性伝導路の種類と各伝導路の主要な部位が言える。

■ 授 業 計 画

- 第1回 神経系総論のまとめ
1. 基礎解剖学で学んだ神経学総論の復習 2. 髄膜、脳室、脳脊髄液
- 第2回 神経系の発生：1. 大脳、中脳、橋、延髄、小脳の発生
脊髄の構造：1. 基礎解剖学で学んだ脊髄の復習
- 第3回 脳の総論：1. 大脳 2. 間脳 3. 中脳 4. 橋 5. 延髄 6. 小脳
大脳：1. 溝、回、葉 2. 大脳皮質
- 第4回 大脳（続き）：1. ブロードマン野 2. 運動野、感覚野、連合野 3. 優位半球
4. 神経線維の種類
- 第5回 大脳（続き）：1. 大脳基底核（機能、構造、障害） 2. 内包（構造、血管分布、脳卒中）
- 第6回 大脳（続き）：1. 扁桃体
間脳：1. 視床 2. 視床下部
中脳：1. 中脳蓋 2. 中脳被蓋 3. 大脳脚
- 第7回 橋：1. 橋底部 2. 橋被蓋
延髄：1. オリーブ 2. 錐体交叉 3. 網様体
小脳：1. 構成[区分] 2. 皮質と髄質 3. 小脳脚
- 第8回 末梢神経系：1. 脊髄神経とは 2. 脊髄神経前枝 3. 脊髄神経後枝
- 第9回 末梢神経系（続き）：1. 腕神経叢の構成 2. 腕神経叢の障害
- 第10回 末梢神経系（続き）：1. 脳神経の総論 2. 嗅神経、視神経 3. 動眼神経 4. 滑車神経
5. 三叉神経 6. 外転神経
- 第11回 末梢神経系（脳神経続き）：1. 顔面神経 2. 内耳神経 3. 舌咽神経 4. 迷走神経
5. 副神経 6. 舌下神経
自律神経系：1. 自律神経とは 2. 交感神経 3. 副交感神経
- 第12回 下行性伝導路：1. 錐体路（皮質脊髄路、皮質格路） 2. 錐体外路 3. 反射路
- 第13回 上行性伝導路：1. 温痛覚（外側脊髄視床路） 2. 粗大触圧角（前脊髄視床路）
3. 精細触圧角（後索-内側毛帯路） 4. 深部感覚（意識的な深部感覚：後索-内側毛帯路、無意識的な深部感覚：脊髄小脳路・楔状束小脳路） 5. 関連痛
総復習のための練習問題配布
- 第14回 総復習1：復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説
- 第15回 総復習2：復習のための練習問題（国家試験形式）とその解説

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習は必要ありませんが、復習を必ず毎回やって、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教 科 書

書 名：PT・OT・ST のための解剖学

著者名：渡辺正仁 監修

出版社：廣川書店

書 名：ネッター解剖学アトラス

著者名：相磯貞和 訳

出版社：南江堂

書 名：消っして忘れない解剖学 要点整理ノート

著者名：井上 馨・松村譲児 編集

出版社：羊土社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

欠席や遅刻をしないように心がけること。

授業科目	内臓系の解剖学	担 当 者	赤松 香奈子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

医学の基礎である解剖学のうち内臓系について、単なる形態構造のみの学習にとどまらず、関連する器官と合わせてその構造と機能を学ぶ。

■ 到達目標

医療専門職として必要な内臓系の構造と機能を、関連器官と合わせて理解する。
さらには適切な専門用語を用いて説明することができることを目標とする。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション、呼吸器系；鼻腔、咽頭、喉頭
第2回 呼吸器系；気管、肺
第3回 消化器系；口腔、食道
第4回 消化器系；胃、小腸
第5回 消化器系；大腸、直腸、肛門
第6回 消化器系；唾液腺、肝臓、胆嚢、膵臓
第7回 泌尿器系；腎臓
第8回 泌尿器系；尿管、膀胱
第9回 生殖器系；男性生殖器
第10回 生殖器系；女性生殖器
第11回 内分泌器；膵臓、腎臓、副腎、甲状腺
第12回 内分泌器；精巣、卵巣、消化管、脳下垂体
第13回 感覚器；特殊感覚器（視覚器、聴覚器）
第14回 感覚器；特殊感覚器（嗅覚器、味覚器、皮膚感覚器）、内臓諸器官の断層解剖学
第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験 100%とする

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で配布する資料を各自、予習・復習すること

■ 教 科 書

書 名：PT・OT・STのための解剖学
著者名：渡辺 正仁
出版社：廣川書店
.....
書 名：ネッター 解剖学アトラス
著者名：相磯 貞和
出版社：南江堂

■ 参考図書

書 名：イラスト解剖学
著者名：松村 譲児
出版社：中外医学者

■ 留意事項

授業科目	生理学	担当者	木村 晃大		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

人体の各臓器がいかに正常の機能を維持し、1 個体としての機能を発揮しているかを学習する。

■ 到達目標

各臓器における構造と機能を理解するだけでなく、生理学を通じて生命現象を理論的に考察する力も養うことを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 細胞と内部環境
- 第2回 筋肉 (1)
- 第3回 筋肉 (2)
- 第4回 神経系の基礎 (1)
- 第5回 神経系の基礎 (2)
- 第6回 末梢神経
- 第7回 自律神経
- 第8回 中枢神経 (1)
- 第9回 中枢神経 (2)
- 第10回 中枢神経 (3)
- 第11回 中枢神経 (4)
- 第12回 中枢神経 (5)
- 第13回 代謝 (1)
- 第14回 代謝 (2)
- 第15回 前期総括
- 第16回 血液 (1)
- 第17回 血液 (2) (免疫)
- 第18回 循環器 (1)
- 第19回 循環器 (2)
- 第20回 呼吸器 (1)
- 第21回 呼吸器 (2)
- 第22回 腎臓 (1)
- 第23回 腎臓 (2)
- 第24回 消化器 (1)
- 第25回 消化器 (2)
- 第26回 内分泌 (1)
- 第27回 内分泌 (2)
- 第28回 内分泌 (3)
- 第29回 性と生殖
- 第30回 後期総括

■ 評価方法

試験（95%）と出席・授業態度（5%）により評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

生理学は解剖学とならんで医療従事者にとって必須の科目であり、臨床医学を学ぶ上での土台となります。また国家試験でも、幅広く深い知識が問われます。そのことを意識して授業に臨んで下さい。また、授業時間のみでは理解は深まりません。自分に適した自己学習方法を見つけ、積極的に予習・復習を行う習慣を身につけましょう。

■ 教科書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学 第4版
著者名：岡田 隆夫・長岡 正範
出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：標準生理学（第7版）
著者名：小澤 滯司 他
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	生理学実習	担当者	木村 晃大		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

解剖学・生理学・運動学の講義を踏まえ、環境の変化・運動に対する生体の反応や恒常性維持について学習する。

■ 到達目標

人の生理機能を自らの手で計測し、その結果を解析・考察する事により、人体機能のダイナミクスやホメオスタシスが維持されるメカニズムを理解する。また、この実習を通して、医療従事者として必要な姿勢や洞察力を養う。

■ 授業計画

- 第1回 実習オリエンテーション
- 第2回 講義・機器取扱い実施確認 (1)
- 第3回 講義・機器取扱い実施確認 (2)
- 第4回 講義・機器取扱い実施確認 (3)
- 第5回 講義・機器取扱い実施確認 (4)
- 第6回 実習 (1)
- 第7回 実習 (2)
- 第8回 実習 (3)
- 第9回 実習 (4)
- 第10回 実習 (5)
- 第11回 解説 (講義)
- 第12回 解説 (講義)

■ 評価方法

実習態度・レポート (50%)、試験 (50%) により評価する。

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

出席や実習中の態度も成績評価に含みます。レポート提出は期限厳守のこと。レポート未提出は再履修とします。被験者の安全や守秘義務を守る事を念頭にして、真剣に取り組むこと。
また、全ての内容は国家試験に直結します。上記に限らず、積極的に沢山の参考書に目を通してレポートを作成し、各項目について理解を深める様に努める事。レポートの評価では①内容のオリジナリティと、②各項目について深く、広く、理解しようとする努力を重視します。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：標準生理学 (第7版)
著者名：小澤 滯司 他
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	運動生理学	担当者	伊禮 まり子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

身体運動において、生体内の各種機構がどのように働いているかを講義する。

■ 到達目標

運動生理学の基礎的な知識および考え方を身につけることを目標とする。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション
第2回 運動と筋骨格系 (1)
第3回 運動と筋骨格系 (2)
第4回 運動と神経系 (1)
第5回 運動と神経系 (2)
第6回 運動と神経系 (3)
第7回 運動と呼吸 (1)
第8回 運動と呼吸 (2)
第9回 運動と循環 (1)
第10回 運動と循環 (2)
第11回 運動と代謝
第12回 運動と栄養
第13回 運動学習とトレーニング
第14回 運動と発育・発達・加齢
第15回 総括

■ 評価方法

筆記試験 (90%)、小テスト (10%) に出席状況を併せて評価する。

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

運動・動作を治療手段とする PT・OT にとって、運動生理学は自らの治療が生体機能に及ぼす影響を理解する基礎となります。生理学、2年生の生理学実習とリンクする内容でもありますので、しっかりと学んでください。また、授業時間のみでは理解は深まりません。あらかじめ教科書を読んでから授業に臨む、授業後には講義内容をまとめる等、自分に適した自己学習方法を見つけ、積極的に予習・復習を行う習慣を身につけましょう。

■ 教 科 書

書 名：運動生理学の基礎と発展
著者名：春日 規克・竹倉 宏明
出版社：フリースペース

■ 参考図書

書 名：運動生理学20講 第2版

著者名：勝田 茂

出版社：朝倉書店

書 名：スポーツ・運動生理学概説

著者名：山地 啓司他

出版社：明和出版

書 名：改訂 身体活動と体力トレーニング

著者名：藤原勝夫・外山寛

出版社：日本出版サービス

書 名：身体機能の調節性

著者名：池上晴夫

出版社：朝倉書店

書 名：姿勢制御の神経生理機構

著者名：藤原勝夫

出版社：杏林書院

■ 留意事項

授業科目	運動学総論	担当者	境 隆弘		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法にとっての運動学（Kinesiology）は、「人間の運動の科学」であり、人間のからだの構造を学ぶ解剖学、人間のからだの機能を学ぶ生理学、そして、身体および身体各部を物体とみなした時の力学を基礎とした応用科学であることについて学ぶ。

■ 到達目標

運動学用語を理解し、使用できるようになる。
運動力学を理解する。
上肢の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 コース・ガイダンス
講義の進め方、評定方法の他、理学療法士にとっての運動学の重要性を学ぶ
- 第2回 運動学（Kinesiology）総説
解剖学・生理学ならびに運動療法学との関連、Kinematics と Kinetics について学ぶ
- 第3回 身体運動①基本
運動学を学ぶにあたって必要な身体における運動面と軸について学ぶ
- 第4回 身体運動②名称
運動学を学ぶにあたって必要な身体各部の運動方向の名称について学ぶ
- 第5回 身体運動③演習
①②で学んだ身体運動について、演習を行い理解を深める
- 第6回 運動を構成する要素と器官① ヒトの運動を生む器官のうち、骨と関節について学ぶ
- 第7回 運動を構成する要素と器官② ヒトの運動を生む器官のうち、筋について学ぶ
- 第8回 運動を構成する要素と器官③ ①②で学んだ運動を構成する要素と器官について、演習を行い理解を深める
- 第9回 力学の基礎① 運動学を学ぶにあたって必要なニュートン力学について学ぶ
- 第10回 力学の基礎② 運動学を学ぶにあたって必要な身体とてこについて学ぶ
- 第11回 力学の基礎③ 運動学を学ぶにあたって必要なモーメント（トルク）について学ぶ
- 第12回 力学の基礎④ 運動学を学ぶにあたって必要な生体における力とモーメントについて学ぶ
- 第13回 構えと姿勢① ヒトの運動にかかわる構えと姿勢の名称について学ぶ
- 第14回 構えと姿勢② ①で学んだ構えと姿勢について、演習を行い理解を深める
- 第15回 上肢の関節運動学① 肩甲帯に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第16回 上肢の関節運動学演習① 肩甲帯の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第17回 上肢の関節運動学② 肩関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第18回 上肢の関節運動学演習② 肩関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第19回 上肢の関節運動学③ 肘関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第20回 上肢の関節運動学演習③ 肘関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第21回 上肢の関節運動学④ 前腕に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第22回 上肢の関節運動学演習④ 前腕の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第23回 上肢の関節運動学⑤ 手関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第24回 上肢の関節運動学演習⑤ 手関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第25回 上肢の関節運動学⑥ 手指に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第26回 上肢の関節運動学演習⑥ 手指の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第27回 実技試験
学んだ関節運動学について実技試験を実施する
- 第28回 実技試験のフィードバック
実技試験の解説、講評を行う
- 第29回 総括① 本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う
- 第30回 総括② 本講義で学んだことについて、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験 80%

小テスト・実技テストで20%（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

（予習）

運動学は、解剖学、生理学、物理学（力学）の知識が無ければ、理解が進まない。

毎回、授業内容に応じた解剖学、生理学、物理学（力学）の復習をしてくること。

例：肩関節の授業の前は、肩関節の解剖の復習をしてくる。

（復習）

授業の翌週に必ず小テストを行うので、授業での学習内容が身に付くよう復習すること。

■ 教科書

書 名：基礎運動学

著者名：中村隆一、斎藤宏

出版社：医歯薬出版

書 名：PT・OTのための運動学テキスト：基礎・実習・臨床

著者名：小柳磨毅・西村敦・山下協子・大西秀明 編

出版社：金原出版株式会社

■ 参考図書

書 名：筋骨格系のキネシオロジー

著者名：嶋田智明ほか監訳

出版社：医歯薬出版

書 名：運動療法のための機能解剖学的触診技術（上肢、下肢・体幹）

著者名：青木隆明監修、林 典雄執筆

出版社：メディカルビュー

書 名：図解 四肢と脊柱の診かた

著者名：野島元雄監訳

出版社：医歯薬出版

書 名：カパンディ関節の生理学（体幹・上肢・下肢）

著者名：萩島秀男監訳

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

理学療法の基礎学問として重要な科目であり、2年生に進んで、運動学各論、運動学実習、臨床運動学と引き続く勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学総論	担当者	長谷川 昌士		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

関節の基本構造と機能を学習する。運動器である上肢の運動、下肢の運動、脊柱・体幹の運動について理解を深める。

■ 到達目標

1. 運動器の構造と機能を理解する。
2. 上肢の運動、下肢の運動、脊柱・体幹の運動を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 コースオリエンテーション
- 第2回 運動のとらえ方について学習する。
- 第3回 運動の面と軸について学習する。
- 第4回 関節の基本的構造と機能について学習する。
- 第5回 肩複合体の関節構造について学習する。
- 第6回 肩複合体の筋と関節の相互作用について学習する。
- 第7回 肘関節の関節構造と機能について学習する。
- 第8回 肘関節の靱帯構造について学習する。
- 第9回 前腕の関節構造と機能について学習する。
- 第10回 前腕の運動について学習する。
- 第11回 手関節の関節構造と機能について学習する。
- 第12回 手のアーチ構造について学習する。
- 第13回 手指の関節構造と機能について学習する。
- 第14回 手指の内在筋と外在筋の相互作用について学習する。
- 第15回 上肢確認試験と振り返り
- 第16回 股関節の関節構造について学習する。
- 第17回 股関節の筋と関節の相互作用について学習する。
- 第18回 膝関節の関節構造について学習する。
- 第19回 膝関節の筋と関節の相互作用について学習する。
- 第20回 足関節の関節構造と機能について学習する。
- 第21回 足関節の運動について学習する。
- 第22回 下肢確認試験と振り返り
- 第23回 頭頸部における関節構造について学習する。
- 第24回 胸腰部における関節構造について学習する。
- 第25回 肩関節の運動について演習形式で学習する。
- 第26回 肘関節・前腕の運動について演習形式で学習する。
- 第27回 手・手指関節の運動について演習形式で学習する。
- 第28回 股関節の運動について演習形式で学習する。
- 第29回 膝・足関節の運動について演習形式で学習する。
- 第30回 最終確認試験と振り返り

■ 評価方法

筆記試験 80% 小テスト 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内容は必ず教科書で見直し、学習したことを授業ノートに追記しておくこと。

■ 教 科 書

書 名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明ほか監訳
出版社：医歯薬出版

■ 参 考 図 書

書 名：基礎運動学
著者名：中村隆一、斎藤宏
出版社：医歯薬出版

■ 留 意 事 項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	運動学各論	担当者	境 隆弘		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

下肢、体幹・頭頸部の機能解剖に立脚した運動の分析を関節運動学と運動力学の視点から部位別に学ぶ。
姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学的分析と筋出力、運動学習について学ぶ。

■ 到達目標

下肢、体幹・頭頸部の関節運動学を理解し、触診やデモンストレーションが出来るようになる。
姿勢や歩行に関する運動学的、運動力学を理解し、観察や分析が出来るようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 コース・ガイダンス
講義の進め方、評定の他、前期に学んだ運動学総論、後期に学ぶ運動学実習との関連性を学ぶ
- 第2回 下肢の関節運動学① 股関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第3回 下肢の関節運動学演習① 股関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第4回 下肢の関節運動学② 膝関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第5回 下肢の関節運動学演習② 膝関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第6回 下肢の関節運動学③ 足関節に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第7回 下肢の関節運動学演習③ 足関節の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第8回 体幹の関節運動学 体幹に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第9回 体幹の関節運動学演習 体幹の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第10回 頭頸部・顔面の関節運動学 頭頸部・顔面に関する運動器官と関節運動学について学ぶ
- 第11回 頭頸部・顔面の関節運動学演習 頭頸部・顔面の関節運動学について、演習を行い理解を深める
- 第12回 四肢と脊柱の運動連鎖 開放性運動連鎖（OKC）と閉鎖性運動連鎖（CKC）について学ぶ
- 第13回 四肢と脊柱の運動連鎖演習 OKC と CKC に関する演習を行い、理解を深める
- 第14回 筋トルク 様々な収縮形態により発揮される筋トルクについて学ぶ
- 第15回 筋トルク演習 実際に筋トルクを計測し、理解を深める
- 第16回 姿勢制御の神経機構 ヒトの姿勢反応について学ぶ
- 第17回 姿勢制御の神経機構演習 ヒトの姿勢反応について、演習を行い理解を深める
- 第18回 運動戦略 ヒトの運動戦略（ストラテジー）について学ぶ
- 第19回 運動戦略演習 ヒトの運動戦略（ストラテジー）について、演習を行い理解を深める
- 第20回 歩行の運動学① 歩行の運動学について、概論を学ぶ
- 第21回 歩行の運動学② 歩行の運動学的分析について学ぶ
- 第22回 歩行の運動学③ 歩行の運動力学的分析について学ぶ
- 第23回 運動学習 ヒトの運動学習機能について学ぶ
- 第24回 運動学習演習 ヒトの運動学習について、演習を行い理解を深める
- 第25回 実技試験（口頭試問含む）① 学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
- 第26回 実技試験（口頭試問含む）② 学んだ関節運動学、動作について実技試験を実施する
- 第27回 実技試験（口頭試問含む）のフィードバック① 実技試験の解説、講評を行う
- 第28回 実技試験（口頭試問含む）のフィードバック② 実技試験の解説、講評を行う
- 第29回 総括① 本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う
- 第30回 総括② 本講義で学んだ事について、復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験 80%

小テスト・実技テストで20%（学則で認められない理由での遅刻・欠席は減点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

（予習）

運動学は、解剖学、生理学、物理学（力学）の知識が無ければ、理解が進まない。

毎回、授業内容に応じた解剖学、生理学、物理学（力学）の復習をしてくること。

例：膝関節の授業の前は、膝関節の解剖の復習をしてくる。

（復習）

授業の翌週に必ず小テストを行うので、授業での学習内容が身に付くよう復習すること。

■ 教科書

書 名：基礎運動学

著者名：中村隆一、斎藤宏

出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：筋骨格系のキネシオロジー

著者名：嶋田智明ほか監訳

出版社：医歯薬出版

書 名：運動療法のための機能解剖学的触診技術（上肢、下肢・体幹）

著者名：青木隆明監修、林 典雄執筆

出版社：メディカルビュー

書 名：図解 四肢と脊柱の診かた

著者名：野島元雄監訳

出版社：医歯薬出版

書 名：カパンディ関節の生理学（体幹・上肢・下肢）

著者名：萩島秀男監訳

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

理学療法の基礎学問として運動学総論から続く重要な科目であり、さらに運動学実習、臨床運動学と引き続く勉強なのでしっかり学んでほしい。

授業科目	運動学各論	担当者	長谷川 昌士		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

生体力学の基礎を学習する。運動学的分析手法である床反力、体重心、関節モーメントについて理解を深める。その応用として立ち上がりや歩行における運動学的分析について理解を深める。
運動学習における理論について学習し、グループにて課題に取り組む。呼吸や心臓における運動療法について学習し、その技術を演習形式にて理解を深める。筋力増強について学習し、その技術を演習形式にて理解を深める。

■ 到達目標

1. 運動学的分析手法（床反力、体重心、関節モーメント）を理解する。
2. 立ち上がりや歩行の運動学的分析を理解する。
3. 運動学習における理論について理解する。
4. 呼吸や心臓における運動療法について理解する。
5. 筋力増強、ストレッチングにおける理論および方法について理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 座位姿勢について学習する。
- 第2回 立位姿勢について学習する。
- 第3回 運動学的分析手法に必要な床反力、体重心について学習する。
- 第4回 運動学的分析手法に必要な関節モーメントについて学習する。
- 第5回 運動学的分析（立ち上がり動作）について学習する。
- 第6回 運動学的分析（歩き始め）について学習する。
- 第7回 運動学的分析（歩行）の歩行周期、ケイデンス、歩幅について学習する。
- 第8回 運動学的分析（歩行）の重心移動、床反力、筋活動について学習する。
- 第9回 運動学的分析（リーチ動作）についてグループにて学習する。
- 第10回 運動学的分析（トイレ動作）についてグループにて学習する。
- 第11回 作業分析（日常活動）についてグループにて学習する。
- 第12回 運動学的分析確認試験と振り返り
- 第13回 運動学習理論について学習する。
- 第14回 運動学習理論に基づいた練習と訓練について学習する。
- 第15回 運動学習における課題にグループで取り組む。
- 第16回 呼吸における運動学について学習する。
- 第17回 換気中の筋活動について学習する。
- 第18回 呼吸リハビリテーション（呼吸法）について学習する。
- 第19回 呼吸リハビリテーション（ストレッチング）について学習する。
- 第20回 身体運動のエネルギー代謝について学習する。
- 第21回 運動処方について学習する。
- 第22回 心臓リハビリテーション（運動療法）について学習する。
- 第23回 心臓リハビリテーション（生活指導）について学習する。
- 第24回 呼吸・心臓リハビリテーション確認試験と振り返り
- 第25回 筋力増強訓練の効果について学習する。
- 第26回 筋力増強訓練の訓練方法について学習する。
- 第27回 活動を用いた筋力増強訓練の訓練方法についてグループで取り組む。
- 第28回 ストレッチングの効果について学習する。
- 第29回 ストレッチングの方法について学習する。
- 第30回 まとめと振り返り

■ 評価方法

筆記試験 80% 小テスト 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内容は必ず教科書で見直し、学習したことを授業ノートに追記しておくこと。

■ 教科書

書 名：基礎バイオメカニクス

著者名：江原義弘、山本澄子、石井慎一郎

出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	運動学実習	担当者	島 雅人		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動学総論、運動学各論により修得した基礎知識・技術を踏まえ、実際に行われている動作を観察し分析するといった実習を行うことで、理学療法・作業療法の基礎となる人体の運動のしくみについて理解を深める。

■ 到達目標

基本動作・歩行を観察する視点を身につけること
 観察した動作を運動学的用語で説明することができるようになること
 観察した動作を運動学・運動力学的に分析することができるようになること

■ 授 業 計 画

第1回 ①コース・ガイダンス：講義の進め方、評定方法、その他
 ②これまでに学んできた運動学総論、運動学各論の知識の確認
 ③体位、構えの（姿勢）の表現、動作分析の手順と方法
 第2回 姿勢の観察・分析①
 第3回 姿勢の観察・分析②
 第4回 姿勢の観察・分析②
 第5回 基本動作の観察・分析①
 第6回 基本動作の観察・分析②
 第7回 基本動作の観察・分析③
 第8回 基本動作の観察・分析④
 第9回 基本動作の観察・分析⑤
 第10回 基本動作の観察・分析⑥
 第11回 応用的動作の観察・分析①
 第12回 応用的動作の観察・分析②
 第13回 応用的動作の観察・分析③
 第14回 応用的動作の観察・分析④
 第15回 応用的動作の観察・分析⑤

■ 評価方法

定期試験70% 発表・提出課題・レポート30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

本講義は、運動学の基礎知識をもとに、人の姿勢や動作を観察・分析し、運動学の理解を深めます。観察や分析は学生1人ひとりが出来るようになることが目的であるため、各授業で与えられたテーマに対する課題レポートをしっかりと行ってください。
 また、観察・分析内容を相手へ伝える機会を設定します。指定された時間内に、分析した内容を伝えられるよう、事前練習を行ってください。

■ 教 科 書

書 名：観察による運動・動作分析演習ノート
 著者名：藤澤 宏幸（著），長崎 浩（著）
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：基礎運動学

著者名：中村隆一、斎藤宏

出版社：医歯薬出版

書 名：ブルンストローム臨床運動学 原著第6版

著者名：Peggy A.Houglum

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：日常生活活動の分析—身体運動学的アプローチ

著者名：藤澤 宏幸（編集）

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

--

授業科目	人間発達学	担当者	藪中 良彦		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法士・作業療法士として必要な子どもの発達の知識を、運動発達を中心に学習する。

■ 到達目標

子どもの機能獲得の仕組みを知ること、子どもの治療だけでなく、成人の治療にも発達の知識を利用できるようにすることが、この科目の目標である。

■ 授 業 計 画

- 第1回 I. 人間発達とは？
II. 発達理論
- 第2回 I. 胎児の発達
- 第3回 I. 胎児の発達
II. 姿勢反射の発達
- 第4回 I. 小児の反射・反応
- 第5回 I. 小児の反射・反応
II. 1歳までの正常運動発達
- 第6回 I. 6歳までの発達
- 第7回 I. 6歳までの発達と姿勢反射との関連
- 第8回 I. 食事動作の発達
- 第9回 I. 目と手の協調の発達
- 第10回 I. 認知機能と言語の発達
- 第11回 I. 排泄行動の発達
- 第12回 I. 更衣動作の発達と援助
- 第13回 I. 遊びの発達
- 第14回 I. 発達検査
- 第15回 I. 老年期

■ 評価方法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点）

小テスト（50点）

定期試験（50点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

第1回目の授業を除き、毎回前回の授業内容に関する小テスト（40問程度の穴埋め問題）を行い、授業の復習を促す。

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 人間発達学

著者名：岩崎清隆，花熊暁，吉松靖文

出版社：医学書院

書 名：乳児の発達 写真でみる0歳児

著者名：高橋孝文

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：コメディカルのための専門基礎分野テキスト 人間発達学

著者名：福田恵美子

出版社：中外医学社

書 名：機能的姿勢 - 運動スキルの発達

著者名：高橋智宏

出版社：協同医書出版社

書 名：写真でみる乳児の運動発達

著者名：木本孝子、中村勇

出版社：協同医書出版社

書 名：乳幼児の運動発達検査 AIMS アルバータ乳幼児運動発達検査法

著者名：上杉雅之、嶋田智明、武政誠一

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：PEDI リハビリテーションのための子どもの能力低下評価法

著者名：里宇明元、近藤和泉、間川博之

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：赤ちゃんの運動発達 絵でみる治療アプローチ

著者名：芝田利生、櫻庭修

出版社：協同医書出版社

書 名：遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法 ― 九州大学小児科改訂新装版

著者名：遠城寺宗徳

出版社：慶應義塾大学出版会

書 名：新版 K 式発達検査法2001年版 ― 標準化資料と実施法

著者名：新版 K 式発達検査研究会

出版社：ナカニシヤ出版

書 名：KIDS 乳幼児発達スケール

著者名：三宅和夫

出版社：達科学研究教育センター

書 名：1987年全訂版田中ビネー知能検査法

著者名：田中教育研究所

出版社：田研出版

書 名：WISC-IV の臨床的利用と解釈

著者名：上野 一彦

出版社：日本文化科学社

書 名：日本版デンバー式発達スクリーニング検査 ― JDDST と JPDQ

著者名：上田 礼子

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：DENVER II - デンバー発達判定法

著者名：Frankenburg WK 著，日本小児保健協会編

出版社：日本小児医時出版社

書 名：K・ABC アセスメントと指導 ― 解釈の進め方と指導の実際

著者名：前川 久男

出版社：丸善メイツ

書 名：グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック

著者名：小林重雄

出版社：三京房

■ 参考図書

書 名：日本版フロスティック視知覚発達検査

著者名：飯鉢和子、鈴木陽子、茂木茂八

出版社：日本文化科学社

書 名：日本版ミラー乳児発達スクリーニング検査と JMAP 簡易版

著者名：土田玲子、岩永竜一郎

出版社：パシフィックサプライ株式会社

書 名：乳幼児精神発達診断法 ― 0才～3才まで

著者名：津守 真、稲毛 教子

出版社：大日本図書

書 名：乳幼児精神発達質問紙 (1～3才まで)

著者名：津守真、稲毛教子

出版社：大日本図書

書 名：乳幼児精神発達診断法 ― 3才～7才まで

著者名：津守 真、磯部 景子

出版社：大日本図書

書 名：乳幼児精神発達質問紙 3～7才まで

著者名：津守 真、稲毛 教子

出版社：大日本図書

書 名：視覚機能の発達障害

著者名：紀伊克昌

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：手の発達機能障害

著者名：紀伊克昌

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	臨床心理学	担当者	春海 淳子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床心理学は「こころの病」や「こころのメカニズム」について学ぶものです。私たちのこころは流動的で環境からの影響を受けながら形成され、揺らぎもします。そうした、こころのありようについて、身近な素材や具体的な話を用いて臨床心理学に関する理論や概念の基礎的素養を身につける機会にします。

■ 到達目標

学んだことを今後の専門職としての活動の中や普段の生活に行かせるよう習得することを目指します。

■ 授業計画

- 第1回 臨床心理学とは
- 第2回 臨床心理査定 (1)：意義と方法 (観察、面接、検査)
- 第3回 臨床心理査定 (2)：発達検査・知能検査
- 第4回 臨床心理査定 (3)：人格検査 (概要)
- 第5回 臨床心理査定 (4)：人格検査
- 第6回 こころの構造 (1)：人格構造論の観点から
- 第7回 こころの構造 (2)：発達論的観点から
- 第8回 精神病理 (1)：統合失調症、気分障害
- 第9回 精神病理 (2)：不安障害、身体表現性障害、人格障害
- 第10回 患者・障害者の心理
- 第11回 臨床心理面接 (1)：目的、基本的技法 (体験)
- 第12回 臨床心理面接 (2)：来談者中心療法
- 第13回 臨床心理面接 (3)：精神分析
- 第14回 臨床心理面接 (3)：学習理論と行動療法
- 第15回 総合的ふりかえり

■ 評価方法

講義への参加・貢献 (レポート等)：30% 筆記試験：70%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

授業終了後、授業で配布したプリントを見直し、復習しておくこと。

■ 教 科 書

特になし

■ 参考図書

適宜紹介します

■ 留意事項

授業科目	病理学概論	担当者	山野 荘太郎・柴田 雅朗		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

疾病の原因（病因）と成り立ち（病態発生）を総論的に学ぶ。

■ 到達目標

病気が何故、どのようにして起こるか、身体にどのような異常を引き起こすかを理解し、説明が出来る。

■ 授業計画

- 第1回 病理学の目的と概要、病因論：内因、外因の概念、疾病の分類
- 第2回 傷害に対する細胞の反応①退行性病変及び進行性病変
- 第3回 代謝異常： 代謝障害による疾患
- 第4回 循環障害： 循環系の構造と機能、全身循環障害、局所循環障害
- 第5回 免疫： 免疫系の仕組みと働き、アレルギー、膠原病、免疫不全症候群
- 第6回 炎症・感染症： 炎症の定義と原因、組織学的変化と経時的変化
- 第7回 炎症・感染症： 感染の成立、感染経路と病態
- 第8回 放射線障害： 放射線による副作用のため出現する病変
- 第9回 老化： 老化の原因、老化に伴って増加する疾患
- 第10回 先天異常・奇形： 先天異常の概念と分類、代表的な先天異常
- 第11回 腫瘍①：腫瘍の定義と分類、腫瘍の進展形式
- 第12回 腫瘍②：腫瘍発生の原因、国試対策のための臓器別の腫瘍
- 第13回 国試対策のための病理学各論（先天性疾患、循環器系疾患、呼吸器系疾患）
- 第14回 国試対策のための病理学各論（代謝異常疾患、自己免疫疾患）
- 第15回 国試対策のための病理学各論（神経系・運動器系疾患）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習は必要ありませんが、復習を必ず毎回やって、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 病理学
著者名：梶原博毅・横井豊治
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

欠席や遅刻がないように心がけること。

授業科目	一般臨床医学（救急医学・外科）	担当者	藤岡 重和 他		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、救急医学の概要と救急措置法について学ぶ。次に、外科、産婦人科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科の代表的疾患について、その病因、病態、特徴的に現れる症状、一般的に行われる検査、治療について基礎的な学習をする。

■ 到達目標

1. 救急疾患の病態を理解し、蘇生法、止血法、固定法、運搬法等の救急措置法を修得する。
2. 外科、産婦人科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科の代表的疾患について、病態、特徴的に現れる症状、治療法を説明できる。
3. 外科、産婦人科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科疾患におけるリハビリテーション留意事項を説明できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 救急医学総論（1） （岡本）
- 第2回 救急医学総論（2） （岡本）
- 第3回 救急医学各論（1） ショック、心肺停止 （神納）
- 第4回 救急医学各論（2） 意識障害、吐血、下血と腹痛 （神納）
- 第5回 救急医学各論（3） 外傷、環境障害 （神納）
- 第6回 外科学総論 （中井）
- 第7回 外科学各論 （中井）
- 第8回 産科学 （福山）
- 第9回 婦人科疾患 （福山）
- 第10回 皮膚科学総論（皮膚の構造、発疹学） （池上）
- 第11回 皮膚科疾患各論（感染症、皮膚腫瘍他） （池上）
- 第12回 眼科学総論（眼球および眼付属器の解剖他） （岡村）
- 第13回 眼科疾患各論（代表的眼疾患について） （岡村）
- 第14回 耳鼻咽喉科疾患 （矢吹）
- 第15回 総復習 （藤岡）

■ 評価方法

定期試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業では、学習すべき課題を提示しますので、事前学習を必ずしておいてください。
次回授業までに、前回の授業内容を復習しておいてください。

■ 教 科 書

書 名：PT・OTのための一般臨床医学
著者名：明石 謙
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：救急診療指針 改訂第4版

著者名：日本救急医学会監修

出版社：へるす出版

書 名：あたらしい皮膚科学第2版

著者名：清水 宏

出版社：中山書店

■ 留意事項

授業科目	内科学	担当者	藤岡 重和		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

循環器疾患、呼吸器疾患、代謝疾患など生体内部の障害について、その病因、病態、特徴的に現れる症候、一般的に行われる検査と診断、治療法、予後などについて基礎的な学習をする。

■ 到達目標

1. 代表的な内科疾患について、疫学、予後、病因、病態、臨床像、評価、検査（画像、生理機能検査、血液検査を含む）、診断、治療法を説明できる
2. 内科疾患患者のリハビリテーション留意事項を説明できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 内科学総論
- 第2回 循環器総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第3回 循環器疾患（1） 高血圧、虚血性心疾患
- 第4回 循環器疾患（2） 弁膜症、先天性心疾患、心筋疾患
- 第5回 循環器疾患（3） 心不全、不整脈、その他
- 第6回 循環器疾患（4） 大動脈疾患、末梢動脈疾患、静脈、リンパ管疾患
- 第7回 呼吸器総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第8回 呼吸器疾患（1） 感染性肺疾患、アレルギー性肺疾患
- 第9回 呼吸器疾患（2） 慢性閉塞性肺疾患、間質性肺疾患
- 第10回 呼吸器疾患（3） 肺腫瘍、肺循環障害
- 第11回 呼吸器疾患（4） 呼吸不全、呼吸調節の異常、胸膜疾患、その他
- 第12回 消化器総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第13回 消化器疾患（1） 食道疾患、胃の疾患
- 第14回 消化器疾患（2） 小腸、大腸の疾患
- 第15回 消化器疾患（3） 肝疾患
- 第16回 消化器疾患（4） 胆道疾患、膵疾患、その他
- 第17回 代謝、内分泌総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第18回 代謝、内分泌疾患（1） 糖尿病、脂質代謝異常、栄養障害、その他
- 第19回 代謝、内分泌疾患（2） 下垂体疾患、甲状腺疾患、副甲状腺疾患、副腎疾患
- 第20回 腎、泌尿器総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第21回 腎、泌尿器疾患（1） 糸球体疾患、全身性疾患と腎障害
- 第22回 腎、泌尿器疾患（2） 腎不全、電解質異常、泌尿器疾患、その他
- 第23回 免疫、アレルギー総論（概要、病因、病態生理、症状、検査と診断）
- 第24回 免疫、アレルギー疾患（1） アレルギー疾患
- 第25回 免疫、アレルギー疾患（2） 自己免疫疾患
- 第26回 血液、造血器疾患（1） 赤血球系疾患
- 第27回 血液、造血器疾患（2） 白血球系疾患、出血性疾患
- 第28回 中毒および環境要因による疾患
- 第29回 リハビリテーションと内科臨床について
- 第30回 総復習（国家試験対策）

■ 評価方法

定期試験 80% 小テスト 10% 出席、態度 10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業では、次回までに学習すべき課題を提示しますので、事前学習を必ずしておいてください。

次回授業までに、前回の授業内容を十分に復習しておいてください。

国家試験出題基準のに基づき、実地臨床に則した内容を中心に授業を展開します。

発展的内容を探究したい時、理解できない内容がある場合は、オフィスアワー等を活用し、担当教員に質問、相談するようにしてください。

■ 教科書

書 名：ナースの内科学 第9版

著者名：奈良信雄

出版社：中外医学社

■ 参考図書

書 名：標準理学療法学作業療法学 専門基礎分野 内科学 第3版

著者名：大成浄志

出版社：医学書院

書 名：看護のための臨床病態学 第2版

著者名：浅野嘉延、吉山直樹

出版社：南山堂

■ 留意事項

内科学を学習するにあたって、解剖学、生理学、病理学をよく理解しておく必要があります。授業の前に、十分復習をしておいてください。感染症については、三年生後期の感染症学において詳しく学習します。

授業科目	整形外科学	担当者	中村 憲正		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
	作業療法学専攻	開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

人体の運動器にかかわる疾患の診断と治療について学習する。

■ 到達目標

運動器疾患の基礎となる骨・関節、筋・神経の構造や病態について十分な知識を得る。特に、外傷学については、重点的に学習し、臨床の場で必要とされる知識体系を構築する。また、整形外科的な診断法や治療法について臨床に必要な知識を得る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 整形外科総論 1 歴史、筋骨格系組織（骨、軟骨、靱帯、筋肉など）の生理学につき学ぶ
- 第2回 整形外科総論 2 歴史、筋骨格系組織（骨、軟骨、靱帯、筋肉など）の生理学につき学ぶ
- 第3回 骨折と脱臼 1
骨折と脱臼につき総括的に述べ、その治癒のメカニズムや治療に対する取り組み方を学ぶ
- 第4回 骨折と脱臼 2
骨折と脱臼につき総括的に述べ、その治癒のメカニズムや治療に対する取り組み方を学ぶ
- 第5回 骨と関節の感染症 骨と関節の感染症につき学ぶ。
- 第6回 関節リウマチ 関節リウマチとその類縁疾患につき学ぶ。
- 第7回 慢性関節疾患 — 退行変性による慢性関節疾患につき学ぶ。
- 第8回 壊死性骨疾患 — 骨壊死の特徴につき学ぶ。
- 第9回 骨系統疾患 — 骨系統疾患につき学ぶ。
- 第10回 代謝性骨疾患 — 代謝性骨疾患につき学ぶ。
- 第11回 腫瘍 1 — 筋骨格系腫瘍につき学び、現代の治療に触れる。
- 第12回 腫瘍 2 — 筋骨格系腫瘍につき学び、現代の治療に触れる。
- 第13回 予備日
- 第14回 予備日
- 第15回 脊椎と脊髄 1 — 脊椎と脊髄疾患、外傷につき学ぶ。
- 第16回 脊椎と脊髄 2 — 脊椎と脊髄疾患、外傷につき学ぶ。
- 第17回 股関節 — 股関節疾患、外傷につき学ぶ。
- 第18回 膝関節 — 膝関節疾患につき述べ、固有の治療法につき学ぶ。
- 第19回 膝のスポーツ傷害 1 — 膝のスポーツ傷害につき述べ、最新治療法につき学ぶ。
- 第20回 膝のスポーツ傷害 2 — 膝のスポーツ傷害につき述べ、最新治療法につき学ぶ。
- 第21回 足と足関節 1 — 足と足関節の傷害につき学ぶ。
- 第22回 足と足関節 2 — 足と足関節の傷害につき学ぶ。
- 第23回 下腿 — 下腿の傷害につき学ぶ。
- 第24回 肩 — 肩関節スポーツ傷害を中心に学び、最新治療に触れる。
- 第25回 肘 — 肘関節疾患、傷害につき学ぶ。
- 第26回 手 1 — 手の外科につき学ぶ。
- 第27回 手 2 — 手の外科につき学ぶ。
- 第28回 予備日
- 第29回 予備日
- 第30回 予備日

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

問題演習を与えるので随時学習する事

■ 教科書

書 名：標準整形外科

出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	臨床神経学	担当者	恵飛須 俊彦・梅本 安則		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

国家試験出題基準に即して、前半は脳神経外科専門医の視点から神経疾患の病態について講義を行い、後半はリハビリテーション専門医の視点から神経症候学に関して講義を行う。

■ 到達目標

リハビリテーション医療に携わる職種として必要な神経学の知識を身につけていただきます。

■ 授 業 計 画

- 第1回 臨床神経学および脳神経外科学総論
- 第2回 画像からみた局所神経解剖（1）
- 第3回 神経症候学
- 第4回 脳卒中概論
- 第5回 脳梗塞
- 第6回 脳出血
- 第7回 くも膜下出血
- 第8回 水頭症
- 第9回 頭部外傷
- 第10回 脳腫瘍
- 第11回 中枢神経感染症（脳膿瘍、髄膜炎、脳炎など）
- 第12回 てんかん
- 第13回 変性疾患（パーキンソン病など）、脱髄疾患、筋疾患
- 第14回 慢性疼痛、痙縮とボトックス治療
- 第15回 画像からみた局所神経解剖（2）（脳機能画像など）
- 第16回 脊髄損傷
- 第17回 末梢神経疾患
- 第18回 脳性麻痺・2分脊椎
- 第19回 認知症
- 第20回 高齢と不動による神経系への影響とリハビリテーション
- 第21回 筋力低下の鑑別とリハビリテーション
- 第22回 片麻痺のリハビリテーション
- 第23回 四肢麻痺・対麻痺のリハビリテーション
- 第24回 MND・小児麻痺のリハビリテーション
- 第25回 末梢神経障害のリハビリテーション
- 第26回 錐体外路徴候のリハビリテーション
- 第27回 失調のリハビリテーション
- 第28回 高次脳機能障害のリハビリテーション
- 第29回 脳卒中急性期のリハビリテーションの実際
- 第30回 症例問題

■ 評価方法

筆記試験（100％）と出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業のノートの復習が重要

■ 教 科 書

不要

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	臨床運動学	担 当 者	島 雅人		
学 科 名	理学療法学専攻（必修）	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻（選択）	開講時期	後期	選択・必修	選択・必修

■ 内 容

運動学総論、運動学各論、運動学実習で修得した知識を踏まえ、疾病や外傷により生じる心身機能・身体構造の変化や活動の変化について学ぶ。実際の運動を教材等で観察し、模倣しながら、障害のある対象者の運動特性を学ぶ。

■ 到達目標

疾病や外傷により生じる心身機能・身体構造の変化、運動・活動を理解できる。
障がい者の姿勢や動作を観察し、その特徴や要因を検討することができる。
機能障害と能力障害の関連を理解できる

■ 授 業 計 画

第1回 コース・ガイダンス：講義の進め方、評価の他、これまでに学んだ基礎運動学との関連性を学ぶ
関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第2回 関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第3回 関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第4回 関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第5回 関節可動域制限による運動や活動の変化を学ぶ
第6回 筋力低下（廃用性・末梢神経障害 等）による運動や活動の変化を学ぶ
第7回 筋力低下（廃用性・末梢神経障害 等）による運動や活動の変化を学ぶ
第8回 筋力低下（廃用性・末梢神経障害 等）による運動や活動の変化を学ぶ
第9回 筋力低下（廃用性・末梢神経障害 等）による運動や活動の変化を学ぶ
第10回 筋力低下（廃用性・末梢神経障害 等）による運動や活動の変化を学ぶ
第11回 筋力低下（廃用性・末梢神経障害 等）による運動や活動の変化を学ぶ
第12回 疾患（中枢神経障害、神経筋疾患 等）による運動や活動の変化を学ぶ
第13回 疾患（中枢神経障害、神経筋疾患 等）による運動や活動の変化を学ぶ
第14回 疾患（中枢神経障害、神経筋疾患 等）による運動や活動の変化を学ぶ
第15回 本講義で学んだことについて復習、再確認を行う

■ 評価方法

定期試験：80％ 小テスト20％

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

本授業の内容を理解するためには、運動学の基礎知識が必要となります。各々の授業テーマに関連する内容に関して、運動学の知識を再確認し授業に臨んでください。また、基本的には授業前に前回の授業内容に関する小テストを実施します。授業後に必ず復習して理解を深め、小テストで知識の確認を行い知識の定着をはかってください。また、分からない点に関しては、あいまいのままにせず積極的に質問して理解を深めてください。

■ 教 科 書

書 名：PT・OTのための運動学テキスト：基礎・実習・臨床
著者名：小柳 磨毅 ほか
出版社：金原出版

■ 参考図書

書 名：ブルンストローム臨床運動学 原著第6版

著者名：Peggy A.Houglum

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：カラー版 筋骨格系のキネシオロジー原著第2版

著者名：Donald A.Neumann 著 / 嶋田智明ほか 監訳

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	精神医学Ⅰ	担当者	高橋 清武		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

主な精神疾患の症状・診断・治療について学ぶ

■ 到達目標

精神医学に関心を持ち、基本的な知識を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 精神医学総論 精神医学とは 精神疾患の分類
- 第2回 診断・検査
- 第3回 アルコール・薬物関連障害
- 第4回 統合失調症
- 第5回 気分障害
- 第6回 神経症性障害・ストレス関連障害・身体表現性障害
- 第7回 睡眠障害・摂食障害
- 第8回 パーソナリティ障害
- 第9回 精神遅滞（知的障害）
- 第10回 発達障害
- 第11回 小児期および青年期に通常発症する行動及び情動の障害
- 第12回 てんかん
- 第13回 器質性精神病
- 第14回 治療
- 第15回 精神医療に関連する法律と制度

■ 評価方法

筆記試験70% 出席・受講態度30%（無断欠席や遅刻はマイナス評価）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

当日受講した該当項目については、テキストを読むなどして、より理解を深めておくこと

■ 教 科 書

書 名：精神医学マイテキスト
 著者名：西川隆・中尾和久・三上章良
 出版社：金芳堂

■ 参考図書

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	精神医学Ⅱ	担当者	足立 一		
学 科 名	理学療法学専攻（選択）	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻（必修）	開講時期	後期	選択・必修	選択・必修

■ 内 容

教科書に沿った講義と定期的な小テストを中心に進めていく。全15回主体的な参加を促す。
※教科書は必ず購入し、持参すること。

■ 到達目標

精神医学の変遷や現状，基本概念，疾患別の特性や支援の実際についての知識を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
精神障害の成因と分類
- 第2回 精神保健医療福祉の現状・歴史
- 第3回 精神機能とその障害①（意識・知能・性格・記憶・欲動・自我・知覚・思考）
- 第4回 精神機能とその障害②（意識・知能・性格・記憶・欲動・自我・知覚・思考）
- 第5回 精神医療における各種治療とリハビリテーション①（薬物療法・心理療法）
- 第6回 精神医療における各種治療とリハビリテーション②（薬物療法・心理療法）
- 第7回 疾患別特性と治療，リハビリテーション①（統合失調症）
- 第8回 疾患別特性と治療，リハビリテーション②（気分・感情障害）
- 第9回 疾患別特性と治療，リハビリテーション③（神経症性障害）
- 第10回 疾患別特性と治療，リハビリテーション①（摂食障害・人格障害）
- 第11回 疾患別特性と治療，リハビリテーション②（知的障害・発達障害）
- 第12回 疾患別特性と治療，リハビリテーション③（てんかん）
- 第13回 疾患別特性と治療，リハビリテーション④
（精神作用物質による精神および行動の障害のリハビリテーション）
- 第14回 疾患別特性と治療，リハビリテーション⑤（器質性精神障害）
- 第15回 疾患別特性と治療，リハビリテーション⑥（その他の疾患）

■ 評価方法

計4回の小テスト（40％）と定期試験（60％）の結果で総合的に評価する。
※遅刻・欠席、授業態度によって減点する場合もある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

定期的に小テストを行うため。毎回授業で学習したことはしっかり復習すること。

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 精神医学
著者名：奈良勲 鎌倉矩子 監修
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	小児科学	担 当 者	非常勤講師		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

小児の成長・発達、形態的特徴・生理的特徴、よくみられる疾患、見逃せない疾患を中心とした小児の病
気及び予防接種・母子保健について述べる。

■ 到達目標

小児の成長・発達、小児疾病、小児保健等を理解して小児科学をよく把握すること。

■ 授 業 計 画

- 第1回 小児の発育・発達、生理の特徴
- 第2回 出生前小児科学
- 第3回 新生児学、周産期学
- 第4回 乳幼児の栄養と生活
- 第5回 母子保健、予防接種
- 第6回 小児の感染症（細菌、ウイルス）
- 第7回 中枢性疾患（痙攣、てんかん、変性）
- 第8回 中枢性疾患と運動器疾患（脳性マヒ、ジストロフィー）
- 第9回 小児内科学、循環器、呼吸器
- 第10回 小児内科学、消化器、内分泌
- 第11回 小児内科学、アレルギー、免疫
- 第12回 小児内科学、血液、泌尿器
- 第13回 発達障害
- 第14回 小児の診療の特徴、事故、救急
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記80%、小テスト20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書を必ず熟読すること。

■ 教 科 書

書 名：最新育児小児病学
著者名：黒田恭弘
出版社：南江堂

書 名：小児・思春期診療 最新マニュアル
著者名：五十嵐 隆
出版社：日本医師会

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	老年医学	担当者	藤岡 重和・大中 玄彦 森田婦美子・藤本 宜正		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

老年期にみられる障害の特性を理解するため、老化のメカニズムや高齢者の生理的特性を学習する。老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化、高齢者を取りまく地域の問題についても幅広く解説する。また、加齢に伴い特徴的に現れる疾患・障害について、その疫学、予後、病態、臨床像、評価、検査（画像、生理機能検査、血液検査を含む）、診断、治療の基礎的な学習する。

■ 到達目標

1. 加齢に伴う生活機能の変化、老年症候群、老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化を説明できる。
2. 加齢に伴い特徴的に現れる疾患・障害について、その疫学、予後、症候、評価、検査（画像、生理機能検査を含む）、診断、治療を説明できる。

■ 授 業 計 画

第1回	老年医学総論 (1)	老化と老年病の考え方	藤岡
第2回	老年医学総論 (2)	加齢に伴う生活機能変化	藤岡
第3回	老年医学総論 (3)	高齢者に多い症候とそのアセスメントについて	森田
第4回	老年医学総論 (4)	老年期の心理、老化に伴う生活機能の変化と高齢者へのアプローチ	森田
第5回	老年医学総論 (5)	高齢者の医療、介護、福祉、ターミナルケア	森田
第6回	老年医学各論 (1)	精神機能の老化と精神疾患（うつ状態、せん妄、認知症、その他）	森田
第7回	老年医学各論 (2)	心、血管機能の老化と循環器疾患（心不全、末梢循環障害、その他）	大中
第8回	老年医学各論 (3)	呼吸機能の老化と呼吸器疾患（誤嚥性肺炎、閉塞性肺疾患、その他）	大中
第9回	老年医学各論 (4)	消化機能の老化と消化器疾患（摂食、嚥下障害、消化器癌、その他）	大中
第10回	老年医学各論 (5)	腎機能、内分泌、代謝機能の老化と疾患（腎不全、糖尿病、その他）	大中
第11回	老年医学各論 (6)	加齢による免疫機能の変化、高齢者の感染症	大中
第12回	老年医学各論 (7)	骨、運動機能の老化と疾患（骨粗鬆症、骨折他）、感覚機能の老化と疾患	藤岡
第13回	泌尿器科総論（解剖と生理、診断と検査法）、 代表的な泌尿器疾患（尿路感染症、尿路結石症）		藤本
第14回	代表的な泌尿器疾患（尿路・生殖器の腫瘍、神経因性膀胱）		藤本
第15回	総復習（国家試験対策）		藤岡

■ 評価方法

定期試験 80% 小テスト 10% 出席、態度 10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

次の授業までに、前回の授業内容を十分に復習しておいてください。
国家試験出題基準の基づき、実地臨床に則した内容をを中心に授業を展開します。

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法学作業療法学 専門基礎分野 老年学 第3版
著者名：大内尉義
出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：新老年学 第3版
著者名：大内尉義、秋山 弘子、折茂 肇
出版社：東京大学出版社

■ 留意事項

授業科目	高次脳機能障害学Ⅰ	担当者	森岡 悦子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、中枢神経系機能を理解し、高次脳機能障害の基本的知識を習得する。

■ 到達目標

高次脳機能障害について、障害メカニズムに基づき症状を理解できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害の概要・高次脳機能に関わる中枢神経系の機能と大脳の情報処理。
- 第2回 注意機能の基本概念と特性、他の高次脳機能との関連。
- 第3回 記憶のメカニズム・病巣による記憶障害の症状のちがい。
- 第4回 失行とその他の行為障害。
- 第5回 認知のメカニズムと失認・身体意識、病態認知。
- 第6回 視空間機能と半側空間無視。
- 第7回 遂行機能と前頭葉機能、その障害像。
- 第8回 コミュニケーション障害：失語症と認知コミュニケーション障害

■ 評価方法

定期試験80%、小テスト20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に指定した箇所を復習すること。また、次回授業の領域について、教科書を読んで予習をしておくこと。

■ 教 科 書

書 名：高次脳機能障害学 第2版
著者名：石合純夫
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	高次脳機能障害学Ⅱ	担当者	森岡 悦子		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
	作業療法学専攻	開講時期	前期	選択・必修	選択

■ 内 容

本講義では、高次脳機能障害について、スクリーニング評価の結果や脳画像を通して、障害の症状やメカニズムを理解し、症状の捉え方を学ぶ。

■ 到達目標

高次脳機能障害の簡易検査の結果を解釈し、脳画像から病巣を特定し、複数の情報から基本的症状を捉えることができるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能：中枢神経系の機能と大脳の情報処理
- 第2回 注意機能の評価：ストループテスト、TMT の実施方法、および結果の解釈
- 第3回 記憶機能の評価：三宅式記銘力検査、Rey 複雑図形検査、実施方法、および結果の解釈
- 第4回 行為障害の検査：失行の鑑別
- 第5回 視空間機能：半側空間無視の評価、結果の解釈
- 第6回 前頭葉機能と遂行機能：FAB、WCST の実施方法よ結果の解釈
- 第7回 脳画像の見方（1）
- 第8回 脳画像の見方（2）

■ 評価方法

定期試験80%、評価練習への取り組み態度20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に指定した箇所を復習すること。また、次回授業の領域の教科書を読んで予習をしておくこと。

■ 教 科 書

書 名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：CT・MRI 画像解剖ポケットアトラス 第4版Ⅰ巻 頭部・頸部
 著者名：町田 徹、小久保 宇
 出版社：メディカル・サイエンス・インターナショナル

■ 留 意 事 項

授業科目	高次脳機能障害学Ⅲ	担当者	森岡 悦子		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、高次脳機能障害の検査を実施し、その結果を分析することにより症状を捉えるとともに、障害機序に沿って考察することを学ぶ。

■ 到達目標

代表的な高次脳機能評価について、目的を理解し、実施できるようになること、また結果から、症状を分析し、考察できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 注意機能 (1)：標準注意検査・標準意欲検査の実施方法の理解、検査演習
- 第2回 注意機能 (2)：検査結果の分析、症状把握
- 第3回 記憶検査 (1)：リバミード行動記憶検査の実施方法の理解、検査演習
- 第4回 記憶検査 (2)：検査結果の分析、症状把握
- 第5回 半側空間無視 (1)：BIT 行動性無視検査の実施方法の理解、検査演習
- 第6回 半側空間無視 (2)：検査結果の分析、症状の検討
- 第7回 遂行機能：検査の検査演習、結果分析、症状の検討
- 第8回 まとめ

■ 評価方法

定期試験70%、検査練習への取組み30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

次に学ぶ高次脳機能障害について、高次脳機能障害学Ⅰ、Ⅱの内容をよく復習し、検査演習がある時には、事前に検査手順を予習しておいて下さい。

■ 教 科 書

書 名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	理学療法概論	担当者	藪中 良彦・佐藤 睦美 大槻 桂右・岩田 篤		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法士になる事を目標に入学してきてはいるが、理学療法のわずかな部分の知識しかない学生に対して、今後4年間学ぶ理学療法の大枠を示す。

■ 到達目標

理学療法の大枠を理解することにより、今後4年間で学ばなければならない内容の概略を把握する。

■ 授業計画

- 第1回 当大学の理学療法学専攻のカリキュラムの解説。
理学療法の歴史、理学療法の定義、理学療法を構成する各種技術の概要、理学療法とリハビリテーション。
- 第2回 理学療法と障害、医学の領域、理学療法の対象。
- 第3回 理学療法の流れ（理学療法過程）、クリニカルパス、理学療法における診療ガイドラインの適用。
- 第4回 理学療法士の使命と倫理、理学療法士に関する法律、理学療法士に求められる資質、接遇・コミュニケーション
- 第5回 理学療法士が働く現場
- 第6回 理学療法士の職能
- 第7回 理学療法（士）教育
- 第8回 中枢神経疾患理学療法概論
- 第9回 骨関節疾患理学療法概論（スポーツリハビリテーションを含む）
- 第10回 呼吸循環疾患理学療法概論
- 第11回 小児理学療法概論
- 第12回 理学療法研究
- 第13回 理学療法士と報酬
- 第14回 病院または施設見学、QOLを意識したフィールドワーク、記録・報告書の書き方。
- 第15回 リスク管理と感染予防

■ 評価方法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点）
小テスト（50点）
定期試験（50点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

次の授業の教科書の範囲を明確に提示して、予習を促す。また、毎回授業の最後に小テスト（40問程度の穴埋め問題）を行い、予習及び授業を集中して受講する態度を育てる。

■ 教 科 書

書 名：理学療法概論テキスト（理学療法入門テキスト 改訂第2版）
著者名：監修 細田多穂、編集 中島喜代彦、森田正治、久保田章仁
出版社：南江堂

■ 参考図書

書 名：理学療法学概論 第3版
著者名：監修 千住秀明
出版社：神陵文庫

■ 留意事項

授業科目	理学療法概論実習	担当者	榑 千磨・伊禮 まり子		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

専任教員と共に国内医療施設で3日間の見学実習を行う。事前に1日を使いオリエンテーションと演習を行う。また、見学後1日を使用して、演習を実施する。

■ 到達目標

現在の国内医療施設における理学療法の概観を理解する。また、障害について実際の対象者様の生活像を理解する。特に理学療法士の仕事を理解することと、対象者様や病院スタッフの方とスムーズにコミュニケーションを取れるようになることが具体的な目標である。

■ 授 業 計 画

実習施設 協力医療機関

実習期間 3日間（前後に1日ずつ学内で演習を行う）

実習形態 協力病院において、専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下、患者と直接に対応する。専任教員は学生の臨床現場を観察し、学生の臨床実習に臨む態度などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。

実習の進め方 理学療法概論で学んだ問診、情報収集、評価、運動療法、物理療法などを実際の臨床現場で体験し、理解を深める。実習の進め方は、臨床現場の見学と専任教員のフォローを織り交ぜて実施する。

■ 評価方法

出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

学内演習で学んだコミュニケーションに関する知識を整理し、問診の練習を積んで臨むこと。本実習終了後は、自身の課題を整理し、次の実習に繋げることができるよう心がけておくこと。

■ 教 科 書

書 名：PT 臨床実習ルートマップ

著者名：柳澤健

出版社：メジカルビュー社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

臨床現場での学習であるため、事前準備を充分に行い、現場の規則を厳守し、事故がないように努めること。

授業科目	理学療法障害学	担当者	伊禮 まり子		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法と障害について学ぶ。国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）について学び、ICFに基づく障害の捉え方を理解する。理学療法において対象となる障害について、障害像・原因・評価・アプローチの概要を学ぶ。

■ 到達目標

理学療法と障害について理解する。国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）の違いを理解し、ICFに基づいた障害の捉え方を経験する。理学療法において対象となる障害について、障害像・原因・評価・アプローチの概要を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション・理学療法と障害
- 第2回 国際障害分類（ICIDH）と国際生活機能分類（ICF）
- 第3回 障害各論（痛み）
- 第4回 障害各論（関節可動域制限）
- 第5回 障害各論（筋力低下）
- 第6回 障害各論（筋緊張異常）
- 第7回 障害各論（運動麻痺）
- 第8回 障害各論（協調運動障害①）
- 第9回 障害各論（協調運動障害②）
- 第10回 障害各論（感覚障害）
- 第11回 障害各論（平衡機能障害）
- 第12回 障害各論（基本動作障害）
- 第13回 障害各論（歩行障害）
- 第14回 障害各論（ADL 障害）
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験（80%）、小テスト（20%）、出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回で提示する小テストの範囲を復習すること。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：リハビリテーションビジュアルブック

著者名：落合慈之監修 稲川利光編集

出版社：学研

書 名：ビジュアルレクチャー 基礎理学療法学

著者名：大橋ゆかり 編集

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：機能障害学入門

著者名：沖田実，松原貴子，森岡周 編集

出版社：神陵文庫

書 名：ICF の理解と活用

著者名：上田敏

出版社：きょうされん

■ 留意事項

授業科目	理学療法管理学	担当者	今井 公一 他		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	4 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本における理学療法の実践から、各職場の業務とその管理について学びます。また、理学療法士に求められている能力について、国家試験の出題内容から理解します。

■ 到達目標

1. 理学療法士の各職場の現状を理解する。
2. 理学療法士に求められている能力について国家試験の出題内容からまとめる

■ 授業計画

- 第1回 理学療法士の現状と将来
- 第2回 理学療法士に求められる能力（グループワーク1）
- 第3回 理学療法士に求められる能力（グループワーク2）
- 第4回 理学療法士に求められる能力（基礎知識1）
- 第5回 理学療法士に求められる能力（基礎知識2）
- 第6回 理学療法士に求められる能力（基礎知識3）
- 第7回 理学療法士に求められる能力（基礎知識4）
- 第8回 理学療法士に求められる能力（理学療法1）
- 第9回 理学療法士に求められる能力（理学療法2）
- 第10回 理学療法士に求められる能力（理学療法3）
- 第11回 理学療法士に求められる能力（理学療法4）
- 第12回 理学療法業務と管理の実践（1）
- 第13回 理学療法業務と管理の実践（2）
- 第14回 理学療法業務と管理の実践（3）
- 第15回 理学療法業務と管理の実践（4）

■ 評価方法

出席点50% 提出物 50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

求められる能力については、国家試験に準じたテーマを取り上げて学習します。講義後できる限り早期に復習すること

■ 教 科 書

書 名：理学療法士・作業療法士国家試験必須ポイント
 著者名：専門基礎（基礎医学）、専門基礎（臨床医学）、障害別 PT 治療学、基礎 PT 学
 出版社：医歯薬出版

書 名：理学療法士過去問題集10年分 共通問題 / 専門問題
 著者名：久美出版編集部
 出版社：久美（株）

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	理学療法研究法	担当者	伊禮 まり子 他		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法学における研究の意義、目的および研究を遂行する際の具体的な方法論について学ぶ。また、本専攻教員のこれまでの研究活動および現在の研究テーマやゼミでの活動に触れ、今までの学習内容などに基づく興味と合わせて、卒業研究（特別演習）において希望する分野について整理する。

■ 到達目標

- ・理学療法学における研究の意義、目的および研究を遂行する際の具体的な方法論について理解することができる。
- ・今までの学習内容および教員の研究活動などに基づいて、自分の興味のある分野について考え、希望する研究テーマについて整理することができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーションと理学療法研究の必要性（EBM・EBPT）
- 第2回 研究デザイン
- 第3回 研究計画・研究倫理
- 第4回 データの処理
- 第5回 データ特性の表現（代表値）
- 第6回 データ特性の表現（ばらつき）
- 第7回 データ特性の表現（Excel 演習）
- 第8回 統計の基礎①
- 第9回 統計の基礎②
- 第10回 文献検索
- 第11回 卒業研究ゼミ（特別演習）、教員研究活動紹介
- 第12回 卒業研究ゼミ（特別演習）、教員研究活動紹介
- 第13回 卒業研究ゼミ（特別演習）、教員研究活動紹介
- 第14回 卒業研究ゼミ（特別演習）、教員研究活動紹介
- 第15回 レポートまとめ

■ 評価方法

レポート（70%）、課題の提出（30%）、出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回で提示する課題を行うこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：はじめての研究法 コメディカルの研究法入門

著者名：千住秀明・玉利光太郎

出版社：神陵文庫

書 名：標準理学療法学専門分野 理学療法研究法

著者名：内山靖 編集

出版社：医学書院

書 名：理学療法科学シリーズ 理学療法研究法入門第3版

著者名：理学療法科学学会 監修

出版社：アイベック

書 名：健康・スポーツ科学のための研究方法 研究計画の立て方とデータ処理方法

著者名：出村愼一

出版社：杏林書院

書 名：保健・医療のための研究法入門

著者名：Diana M. Bailey 著 朝倉隆司監訳

出版社：協同医書出版社

■ 留意事項

授業科目	理学療法研究法実習	担当者	伊禮 まり子 他		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	4 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

研究における計画書や論文、プレゼンテーションの意義、方法について学ぶとともに、実際の自分の卒業研究テーマについて、計画書の作成から具体的な方法論の検討、研究概略のプレゼンテーションを経験する。

■ 到達目標

- ・ 研究における計画書の意義、方法を理解し、卒業研究についての研究計画書を作成、発表することができる。
- ・ 研究計画書に基づいた研究の方法論を検討することができる。
- ・ 研究における論文作成やプレゼンテーションの意義、方法を理解し、卒業研究の概略を発表することができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 研究計画書の意義、方法
- 第2回 研究計画書作成
- 第3回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第4回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第5回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第6回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第7回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第8回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第9回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第10回 研究計画書発表と研究計画書に基づく方法論の検討
- 第11回 論文作成の意義
- 第12回 論文作成の方法
- 第13回 プレゼンテーションの方法
- 第14回 卒業研究概略発表
- 第15回 卒業研究概略発表

■ 評 価 方 法

研究計画書20%、研究計画書発表20%、卒業研究概略の内容40%、卒業研究概略のプレゼンテーション20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜指示する。

■ 教 科 書

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	理学療法評価学Ⅰ（概論・測定・評価）	担当者	今井 公一		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法の対象者をどのような視点で理解すればよいのか、また対象者の生活像の理解と問題分析のためにどのような具体的な方法があるのか、総論的な内容を学習した後、評価法の各論を学びます。各論の個々の内容は目標を参照。

■ 到達目標

1. 生活機能について説明できる
2. 理学療法評価の過程について説明できる
3. 理学療法評価実施にあたってのリスクについて説明できる
4. 形態測定及び関節可動域測定の方法について説明できる
5. 筋機能の評価について説明できる
6. 筋力測定の方法について説明できる
7. 神経機能（意識・知能・高次脳機能、運動麻痺、協調障害、感覚障害、反射・反応、筋緊張）の評価について説明できる
8. 神経系に対する個々の評価方法について説明できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 生活機能と理学療法評価
- 第2回 理学療法プロセス
- 第3回 理学療法評価の過程
- 第4回 日常生活活動と評価
- 第5回 日常生活活動を支える心身機能（1）
- 第6回 日常生活活動を支える心身機能（2）
- 第7回 理学療法評価総論の総括
- 第8回 筋骨格系の評価 形態・測定（1）
- 第9回 筋骨格系の評価 形態・測定（2）
- 第10回 筋骨格系の評価 形態・測定（3）
- 第11回 筋骨格系の評価 ROM 測定（1）
- 第12回 筋骨格系の評価 ROM 測定（2）
- 第13回 筋骨格系の評価 ROM 測定（3）
- 第14回 筋骨格系の評価 ROM 測定（4）
- 第15回 筋骨格系の評価 徒手筋力検査法（1）
- 第16回 筋骨格系の評価 徒手筋力検査法（2）
- 第17回 筋骨格系の評価 徒手筋力検査法（3）
- 第18回 筋骨格系の評価 徒手筋力検査法（4）
- 第19回 神経系の評価 総論
- 第20回 神経系の評価 運動機能系（1）
- 第21回 神経系の評価 運動機能系（2）
- 第22回 神経系の評価 感覚機能系（1）
- 第23回 神経系の評価 感覚機能系（2）
- 第24回 神経系の評価 筋緊張 反射 その他
- 第25回 神経系の評価 脳神経
- 第26回 神経系の評価 総括
- 第27回 医療面接・フィジカルアセスメント（1）
- 第28回 医療面接・フィジカルアセスメント（2）
- 第29回 総括（1）
- 第30回 総括（2）

■ 評価方法

出席点10% 提出物10% 筆記試験80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

1. 毎回の授業内容は必ず1週間以内に復習し、分からない箇所があれば質問すること。
2. 適宜学習課題を提示するので必ず学習し指示があれば提出すること。

■ 教科書

書名：理学療法評価学
著者名：松澤 正、江口 勝彦
出版社：金原出版

書名：絵でみる脳と神経
著者名：馬場元毅
出版社：医学書院

書名：新・徒手筋力検査法
著者名：津山直一他訳
出版社：協同医書出版

書名：リハビリテーション評価
著者名：正門由久
出版社：医歯薬出版

書名：ベッドサイドの神経の診かた
著者名：田崎 義昭
出版社：南山堂

■ 参考図書

書名：理学療法評価学Ⅰ、Ⅱ
著者名：石川 朗
出版社：中山書店

書名：運動療法のための機能解剖学的触診技術 上肢／下肢・体幹
著者名：林 典雄
出版社：メジカルビュー社

書名：筋骨格系のキネシオロジー
著者名：嶋田智明 監訳
出版社：医歯薬出版

書名：ブルンストローム臨床運動学
著者名：武田 功 監訳
出版社：医歯薬出版

書名：オーチスのキネシオロジー
著者名：山崎 敦 他 監訳
出版社：有限会社 ラウンドフラット

書名：know the body 筋・骨格の理解と触診のすべて
著者名：日高 正巳 監訳
出版社：医歯薬出版

書名：筋骨格系の触診マニュアル
著者名：丸山 仁司 監修
出版社：ガイアブック

書名：バランス評価
著者名：星 文彦 他
出版社：三輪書店

書名：形態測定・感覚検査・反射検査
著者名：伊藤 俊一 他
出版社：三輪書店

書名：ROMナビ（DVD）
著者名：青木主税 他
出版社：Round Flat

■ 留意事項

授業科目	理学療法評価学Ⅱ（評価プロセス）	担当者	今井 公一		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法評価学Ⅰで学んだ個々の検査・測定方法に加えて、各論的に重要な評価方法を学び、後半は臨床適応のために今まで学んできた評価方法についての理解を深めます。

■ 到達目標

1. 各論で学んだ個々の評価方法について説明できる
2. 治療プログラムの立案を前提とした臨床的思考について考えを述べることができる。

■ 授業計画

- 第1回 内部障害（呼吸・循環・代謝障害）の評価
- 第2回 呼吸障害と評価
- 第3回 循環・代謝障害と評価
- 第4回 痛み・高次脳機能障害と評価
- 第5回 発達と評価（1）
- 第6回 発達と評価（2）
- 第7回 徒手筋力検査法（上肢）
- 第8回 徒手筋力検査法（手指）
- 第9回 徒手筋力検査法（下肢・体幹）
- 第10回 徒手筋力検査法 総括
- 第11回 姿勢と歩行（1）
- 第12回 姿勢と歩行（2）
- 第13回 臨床適応（1）
- 第14回 臨床適応（2）
- 第15回 臨床適応（3）

■ 評価方法

出席点10% 提出物10% 筆記試験80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

1. 毎回の授業内容は必ず1週間以内に復習し、分からない箇所があれば質問すること。
2. 適宜学習課題を提示するので必ず学習し指示があれば提出すること。

■ 教 科 書

書 名：理学療法評価法

著者名：中島 喜代彦

出版社：神陵文庫

書 名：ブルンストローム臨床運動学

著者名：武田 功 監訳

出版社：医歯薬出版

書 名：リハビリテーション評価

著者名：正門由久

出版社：医歯薬出版

書 名：ベッドサイドの神経の診かた

著者名：田崎 義昭

出版社：南山堂

書 名：新・徒手筋力検査法

著者名：津山直一他訳

出版社：協同医書出版

書 名：絵でみる脳と神経

著者名：馬場元毅

出版社：医学書院

■ 参 考 図 書

書 名：理学療法評価学Ⅰ、Ⅱ

著者名：石川 朗

出版社：中山書店

書 名：DVD 研修医のための基本技能 神経学的診察Ⅰ、Ⅱ

著者名：大石 実

出版社：丸善

書 名：実践 早期離床完全マニュアル

著者名：かつ川 元

出版社：慧文社

■ 留 意 事 項

--

授業科目	理学療法評価学実習	担当者	牧之瀬 一博・大槻 桂右		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

3年次で行う理学療法評価学実習は、臨床場面で求められる評価技能の獲得を目指す。

特に、症例検討を通じた活動制限と身体機能障害の関係性の理解を通して、動作分析の基礎となる思考過程をトレーニングする。

また、代表的な疾患に対する病態の理解から評価の選択などの臨床思考過程を学び、症例像に合わせた実技までを体系的に学ぶ。

これらの実施を通して、総合臨床実習に向けた臨床思考能力及び評価技術をトレーニングする場とする。

■ 到達目標

- ・グループでの学修を通して、協同的な活動に参加し、クラス全体の能力向上に寄与することが出来る。
- ・症例検討を通して臨床思考の理解を深め、活動制限と機能障害の関係について説明できる。
- ・動作観察から機能障害を推測する事ができる。
- ・代表的な疾患に対して、障害像の理解と理学療法評価を選択できる。
- ・総合臨床実習に向けた基本的な評価技術を修得する。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション

理学療法評価学実習の目指すところ（症候障害学ならびにクリニカル・リーズニング）

第2回 カンファレンス形式による症例プレゼンテーションと模擬カンファレンス①

第3回 カンファレンス形式による症例プレゼンテーションと模擬カンファレンス②

第4回 カンファレンス形式による症例プレゼンテーションと模擬カンファレンス③

第5回 動作観察・分析①（Top down の思考で動作から機能障害を推論する）

第6回 動作観察・分析②（Top down の思考で動作から機能障害を推論する）

第7回 理学療法評価の思考過程（Top down 評価と Bottom up 評価）

脳血管症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈①

第8回 脳血管症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈②

第9回 神経変性疾患（パーキンソン病など）症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈

第10回 運動器疾患（腰椎ヘルニアなど）症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈

第11回 運動器疾患（大腿骨頸部骨折など）症例に対する臨床思考過程，検査測定実技，統合解釈

第12回 基本的な症例に対する医療面接・動作観察・検査測定など理学療法評価過程の実技

第13回 基本的なクリニカルリーズニングの知識のまとめ

第14回 その他の疾患に関する評価実習

例として、呼吸循環不全・脊髄損傷・脳性麻痺の障害像の理解と理学療法評価

第15回 総合臨床実習に向けたオリエンテーション

実習に向けた演習（レポートなどの記載方法・Daily note の記載方法）

■ 評価方法

実技試験（50％），筆記試験（30％），発表と提出物（20％）

出席（欠席：－4点、遅刻：－2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

理学療法評価学実習は理学療法評価の総まとめである。この科目を履修し終える頃には、評価過程を独力で実施出来る状態となることが求められる。その為、授業時間外の学修にも真摯に望むこと。

予習に関しては都度必要な内容について提示する。

第2～6回の講義については、参考図書基礎運動学の第5章『運動と動作の分析 pp287～294』、第7章『姿勢』、第8章『運動と動作の分析 pp361～382』を読み、それぞれの活動における関節運動や筋活動が頭の中で再現できるような状態である必要がある。特に、こういった運動分析が苦手な学生は、まず基本的な解剖（筋の走行）・運動学（筋の作用）について理解度を確認する必要がある。これらの基本が押さえられてれば、例えば歩行の専門書（例えば参考図書の観察による歩行分析）を読み通し、繰り返しの思考のトレーニングが必要である。

第7～13回の講義においては、それぞれの疾患の病態や臨床症状について理解しておく予習が求められる。

■ 教科書

書名：症候障害学序説 理学療法の臨床思考過程モデル

著者名：内山 靖

出版社：文光堂

書名：標準理学療法学 専門分野 理学療法評価学（第2版）

著者名：内山靖（編集）

出版社：医学書院

■ 参考図書

書名：ベッドサイドの神経の診かた

著者名：田崎 義昭

出版社：南山堂

書名：新・徒手筋力検査法 原著第8版

著者名：津山直一，他（訳）

出版社：共同医書出版

書名：神経診察クロズアップ 正しい病巣診断のコツ

著者名：鈴木則宏（編集）

出版社：メジカルレビュー社

書名：基礎運動学

著者名：中村隆一、斎藤宏

出版社：医歯薬出版

書名：観察による歩行分析

著者名：月城 慶一，他（訳）

出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	理学療法評価学演習	担当者	牧之瀬 一博		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

「理学療法評価学」で学んだ基本的な検査測定手技（各種神経学的検査／片麻痺運動機能テスト／感覚検査／MMT/ROM 測定／痛みの評価／形態測定）に関する講義・演習・実技を行う。

各種検査を注意点を理解し、学生同士で正確に実施する。また、それぞれの検査測定結果の臨床的な意義について解説する。

その他、臨床場面を意識して、ペーパーペイシェントを用いた演習で障害構造について講義・演習を行う。必要に応じてグループ学習を行い、他者との関わりの中で思考を深める。

演習は実技トレーニングと思考能力トレーニングから構成する。

■ 到達目標

- ・各種検査法の注意点について説明できる。
- ・各種検査法を学生同士で正確に実施することができる。
- ・各種検査法の臨床的意義を説明できる。
- ・ペーパーペイシェントの障害像から評価すべき項目を挙げることができる。
- ・ペーパーペイシェントの障害構造について説明することが出来る。
- ・行動学習を通して、国家試験頻出レベルの知識を自分のものとする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
理学療法評価学演習の目指すところ
- 第2回 カルテ情報の診方：情報収集とコミュニケーション演習
バイタルサインの診方
- 第3回 神経学的検査（腱反射・筋緊張検査・病的反射・片麻痺運動機能テスト）
中枢性麻痺と末梢性麻痺の理解と筋緊張検査
- 第4回 神経学的検査（腱反射・筋緊張検査・病的反射・片麻痺運動機能テスト）
神経学的検査の実技
- 第5回 感覚の評価
感覚検査の意義と病態との兼ね合い／感覚検査の実技
- 第6回 筋力測定の代償運動に関する講義
徒手筋力検査の注意点に関する演習
- 第7回 徒手筋力検査の注意点に関する演習
- 第8回 徒手筋力検査
筋力測定に関する演習と実技
- 第9回 関節可動域検査（上肢・体幹）
関節可動域制限に関する演習・実技
- 第10回 関節可動域検査（下肢・体幹）
関節可動域制限に関する演習・実技
- 第11回 痛みの基本的評価
形態測定
- 第12回 ペーパーペイシェントを用いた運動器疾患の障害像の理解
- 第13回 ペーパーペイシェントを用いた中枢神経障害疾患（脳血管障害）の障害像の理解
- 第14回 ペーパーペイシェントを用いた中枢神経障害疾患（神経変性疾患）の障害像の理解
- 第15回 ペーシックなバイタルサインの測定、関節可動域測定、徒手筋力検査、各種基本的検査法
まとめと実技

■ 評価方法

提出課題（30％）、実技試験（30％）、筆記試験（40％）

出席（欠席：－4点、遅刻：－2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習に関しては都度必要な内容について細かく提示する。大まかには以下の通りである。

第2回講義には、上腕動脈と橈骨動脈の走行と触知部位について復習し、自身の身体で触知できる状態で講義に臨むこと。

第3回講義には、中枢神経・末梢神経、錐体路・伸張反射の経路について説明できる状態で講義に臨むこと。

第5回講義には、感覚の経路（温痛覚の脊髓視床路、深部感覚の後索路）について説明できる状態で講義に臨むこと。

第6回講義には、下肢筋の走行と作用を理解した上で、それぞれのMMTについて概略が説明できる状態で講義に臨むこと。また、個別に課題を課すため、それを行って参加すること。

第7回講義には、グループ内で学生同士での教え合いを行うため、それぞれの担当課題について説明できる状態で講義に臨むこと。

第8回講義では、前回のグループ内での教え合いの内容を全員が理解した状態で参加する事。

第9・10回講義には、ROM測定における基本軸・移動軸を説明できる状態で講義に臨むこと。

第12～14回講義では、それぞれの症例の臨床像を理解するための課題を個別に課すため、それらについて説明できる状態で講義に臨むこと。

■ 教科書

書名：理学療法評価法

著者名：中島 喜代彦（編集）

出版社：神陵文庫

書名：神経診察クロズアップ 正しい病巣診断のコツ

著者名：鈴木則宏（編集）

出版社：メジカルレビュー社

書名：ベッドサイドの神経の診かた

著者名：田崎 義昭

出版社：南山堂

書名：新・徒手筋力検査法 原著第8版

著者名：津山直一、他（訳）

出版社：共同医書出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	運動療法学Ⅰ（概論）	担当者	牧之瀬 一博		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法における運動療法の位置づけと基本的概念を学ぶ。
解剖学・運動学・生理学などの基礎科目に立脚した運動療法を学ぶ。

■ 到達目標

- ・疾患・症状に対応する各種運動療法の理論・目的・方法・適応について理解出来る。
- ・各種運動療法を解剖・生理・運動学に基づいて理解し、論理的に解説できる。
- ・関節拘縮の様々な因子について理解し、それらに対する関節可動域運動を説明することができる。
- ・筋力調節・増強に関わる因子について理解し、整理して論理的に解説する事が出来る。
- ・筋力増強運動の原則について理解し、適切な筋力増強運動について思考することが出来る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 運動療法の概念（講義）
運動療法の概念：定義や目的，対象疾患，方法，EBM
- 第2回 関節可動域障害に対する運動療法：
関節の構造と運動（講義）
- 第3回 関節可動域障害に対する運動療法：
関節拘縮・関節可動域運動（講義）
- 第4回 関節可動域障害に対する運動療法：
モビライゼーション，ストレッチング（講義）
- 第5回 筋力低下に対する運動療法：
筋の構造・収縮様式（講義）
- 第6回 筋力低下に対する運動療法：
筋張力の規定因子，筋力増強の原則（講義）
- 第7回 筋力低下に対する運動療法：
筋力増強の効果，エネルギー機構（講義）
- 第8回 持久力増強運動（講義）
- 第9回 運動と呼吸・循環・代謝
- 第10回 協調性障害に対する運動療法：
運動の協調性／バランス障害（講義）
- 第11回 一般的な運動療法についてのまとめ（講義・演習）
- 第12回 運動学習を目的とした運動療法
- 第13回 痛みに対する運動療法，治療体操
特殊な運動療法
- 第14回 組織の病態生理と修復（講義）
- 第15回 講義全体のまとめ（講義）

■ 評価方法

レポート課題（20%），確認テストとノート類の提出（20%），筆記試験（60%）
出席（欠席：－4点、遅刻：－2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

理学療法治療の基礎となる重要な科目であり、新しい専門用語が多く出てくることから、講義後の復習が重要である。

大学設置基準に定められているとおり、おおよそ講義時間と同等の復習時間を確保すること。復習方法が分からない学生に対しては、復習方法を提案するため、その方法を参考に復習を行うこと。

予習については必要時に都度提示する。

■ 教科書

書 名：標準理学療法学 専門分野 運動療法学 総論（第3版）

著者名：吉尾雅春（編集）

出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：運動療法学—障害別アプローチの理論と実際（第2版）

著者名：市橋則明（編集）

出版社：文光堂

書 名：エビデンスに基づく理学療法 活用と臨床思考過程の実際

著者名：内山靖（編集）

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

レポート課題を課す。その課題の評価点には、以下の条件が加わる。

定期試験内には、課題内容が理解できていることを確認する問題を数問出題する。定期試験内の該当問題の正答率が一定割合を下回った場合にはレポート課題の評価点も減点する。よって、課題内容についての知識を確実に理解できるように取り組むこと。

授業科目	運動療法学Ⅱ（各論）	担当者	島 雅人		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動療法学Ⅰで学んだ知識をもとに、学生間での実技演習を通して各運動療法の基本的な技術を身につける。また、障害を有する対象者に対して、どのようにリスクを管理しながら効果的な運動療法を実施していくかを思考し模擬的に実施する。そのため、本学の履修においては、運動療法の原則や疾患の知識を復習しながら学んでいく。

■ 到達目標

1. 運動療法に必要な解剖・運動・生理学の知識及び運動療法の原則について理解を深める
2. 学生同士で各運動療法技術を実施することができる
3. 各運動療法技術を障害のある対象者に実施する際の注意点（リスク）を理解できる
4. 各障害を想定した運動療法を模擬的に実施できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 コースガイダンス
運動療法Ⅰで学習した内容の確認 / 四肢・体幹の触れ方、他動運動の仕方
- 第2回 四肢・体幹の触れ方、他動運動の仕方
- 第3回 関節可動域制限の要因と治療の実際
- 第4回 関節可動域制限の要因と治療の実際
- 第5回 関節可動域制限の要因と治療の実際
- 第6回 関節可動域制限の要因と治療の実際
- 第7回 関節可動域制限の要因と治療の実際
- 第8回 関節可動域制限の要因と治療の実際
- 第9回 自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
- 第10回 自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
- 第11回 自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
- 第12回 自動介助運動の仕方、神経筋活動の抑制と促通
- 第13回 抵抗運動の方法
- 第14回 抵抗運動の方法
- 第15回 筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第16回 筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第17回 筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第18回 筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第19回 筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第20回 筋力・筋持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第21回 全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第22回 全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第23回 全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第24回 全身持久力が低下する要因と運動療法の実際
- 第25回 協調性障害に対する運動療法の実際
- 第26回 協調性障害に対する運動療法の実際
- 第27回 実技の到達度確認
- 第28回 実技の到達度確認
- 第29回 実技の到達度確認
- 第30回 本講義のまとめ

■ 評価方法

定期試験70% 課題15% 実技テスト15%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

本講義は、運動療法学の基礎知識をもとに、運動療法の各技術に関して実技を多く用いながら理解を深めていきます。そのため、各授業前には該当する運動療法学の知識を復習して臨んでください。

また、運動療法の技術を習得するためには、実技の練習を何回も繰り返して行う必要があります。授業中に実技に真剣に取り組むことはもちろん、授業後も技術を習得するための自主練習を行い、理学療法士の主要な治療技術の基本を身につけてください。

■ 教科書

書 名：標準理学療法学 専門分野 運動療法学 各論 第3版

著者名：シリーズ監修：奈良 勲 編集：吉尾 雅春

出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：標準理学療法学 専門分野 運動療法学総論 第3版

著者名：シリーズ監修：奈良 勲 編集：吉尾 雅春

出版社：医学書院

書 名：最新 運動療法大全“基礎と実践”&“エビデンス情報”＜DVD付＞ペーパーバック普及版

著者名：キャロリン・キスナー／リン・アラン・コルビー 他

出版社：ガイアブックス

■ 留意事項

授業科目	小児期理学療法治療学	担当者	藪中 良彦		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

正常発達と共に各疾患別の発達を理解し、小児理学療法評価法を学び、各小児疾患別の治療プログラム立案について学習する。

■ 到達目標

脳性麻痺や二分脊椎や筋ジストロフィー等の小児理学療法対象疾患のある子ども達に対して、適切な評価・治療が行えるようになること。

■ 授 業 計 画

- 第1回 姿勢反射、1歳までの運動発達
- 第2回 脳性麻痺概論
- 第3回 脳性麻痺概論
- 第4回 脳性麻痺概論，小児理学療法評価法
- 第5回 脳性麻痺概論，小児理学療法評価法
- 第6回 脳性麻痺概論，小児理学療法評価法
- 第7回 脳性麻痺 痙直型片麻痺
- 第8回 脳性麻痺 痙直型両麻痺
- 第9回 脳性麻痺 痙直型四肢麻痺
- 第10回 脳性麻痺 アテトーゼ型
- 第11回 脳性麻痺 アテトーゼ型，失調型
小児整形疾患
- 第12回 小児整形疾患
- 第13回 子どもの遺伝性疾患
- 第14回 重症心身障害
- 第15回 子どもの呼吸障害

■ 評価方法

出席（欠席－4点、遅刻／早退－2点）
小テスト（50点）
定期試験（50点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

第1回目の授業を除き，毎回前回の授業内容に関する小テスト（40問程度の穴埋め問題）を行い，授業の復習を促す。

■ 教 科 書

書 名：イラストでわかる小児理学療法
著者名：上杉雅之 監修
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：小児理学療法学テキスト

著者名：細田多穂

出版社：南江堂

書 名：理学療法 Mook 15 子どもの理学療法 脳性麻痺の早期アプローチから地域理学療法まで

著者名：黒川幸雄、高橋正明、鶴見隆正

出版社：三輪書店

書 名：PT マニュアル 小児の理学療法

著者名：河村光俊

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：発達障害児の新しい療育 こどもと家族とその未来のために

著者名：今川忠男

出版社：三輪書店

書 名：モーターコントロール 原著第4版 運動制御の理論から臨床実践へ

著者名：田中 繁、高橋 明

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：乳児の発達 写真でみる0歳児

著者名：高橋孝文

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：GMFM -粗大運動能力尺度

著者名：近藤 和泉、福田 道隆、青山 香

出版社：医学書院

書 名：Clinics in Developmental Medicine Gross Motor Function Measure
(GMFM-66 & GMFM-88) User's Manual 2nd Edition

著者名：Dianne J. Russell、Peter L. Rosenbaum、Lisa M. Avery、Marilyn Wright

出版社：Mac Keith Press

書 名：Gross Motor Function Measure (GMFM) Self-Instructional Training CD-ROM

著者名：Mary Lane、Dianne Russell

出版社：Mac Keith Press

書 名：PEDI リハビリテーションのための子どもの能力低下評価表

著者名：里宇明元、近藤和泉、間川博之

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：脳性まひ児の24時間姿勢ケア - The Chailey Approach to Postural Management

著者名：今川忠男

出版社：三輪書店

書 名：脳損傷による異常姿勢反射活動

著者名：梶浦 一郎

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：脳性麻痺の運動障害 原著第2版

著者名：梶浦 一郎

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：脳性麻痺の類型別運動発達

著者名：梶浦 一郎

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：脳性まひ児の家庭療育 原著第3版

著者名：梶浦 一郎

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：赤ちゃんの運動発達 絵でみる治療アプローチ

著者名：芝田利生、櫻庭修

出版社：協同医書出版社

書 名：誕生から1歳まで 機能的姿勢－運動スキルの発達

著者名：高橋智宏

出版社：協同医書出版社

書 名：アテトーゼ・失調・低緊張の評価と治療：子どもへの感覚運動入力の実際

著者名：調 誠也、調 信子、鈴木 ほがら

出版社：協同医書出版社

書 名：ボバース概念の実戦ハンドブック

著者名：紀伊克昌

出版社：パシフィックサプライ株式会社

書 名：子育てと健康シリーズ17 子どもの障害をどう受容するか

著者名：中田 洋二郎

出版社：大月書店

書 名：子育てと健康シリーズ21 医療的ケアハンドブック

著者名：横浜「難病児の在宅療育」を考える会

出版社：大月書店

書 名：240動画でわかる赤ちゃんの発達地図

－ 胎児・新生児期から歩行するまでの発達のつながりが理解できる

著者名：木原 秀樹

出版社：メディカ出版

書 名：ネオネイタルケア2009年秋季増刊新生児発達ケア実践マニュアル

（ネオネイタルケア 09年秋季増刊）

著者名：木原 秀樹

出版社：メディカ出版

書 名：新生児理学療法

著者名：大城昌平、木原秀樹

出版社：メディカルプレス

書 名：視覚機能の発達障害

著者名：紀伊克昌

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：手の発達機能障害

著者名：紀伊克昌

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：EBOT 時代の評価法 作業療法ジャーナル増刊号 Vol.38. No. 7. 2004

出版社：三輪書店

書 名：上肢 - 上部体幹の機能改善－評価と治療アプローチ

著者名：高橋 智宏、柴田 秀雄、辻 薫

出版社：協同医書出版社

書 名：発達障害と作業療法（基礎編）

著者名：岩崎 清隆、鎌倉 矩子、山根 寛、二木 淑子

出版社：三輪書店

書 名：発達障害と作業療法（実践編）

著者名：岩崎 清隆、岸本 光夫、鎌倉 矩子、山根 寛

出版社：三輪書店

■ 参考図書

書 名：脳性麻痺のクリニカルリーズニングアプローチ—理学療法・作業療法評価と治療

著者名：上杉雅之、成瀬進

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：イラストでわかるスペシャルシーティング—姿勢評価アプローチ

著者名：上杉雅之、成瀬進

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：重症心身障害療育マニュアル

著者名：江草 安彦、岡田 喜篤、鈴木 康之、末光 茂

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：重症心身障害療育マニュアル

著者名：江草 安彦、岡田 喜篤、末光 茂、鈴木 康之

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：重症児の QOL(クオリティー・オブ・ライフ)—「医療的ケア」ガイド

著者名：藤岡 一郎

出版社：クリエイツかもがわ

書 名：こどもの整形外科疾患の診かた—診断・治療から患者家族への説明まで

著者名：亀ヶ谷 真琴

出版社：医学書院

書 名：脳性麻痺リハビリテーションガイドライン 第2版

著者名：日本リハビリテーション医学会

出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	呼吸障害理学療法治療学	担当者	野村 卓生		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

「呼吸と運動」に関する解剖学・生理学的な基本知識を整理し、呼吸器疾患の病態およびその基本治療を学ぶ。酸素化能障害や換気能力障害などの呼吸器の障害に対する評価と理学療法について、その禁忌やリスク管理をふまえて講義し、実技実習を行う。

■ 到達目標

肺解剖 T シャツやペットボトルを利用した肺胞モデルの製作、フィジカルアセスメント、呼吸機能検査や運動耐容能評価の実習もふまえ、疾患、病態、病期（急性期、慢性期）に応じた理学療法について理解を深める。

■ 授業計画

- 第1回 「運動と呼吸」
内部障害の範囲と特徴を理解する。呼吸器系の役割と運動時の適応、呼吸器系の障害が運動を制限するメカニズムを学習する。
- 第2回 「酸素化能、換気能力」
酸素化能障害、換気能力障害の基本的概念をふまえ理解する。酸素化能、換気能力の基本的な評価法について学習する。
- 第3回 「呼吸理学療法における評価1」
基本となる胸部の観察、呼吸困難の評価方法、打診、聴診の実際を学習する。
- 第4回 「呼吸理学療法における評価2」
呼吸機能、運動耐容能の評価方法について、その実際を学習する。
- 第5回 「慢性閉塞性肺疾患（COPD）の理学療法」
COPD における障害、呼吸器疾患患者の ADL および QOL 低下の特徴を理解し、特有の評価方法について学習する。他部門からの情報、理学療法評価結果に基づいた理学療法を学習する。
- 第6回 「拘束性肺疾患、外科手術後、その他呼吸器疾患の理学療法」
疾患、病態の特徴を理解し、特有の評価方法、理学療法について学習する。外科手術が生体に与える影響を理解し、術前後および急性増悪例への理学療法を学習する。
- 第7回 「排痰法」
呼吸リハビリテーションにおける排痰法の目的とその適応、徒手のおよび体位肺痰法の実際を学習する。
- 第8回 「理学療法士による吸引行為」
吸引プロトコル（日本理学療法士協会）に沿って吸引のための基礎知識、実際の概要を学習する。

■ 評価方法

期末試験 70%、提出課題（場合によっては小テスト） 30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

以下のキーワードを参考に、事前・事後の学習に取り組むこと。指定教科書にそった内容で、また、参考図書の内容を取り込んだ授業資料を毎回準備する。とくに**復習が重要であり、授業1コマに対して同じ1コマ分の復習を必ず行うこと**。国家試験の過去問題を調べることも有用である。

学習キーワード：呼吸運動の調節中枢、肺・気道の解剖学、酸素化能、閉塞性換気障害を呈す疾患、拘束性換気障害を呈す疾患、呼吸機能検査（スパイロメトリー）、肺気量分画、フローボリューム曲線、健常人の呼吸量、健常人の呼吸パターンと呼吸数、肺気腫患者の呼吸機能、肺気腫患者の臨床症状、動脈血液ガス、胸部 X 線像の特徴、PaO₂ と SPO₂ の関連、換気能力の評価、肺・胸郭コンプライアンス、肺呼吸モデル（ペットボトルと風船を使用して作成し実習した内容）、酸素搬送系とその障害、呼吸器疾患患者の運動障害の要因、呼吸器疾患患者の運動耐容能、呼吸器疾患患者の栄養障害、標準体重、% 標準体重、肥満度とその判定（日本肥満学会）、理学療法の専門的内容、呼吸理学療法における他部門からの情報収集、F-H-J 分類、MRC 息切れスケール、カルボーネン式、Borg scale、修正 Borg scale、フィールドテスト、6 分間歩行テスト（実施手順を含む）、シャトルウォーキングテスト、運動負荷試験、運動負荷試験の絶対的禁忌、中止基準、評価指標、体位排痰法の排痰姿勢と痰貯留部位、体位排痰法の禁忌、COPD の呼吸機能検査の特徴、呼吸器疾患患者の ADL の特徴、呼吸器疾患患者への理学療法（運動療法）、生活指導、開胸腹前後の呼吸理学療法、人工呼吸器からの離脱（ウィーニング）、人工呼吸器の換気モード、人工呼吸器装着患者の理学療法、標準予防策（standard precaution）、吸引

■ 教科書

書名：内部障害理学療法学テキスト 改訂第2版
著者名：細田多穂 監、山崎裕司・川俣幹雄・丸岡 弘 編集
出版社：南江堂

■ 参考図書

書名：ビジュアルレクチャー 内部障害理学療法学
著者名：高橋哲也 編集
出版社：医歯薬出版

書名：ゴールド・マスター・テキスト 内部障害系理学療法学
著者名：柳澤 健 編集
出版社：メジカルビュー社

書名：動画でわかる呼吸リハビリテーション 第2版
著者名：高橋仁美・塩谷隆信・宮川哲夫
出版社：中山書店

書名：呼吸・心臓リハビリテーション ビジュアル実践リハ
著者名：高橋哲也・間瀬教史
出版社：羊土社

書名：理学療法テキスト 内部障害理学療法学 呼吸
著者名：石川朗・玉木 彰
出版社：中山書店

書名：DVD で学ぶ呼吸理学療法テクニック 呼吸と手技のタイミングがわかる動画91
著者名：玉木 彰
出版社：南江堂

書名：標準理学療法学 専門分野 理学療法 臨床実習とケーススタディ第2版
著者名：奈良 勲 シリーズ監修、鶴見隆正・辻下守弘 編集
出版社：医学書院

書名：呼吸リハビリテーションマニュアル 運動療法
著者名：日本呼吸管理学会、日本呼吸器学会、日本理学療法士協会 編
出版社：日本呼吸管理学会、日本呼吸器学会、日本理学療法士協会

書名：呼吸機能検査ガイドライン、呼吸機能検査ガイドラインⅡ
著者名：日本呼吸器学会
出版社：メディカルレビュー社

書名：酸素療法ガイドライン
著者名：日本呼吸器学会、日本呼吸管理学会 編
出版社：メディカルレビュー社

■ 留意事項

授業では、個人情報に関わる資料を提示する場合がある。取り扱いには十分に留意しなければならないことを認識して望むこと。授業には出席することが必須の前提であり、無断欠席、遅刻には十分に注意し、実習にも積極的に参加すること。実習を行う際には大学指定のジャージや白衣（KC）など実技を行いやすい衣服を着用し、爪は短く切っておくこと。

授業科目	代謝障害理学療法治療学	担当者	野村 卓生		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

「代謝と運動」に関する生理学・生化学的な基本知識を整理し、代表的な代謝障害である糖尿病の病態およびその基本治療を学ぶ。長期にわたる糖代謝障害によって発症する糖尿病特有の合併症や足病変への理学療法、理学療法士の関わりについて講義し、実技実習を行う。

■ 到達目標

自己血糖測定、糖尿病足病変のスクリーニング方法や糖尿病多発神経障害の簡易診断基準の実習もふまえ、病型、病態、病期に応じた理学療法について理解を深める。

■ 授業計画

- 第1回 「代謝と運動」
内部障害の範囲と特徴を理解する。運動時における代謝系の適応、代謝系の障害が運動を制限するメカニズムを学習する。
- 第2回 「代謝疾患総論」
糖尿病、肥満症、メタボリックシンドローム、脂質異常症等について、日本における患者数、疾患の概要と診断基準等の概略について学習する。
- 第3回 「糖尿病合併症」
低血糖に代表される急性合併症、糖尿病特有の慢性合併症（網膜症・腎症・神経障害）について学習する。
- 第4回 「糖尿病管理」
糖尿病の基本的治療法、とくに運動療法についてその概要を学習する。また、自己管理を支援するための患者教育の重要性を理解する。
- 第5回 「糖尿病理学療法1（導入編）」
一般的な糖尿病患者、および糖尿病合併症を有する患者への理学療法、理学療法士の関わりについて、その具体を演習形式で学習する。
- 第6回 「糖尿病理学療法2（実践編）」
実際に自己血糖測定を行い、理学療法を効果的かつ安全に進める上で必要な血液生化学的データの理解を深める。
- 第7回 「糖尿病理学療法3（応用編）」
振動覚検査、アキレス腱反射など糖尿病神経障害の簡易診断基準の一つともなる身体評価について演習形式で学習する。また、その結果を如何に患者教育に活用するかについて学習する。
- 第8回 「糖尿病理学療法4（総合演習）」
仮想症例を提示し、問題点の抽出、プログラムの作成から効果判定をどのように行うかまでの一連の理学療法介入の思考プロセスを経験する。

■ 評価方法

期末試験 70%、提出課題（場合によっては小テスト） 30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

以下のキーワードを参考に、事前・事後の学習に取り組むこと。指定教科書にそった内容で、また、参考図書の内容を取り込んだ授業資料を毎回準備する。とくに**復習が重要であり、授業1コマに対して同じ1コマ分の復習を必ず行うこと**。国家試験の過去問題を調べることも有用である。

学習キーワード：生活習慣病の定義、脂質異常症診断基準、メタボリックシンドローム診断基準、BMI（Body Mass Index）判定基準（日本肥満学会）、肥満症診断基準、肥満症の概要、糖尿病診断基準とコントロール指標 * HbA1c の JDS 値および NGSP 値に注意、糖尿病の概要 * 全ての糖尿病患者が持つ糖尿、病連携手帳に記載されている内容は必須、糖尿病の急性合併症、糖尿病の慢性合併症、低血糖の症状（交感神経症状、中枢神経症状）、糖尿病神経障害の分類、糖尿病自律神経障害の症状、糖尿病多発神経障害の簡易診断基準 * 臨床上も重要なのでしっかりと覚えておくこと、糖尿病足病変の定義、糖尿病足病変の予防と管理方法の概要、糖尿病網膜症の概要と管理、糖尿病腎症の概要と概要、糖尿病合併症（動脈硬化性疾患）、糖尿病合併症（手の病変・歯周病）、ヒトの代謝（運動時を含む）の概要、筋繊維別での代謝特性、脂肪と消費カロリー、糖尿病の運動療法、運動の種類と METs、エクササイズガイド2006、アクティブガイド

■ 教科書

書 名：内部障害理学療法学テキスト 改訂第2版
著者名：細田多穂 監、山崎裕司・川俣幹雄・丸岡 弘 編集
出版社：南江堂

■ 参考図書

書 名：考える理学療法 内部障害編 評価から治療手技の選択
著者名：丸山仁司・竹井 仁・黒澤和生 常任編集、石黒友康・高橋哲也 ゲスト編集
出版社：文光堂

書 名：標準理学療法学 専門分野 内部障害理学療法学
著者名：奈良 勲 シリーズ監修、吉尾雅春・高橋哲也 編集
出版社：医学書院

書 名：腎臓リハビリテーション
著者名：上月正博 編集
出版社：医歯薬出版

書 名：標準理学療法学 専門分野 病態運動学
著者名：奈良勲 シリーズ監修、星文彦・新小田幸一・臼田滋 編集
出版社：医学書院

書 名：運動療法学 第2版
著者名：市橋則明 編集
出版社：文光堂

書 名：歩行を診る 観察から始める理学療法実践
著者名：奈良 勲 監修、松尾善美 編集
出版社：文光堂

書 名：糖尿病療養指導ガイドブック2015
著者名：日本糖尿病療養指導士認定機構 編集
出版社：メディカルレビュー社

書 名：糖尿病療養指導の手引き 改訂第4版
著者名：日本糖尿病学会 編集
出版社：メディカルレビュー社

書 名：糖尿病治療ガイド2014-2015
著者名：日本糖尿病学会 編集
出版社：文光堂

書 名：科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン2013
著者名：日本糖尿病学会 編集
出版社：南江堂

■ 留意事項

授業では、個人情報に関わる資料を提示する場合がある。取り扱いには十分に留意しなければならないことを認識して望むこと。授業には出席することが必須の前提であり、無断欠席、遅刻には十分に注意し、実習にも積極的に参加すること。実習を行う際には大学指定のジャージや白衣（KC）など実技を行いやすい衣服を着用し、爪は短く切っておくこと。血糖測定の実習では、穿刺器具を使用するため取扱いに留意し、感染に関しては特に注意すること。

授業科目	神経障害理学療法治療学	担当者	岩田 篤		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

神経筋疾患の理学療法における神経科学の重要性を説き、根拠ある理学療法を展開するための基礎知識の習得とその方法論を学習する。

■ 到達目標

神経筋疾患による理学療法において、検査・測定結果から科学的根拠に基づいた臨床推論ができることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 中枢神経系理学療法の基礎知識
- 第2回 運動と感覚の中枢機能と構造
- 第3回 脳損傷の定義と病態
- 第4回 脳の損傷とその回復
- 第5回 脳血管障害における医学管理
- 第6回 脳血管障害におけるリハビリテーションの流れ
- 第7回 脳血管障害後片麻痺患者の運動障害の特徴
- 第8回 脳血管障害後片麻痺に対する評価（1）－ impairment
- 第9回 脳血管障害後片麻痺に対する評価（2）－ activity limitation
- 第10回 脳血管障害後片麻痺患者に対するトレーニング（1）
－ 課題指向型トレーニングと運動学習の理論的背景
- 第11回 脳血管障害後片麻痺患者に対するトレーニング（2）
－ 歩行に向けて：座位，立位を中心に
- 第12回 脳血管障害後片麻痺患者に対するトレーニング（3）
－ 歩行を中心に
- 第13回 脳血管障害における合併症
- 第14回 高次脳機能障害と理学療法－ pusher 現象と半側空間無視
- 第15回 脳血管障害における理学療法の実際
- 第16回 脳の構造と機能－大脳基底核
- 第17回 脳の構造と機能－小脳
- 第18回 脳の構造と機能－脳幹
- 第19回 パーキンソン病の病態
- 第20回 パーキンソン病に対する理学療法・リハビリテーションの実際
- 第21回 運動失調症の病態
- 第22回 運動失調症に対する理学療法・リハビリテーションの実際
- 第23回 頭部外傷・脳腫瘍の病態
- 第24回 頭部外傷・脳腫瘍に対する理学療法
- 第25回 多発性硬化症の病態
- 第26回 多発性硬化症に対する理学療法・リハビリテーションの実際
- 第27回 筋萎縮性側索硬化症の病態
- 第28回 筋萎縮性側索硬化症に対する理学療法・リハビリテーションの実際
- 第29回 末梢神経障害・筋疾患の病態
(筋ジストロフィー・ギランバレー症候群を中心に)
- 第30回 末梢神経障害・筋疾患に対する理学療法・リハビリテーションの実際
(筋ジストロフィー・ギランバレー症候群を中心に)

■ 評価方法

筆記試験：70%，小テスト：30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義は、基本的には教科書の章立てに合わせた形で行います。理解度を促進するために、次の講義で小テストを行いますので、翌週までに該当する箇所を教科書および配布資料をもとに必ず復習しておいてください。

■ 教科書

書 名：15レクチャーシリーズ 神経障害理学療法学Ⅰ

著者名：石川 朗（総編集）

出版社：中山書店

書 名：15レクチャーシリーズ 神経障害理学療法学Ⅱ

著者名：石川 朗（総編集）

出版社：中山書店

■ 参考図書

書 名：標準理学療法学 神経理学療法学

著者名：吉尾雅春・他（編集）

出版社：医学書院

書 名：病気がみえる

著者名：医療情報科学研究所（編集）

出版社：メディックメディア

書 名：脳卒中ビジュアルテキスト 第2版

著者名：高木康行

出版社：医学書院

書 名：脳の機能解剖と画像診断

著者名：真柳佳昭

出版社：医学書院

■ 留意事項

脳神経解剖学，脳神経生理学の復習をしておくことを希望する。

授業科目	老年期理学療法治療学	担当者	今井 公一・大槻 桂右 山崎 宏大・奥野 泰介		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

老年期における心身機能の特徴をふまえ理学療法による治療について学びます。

■ 到達目標

1. ライフステージとしての老年期の特徴について説明できる。
2. 老年期の心身機能の特長について説明できる。
3. 生活期の理学療法について説明できる。
4. 急性期・回復期の理学療法について説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 ライフステージとしての老年期
 第2回 老年期の骨・関節・神経系の機能
 第3回 老年期の呼吸・循環・代謝系の機能
 第4回 老年期と疾患
 第5回 生活期理学療法の実践（1）
 第6回 生活期理学療法の実践（2）
 第7回 急性期・回復期理学療法の実践（1）
 第8回 急性期・回復期理学療法の実践（2）

■ 評価方法

出席：30% レポート：20% 筆記試験：50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

1. 講義後1週間以内に復習すること。
2. 提示された課題は必ず学習すること。提出の指示があれば提出すること。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：高齢者診療マニュアル
 著者名：鳥羽研二 他
 出版社：日本医師会雑誌138巻特別号（2）

 書 名：高齢者リハビリテーション実践マニュアル
 著者名：宮越浩一
 出版社：メジカルビュー社

 書 名：高齢者の生活機能増進法
 著者名：岡田守彦
 出版社：有限会社 ナップ

■ 留意事項

授業科目	循環器障害理学療法治療学	担 当 者	大槻 桂右		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

循環器疾患患者は増加の一途を辿っている。特に動脈硬化症を背景とする心筋梗塞, 狭心症, 末梢循環不全, 心不全は国家試験出題数も多い。理学療法士はそれらに対する全般的な医学的知識とリハビリテーションの介入方法論を学ばなければならない。循環器領域での理学療法士の役割 (ICU, 急性期・回復期・生活期) を講義する。

■ 到達目標

心臓疾患の病態生理とリハビリテーションの在り方を学ぶ。
ペーパーペイシェントを用いて心疾患の臨床推論の在り方を学ぶ。

■ 授業計画

- 第1回 心臓リハビリテーションの概説と心疾患の総括
- 第2回 急性心筋梗塞に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第3回 回復期・維持期心筋梗塞に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第4回 心不全に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第5回 心不全に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第6回 不整脈を合併する症例に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第7回 末梢循環不全に対する理学療法評価ならびに運動療法を学ぶ。
- 第8回 ペーパーペイシェントを用いて、心疾患に対する臨床推論を学ぶ。

■ 評価方法

筆記試験80% 出席点20% で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業外の取り組みとして、講義中に次の講義内容と事前学習について指示します。特に心臓の解剖、生理、病理の基本を押さえておくことが望ましい。講義においては心筋リモデリングについて、重点的に講義するため、テキスト該当箇所を一読しておくことが、理解につながる。

■ 教 科 書

書 名：内部障害理学療法学テキスト
著者名：細田多穂，山崎裕司，川俣幹雄，丸岡弘
出版社：南江堂

■ 参考図書

書 名：循環器理学療法の理論と技術
著者名：増田 卓，松永 篤彦
出版社：メジカルビュー社

■ 留意事項

講義中の私語は厳禁とする。講義中に注意を何度か受け、かつ改善が認められな場合は講義を妨害したとみなし、対象学生に対して退室を指示することがある。真剣に取り組む姿勢を求める。

授業科目	リウマチ・有痛性傷害・脊髄損傷理学療法治療学	担 当 者	井上 悟・加藤 直樹		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

RA、疼痛、脊損の PT 治療の現状について知る。

■ 到達目標

RA、疼痛、脊損の PT 治療の実際を知る。

■ 授業計画

- 第 1 回 関節リウマチ 1
- 第 2 回 関節リウマチ 2
- 第 3 回 関節リウマチ 3
- 第 4 回 脊髄損傷 1
- 第 5 回 脊髄損傷 2
- 第 6 回 疼痛性疾患 1
- 第 7 回 疼痛性疾患 2（阪大：加藤）
- 第 8 回 疼痛性疾患 3（阪大：加藤）

■ 評価方法

筆記試験 70%、授業態度 30%（遅刻・欠席は減点対象）で総合評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業前には、教科書の授業該当範囲を予習しておくこと

■ 教 科 書

書 名：骨関節理学療法学
 著者名：吉尾雅春・小柳磨毅
 出版社：医学書院，2013年，4800円

■ 参考図書

書 名：運動器疾患の理学療法テクニック
 著者名：林 義孝
 出版社：南江堂

■ 留意事項

各回の講義テーマ、内容については関連する講義の進捗状況により変更することがあります。
 指定の教科書は後期開講のリハビリテーション医学の教科書としても利用される予定。

授業科目	運動器障害・スポーツ傷害理学療法治療学	担当者	佐藤 睦美		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動器障害およびスポーツ傷害の疾患の概念および理学療法評価・治療について学ぶ

■ 到達目標

運動器障害およびスポーツ傷害に対する理学療法評価計画，治療プログラムが立案できる

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション，骨折の理学療法
- 第2回 肩関節障害の理学療法 1
- 第3回 肩関節障害の理学療法 2
- 第4回 肩関節障害の理学療法 3
- 第5回 肘・前腕・手関節傷害の理学療法 1
- 第6回 肘・前腕・手関節傷害の理学療法 2
- 第7回 股関節障害の理学療法
- 第8回 股関節障害の理学療法
- 第9回 股関節障害の理学療法
- 第10回 股関節障害の理学療法
- 第11回 膝関節障害の理学療法 1
- 第12回 膝関節障害の理学療法 2
- 第13回 膝関節障害の理学療法 3
- 第14回 膝関節障害の理学療法 4
- 第15回 下腿・足関節・足部障害の理学療法 1
- 第16回 下腿・足関節・足部障害の理学療法 2
- 第17回 脊柱障害の理学療法 1
- 第18回 脊柱障害の理学療法 2
- 第19回 脊柱障害の理学療法 3
- 第20回 脊柱障害の理学療法 4
- 第21回 スポーツ傷害（総論），上肢のスポーツ傷害 1
- 第22回 上肢のスポーツ傷害 2
- 第23回 上肢のスポーツ傷害 3
- 第24回 下肢のスポーツ傷害 1
- 第25回 下肢のスポーツ傷害 2
- 第26回 下肢のスポーツ傷害 3
- 第27回 悪性腫瘍に対する理学療法 1
- 第28回 悪性腫瘍に対する理学療法 2
- 第29回 まとめ 1
- 第30回 まとめ 2

■ 評価方法

筆記試験 80%，小テスト・課題 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・ Moodle に掲示される「講義の前に」の項に書かれている内容を事前に学習する。
- ・ Moodle に掲示される「講義のポイント」を参考に、講義内容を整理する。

■ 教科書

書 名：15レクチャーシリーズ 運動器障害理学療法学Ⅰ

著者名：河村廣幸（責任編集）

出版社：中山書店

書 名：15レクチャーシリーズ 運動器障害理学療法学Ⅱ

著者名：河村廣幸（責任編集）

出版社：中山書店

書 名：実践PTノート 第2版 運動器障害の理学療法

著者名：小柳磨毅（編）

出版社：三輪書店

■ 参考図書

書 名：標準理学療法学 専門分野 理学療法学 各論 第3版

著者名：吉尾雅春（編）

出版社：医学書院

書 名：整形外科 術後理学療法プログラム 改訂第2版

著者名：島田洋一，高橋仁美（編）

出版社：メジカルビュー社

書 名：スポーツ膝の臨床（第2版）

著者名：史野根生

出版社：金原出版

書 名：理学療法 MOOK 9 スポーツ傷害の理学療法 第2版

著者名：福井勉・小柳磨毅（編）

出版社：三輪書店

書 名：ビジュアル実践リハ 整形外科リハビリテーション

著者名：相澤純也・中丸宏二（編）

出版社：羊土社

書 名：整形外科疾患ビジュアルブック

著者名：落合慈之（監修），下出真法（編）

出版社：学研

■ 留意事項

実技実習を行う際には事前に連絡をするので、動きやすい服装で出席すること。

授業科目	健康増進理学療法学	担当者	今井 公一		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

我が国は高齢社会にあって、疾病や障害の予防が注目されています。この講義では、予防のための理学療法のある方についてをテーマとし、基本的な評価、運動療法の実施について考えます。

■ 到達目標

1. 予防的理学療法の必要性について説明できる。
2. 予防的理学療法に必要な評価について説明できる。
3. 予防的理学療法に関する代表的なプログラムについて説明できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 健康増進と理学療法（概念）
- 第2回 予防のための理学療法（基礎知識）
- 第3回 予防のための理学療法評価 1. 形態・測定
- 第4回 予防のための理学療法評価 2. ROMの測定
- 第5回 予防のための理学療法評価 3. 筋力の測定
- 第6回 予防のための理学療法評価 4. 筋力の測定
- 第7回 予防のための理学療法評価 5. 神経系の評価
- 第8回 予防のための理学療法評価 6. 姿勢と歩行
- 第9回 加齢と理学療法
- 第10回 廃用症候群と理学療法
- 第11回 疾病予防と理学療法
- 第12回 産業保健分野の理学療法
- 第13回 予防のための理学療法プログラムの作成（1）
- 第14回 予防のための理学療法プログラムの作成（2）
- 第15回 総括

■ 評 価 方 法

出席：20% 提出物：30% 筆記試験：50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜提示する課題を確実に学習してください。提出を求められた場合は確実に提出して下さい。

■ 教 科 書

書 名：理学療法評価法

著者名：中島 喜代彦

出版社：神陵文庫

書 名：新・徒手筋力検査法

著者名：津山直一他訳

出版社：協同医書出版

■ 参考図書

書 名：理学療法から診る廃用症候群

著者名：奈良勲 他

出版社：文光堂

書 名：もっとも新しい重症患者の早期離床の考えかた

著者名：卯野木 健 編集

出版社：学研メディカル秀潤社

■ 留意事項

授業科目	物理療法学	担当者	棚 千磨		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

まずは、物理療法機器によってもたらされる身体への生理学的作用を理解してもらいます。その上で、それに伴うリスク・適応・禁忌などを考えてもらいます。実際の機器の操作は、物理療法学実習で行います。

■ 到達目標

1. 理学療法における物理療法の位置づけと意義を理解する。
2. 各物理療法の生理学的作用を理解する。
3. 各物理療法のリスクを想起することができる。
4. 生理学的作用、リスクを勘案して、適切な物理療法機器の選択ができる。
5. 各物理療法機器の設定値の意味を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 物理療法の意義・位置づけ
- 第2回 生理学的作用
- 第3回 炎症・痛みに対する理学療法
- 第4回 温熱療法
- 第5回 寒冷療法
- 第6回 光線療法
- 第7回 光線療法・電磁波療法
- 第8回 超音波療法
- 第9回 電気刺激療法①
- 第10回 電気刺激療法②
- 第11回 その他の電気療法
- 第12回 牽引療法
- 第13回 マッサージ
- 第14回 水治療法
- 第15回 リスク管理その他

■ 評価方法

小テスト：15点 出席状況：15点 筆記試験：70%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各学生は授業後十分に復習を行い、2回目授業以降、小テストで理解度の確認を行ってもらいます。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

受動的に暗記するのではなく、自ら能動的に考える姿勢で臨んでください。

授業科目	物理療法学実習	担 当 者	棚 千 磨		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

物理療法学実習では、実際に物理療法機器を操作し、生体の反応を体感してもらいます。それに際しては、出力や温度などの物理療法機器の設定、適応・禁忌などのリスク管理などを重点的に学習してもらいます。また、機器を操作するにあたっては、それを扱うに足る知識があることを確認してから、機器操作の許可を出します。

グループに分かれ、各物理療法機器をローテーションで実習してもらいます。

■ 到達目標

1. 物理療法機器操作に際し、リスク管理を行えるようになる。
2. 適切に物理療法機器を選択できるようになる。
3. 適切に物理療法機器を操作できるようになる。
4. 物理療法施行後の生体反応を見極めることができるようになる。
5. 物理療法と生体反応の関係性に考察が及ぶようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション (①ホットパック、②パラフィン、③寒冷療法、④極超短波)
- 第2回 オリエンテーション (⑤超音波、⑥低周波、⑦干渉波)
- 第3回 オリエンテーション (⑧牽引 [頸椎・腰椎]、⑨水治療法 [渦流浴]、⑩マッサージ)
- 第4回 実習 第1回目 実習前に指定された各班が、ローテーションで治療手段の実習を行う。
翌週の実習開始前に各自レポートにまとめて提出する。2回目以後も同様とする。
- 第5回 実習 第2回目
- 第6回 実習 第3回目
- 第7回 実習 第4回目
- 第8回 実習 第5回目
- 第9回 実習 第6回目
- 第10回 実習 第7回目
- 第11回 実習 第8回目
- 第12回 実習 第9回目
- 第13回 実習 第10回目
- 第14回 まとめ
- 第15回 実技テスト

■ 評価方法

筆記試験20% 出席数・受講態度30% (無断欠席・遅刻は減点) レポート・実技テスト50%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

1. 「実習の手引き」をあらかじめ十分に熟読・予習してきて、実習開始後速やかに行動ができるようにする。
2. 実習第1回目から第10回目までのグループ実習では、10回の実習項目について全員がレポートを提出する。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

1. 学生全員が験者、被験者を必ず体験すること。
2. リスク管理事項を絶対に遵守すること。

授業科目	義肢装具学	担当者	井上 悟		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

義肢装具に関する基本的事項を学習し、各種義肢装具の特性と構造を紹介する。

■ 到達目標

臨床で用いる義肢装具の基本的知識を増やす。
臨床で使用される義肢装具の種類、特徴、機能が説明できる。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション（授業計画の概要と成績判定方法の説明）
義肢学1 切断総論1
第2回 義肢学2 切断総論2
第3回 義肢学3 義足総論
第4回 義肢学4 下腿切断と下腿義足1（ソケット）
第5回 義肢学5 下腿義足2（足部、足継手）
第6回 義肢学6 下腿義足3（適合とアライメント）
第7回 義肢学7 大腿切断と大腿義足1（ソケット）
第8回 義肢学8 大腿義足2（ソケットと懸垂）
第9回 義肢学9 大腿義足3（膝継手）
第10回 義肢学10 大腿義足4（適合とアライメント）
第11回 装具学1 装具総論（下肢装具を中心に）
第12回 装具学2 靴と靴型装具（FO）
第13回 装具学3 短下肢装具（AFO）
第14回 装具学4 長下肢装具（KAFO）、膝装具（KO）
第15回 装具学5 骨盤帯付き長下肢装具（HKAFO）、股関節装具（HO）

■ 評価方法

筆記試験 70%、授業態度 30%（遅刻・欠席は減点対象）で総合評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業前には、教科書の授業該当範囲を予習しておくこと

■ 教 科 書

書 名：義肢装具学（第4版）
著者名：川村次郎・他編
出版社：医学書院、定価：7350円、2009年

■ 参考図書

書 名：切断と義肢
著者名：澤村誠志
出版社：医歯薬出版、定価：7350円、2007年

■ 留意事項

授業科目	義肢装具学実習	担当者	井上 悟・高木 啓至・西野 誠一		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

義肢装具に関する基本的事項を学習し、各種義肢装具の特性と構造を紹介する。臨床で用いる義肢装具の基本的知識を増やす。

■ 到達目標

対象者の障害レベルに応じた義肢装具の類別ができる。
各種障害に対する義肢装具の選択と適合判定ができる。

■ 授 業 計 画

第1回 義肢学実習1 股関節離断と股義足
第2回 義肢学実習2 膝離断と膝義足
第3回 義肢学実習3 サイム切断とサイム義足
第4回 義肢学実習4 足部切断と足部義足
第5回 義肢学実習5 切断者の理学療法1
第6回 義肢学実習6 切断者の理学療法2
第7回 義肢学実習7 切断者の理学療法3
第8回 義肢学実習8 切断者の理学療法4（高木 PT）：実技指導含
第9回 義肢学実習9 切断者理学療法の臨床（高木 PT）
第10回 装具学実習1 疾患・障害別装具1 CVA 片麻痺の装具
第11回 装具学実習2 疾患・障害別装具2 対麻痺、二分脊椎の装具
第12回 装具学実習3 疾患・障害別装具3 体幹・頸椎装具、側弯症装具
第13回 装具学実習4 疾患・障害別装具4 頸随損傷、末梢神経損傷の上肢装具
第14回 装具学実習5 疾患・障害別装具5 小児疾患用装具、整形外科的治療用装具、その他
第15回 装具学実習6 義肢・装具の最新情報、最新の支給制度など（西野 PO）

■ 評価方法

筆記試験 70%、授業態度 30%（遅刻・欠席は減点対象）で総合評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業前には、教科書の授業該当範囲を予習しておくこと

■ 教 科 書

書 名：義肢装具学（第4版）
著者名：川村次郎・他編
出版社：医学書院、定価：7350円、2009年

■ 参考図書

書 名：切断と義肢
著者名：澤村誠志
出版社：医歯薬出版、定価：7350円、2007年

■ 留意事項

外来講師の都合により、講義日時の変動があり得ます。

授業科目	日常生活活動学	担 当 者	牧之瀬 一博		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日常生活活動学では、普段意識する事無く行っている日常生活が、理学療法において重要な評価・介入対象であり、活動を専門的な視点で見る事を学ぶ。日常生活に關与する諸活動の概念、生活関連活動、運動学との関係、各種評価法などの理解を深める。主な疾患や病態の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について学修する。

■ 到達目標

- ・日常生活活動が理学療法における重要な評価介入対象である事を理解する。
- ・日常生活に關与する諸活動の概念、分析、評価及び練習についての知識を深める。
- ・代表的な自助具や福祉・生活支援機器についての知識を習得する。
- ・代表的疾患の日常生活活動の特徴並びに介助法や指導法について修得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 総論①日常生活活動（ADL）の概念と範囲（基本的 ADL、生活関連活動）
- 第2回 総論② ADL と障害（ICF）
- 第3回 総論③基本的 ADL と生活の質（QOL）
- 第4回 総論④ ADL と運動学
- 第5回 総論⑤ ADL 評価（代表的評価法）
- 第6回 総論⑥ ADL と周辺機器（自助具や歩行補助具など）
- 各論①片麻痺の ADL（前半）
- 第7回 各論①片麻痺の ADL（後半）
- 各論②脊髄損傷の ADL（前半）
- 第8回 各論②脊髄損傷の ADL（後半）
- 第9回 各論③脳性麻痺の ADL
- 第10回 各論④神経筋疾患・難病の ADL
- 第11回 各論⑤関節リウマチの ADL
- 第12回 各論⑥人工股関節術後の ADL
- 第13回 各論⑦内科疾患（呼吸器疾患・循環器疾患）の ADL
- 第14回 各論⑧切断の ADL
- ⑨高齢者の ADL
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

提出課題（20%）、確認テストとノート類の提出（20%）、筆記試験（60%）
出席（欠席：－4点、遅刻：－2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

理学療法と密接に関わる科目であり、新しい専門用語が多く出てくることから、講義後の復習が重要である。大学設置基準に定められているとおり、おおよそ講義時間と同等～半分程度の復習時間を確保すること。復習方法が分からない学生に対しては、復習方法を提案するため、その方法を参考に復習を行うこと。講義内容の理解には予習も有効である。予習に関しては指定の教科書の対応する各章（10～20ページ程度）を読んでおくこと。

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学（第4版）
著者名：鶴見隆正（編集）
出版社：医学書院

■ 参 考 図 書

書 名：新版 日常生活活動（ADL）― 評価と支援の実際 ―
著者名：土屋弘吉等
出版社：医歯薬出版

.....
書 名：姿勢と動作 ― ADL その基礎から応用まで ―（第3版）
著者名：斉藤宏他著
出版社：メヂカルフレンド社

■ 留 意 事 項

授業科目	日常生活活動学実習	担当者	牧之瀬 一博		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

日常生活活動学実習では、姿勢と動作の基礎的知識、起居・移動・移乗及び段差・階段・歩行に関わる自力動作と介助法を修得する。特に正常動作における運動学・運動力学を押さえた上で、障害が加わった場合の理学療法士として適切な介助技術について学ぶ。
車いす操作法、及び車いすのキャスター上げを体得する。各論として、主な疾患者の特徴的動作を習得させる。

■ 到達目標

- ・姿勢と動作の基礎的知識が理解できる。
- ・起居・移動・移乗動作に関わる身体構造・機能の視点に基づいた、自力動作が理解できる。
- ・動作指導・運動学習の視点から適切な介助法を理解し、安全に実践できる。
- ・車いす操作、及び車いすキャスター上げができる。
- ・主な疾患者の特徴的動作が理解でき、指導方法も理解できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
姿勢と動作の基礎知識（概念、身体力学、姿勢と身体構造、姿勢反射）
- 第2回 基本の姿勢、移動
理学療法士としての日常生活活動への関わり
- 第3回 日常生活活動における姿勢と動作
ベッド上移動（水平移動）・起居動作（寝返り・起き上がり）の自力動作と介助法
- 第4回 日常生活活動における姿勢と動作
立ち上がり・移乗動作の自力動作と介助法
- 第5回 平地歩行、段差・階段昇降（自力、介助）
- 第6回 各論①－1片麻痺者の特徴的動作
寝返り、起き上がり、立ち上がり、移乗
- 第7回 各論①－2片麻痺者の特徴的動作
歩行、階段昇降、更衣、入浴、キャスター挙げ体験とレポート課題の説明
- 第8回 各論②脊髄損傷（四肢麻痺、対麻痺）者の特徴的動作
寝返り、起き上がり、移乗
- 第9回 各論②脊髄損傷（対麻痺）者の特徴的動作
歩行、ADL
- 第10回 片麻痺者・対麻痺者の車いす操作法（自力）
車いす操作（介助）・キャスター上げ
- 第11回 自力でのキャスター上げの修得
- 第12回 各論③関節リウマチ者、人工股関節者の特徴的動作
- 第13回 各論④筋萎縮性疾患（筋ジストロフィー、筋萎縮性側索硬化症）の特徴的動作
神経筋疾患（脊髄小脳変性症、パーキンソン病、多発性硬化症）の特徴的動作
- 第14回 各論⑤内科疾患（呼吸器疾患・循環器疾患）のADL
脳性麻痺（児、者）、切断（下肢、上肢）者、高齢者の特徴的動作
- 第15回 トランスファーや介助法などの実技

■ 評価方法

提出課題（30％）、実技試験（30％）、筆記試験（40％）

出席（欠席：－4点、遅刻：－2点）遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

前期の日常生活活動学で学んだ内容を復習した状態で参加すること。

実技については、まず正常な動作の理解に努める必要がある。その際、特に自身の身体を用いて学習することが出来るような体験を講義内で行う事から、それらを講義外での時間でも実施して、自分の身体で重要なことを学んで欲しい。また、理学療法学生同士では分からない事も多いことから、家族や学外の知人などにも協力してもらい、動作を学んでいく事が必要である。その上で、それぞれの疾患の特徴に合わせた動作方法などを学ぶため、疾患によって生じる臨床症状の理解が欠かせない。

■ 教科書

書 名：姿勢と動作 ― ADL その基礎から応用まで ―（第3版）

著者名：斉藤宏他著

出版社：メヂカルフレンド社

■ 参考図書

書 名：標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学（第4版）

著者名：鶴見隆正編

出版社：医学書院

書 名：新版 日常生活活動（ADL）― 評価と支援の実際 ―

著者名：土屋弘吉等

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	地域理学療法学	担当者	岩田 篤		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

地域医療の成り立ち（歴史）を概観しつつ、そこでの理学療法士の役割や、種々（職種間、施設間）の連携の重要性を整理し、地域での暮らしを支えるに必要な基礎知識について学修する。

■ 到達目標

地域医療における理学療法士の役割と方法論、またそれを支えるシステム（制度と社会資源）の重要性について理解することを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 地域リハビリテーション
- 第3回 地域理学療法
- 第4回 障害者福祉と障害者施策
- 第5回 介護保険制度の概要
- 第6回 介護保険で利用できる各種サービスとその他の社会資源
- 第7回 地域包括ケアシステムおよび障害者総合支援法
- 第8回 訪問リハビリテーション
- 第9回 通所リハビリテーション
- 第10回 福祉用具と住宅改修
- 第11回 在宅医療にかかわる知識～褥瘡～
- 第12回 高齢者の身体特性
- 第13回 介護予防
- 第14回 事例検討
- 第15回 総括

■ 評価方法

筆記試験：70%，小テスト：30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

理解度を促進するために、小テストを行います。
配布資料をもとに必ず復習しておいてください。

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法学 地域理学療法学 第3版
著者名：牧田光代，金谷さとみ（編集）
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

制度は時代の変遷とともに見直され常に変化するものである。特に社会保障関連はここ数年来のトピックスであり、ニュースで取り上げられることも少なくない。今後直面する現実問題として強く関心を持つとともに、積極的な情報へのアクセスを行い、地域を考える一助としていただきたい。

授業科目	生活環境論	担 当 者	田中 仁		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーションに関わる生活環境を、患者（利用者）を取り巻く生活地域に視点をおいて考える。

■ 到達目標

現在日本における患者（利用者）の在宅環境（家屋、福祉用具等）を、医療保険、介護保険の現行制度を通して、リハビリテーションの視点で理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 生活環境論について
- 第2回 日本の社会保障について
- 第3回 日本のリハビリテーションについて
- 第4回 医療保険制度と介護保険制度について
- 第5回 介護保険制度について
- 第6回 居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・一般知識）
- 第7回 居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・移乗移動関係）
- 第8回 居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・移乗移動関係：実技編）
- 第9回 居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・ベッド関係）
- 第10回 居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・褥瘡関係）
- 第11回 居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・排泄、入浴関係）
- 第12回 居住環境（福祉・リハビリテーション関連機器・その他）
- 第13回 居住環境（住宅改修）
- 第14回 地域包括ケアシステムとリハビリテーション
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習は、教科書と添付資料を熟読すること。復習は、講義中に重要項目として強調したところは必ず読み直すこと。

■ 教 科 書

書 名：福祉用具専門相談員研修用テキスト第7訂（2015発行予定）
 著者名：一般社団法人シルバーサービス振興会（編集）
 出版社：中央法規

■ 参考図書

書 名：生活環境論 第6版 生活支援の視点と方法
 著者名：木村 哲彦 監修
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

福祉用具専門相談員研修用テキスト第7訂(2015発行予定)は、本年度介護保険改正のため第7訂が発行される予定です。生活環境論 第6版も第7版ができれば、それをお願いいたします。

授業科目	卒業研究論文	担 当 者	理学療法学専攻教員		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	4 年	総単位数	4 単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

理学療法に関する研究を通じて、研究手法や現象に対する考察の手順を学ぶ

■ 到達目標

研究手法の基礎を理解し、自ら考察する力を養う。

■ 授業計画

第1回 オリエンテーション
 第2回 文献検索の方法： インターネットを利用した論文の検索方法について学ぶ
 第3～8回 先行研究論文の抄読： 各グループで発表を行い、研究テーマや手法について考える
 第8～11回 研究計画書の作成： 規定の書式に従い計画書を作成し、担当教員の指導を受ける
 第12～22回 研究データを収集する（文献、資料、実験・測定）
 第23～33回 収集した研究データを整理・解析する： 結果をまとめグループ内で発表する
 第34～40回 得られた結果について考察する： 得られた結果に対する考察をまとめグループ内で発表する
 第41～48回 論文を作成する： 規定の書式に従い論文を作成し、担当教員の指導を受ける
 第49～53回 研究報告会用のプレゼンテーション資料、配付資料を作成する
 第53～58回 研究報告会： 全体で報告会を実施し、他者の発表に対して積極的に質問をする。
 第59～60回 卒業研究論文を完成させる： 研究報告会での質疑応答や指摘をふまえて論文を修正する。

■ 評価方法

出席状況（20%）、研究報告会での発表状況（30%）、卒業研究論文（50%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

それぞれの研究分野に対する知識が必要となります。ゼミ以外の時間も積極的に活用し、研究を進めるようにしてください。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：入門はじめての統計解析
 著者名：石村貞夫
 出版社：東京図書

 書 名：すぐわかる統計解析
 著者名：石村貞夫
 出版社：東京図書

 書 名：すぐわかる統計処理の選び方
 著者名：石村貞夫・石村光資郎
 出版社：東京出版

 書 名：学生・研究者のための 使える！ PowerPoint スライドデザイン 伝わるプレゼン1つの原理と3つの技術
 著者名：宮野公樹
 出版社：化学同人

■ 参考図書

書 名：これから学会発表する若者のために ―ポスターと口頭のプレゼン技術―

著者名：酒井聡樹

出版社：共立出版

書 名：これから論文を書く若者のために

著者名：酒井聡樹

出版社：共立出版

■ 留意事項

発表・論文の内容だけでなく、ゼミへの出席状況や研究へ取り組む態度も評価対象となります。ゼミで協力して実施する内容も多いと思いますので、無断欠席のないようにしてください。

授業科目	理学療法研究特別演習（卒業研究）	担 当 者	(全体) 島・牧之瀬 (演習) オムニバス		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3～4年	総単位数	4単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

（共通）

卒業研究／特別演習は、『基礎教育分野の共通』と『各卒業研究・特別演習』から構成されている。
共通部分では、理学療法教育の中で基礎となり、国家試験においても多く出題されている解剖学・生理学・運動学・人間発達学に関する総復習と知識の定着を図る内容である。この科目の履修により、卒業研究や分野別特別演習の円滑な理解を促すとともに、国家試験合格に必要な基礎知識を学ぶ。

深い理解を目的としたグループ活動を通しての学び合いを基本とする。

（領域毎の演習）

理学療法に関する研究を通じて、研究手法や現象に対する考察の手順を学ぶ

■ 到達目標

（共通）

- ・グループ活動の中で自身の与えられた役割を責任もって遂行する。
- ・国家試験頻出の解剖学・生理学・運動学・人間発達学の領域の問題について、他者へ説明できるレベルでの理解を目標とする。
- ・頻出の分野における国家試験過去問に関しては、最低でも8割以上の正答率となる。
- ・一つ一つの領域を単なる暗記とするような浅い記憶でなく、複数の領域を統合して臨床に活用できるような知識にする。

（領域毎の演習）

研究手法の基礎を理解し、自ら考察する力を養う。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション（共通） 国家試験の傾向と学習方法（グループ学習の意図、進め方）
- 第2回 解剖生理学（植物機能）1（共通） 循環器系の基礎と臨床の関係領域
- 第3回 解剖生理学（植物機能）2（共通）
- 第4回 解剖生理学（植物機能）3（共通）
- 第5回 解剖生理学（植物機能）4（共通）
- 第6回 解剖生理学（植物機能）5（共通）
- 第7回 解剖生理学（植物機能）6（共通）
- 第8回 解剖生理学（植物機能）総まとめ（共通）
- 第9回 解剖生理学（動物機能）1（共通） 神経系の基礎と臨床の関係領域
- 第10回 解剖生理学（動物機能）2（共通）
- 第11回 解剖生理学（動物機能）3（共通）
- 第12回 解剖生理学（動物機能）4（共通）
- 第13回 解剖生理学（動物機能）5（共通）
- 第14回 解剖生理学（動物機能）6（共通）
- 第15回 解剖生理学（動物機能）総まとめ（共通）
- 第16回 解剖生理学（植物・動物機能）総まとめ（共通）
- 第17回 運動機能学1（共通） 運動器の基礎と臨床の関係領域
- 第18回 運動機能学2（共通）
- 第19回 運動機能学3（共通）
- 第20回 運動機能学4（共通）

■ 授業計画

- 第21回 運動機能学 5 (共通)
- 第22回 運動機能学 6 (共通)
- 第23回 運動機能学 7 (共通)
- 第24回 運動機能学 8 (共通)
- 第25回 運動機能学 9 (共通)
- 第26回 運動機能学総まとめ (共通)
- 第27回 人間発達学 1 (共通)
- 第28回 人間発達学 2 (共通)
- 第29回 総まとめ 全範囲のまとめ (共通)
- 第30回 総まとめ 全範囲のまとめ (共通)
- 第31回 オリエンテーション (領域毎の演習)
- 第32回 文献検索の方法: インターネットを利用した論文の検索方法について学ぶ (領域毎の演習)
- 第33回 先行研究論文の抄読: 各グループで発表を行い、研究テーマや手法について考える 1 (領域毎の演習)
- 第34回 先行研究論文の抄読: 各グループで発表を行い、研究テーマや手法について考える 2 (領域毎の演習)
- 第35回 先行研究論文の抄読: 各グループで発表を行い、研究テーマや手法について考える 3 (領域毎の演習)
- 第36回 研究計画書の作成: 規定の書式に従い計画書を作成し、担当教員の指導を受ける 1 (領域毎の演習)
- 第37回 研究計画書の作成: 規定の書式に従い計画書を作成し、担当教員の指導を受ける 2 (領域毎の演習)
- 第38回 研究計画書の作成: 規定の書式に従い計画書を作成し、担当教員の指導を受ける 3 (領域毎の演習)
- 第39回 研究データを収集する 1 (文献、資料、実験・測定) (領域毎の演習)
- 第40回 研究データを収集する 2 (文献、資料、実験・測定) (領域毎の演習)
- 第41回 研究データを収集する 3 (文献、資料、実験・測定) (領域毎の演習)
- 第42回 研究データを収集する 4 (文献、資料、実験・測定) (領域毎の演習)
- 第43回 研究データを収集する 5 (文献、資料、実験・測定) (領域毎の演習)
- 第44回 収集した研究データを整理・解析する: 結果をまとめグループ内で発表する 1 (領域毎の演習)
- 第45回 収集した研究データを整理・解析する: 結果をまとめグループ内で発表する 2 (領域毎の演習)
- 第46回 収集した研究データを整理・解析する: 結果をまとめグループ内で発表する 3 (領域毎の演習)
- 第47回 収集した研究データを整理・解析する: 結果をまとめグループ内で発表する 4 (領域毎の演習)
- 第48回 収集した研究データを整理・解析する: 結果をまとめグループ内で発表する 5 (領域毎の演習)
- 第49回 得られた結果について考察する: 得られた結果に対する考察をまとめグループ内で発表する 1 (領域毎の演習)
- 第50回 得られた結果について考察する: 得られた結果に対する考察をまとめグループ内で発表する 2 (領域毎の演習)
- 第51回 得られた結果について考察する: 得られた結果に対する考察をまとめグループ内で発表する 3 (領域毎の演習)
- 第52回 得られた結果について考察する: 得られた結果に対する考察をまとめグループ内で発表する 4 (領域毎の演習)
- 第53回 論文を作成する: 規定の書式に従い論文を作成し、担当教員の指導を受ける 1 (領域毎の演習)
- 第54回 論文を作成する: 規定の書式に従い論文を作成し、担当教員の指導を受ける 2 (領域毎の演習)
- 第55回 論文を作成する: 規定の書式に従い論文を作成し、担当教員の指導を受ける 3 (領域毎の演習)
- 第56回 研究報告会用のプレゼンテーション資料、配付資料を作成する 1 (領域毎の演習)
- 第57回 研究報告会用のプレゼンテーション資料、配付資料を作成する 2 (領域毎の演習)
- 第58回 研究報告会: 全体で報告会を実施し、他者の発表に対して積極的に質問をする 1 (領域毎の演習)
- 第59回 研究報告会: 全体で報告会を実施し、他者の発表に対して積極的に質問をする 2 (領域毎の演習)
- 第60回 卒業研究論文を完成させる: 研究報告会での質疑応答や指摘をふまえて論文を修正する。(領域毎の演習)

■ 評価方法

(共通) 領域別の確認テスト及び全体の確認テスト (30%)

出席 (欠席: -4点、遅刻: -2点) 遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする。

(領域毎の演習) 出席状況 (20%), 研究報告会での発表状況 (30%), 卒業研究論文 (50%)

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

(共通)

一回の講義内で複数の領域について学習する。それぞれの領域について学生毎に担当者を決め、それぞれのグループ内での担当領域についての学習については、その学生が責任を持って解説を行えるようになる必要がある。そのため、事前学習が必須である。

担当した領域の国家試験過去問題について、各設問の正誤だけでなく、問題の解説や、こういった点が重要な点であるのか、理解の仕方・覚え方などを他者に解説出来るようになる必要がある。解説をする際に必要となる資料なども各自で用意する必要がある。

(領域毎の演習)

それぞれの研究分野に対する知識が必要となります。ゼミ以外の時間も積極的に活用し、研究を進めるようにしてください。

■ 教科書

書 名: (領域毎の演習) 脳性まひ児の家庭療育 原著第4版

著者名: Eva Bower 著, 上杉雅之監訳

出版社: 医歯薬出版株式会社

書 名: (共通) PT/OT 国家試験必修ポイント 専門基礎分野基礎医学<2015>

著者名: 医歯薬出版

出版社: 医歯薬出版

■ 参考図書

書 名: 入門はじめての統計解析

著者名: 石村貞夫

出版社: 東京図書

書 名: すぐわかる統計解析

著者名: 石村貞夫

出版社: 東京図書

書 名: すぐわかる統計処理の選び方

著者名: 石村貞夫・石村光資郎

出版社: 東京出版

書 名: 学生・研究者のための 使える! PowerPoint スライドデザイン 伝わるプレゼン1つの原理と3つの技術

著者名: 宮野公樹

出版社: 化学同人

書 名: これから学会発表する若者のために - ポスターと口頭のプレゼン技術 -

著者名: 酒井聡樹

出版社: 共立出版

書 名: これから論文を書く若者のために

著者名: 酒井聡樹

出版社: 共立出版

■ 留意事項

(領域毎の演習) 発表・論文の内容だけでなく、ゼミへの出席状況や研究へ取り組む態度も評価対象となります。ゼミで協力して実施する内容も多いと思いますので、無断欠席のないようにしてください。

授業科目	内部障害理学療法特別演習	担当者	(全体) 島・牧之瀬 (演習) 大概		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3～4年	総単位数	4単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

(共通) 卒業研究 / 特別演習は、『基礎教育分野の共通』と『各卒業研究・特別演習』から構成されている。共通部分では、理学療法教育の中で基礎となり、国家試験においても多く出題されている解剖学・生理学・運動学・人間発達学に関する総復習と知識の定着を図る内容である。この科目の履修により、卒業研究や分野別特別演習の円滑な理解を促すとともに、国家試験合格に必要な基礎知識を学ぶ。

深い理解を目的としたグループ活動を通しての学び合いを基本とする。

(領域毎の演習) 1) 内部障害の解剖生理のおさらい。具体的には、心臓、肺などの重点箇所をおさらいし、それぞれ の関係性を理解する。病態生理の理解に力点を置く。

2) 文献抄読 (2本程度 (内部障害に関する知識を得るだけでなく、論文の構成も学ぶ))

3) 体験実習として、前述した理学療法実施に関わる有用な評価、簡便な体力測定 (有酸素運動) を通じて、運動耐容能評価を体験する。心音、呼吸音、体位排痰などの評価を通じて、内部の評価を体験する。

4) 課題レポートの作成 (各自の内部障害と関係づけた興味のあるのテーマ)

■ 到達目標

(共通) ・グループ活動の中で自身の与えられた役割を責任もって遂行する。

・国家試験頻出の解剖学・生理学・運動学・人間発達学の領域の問題について、他者へ説明できるレベルでの理解を目標とする。

・頻出の分野における国家試験過去問に関しては、最低でも8割以上の正答率となる。

・一つ一つの領域を単なる暗記とするような浅い記憶でなく、複数の領域を統合して臨床に活用できるような知識にする。

(領域毎の演習) 演習を通じ、「想起」、「解釈」、「問題解決」の能力を養う。

グループワーク、発表、ディスカッションを通じ、疾患に対する基本的理学療法を理解する。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション (共通) 国家試験の傾向と学習方法 (グループ学習の意図、進め方)

第2回 解剖生理学 (植物機能) 1 (共通) 循環器系の基礎と臨床の関係領域

第3回 解剖生理学 (植物機能) 2 (共通)

第4回 解剖生理学 (植物機能) 3 (共通)

第5回 解剖生理学 (植物機能) 4 (共通)

第6回 解剖生理学 (植物機能) 5 (共通)

第7回 解剖生理学 (植物機能) 6 (共通)

第8回 解剖生理学 (植物機能) 総まとめ (共通)

第9回 解剖生理学 (動物機能) 1 (共通) 神経系の基礎と臨床の関係領域

第10回 解剖生理学 (動物機能) 2 (共通)

第11回 解剖生理学 (動物機能) 3 (共通)

第12回 解剖生理学 (動物機能) 4 (共通)

第13回 解剖生理学 (動物機能) 5 (共通)

第14回 解剖生理学 (動物機能) 6 (共通)

第15回 解剖生理学 (動物機能) 総まとめ (共通)

第16回 解剖生理学 (植物・動物機能) 総まとめ (共通)

第17回 運動機能学 1 (共通) 運動器の基礎と臨床の関係領域

第18回 運動機能学 2 (共通)

第19回 運動機能学 3 (共通)

第20回 運動機能学 4 (共通)

■ 授業計画

- 第21回 運動機能学 5 (共通)
- 第22回 運動機能学 6 (共通)
- 第23回 運動機能学 7 (共通)
- 第24回 運動機能学 8 (共通)
- 第25回 運動機能学 9 (共通)
- 第26回 運動機能学総まとめ (共通)
- 第27回 人間発達学 1 (共通)
- 第28回 人間発達学 2 (共通)
- 第29回 総まとめ 全範囲のまとめ (共通)
- 第30回 総まとめ 全範囲のまとめ (共通)
- 第31回 オリエンテーション (領域毎の演習)
- 第32回 心大血管の解剖学 (中枢循環: 心臓と大血管の構造) (領域毎の演習)
- 第33回 心大血管の解剖学 (末梢循環: 骨格筋と末梢血管の構造) (領域毎の演習)
- 第34回 心大血管の生理学 (末梢循環: 心臓と大血管の役割, 主に刺激伝導系, 血管コンプライアンス, スターリングの心臓の法則を整理する.) (領域毎の演習)
- 第35回 心大血管の生理学 (末梢循環: 骨格筋と末梢血管の役割, 主に末梢血管抵抗とレニン・アンギオテンシン系の働きを整理する.) (領域毎の演習)
- 第36回 呼吸器の解剖学 (中枢循環: 肺と周辺血管の構造) (領域毎の演習)
- 第37回 呼吸器の生理学 (中枢循環: 呼吸のメカニズム, 主に化学受容器と反射の役割を整理する.) (領域毎の演習)
- 第38回 症例を用いた呼吸循環器疾患の病態生理 1 (各疾患の理解, 主に心筋梗塞, 弁膜症, COPD, 間質性肺炎の病態を理解する) (領域毎の演習)
- 第39回 症例を用いた呼吸循環器疾患の病態生理 2 (各疾患の理解, 主に心筋梗塞, 弁膜症, COPD, 間質性肺炎の病態を理解する) (領域毎の演習)
- 第40回 症例を用いた呼吸循環器疾患の病態生理 3 (各疾患の理解, 主に心筋梗塞, 弁膜症, COPD, 間質性肺炎の病態を理解する) (領域毎の演習)
- 第41回 症例を用いた呼吸循環器疾患の病態生理 4 (各疾患の理解, 主に心筋梗塞, 弁膜症, COPD, 間質性肺炎の病態を理解する) (領域毎の演習)
- 第42回 呼吸循環器障害の統合と解釈: 演習 1 (第 2 ~ 11 回の理解度チェック) (領域毎の演習)
- 第43回 呼吸循環器障害の統合と解釈: 演習 2 (第 2 ~ 11 回の理解度チェック) (領域毎の演習)
- 第44回 呼吸循環器障害の統合と解釈: 演習 3 (第 2 ~ 11 回の理解度チェック) (領域毎の演習)
- 第45回 呼吸循環器障害の統合と解釈: 演習 4 (第 2 ~ 11 回の理解度チェック) (領域毎の演習)
- 第46回 問題解決能力の育成 (国家試験症例問題を中心に: 想起型問題) グループ・ワーク形式 1 (領域毎の演習)
- 第47回 問題解決能力の育成 (国家試験症例問題を中心に: 想起型問題) グループ・ワーク形式 2 (領域毎の演習)
- 第48回 問題解決能力の育成 (国家試験症例問題を中心に: 想起型問題) グループ・ワーク形式 3 (領域毎の演習)
- 第49回 問題解決能力の育成 (国家試験症例問題を中心に: 想起型問題) グループ・ワーク形式 4 (領域毎の演習)
- 第50回 問題解決能力の育成 (国家試験症例問題を中心に: 想起型問題) グループ・ワーク形式 5 (領域毎の演習)
- 第51回 各評価法の演習 1 (領域毎の演習)
- 第52回 各評価法の演習 2 (領域毎の演習)
- 第53回 各評価法の演習 3 (領域毎の演習)
- 第54回 各評価法の演習 4 (領域毎の演習)
- 第55回 確認テストと徹底解説: 学生参加型ディスカッション 1 (領域毎の演習)
- 第56回 確認テストと徹底解説: 学生参加型ディスカッション 2 (領域毎の演習)
- 第57回 確認テストと徹底解説: 学生参加型ディスカッション 3 (領域毎の演習)
- 第58回 確認テストと徹底解説: 学生参加型ディスカッション 4 (領域毎の演習)
- 第59回 確認テストと徹底解説: 学生参加型ディスカッション 5 (領域毎の演習)
- 第60回 確認テストと徹底解説: 学生参加型ディスカッション 6 (領域毎の演習)

■ 評価方法

(共通) 領域別の確認テスト及び全体の確認テスト (30%)

出席 (欠席: -4点、遅刻: -2点) 遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする。

(領域毎の演習) 課題レポートの提出を前提とし、出席点20%, 発表点30%, グループディスカッションの参加30%, 小テスト20% で評価する。

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

(共通)

一回の講義内で複数の領域について学習する。それぞれの領域について学生毎に担当者を決め、それぞれのグループ内での担当領域についての学習については、その学生が責任を持って解説を行えるようになる必要がある。そのため、事前学習が必須である。

担当した領域の国家試験過去問題について、各設問の正誤だけでなく、問題の解説や、こういった点が重要な点であるのか、理解の仕方・覚え方などを他者に解説出来るようになる必要がある。解説をする際に必要となる資料なども各自で用意する必要がある。

(領域毎の演習)

講義前に、次の講義内容について概説し、テキストと合わせて予習すべき内容を指示します。特に呼吸循環器に関わる解剖・生理は復習しておくことが望ましい。

■ 教科書

書 名: (領域毎の演習) 内部障害理学療法学テキスト

著者名: 細田多穂, 山崎裕司, 川俣幹雄, 丸岡弘

出版社: 南江堂

書 名: (共通) PT/OT 国家試験必修ポイント 専門基礎分野基礎医学<2015>

著者名: 医歯薬出版

出版社: 医歯薬出版

■ 参考図書

書 名: (領域毎の演習) 循環器理学療法の理論と技術

著者名: 増田 卓, 松永 篤彦

出版社: メジカルビュー社

■ 留意事項

講義中の私語は厳禁とする。講義中に注意を何度か受け、かつ改善が認められな場合は講義を妨害したとみなし、対象学生に対して退室を指示することがある。真剣に取り組む姿勢を求める。

授業科目	運動器理学療法特別演習	担 当 者	(全体) 島・牧之瀬 (演習) 佐藤		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	3～4年	総単位数	4単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

(共通)

卒業研究 / 特別演習は、『基礎教育分野の共通』と『各卒業研究・特別演習』から構成されている。

共通部分では、理学療法教育の中で基礎となり、国家試験においても多く出題されている解剖学・生理学・運動学・人間発達学に関する総復習と知識の定着を図る内容である。この科目の履修により、卒業研究や分野別特別演習の円滑な理解を促すとともに、国家試験合格に必要な基礎知識を学ぶ。

深い理解を目的としたグループ活動を通しての学び合いを基本とする。

(領域毎の演習)

運動器疾患について疾患の理解を深め、評価や治療プログラムの立案と治療実施を症例を通じて学ぶ。

■ 到達目標

(共通)

- ・グループ活動の中で自身の与えられた役割を責任もって遂行する。
- ・国家試験頻出の解剖学・生理学・運動学・人間発達学の領域の問題について、他者へ説明できるレベルでの理解を目標とする。
- ・頻出の分野における国家試験過去問に関しては、最低でも8割以上の正答率となる。
- ・一つ一つの領域を単なる暗記とするような浅い記憶でなく、複数の領域を統合して臨床に活用できるような知識にする。

(領域毎の演習)

運動器障害に対して、各疾患に応じたリスク管理・評価・治療が実施できるようになる。

■ 授 業 計 画

第1回 オリエンテーション (共通) 国家試験の傾向と学習方法 (グループ学習の意図、進め方)

第2回 解剖生理学 (植物機能) 1 (共通) 循環器系の基礎と臨床の関係領域

第3回 解剖生理学 (植物機能) 2 (共通)

第4回 解剖生理学 (植物機能) 3 (共通)

第5回 解剖生理学 (植物機能) 4 (共通)

第6回 解剖生理学 (植物機能) 5 (共通)

第7回 解剖生理学 (植物機能) 6 (共通)

第8回 解剖生理学 (植物機能) 総まとめ (共通)

第9回 解剖生理学 (動物機能) 1 (共通) 神経系の基礎と臨床の関係領域

第10回 解剖生理学 (動物機能) 2 (共通)

第11回 解剖生理学 (動物機能) 3 (共通)

第12回 解剖生理学 (動物機能) 4 (共通)

第13回 解剖生理学 (動物機能) 5 (共通)

第14回 解剖生理学 (動物機能) 6 (共通)

第15回 解剖生理学 (動物機能) 総まとめ (共通)

第16回 解剖生理学 (植物・動物機能) 総まとめ (共通)

第17回 運動機能学 1 (共通) 運動器の基礎と臨床の関係領域

第18回 運動機能学 2 (共通)

第19回 運動機能学 3 (共通)

第20回 運動機能学 4 (共通)

■ 授業計画

- 第21回 運動機能学 5 (共通)
- 第22回 運動機能学 6 (共通)
- 第23回 運動機能学 7 (共通)
- 第24回 運動機能学 8 (共通)
- 第25回 運動機能学 9 (共通)
- 第26回 運動機能学総まとめ (共通)
- 第27回 人間発達学 1 (共通)
- 第28回 人間発達学 2 (共通)
- 第29回 総まとめ 全範囲のまとめ (共通)
- 第30回 総まとめ 全範囲のまとめ (共通)
- 第31回 オリエンテーション (領域毎の演習)
- 第32回 肩関節の運動器疾患: 疾患の理解 (領域毎の演習)
- 第33回 肩関節の運動器疾患: 理学療法評価 (領域毎の演習)
- 第34回 肩関節の運動器疾患: 治療 (領域毎の演習)
- 第35回 肩関節の運動器疾患: 症例検討 (領域毎の演習)
- 第36回 肩関節の運動器疾患: まとめ (領域毎の演習)
- 第37回 肘・手関節の運動器疾患: 疾患の理解 (領域毎の演習)
- 第38回 肘・手関節の運動器疾患: 理学療法評価 (領域毎の演習)
- 第39回 肘・手関節の運動器疾患: 治療 (領域毎の演習)
- 第40回 肘・手関節の運動器疾患: 症例検討 (領域毎の演習)
- 第41回 肘・手関節の運動器疾患: まとめ (領域毎の演習)
- 第42回 股関節の運動器疾患: 疾患の理解 (領域毎の演習)
- 第43回 股関節の運動器疾患: 理学療法評価 (領域毎の演習)
- 第44回 股関節の運動器疾患: 治療 (領域毎の演習)
- 第45回 股関節の運動器疾患: 症例検討 (領域毎の演習)
- 第46回 股関節の運動器疾患: まとめ (領域毎の演習)
- 第47回 膝関節の運動器疾患: 疾患の理解 (領域毎の演習)
- 第48回 膝関節の運動器疾患: 理学療法評価 (領域毎の演習)
- 第49回 膝関節の運動器疾患: 治療 (領域毎の演習)
- 第50回 膝関節の運動器疾患: 症例検討 (領域毎の演習)
- 第51回 膝関節の運動器疾患: まとめ (領域毎の演習)
- 第52回 脊椎の運動器疾患: 疾患の理解 (領域毎の演習)
- 第53回 脊椎の運動器疾患: 理学療法評価 (領域毎の演習)
- 第54回 脊椎の運動器疾患: 治療 (領域毎の演習)
- 第55回 脊椎の運動器疾患: 症例検討 (領域毎の演習)
- 第56回 脊椎の運動器疾患: まとめ (領域毎の演習)
- 第57回 まとめ 1 (領域毎の演習)
- 第58回 まとめ 2 (領域毎の演習)
- 第59回 まとめ 3 (領域毎の演習)
- 第60回 まとめ 4 (領域毎の演習)

■ 評価方法

(共通) 領域別の確認テスト及び全体の確認テスト (30%)

出席 (欠席: -4点、遅刻: -2点) 遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする。

(領域毎の演習) 課題40%, 小テスト20%, プレゼンテーション40%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

（共通）

一回の講義内で複数の領域について学習する。それぞれの領域について学生毎に担当者を決め、それぞれのグループ内での担当領域についての学習については、その学生が責任を持って解説を行えるようになる必要がある。そのため、事前学習が必須である。

担当した領域の国家試験過去問題について、各設問の正誤だけでなく、問題の解説や、こういった点が重要な点であるのか、理解の仕方・覚え方などを他者に解説出来るようになる必要がある。解説をする際に必要となる資料なども各自で用意する必要がある。

（領域毎の演習）

適宜指示を行います。

■ 教科書

書 名：（共通） PT/OT 国家試験必修ポイント 専門基礎分野基礎医学＜2015＞

著者名：医歯薬出版

出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	脳血管理学療法特別演習	担当者	(全体) 島・牧之瀬 (演習) 岩田		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3～4年	総単位数	4単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

(共通)

卒業研究 / 特別演習は、『基礎教育分野の共通』と『各卒業研究・特別演習』から構成されている。

共通部分では、理学療法教育の中で基礎となり、国家試験においても多く出題されている解剖学・生理学・運動学・人間発達学に関する総復習と知識の定着を図る内容である。この科目の履修により、卒業研究や分野別特別演習の円滑な理解を促すとともに、国家試験合格に必要な基礎知識を学ぶ。

深い理解を目的としたグループ活動を通しての学び合いを基本とする。

(領域毎の演習)

脳血管障害における理学療法を考える上で必要な基礎知識を臨床の視点から網羅する。

■ 到達目標

(共通)

- ・グループ活動の中で自身の与えられた役割を責任もって遂行する。
- ・国家試験頻出の解剖学・生理学・運動学・人間発達学の領域の問題について、他者へ説明できるレベルでの理解を目標とする。
- ・頻出の分野における国家試験過去問に関しては、最低でも8割以上の正答率となる。
- ・一つ一つの領域を単なる暗記とするような浅い記憶でなく、複数の領域を統合して臨床に活用できるような知識にする。

(領域毎の演習)

脳血管障害による理学療法において、科学的根拠に基づいた臨床推論ができることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション (共通) 国家試験の傾向と学習方法 (グループ学習の意図、進め方)
- 第2回 解剖生理学 (植物機能) 1 (共通) 循環器系の基礎と臨床の関係領域
- 第3回 解剖生理学 (植物機能) 2 (共通)
- 第4回 解剖生理学 (植物機能) 3 (共通)
- 第5回 解剖生理学 (植物機能) 4 (共通)
- 第6回 解剖生理学 (植物機能) 5 (共通)
- 第7回 解剖生理学 (植物機能) 6 (共通)
- 第8回 解剖生理学 (植物機能) 総まとめ (共通)
- 第9回 解剖生理学 (動物機能) 1 (共通) 神経系の基礎と臨床の関係領域
- 第10回 解剖生理学 (動物機能) 2 (共通)
- 第11回 解剖生理学 (動物機能) 3 (共通)
- 第12回 解剖生理学 (動物機能) 4 (共通)
- 第13回 解剖生理学 (動物機能) 5 (共通)
- 第14回 解剖生理学 (動物機能) 6 (共通)
- 第15回 解剖生理学 (動物機能) 総まとめ (共通)
- 第16回 解剖生理学 (植物・動物機能) 総まとめ (共通)
- 第17回 運動機能学 1 (共通) 運動器の基礎と臨床の関係領域
- 第18回 運動機能学 2 (共通)
- 第19回 運動機能学 3 (共通)
- 第20回 運動機能学 4 (共通)

■ 授業計画

- 第21回 運動機能学 5 (共通)
- 第22回 運動機能学 6 (共通)
- 第23回 運動機能学 7 (共通)
- 第24回 運動機能学 8 (共通)
- 第25回 運動機能学 9 (共通)
- 第26回 運動機能学総まとめ (共通)
- 第27回 人間発達学 1 (共通)
- 第28回 人間発達学 2 (共通)
- 第29回 総まとめ 全範囲のまとめ (共通)
- 第30回 総まとめ 全範囲のまとめ (共通)
- 第31回 脳解剖・脳機能：神経の構造と仕組み (領域毎の演習)
- 第32回 脳解剖・脳機能：大脳皮質の脳溝および脳回 (前頭葉, 頭頂葉, 側頭葉, 後頭葉) (領域毎の演習)
- 第33回 脳解剖・脳機能：確認テストおよびグループディスカッション① (領域毎の演習)
- 第34回 脳解剖・脳機能：上位運動ニューロン (ホムンクルス, 内包局在),
下位運動ニューロン (領域毎の演習)
- 第35回 脳解剖・脳機能：大脳基底核, 小脳 (領域毎の演習)
- 第36回 脳解剖・脳機能：確認テストおよびグループディスカッション② (領域毎の演習)
- 第37回 脳解剖・脳機能：大脳辺縁系, 視床 (領域毎の演習)
- 第38回 脳解剖・脳機能：脳幹 (脳神経, 中脳, 橋) (領域毎の演習)
- 第39回 脳解剖・脳機能：確認テストおよびグループディスカッション③ (領域毎の演習)
- 第40回 脳解剖・脳機能：脳幹 (延髄 (ワレンベルグ症候群)) (領域毎の演習)
- 第41回 脳解剖・脳機能：脊髄 (ブラウンセカール症候群) (領域毎の演習)
- 第42回 脳解剖・脳機能：確認テストおよびグループディスカッション④ (領域毎の演習)
- 第43回 脳解剖・脳機能：自律神経 (交感神経, 副交感神経)
(領域毎の演習)
- 第44回 脳解剖・脳機能：脳血管支配 (ウィリス動脈輪含む)
(領域毎の演習)
- 第45回 脳解剖・脳機能：確認テストおよびグループディスカッション⑤ (領域毎の演習)
- 第46回 各論：被殻出血患者に対する理学療法評価および治療の検討 (領域毎の演習)
- 第47回 各論：視床出血患者に対する理学療法評価および治療の検討 (領域毎の演習)
- 第48回 各論：まとめおよびグループディスカッション⑪ (領域毎の演習)
- 第49回 各論：脳幹出血患者に対する理学療法評価および治療の検討 (領域毎の演習)
- 第50回 各論：小脳出血患者に対する理学療法評価および治療の検討 (領域毎の演習)
- 第51回 各論：まとめおよびグループディスカッション⑫ (領域毎の演習)
- 第52回 各論：前頭葉皮質下出血患者に対する理学療法評価および治療の検討 (領域毎の演習)
- 第53回 各論：頭頂葉皮質下出血患者に対する理学療法評価および治療の検討 (領域毎の演習)
- 第54回 各論：まとめおよびグループディスカッション⑬ (領域毎の演習)
- 第55回 各論：側頭葉および後頭葉皮質下出血患者に対する理学療法評価
および治療の検討 (領域毎の演習)
- 第56回 各論：ラクナ梗塞患者に対する理学療法評価および治療の検討 (領域毎の演習)
- 第57回 各論：まとめおよびグループディスカッション⑭ (領域毎の演習)
- 第58回 各論：びまん性軸索損傷患者に対する理学療法評価および治療の検討 (領域毎の演習)
- 第59回 各論：前脊髄動脈梗塞患者に対する理学療法評価および治療の検討 (領域毎の演習)
- 第60回 各論：まとめおよびグループディスカッション⑮ (領域毎の演習)

■ 評価方法

(共通) 領域別の確認テスト及び全体の確認テスト (30%)

出席 (欠席: -4点、遅刻: -2点) 遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする。

(領域毎の演習) 70% (事前準備10%, 小テスト20%, ディスカッションへの参加貢献度およびレポート課題70%)

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

(共通)

一回の講義内で複数の領域について学習する。それぞれの領域について学生毎に担当者を決め、それぞれのグループ内での担当領域についての学習については、その学生が責任を持って解説を行えるようになる必要がある。そのため、事前学習が必須である。

担当した領域の国家試験過去問題について、各設問の正誤だけでなく、問題の解説や、こういった点が重要な点であるのか、理解の仕方・覚え方などを他者に解説出来るようになる必要がある。解説をする際に必要となる資料なども各自で用意する必要がある。

(領域毎の演習)

授業ごとに、当該授業で参考になりそうな本や文献などを集め、持参すること。

また、理解度を促進するために小テストを行うこともある。

授業で活用した資料をもとに必ず復習しておくこと。

■ 教科書

書 名: (共通) PT/OT 国家試験必修ポイント 専門基礎分野基礎医学<2015>

著者名: 医歯薬出版

出版社: 医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	小児理学療法特別演習	担 当 者	(全体) 島・牧之瀬 (演習) 藪中		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3～4年	総単位数	4単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

(共通)

卒業研究／特別演習は、『基礎教育分野の共通』と『各卒業研究・特別演習』から構成されている。

共通部分では、理学療法教育の中で基礎となり、国家試験においても多く出題されている解剖学・生理学・運動学・人間発達学に関する総復習と知識の定着を図る内容である。この科目の履修により、卒業研究や分野別特別演習の円滑な理解を促すとともに、国家試験合格に必要な基礎知識を学ぶ。

深い理解を目的としたグループ活動を通しての学び合いを基本とする。

(領域毎の演習)

- ・「脳性まひ児の家庭療育 原著第4版」の各章を分担してまとめ、発表する。
- ・「脳性まひ児の家庭療育 原著第4版」と「Facilitation techniques based on NDT principles」を使用して、ハンドリングの練習を行う。練習を写真に撮り、各ハンドリングに関してまとめる。

■ 到達目標

(共通)

- ・グループ活動の中で自身の与えられた役割を責任をもって遂行する。
- ・国家試験頻出の解剖学・生理学・運動学・人間発達学の領域の問題について、他者へ説明できるレベルでの理解を目標とする。
- ・頻出の分野における国家試験過去問に関しては、最低でも8割以上の正答率となる。
- ・一つ一つの領域を単なる暗記とするような浅い記憶でなく、複数の領域を統合して臨床に活用できるような知識にする。

(領域毎の演習)

- ①脳性まひ児の両親とスムーズにコミュニケーションが取れ、脳性まひ児のADLを援助するための基礎知識を獲得する。
- ②脳性まひ児を的確にハンドリングする準備として、健常者においてハンドリングによつて的確な反応を促せるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション (共通) 国家試験の傾向と学習方法 (グループ学習の意図, 進め方)
- 第2回 解剖生理学 (植物機能) 1 (共通) 循環器系の基礎と臨床の関係領域
- 第3回 解剖生理学 (植物機能) 2 (共通)
- 第4回 解剖生理学 (植物機能) 3 (共通)
- 第5回 解剖生理学 (植物機能) 4 (共通)
- 第6回 解剖生理学 (植物機能) 5 (共通)
- 第7回 解剖生理学 (植物機能) 6 (共通)
- 第8回 解剖生理学 (植物機能) 総まとめ (共通)
- 第9回 解剖生理学 (動物機能) 1 (共通) 神経系の基礎と臨床の関係領域
- 第10回 解剖生理学 (動物機能) 2 (共通)
- 第11回 解剖生理学 (動物機能) 3 (共通)
- 第12回 解剖生理学 (動物機能) 4 (共通)
- 第13回 解剖生理学 (動物機能) 5 (共通)
- 第14回 解剖生理学 (動物機能) 6 (共通)

■ 授業計画

- 第15回 解剖生理学（動物機能）総まとめ（共通）
- 第16回 解剖生理学（植物・動物機能）総まとめ（共通）
- 第17回 運動機能学 1（共通） 運動器の基礎と臨床の関係領域
- 第18回 運動機能学 2（共通）
- 第19回 運動機能学 3（共通）
- 第20回 運動機能学 4（共通）
- 第21回 運動機能学 5（共通）
- 第22回 運動機能学 6（共通）
- 第23回 運動機能学 7（共通）
- 第24回 運動機能学 8（共通）
- 第25回 運動機能学 9（共通）
- 第26回 運動機能学総まとめ（共通）
- 第27回 人間発達学 1（共通）
- 第28回 人間発達学 2（共通）
- 第29回 総まとめ 全範囲のまとめ（共通）
- 第30回 総まとめ 全範囲のまとめ（共通）
- 第31回 オリエンテーション, 第11章：ハンドリング（領域毎の演習）
- 第32回 第1章：両親と専門家間のコミュニケーション（領域毎の演習）
- 第33回 第2章：病院の予約・評価・入院に対処するための準備（領域毎の演習）
- 第34回 第3章：脳性まひの医学的側面：原因、関連する問題、管理（領域毎の演習）
- 第35回 第4章：脳性まひの診断における種々の脳画像技術の役割（領域毎の演習）
- 第36回 第5章：脳性まひのてんかん（領域毎の演習）
- 第37回 第6章：両親の問題（領域毎の演習）
- 第38回 第7章：学習と行動－心理学者の役割（領域毎の演習）
- 第39回 第8章：感情的健康（領域毎の演習）
- 第40回 第9章：早期学習における両親の貢献－触って、見て、聞いてやり取りをして、対話をはぐくむ（領域毎の演習）
- 第41回 第10章：健常児と脳性まひ児の運動の理解（領域毎の演習）
- 第42回 第12章：睡眠（領域毎の演習）
- 第43回 第13章：摂食（領域毎の演習）
- 第44回 第14章：抱っこと移動（領域毎の演習）
- 第45回 第15章：トイレトレーニング（領域毎の演習）
- 第46回 第16章：入浴（領域毎の演習）
- 第47回 第17章：更衣動作（領域毎の演習）
- 第48回 第18章：コミュニケーション（領域毎の演習）
- 第49回 第19章：手の機能と巧緻運動・活動（領域毎の演習）
- 第50回 第20章：脳性まひをもつ子どもの粗大運動発達：いま私たちが知っていることは何でしょうか？
その知識はどのように役立つのでしょうか？（領域毎の演習）
- 第51回 第21章：椅子、バギー、カーシート（領域毎の演習）
- 第52回 第22章：移動のための補助具（領域毎の演習）
- 第53回 第23章：遊び（領域毎の演習）
- 第54回 第24章：レジャーとフィットネス（領域毎の演習）
- 第55回 第25章：変形：成長と伸張の伸びによって起こる問題（領域毎の演習）
- 第56回 第26章：装具と脳性まひをもつ子ども（領域毎の演習）
- 第57回 第27章：痙縮（領域毎の演習）
- 第58回 第28章：脳性まひの補完代替医療（領域毎の演習）
- 第59回 まとめ 1（領域毎の演習）
- 第60回 まとめ 2（領域毎の演習）

■ 評価方法

(共通) 領域別の確認テスト及び全体の確認テスト (30%)

出席 (欠席: -4点、遅刻: -2点) 遅刻・欠席や不真面目な受講態度は減点対象とする。

(領域毎の演習) 出席 (40%), 課題 (60%)

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

(共通)

一回の講義内で複数の領域について学習する。それぞれの領域について学生毎に担当者を決め、それぞれのグループ内での担当領域についての学習については、その学生が責任を持って解説を行えるようになる必要がある。そのため、事前学習が必須である。

担当した領域の国家試験過去問題について、各設問の正誤だけでなく、問題の解説や、こういった点が重要な点であるのか、理解の仕方・覚え方などを他者に解説出来るようになる必要がある。解説をする際に必要となる資料なども各自で用意する必要がある。

(領域毎の演習)

全参加学生は、演習時間中にディスカッションができるように、事前に演習範囲の章またはハンドリング手技を勉強してくる。また、毎回担当の学生が、「脳性まひ児の家庭療育 原著第4版」の1章のレジメを作成し、演習開始時に参加学生に配布する。また、演習時間中に練習したハンドリングについて担当学生が資料にまとめ、次の演習の開始時に参加学生に配布する。

■ 教科書

書 名: (領域毎の演習) 脳性まひ児の家庭療育 原著第4版

著者名: Eva Bower 著, 上杉雅之監訳

出版社: 医歯薬出版株式会社

書 名: (共通) PT/OT 国家試験必修ポイント 専門基礎分野基礎医学<2015>

著者名: 医歯薬出版

出版社: 医歯薬出版

■ 参考図書

書 名: Facilitation techniques based on NDT principles

著者名: Lois Bly, Allison Whiteside.

出版社: Therapy Skill Builder

■ 留意事項

授業科目	臨床実習Ⅰ	担当者	棚 千磨・伊禮 まり子		
学 科 名	理学療法専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 国内医療・介護等施設の見学を行う。
2. 国内医療施設で1週間の臨床実習を行う。

■ 到達目標

1. 医療・介護等様々な分野の理学療法を理解する。
2. 対象者の障害について、実際の生活像と共にそれを阻害している機能的な問題の実像を、医療面接、PT 見学、観察、触知、検査・測定などを通じて理解する。また、これまでに学習した評価技術の適応にあたって、臨床適応の際の課題について整理する。

■ 授業計画

- 実習施設 1. 学生自身が見学依頼をした医療・介護等施設
2. 協力医療施設
- 実習期間 1. 2回（内訳：2施設）
2. 1週間
- 実習形態 1. 学生自身が領域の異なる2施設に見学依頼をして、所定の日当該施設の理学療法場面を見学しに行く。
2. 協力病院において、専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下、これまでに修得した検査・測定技術を駆使し、対象者様の障害像に迫る。専任教員は学生の臨床実習現場を観察し、学生の学習課題などを適切に把握し、臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。
- 実習の進め方
1. 見学中は、礼儀に十分注意を払いながら、積極的に理学療法場面の見学を行う。
2. 理学療法評価学Ⅰ、Ⅱで学んだ問診、情報収集、ROM-T、MMT、感覚検査などの基本的な測定、評価をなるべく多く体験する。また、解剖学、生理学、運動学、臨床医学等の知識を基に、一人の対象者様に対して適切な機能障害の検査測定項目を選択し、的確に実施する。実習の進め方は、臨床現場実習と専任教員のフォローを織り交ぜて実施する。

■ 評価方法

1. 【施設見学】出席、レポートで判定する。
 2. 【臨床実習】出席、実習態度、臨床実習実施記録の内容、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。
- 総点数配分は、【施設見学】20%・【臨床実習】80%とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

1. 施設見学に際しては、事前に当該施設自体の情報及び当該領域の理学療法について下調べをして臨む。見学終了後は、得られた知見をレポートにまとめ、以後の学習に活かせるようにしておく。
2. 実習前には、解剖学・運動学・生理学・評価学等の知識を再度整理し、評価に関する実技を十分練習しておくこと。実習終了後は、自己の課題を整理し次の実習に繋げる事ができるようにしておくこと。

■ 教科書

書名：PT 臨床実習ルートマップ

著者名：柳澤健

出版社：メジカルビュー社

書名：症候障害学序説 理学療法の臨床思考過程モデル

著者名：内山 靖

出版社：文光堂

■ 参考図書

■ 留意事項

臨床実習Ⅰは、実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には、臨床実習の目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	臨床実習Ⅱ	担当者	岩田 篤・柳 千磨		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設で1週間の臨床実習を行う。

■ 到達目標

臨床実習指導者の指導の下，理学療法評価プロセスの全体を経験する。具体的には，生活上の問題点を捉えた上で，理学療法評価から機能障害と能力障害との結びつきを明らかにすることが目標である。

■ 授業計画

実習施設 協力医療機関

実習期間 1 週間

実習形態 協力病院において，専任教員と臨床実習指導者の指導／監督の下，これまでに修得した検査・測定技術を駆使し，対象者様の障害像に迫る。専任教員は学生の臨床実習現場を観察し，学生の学習課題などを適切に把握し，臨床実習指導者と綿密に連絡を取りながら必要なフォローを実施する。

実習の進め方 臨床医学，理学療法治療学，日常生活活動学の知識を基に評価項目を選択し，理学療法評価学で学んだ問診，情報収集，ROM-T，MMT，感覚検査などの基本的な測定・評価を実施して機能障害の評価を行う。評価結果を解剖学，生理学，運動学，臨床医学，理学療法治療学，日常生活活動学などの知識を基に解釈を行い，機能障害と能力障害の結びつきを理解する。実習の進め方は，実習現場実習と専任教員のフォローを必要に応じて織り交ぜて実施する。

■ 評価方法

出席，実習態度，臨床実習実施記録の内容を基に，専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

臨床実習Ⅰの課題を再度見返し，健常者同士での検査・測定技術はマスターしておくこと。

また，能力障害と機能障害との関係を理解していくために，運動学および臨床運動学等の知識を整理しておくこと。

■ 教 科 書

書 名：症候障害学序説 理学療法の臨床思考過程モデル

著者名：内山 靖

出版社：文光堂

■ 参考図書

■ 留意事項

臨床実習Ⅱは，実際の臨床現場での実習となる。臨床実習実施要綱には，臨床実習の目的や注意点が記載されているので，実習前に再度読み直し，理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習Ⅰ	担当者	藪中 良彦, 他		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設または介護老人保健施設で2週間の臨床実習を行う。

■ 到達目標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム立案までのプロセスを経験する。具体的には、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラム立案が行えるようになる。

■ 授業計画

実習施設 近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院、介護老人保健施設
 実習期間 2週間
 実習形態 臨床実習指導者の監督の下に、対象者様に合わせた評価項目を選択・実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を行い、治療プログラムを立案する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。
 実習の進め方 解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評価方法

出席、実習態度、総合臨床実習症例レジメとICF/ICIDH枠組み図の内容、学内症例発表会の発表内容等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎日の経験と疑問に対する自己学習についてまとめるデイリーノートが毎日の自宅学習の課題である。また、実習期間で経験した症例についてレジメまたはレポートにまとめることも自宅学習の課題である。

■ 教 科 書

書 名：PT 臨床実習ルートマップ
 著者名：柳澤健
 出版社：メジカルビュー社

■ 参考図書

■ 留意事項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習Ⅰの目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習Ⅱ	担当者	藪中 良彦, 他		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	4 年	総単位数	8 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設で8週間の臨床実習を行うと共に、途中に1週間の学内演習を行う。

■ 到達目標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム立案、プログラム実施のまでの一連の理学療法プロセスを経験する。具体的には、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定、具体的治療プログラム立案、適切なプログラム実施が行えるようになる。

■ 授業計画

実習施設 近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院
 実習期間 8週間＋1週間の学内演習
 実習形態 臨床実習指導者の監督の下に、対象者様に合わせた評価項目を選択・実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を設定し、治療プログラム立案し、治療プログラム実施する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。また、1週間の学内演習では、4週間の実習のまとめと残り4週間の実習のための準備を専任教員の指導の下実施する。
 実習の進め方 解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案し実施する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評価方法

出席、実習態度、総合臨床実習症例レジメとICF/ICIDH枠組み図の内容、学内症例発表会の発表内容等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎日の経験と疑問に対する自己学習についてまとめるデイリーノートが毎日の自宅学習の課題である。また、実習期間で経験した症例についてレジメまたはレポートにまとめることも自宅学習の課題である。

■ 教 科 書

書 名：PT 臨床実習ルートマップ
 著者名：柳澤健
 出版社：メジカルビュー社

■ 参考図書

■ 留意事項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習Ⅱの目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	総合臨床実習Ⅲ	担当者	藪中 良彦, 他		
学 科 名	理学療法学専攻	学 年	4 年	総単位数	8 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

国内医療施設で8週間の臨床実習を行うと共に、途中に1週間の学内演習を行う。

■ 到達目標

臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラム実施のまでの一連の理学療法プロセスを経験する。具体的には、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定、具体的治療プログラム立案、適切なプログラム実施、治療効果判定に基づく治療プログラムの変更が行えるようになる。

■ 授業計画

実習施設 近畿圏を中心とした全国の一般病院、リハビリテーション病院
 実習期間 8週間＋1週間の学内演習
 実習形態 臨床実習指導者の監督の下に、対象者様に合わせた評価項目を選択・実施し、統合と解釈を行い、問題点を抽出し、目標設定を設定し、治療プログラム立案し、治療プログラム実施する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。専任教員訪問時には、学生自身の問題解決のためのディスカッション時間を設ける。また、1週間の学内演習では、4週間の実習のまとめと残り4週間の実習のための準備を専任教員の指導の下実施する。
 実習の進め方 解剖学、生理学、運動学、臨床医学、理学療法評価学、理学療法治療学、日常生活活動学、地域理学療法学等の知識を駆使して、評価を行い、ICF（又はICIDH）の枠組みの中で統合と解釈を行い、参加、個人因子、環境因子を考慮して問題点を抽出し、目標設定を行い、具体的治療プログラムを立案し実施する。実習の進め方は、実習施設の実情に合わせ、専任教員と臨床実習指導者で計画する。

■ 評価方法

出席、実習態度、総合臨床実習症例レジメとICF/ICIDH枠組み図の内容、学内症例発表会の発表内容等を基に、専任教員と臨床実習指導者との協議で総合的に判定する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

■ 教 科 書

書 名：PT 臨床実習ルートマップ
 著者名：柳澤健
 出版社：メジカルビュー社

■ 参考図書

■ 留意事項

総合臨床実習実施要綱には、総合臨床実習Ⅲの目的や注意点が記載されているので、実習直前に再度読み直し、理解しておくこと。

授業科目	作業療法概論	担当者	平尾 一幸		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーションにおいて、作業療法は対象者（児）の心身機能の回復を目指すだけでなく、生活機能の改善・向上や活動性の発達・拡大を通して、社会参加の可能性を引き出す働きかけである。作業療法の基礎となる概念や歴史的変遷と臨床の実践について学習する。

■ 到達目標

- 1) 作業療法士の活動内容について知る
- 2) 作業療法の歴史と理論的背景を理解する
- 3) 身体障害、精神障がい、発達障害、老年期障害の各領域における作業療法の実際について学ぶ

■ 授業計画

- 第1回 作業療法士の活動内容、職域の紹介
- 第2回 作業療法とは？日本作業療法士協会の定義、関連法規
- 第3回 作業療法の歴史的変遷①
- 第4回 作業療法の歴史的変遷②
- 第5回 作業療法の対象領域
- 第6回 国際障害分類（ICF）、チームアプローチ、科学的根拠に基づく実践（EBM）の概念
- 第7回 作業療法の過程（評価～治療。支援計画～作業療法プログラムの実施）
- 第8回 作業療法の実際（身体障害領域）
- 第9回 作業療法の実際（精神障害領域）
- 第10回 作業療法の実際（発達障害領域）
- 第11回 作業療法の実際（老年期障害領域）
- 第12回 作業療法の実際（地域リハビリテーション領域）
- 第13回 作業療法の研究
- 第14回 作業療法の管理運営
- 第15回 作業療法の今後の課題

■ 評価方法

授業記録（20%）、小テスト（20%）、定期試験（60%）を総合的に判定する評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業ノートの整理、小テストの事前学習をしっかりと行うこと

■ 教 科 書

標準作業療法学・専門分野「作業療法概論」，医学書院

■ 参考図書

作業療法学全書・改訂版「作業療法評価学」，協同医書出版社

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	基礎作業療法学Ⅰ	担当者	吉田 文		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業の分類や作業の特性など作業の基本を実際に作業を体験しながら学ぶ。体験をもとにグループでディスカッションしながら人の生活における作業活動の意味や、作業療法でどのように作業を用いるのか等をレポートにまとめ、発表する。

■ 到達目標

1. 作業の分類ができる
2. 作業の特性について説明できる

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 作業の意味、作業の分類
- 第3回 作業は人の生活をどのように構成しているか、自分の生活から考える
- 第4回 作業特性、作業過程
- 第5回 作業活動体験と振り返り、グループディスカッション①
- 第6回 作業活動体験と作業分析（特性、過程、環境など） グループディスカッション①
- 第7回 作業活動体験と作業分析（特性、過程、環境など） 2グループで情報交換①
- 第8回 作業活動体験と振り返り、グループディスカッション②
- 第9回 作業活動体験と作業分析（特性、過程、環境など） グループディスカッション②
- 第10回 作業活動体験と作業分析（特性、過程、環境など） 2グループで情報交換②
- 第11回 作業分析発表準備
- 第12回 作業分析発表準備
- 第13回 作業分析発表①
- 第14回 作業分析発表②
- 第15回 授業の振り返り

■ 評価方法

出席点20%、提出物30%、発表20%、最終レポート30%

出席を基本とする授業のため遅刻・早退-2点、欠席-5点の減点とする。但し事前に連絡がありやむを得ない遅刻・早退・欠席と認められた場合は考慮することがある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

* 毎回、提示する課題（復習と予習、A 4 で1～2枚程度）を次回授業時または定められた期限内に提出すること

■ 教 科 書

書 名：つくる・あそぶを治療にいかす 作業活動実習マニュアル

著者名：古川 宏

出版社：医歯薬出版

書 名：標準作業療法学専門分野 基礎作業学

著者名：小林夏子、福田恵美子 編

出版社：医学書院

書 名：ICF 国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－

著者名：世界保健機関（WHO）

出版社：中央法規

■ 参考図書

書 名：「作業」って何だろう ― 作業科学入門

著者名：吉川ひろみ

出版社：医歯薬出版

書 名：だから作業療法が大好きです

著者名：葉山 明

出版社：三輪書店

■ 留意事項

授業科目	基礎作業療法学Ⅱ	担 当 者	平尾 一幸		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

近年、「根拠のある医療（EBM）」の検証が求められている。作業療法は、対象者（児）の心身機能の回復を目指すだけでなく、生活機能の改善・向上や活動性の発達・拡大を通して、社会参加の可能性を引き出す働きかけであることから、「根拠のある実践（EBP）」が重視される。作業療法のクリニカルリーズニングに必要な、基礎的な理論やモデル、作業分析の方法について学習する。

■ 到達目標

- 1) EBM,EBP,作業療法のクリニカルリーズニングについて知る
- 2) 作業療法に应用される理論的観点、モデルを理解する
- 3) 「作業」を活用するために必要な作業（活動）分析について学ぶ

■ 授 業 計 画

- 第1回 「科学的にとらえる」とは？「構造」と「機能」の関係
- 第2回 ICF、EBM、EBP、作業療法におけるクリニカルリーズニング
- 第3回 作業（活動）分析
- 第4回 作業（活動）分析 身体運動技能の観点① 身体機能の「構造」と「機能」
- 第5回 作業（活動）分析 身体運動技能の観点② 解剖学、生理学、運動学の観点
- 第6回 作業（活動）分析 認知技能の観点① 「認知」とは？
- 第7回 作業（活動）分析 認知技能の観点② 「脳機能」と「行動」
- 第8回 作業（活動）分析 心理社会的観点① 「心理」とは？
- 第9回 作業（活動）分析 心理社会的観点② 「学習」と「発達」
- 第10回 作業療法に役立つ理論 ① 生体力学的観点、神経発達学的観点
- 第11回 作業療法に役立つ理論 ② 発達の観点、感覚統合的観点
- 第12回 作業療法に役立つ理論 ③ 精神力動的観点、行動療法的観点
- 第13回 作業療法に役立つ理論 ④ 認知運動療法的観点、認知行動療法的観点
- 第14回 作業療法に役立つ理論 ⑤ 作業行動理論、人間作業モデル
- 第15回 作業療法の研究

■ 評価方法

授業ノート（20%）、小テスト（20%）、定期試験（60%）を総合的に判定する評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業ノートや資料の整理、小テストの事前学習をしっかりと行うこと

■ 教 科 書

標準作業療法学・専門分野「基礎作業学」、医学書院

■ 参 考 図 書

作業療法学全書・改訂版「作業療法評価学」、協同医書出版社
 その他は授業の中で紹介する

■ 留 意 事 項

理論的な講義が多くなるので、わからない点はその都度質問するなどし、理解を深めてほしい

授業科目	基礎作業療法学Ⅲ	担当者	吉田 文		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

対象者へ作業活動を提供するためのプロセスと効果について学習する。またその集団の中で交流技能の評価について学び、学生自らの交流技能について振り返る。講義とグループ演習によって学習をすすめる。

■ 到達目標

1. 対象者へ効果的に作業活動を提供するための計画を立てることができる
2. 集団作業活動の運営（補助）ができる
3. 集団における交流技能について述べるができる
4. 集団における交流技能の評価ができる
5. 作業療法場面における学生自身の交流技能について認識し、課題について対策を挙げることができる

■ 授 業 計 画

- | | | |
|------|-------------------------|-----------------------|
| 第1回 | オリエンテーション、スケジュールの説明など | |
| 第2回 | 作業活動を提供する対象者・施設等についての説明 | |
| 第3回 | 対象者の特徴を調べる
対人交流技能とは | |
| 第4回 | 作業活動の目的を考える | 集団関係技能とは |
| 第5回 | 対象者に提供する作業活動について調べる | *対象者および施設見学 |
| 第6回 | 対象者に提供する作業活動について調べる | *対象者および施設見学 |
| 第7回 | 対象者に提供する作業活動について調べる | 見学記録等のまとめ *対象者および施設見学 |
| 第8回 | 対象者に提供する作業活動について調べる | 見学記録等のまとめ *対象者および施設見学 |
| 第9回 | 対象者に提供する作業活動について調べる | 見学記録等のまとめ *対象者および施設見学 |
| 第10回 | 対象者に提供する作業活動について調べる | 見学記録等のまとめ *対象者および施設見学 |
| 第11回 | 見学記録等のまとめと作業活動計画の発表準備 | |
| 第12回 | 見学記録等のまとめと作業活動計画の発表準備 | |
| 第13回 | 見学記録等のまとめと作業活動計画の発表準備 | |
| 第14回 | 見学記録等のまとめと作業活動計画の発表準備 | |
| 第15回 | 授業の振り返り | |

■ 評価方法

出席点20%、提出物30%、発表20%、最終レポート30%
出席を基本とする授業のため遅刻・早退-2点、欠席-5点の減点とする。但し事前に連絡がありやむを得ない遅刻・早退・欠席と認められた場合は考慮することがある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

*毎回、提示する課題（復習と予習、A4で1～2枚程度）を次回授業時または定められた期限内に提出すること

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学専門分野 基礎作業学

著者名：小林夏子、福田恵美子 編

出版社：医学書院

書 名：レクリエーション—社会参加を促す治療的レクリエーション

著者名：寺山久美子監修

出版社：三輪書店

■ 参考図書

書 名：完全図解 介護予防リハビリ体操大全集

著者名：太田仁史

出版社：講談社

書 名：アクティビティと作業療法

著者名：アクティビティ研究会

出版社：三輪書店

書 名：高齢者のためのかんたんレクリエーション

著者名：三瓶あずさ

出版社：日本工芸社

書 名：転倒予防のための棒体操

著者名：横井賀津志

出版社：三輪書店

■ 留意事項

授業科目	基礎作業療法学実習	担当者	吉田 文		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

地域の施設を見学し、そこを利用する障害がある方と共に作業活動を計画し、実行する。グループでの実習を通して、地域の特徴、地域施設の目的や特徴、利用者の方々の生活、障がいの特徴、目的に沿って適切に作業活動を提供することを学習する。

■ 到達目標

1. 施設がある地域について分析できる
2. 施設の目的や特徴について述べることができる
3. 施設利用者の障がいと生活への影響、施設が果たす役割について述べるができる
4. 目的に合わせて作業活動を計画することができる
5. 施設利用者の方に適切に作業活動を提供できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション スケジュール説明
- 第2回 地域分析とは？ 地域について調べてみよう！
- 第3回 施設の特徴について 障がい者総合支援法とは？
- 第4回 施設利用者の障害特性と生活について
- 第5回 施設見学と施設利用者へのインタビュー準備
- 第6回 施設見学
- 第7回 施設見学、施設利用者へのインタビューのまとめ
- 第8回 施設見学、施設利用者へのインタビューのまとめ
- 第9回 作業活動計画
- 第10回 作業活動計画
- 第11回 施設での作業活動提供、発表準備
- 第12回 施設での作業活動提供、発表準備
- 第13回 施設での作業活動提供の実施報告作成、発表準備
- 第14回 施設での作業活動提供の実施報告発表
- 第15回 授業の振り返り

■ 評価方法

出席点20%、提出物30%、発表20%、最終レポート30%
出席を基本とする授業のため遅刻・早退－2点、欠席－5点の減点とする。但し事前に連絡がありやむを得ない遅刻・早退・欠席と認められた場合は考慮することがある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

*毎回、提示する課題（復習と予習、A 4 で1～2枚程度）を次回授業時または定められた期限内に提出すること

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学専門分野 基礎作業学
著者名：小林夏子、福田恵美子 編
出版社：医学書院
.....
書 名：ICF 国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－
著者名：世界保健機関（WHO）
出版社：中央法規

■ 参考図書

書 名：レク活動の考え方と広がり方－作業療法士に学べ！「今」を演出するテクニック

著者名：岡野純毅

出版社：雲母書房

書 名：ひとと作業・作業活動—にとにとって作業とは？どのように使うのか？第2版

著者名：山根 寛

出版社：三輪書店

書 名：ひとと集団・場—一人の集まりと場を利用する 第2版

著者名：山根 寛

出版社：三輪書店

書 名：精神障害と作業療法—治る・治すから生きるへ 第3版

著者名：山根 寛

出版社：三輪書店

■ 留意事項

授業科目	作業療法研究法	担当者	井口 知也		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法の発展を支えるのは研究であることを理解し、研究に必要な基礎知識を学ぶ。また、演習を通じて、卒業論文実施計画書を作成する技術を身につける。

■ 到達目標

- 1) 研究疑問を立て、研究を進める方法を理解する
- 2) 研究の類型やデザインを理解する
- 3) 研究計画の具体的な手順を学び、実践することができる

■ 授 業 計 画

- 第1回 作業療法研究法の概論
- 第2回 研究とは何をするのか
- 第3回 研究の類型と論文構成
- 第4回 研究に関わる基礎知識
- 第5回 研究論文の発表と手続き
- 第6回 実際の作業療法研究事例について
- 第7回 研究疑問の立て方と解決法
- 第8回 文献検索（演習）
- 第9回 文献検索（演習）
- 第10回 研究計画の報告①
- 第11回 研究計画の報告②
- 第12回 研究計画書の作成（演習）
- 第13回 研究計画書の作成（演習）
- 第14回 研究計画書の作成（演習）
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する

レポートおよび発表 40%，定期試験 60%するが、いずれも60%以上ないと合格としない。

なお、欠席、遅刻早退は減点対象（無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義ごとにレポート課題を設定するので、次回の講義開始までに提出する。また、予習として教科書を読んてくること。予習範囲は講義の最後にアナウンスする。

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学 作業療法研究法 第2版
 著者名：山田 孝（編集）
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	作業療法評価学Ⅰ（概論）	担当者	清水 大輔		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法過程において、対象者・児の評価は重要である。心身の構造・機能のみでなく、活動や（社会）参加の制約についても理解する。また、個人因子のみでなく生活全般を取り巻く環境についても把握しておく必要がある。この講義では、作業療法の基礎となる評価について学び、自らの知識・技術を高める。

■ 到達目標

- 1) 作業療法の評価過程を理解する
- 2) 評価方法について知識を整理し、技術を身につける

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
評価の意義
- 第2回 評価の流れ・評価する時期
- 第3回 評価項目 ICF に基づいた視点
- 第4回 面接法
- 第5回 面接法演習
- 第6回 観察法
- 第7回 観察法演習
- 第8回 バイタルサインの解説
バイタルサインの測定方法の演習
- 第9回 バイタルサインの測定方法の演習
- 第10回 バイタルサインの測定方法の実技テスト
- 第11回 形態計測（四肢長）
- 第12回 形態計測（周径）
- 第13回 関節可動域測定（上肢）
- 第14回 関節可動域測定（上肢）
- 第15回 関節可動域測定実技テスト

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する
 レポート および実技試験を40%、定期試験を60%で評価する。
 なお、欠席、遅刻早退は減点対象（一回に付き、事前届出あり：－2点、事前届出なし：－10点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業ごとにレポート課題や演習の課題を提出すること。また、授業終了時に予告された教科書のページを事前に読んでおくこと。

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学 作業療法評価学
 著者名：編集：岩崎テル子 他
 出版社：医学書院

■ 参 考 図 書

書 名：誰でもわかる動作分析
 著者名：小島正義
 出版社：南江堂、2011

■ 留 意 事 項

講義が実技演習の時間は、動きやすい服装で参加すること。

授業科目	作業療法評価学Ⅱ（測定と評価）	担当者	清水 大輔		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法評価場面で用いる各種検査・測定にはどのようなものがあるかを知り、その方法を理解する。

■ 到達目標

1. 作業療法場面で用いる検査・測定を知る
2. 作業療法場面で用いる検査・測定を正しい方法で行う
3. 作業療法場面で用いる検査・測定を正確に実施する（オリエンテーション含む）

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 関節の動きと各種測定（下肢）
関節の動きと各種測定（下肢）
- 第3回 関節の動きと各種測定（体幹）
- 第4回 関節の動きと各種測定（手指）
- 第5回 ROM 測定実技試験
- 第6回 ROM 測定実技試験
- 第7回 筋力測定の方法（上肢）
- 第8回 筋力測定の方法（上肢）
- 第9回 筋力測定の方法（下肢・体幹）
- 第10回 筋力測定の方法（下肢体幹）
- 第11回 筋力測定 実技試験
- 第12回 筋力測定 実技試験
- 第13回 反射のみかた
- 第14回 反射のみかた、筋緊張のみかた
- 第15回 筋の随意運動のみかた
- 第16回 筋の随意運動のみかた
- 第17回 筋の随意運動のみかた
- 第18回 筋の随意運動のみか
- 第19回 筋の随意運動のみかた試験
- 第20回 高次脳機能障害のみかた
- 第21回 高次脳機能障害のみかた
- 第22回 高次脳機能障害のみかた
- 第23回 バランスの見方
- 第24回 バランスの見方
- 第25回 12脳神経のみかた
- 第26回 12脳神経のみかた
- 第27回 ADL 評価について
- 第28回 ADL 評価について
- 第29回 感覚障害のみかた
- 第30回 感覚障害のみかた

■ 評価方法

筆記試験・実技試験で評価する。配点は筆記試験70%、実技試験30%とする。いずれの試験も60%以上で合格とする。筆記試験・実技試験共に再試験は実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は-10点、事前連絡のある遅刻・欠席は-5点とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

実技演習が中心となるため、学生同士で毎授業後に復習しておくこと。また、筋力検査法は教材にDVDが付いているため、授業までに該当箇所を3回以上視聴し、検査方法（測定肢位や抵抗を加える位置等）を事前にイメージしておくこと。

また授業ごとのレポート課題を提出すること。

■ 教科書

書 名：標準作業療法学 作業療法評価学 第2版

著者名：岩崎テル子他

出版社：医学書院

書 名：ベッドサイドの神経の診かた 改定17版

著者名：田崎義昭他

出版社：南山堂

書 名：新・徒手筋力検査法 第8版

著者名：津山直一他

出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

反射検査では、打鍵器を使用するため、授業までに各自で購入し準備しておくこと。解剖学・生理学・運動学等の基礎知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。授業時間内ですべてを網羅することは困難である。そのため、各自で授業の予習・復習を行い能動的に取り組むこと。実技練習中は、動きやすい服装・靴で参加すること。

授業科目	作業療法評価学Ⅲ（評価プロセス）	担当者	辻 郁・吉田 文・井口知也 清水大輔・橋本卓也		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

提示された事例等の情報を十分読み込み理解して整理することで、作業療法評価の方法と考え方を学ぶものである。

■ 到達目標

提示された事例の

1. 記述内容が理解でき専門用語が系統的に知識として蓄積できる。
2. 情報を生活機能（あるいは障害）の階層に分類・整理できる。
3. 情報の収集法（面接・観察・検査測定等）と、その実施方法が分かる。
4. 全体像が分かる（情報を統合し解釈できる）
5. 作業療法ニーズが抽出でき、その理由を説明できる。
6. 作業療法計画（長期・短期目標、具体的なプログラム、判定指標等）が立案できる。

■ 授 業 計 画

第1回	オリエンテーション	障害の階層的理解及び作業療法評価（作業療法の復習）	辻担当
第2回	見学実習事例分析 1	演習により学習とレポート作成（検査・測定法の国試問題）	辻担当
第3回	見学実習事例分析 2	演習により学習とレポート作成（検査・測定法の国試問題）	辻担当
第4回	見学実習事例分析 3	演習により学習とレポート作成（検査・測定法の国試問題）	辻担当
第5回	精神障害者の分析及び統合と解釈 1	（統合失調症の障害特徴、事例提示、用語調べ）	吉田担当
第6回	精神障害者の分析及び統合と解釈 1	（統合失調症の障害特徴、事例提示、用語調べ）	吉田担当
第7回	精神障害者の分析及び統合と解釈 3	（精神障害事例の情報分析：ICF） 3	吉田担当
第8回	精神障害者の分析及び統合と解釈 3	（精神障害事例の情報分析：ICF） 3	吉田担当
第9回	精神障害者の分析及び統合と解釈	（事例における評価・治療への ICF の利用） 5	吉田先生
第10回	精神障害者の分析及び統合と解釈	（事例における評価・治療への ICF の利用） 5	吉田先生
第11回	中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈 1	（作業療法評価とは？人体の構造と機能）	井口担当
第12回	中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈 2		井口担当
第13回	中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈 3		井口担当
第14回	中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈 4		井口担当
第15回	中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈 5		井口担当
第16回	中枢身体障害事例の分析及び統合と解釈 6		井口担当
第17回	整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈 1	（骨折の治癒過程それに伴って起こる機能障害、活動制限や参加制約について）	清水担当
第18回	整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈 2	（事例検討）	清水担当
第19回	整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈 3	（事例検討）	清水担当
第20回	整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈 4	（事例検討）	清水担当
第21回	整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈 5	（事例検討）	清水担当
第22回	整形外科系機能障害事例の分析及び統合と解釈 6	（事例検討）	清水担当
第23回	発達障害事例の分析及び統合と解釈 1	（運動機能障害をもつ子どもを中心に） －評価の視点と過程－	橋本担当
第24回	発達障害事例の分析及び統合と解釈 2	（運動機能障害をもつ子どもを中心に） －評価の視点と過程－	橋本担当
第25回	発達障害事例の分析及び統合と解釈 3	（脳性マヒをもつ子どもの異常運動パターンの発達過程について）	橋本担当
第26回	発達障害事例の分析及び統合と解釈 4	（事例検討、原始反射の国試問題含む）	橋本担当
第27回	発達障害事例の分析及び統合と解釈 5	（いわゆる自閉症、アスペルガー症候群、ADHD、学習障害等の発達障害児・者）障害特徴と評価の視点）	橋本担当
第28回	発達障害事例の分析及び統合と解釈 6	（感覚統合アプローチ含む）	橋本担当
第29回	評価プロセスのまとめ 1		辻担当
第30回	評価プロセスのまとめ 2		辻担当

■ 評価方法

各領域科目のレポートの総合点（平均）で評価する。欠席・遅刻・早退は減点対象とする。（事前届出なし－10点、届出あり－5点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各領域の授業について予習を行っておくこと（指定教科書、その他、授業に関する他の参考書等を読み込んでおくこと）次回の授業につながる内容に関しては、その日習った内容について復習しておくこと。指定されたレポートについては必ず期日までに提出すること。また、小テストの実施については必ず指定された範囲を予習して臨むこと。

■ 教科書

書 名：標準作業療法学（専門分野）作業療法評価学
著者名：岩崎テル子 他（編集）
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

他者に説明できるまで、調べて熟考すること。分からないままにしないこと。

事例については、

- ①事例を読み込み用語を丁寧に調べる事、
- ②事例を読み込み全体像を把握する、
- ③事例の全体像を ICF の相互作用図で示し、文章化する。

授業科目	身体障害治療学Ⅰ	担当者	清水 大輔・熊野 宏治		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

身体障害に対する作業療法における基本的知識を学ぶ。疾患に共通して用いられる手技を実技を交えて実施する。また、治療原理や作業療法の実施に必要な考え方を疾患ごとの特徴を踏まえ、事例を交えて学ぶ。

■ 到達目標

1. 作業療法に必要な推論を理解できる。
2. 作業療法の治療原理を理解し、実践できる技術を習得する。
3. 各疾患ごとの治療の考え方が分かる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 身体機能作業療法の作業療法原理
- 第2回 身体機能作業療法の作業療法原理
- 第3回 様々な治療手技
- 第4回 様々な治療手技
- 第5回 様々な治療手技
- 第6回 様々な治療手技
- 第7回 身体機能作業療法学の基礎
- 第8回 身体機能作業療法学の基礎
- 第9回 脊髄損傷の作業療法
- 第10回 脊髄損傷の作業療法
- 第11回 脊髄損傷の作業療法
- 第12回 脊髄損傷の作業療法
- 第13回 切断の作業療法
- 第14回 熱傷・呼吸器疾患・心疾患・糖尿病の作業療法
- 第15回 熱傷・呼吸器疾患・心疾患・糖尿病の作業療法

■ 評価方法

筆記試験・とレポート・報告で評価する。配点は筆記試験70%、レポート・報告30%とする。いずれの試験も60%以上で合格とする。筆記試験は再試験を実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。また、授業時間内ですべてを網羅することは困難であるため、授業の予習・復習を行い能動的に取り組むこと。授業時のレポート課題は毎回提出すること。また、授業終了時に、次回の講義内容を知らせるため、事前に該当ページを読んでおくこと。小テストを予告された際には、小テストの範囲を復習しておくこと。

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学-専門分野 身体機能作業療法学
 著者名：編集：岩崎テル子他
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：標準作業療法学 - 専門分野 作業療法評価学

著者名：編集：岩崎テル子他

出版社：医学書院

書 名：ベッドサイドの神経の診かた

著者名：田崎義昭

出版社：南山堂

書 名：中枢神経疾患に対する作業療法 具体的介入論から ADL・福祉用具・住環境への展開

著者名：編集：山本伸一

出版社：三輪書店

書 名：動画で学ぶ脊髄損傷のリハビリテーション

著者名：編集：田中宏太佳 他

出版社：医学書院

■ 留意事項

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。
また、授業時間内ですべてを網羅することは困難であるため授業の予習・復習を行い能動的に取り組むこと。

授業科目	身体障害治療学Ⅱ	担当者	大友健治・島田康雄・弦牧美歩		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

身体障害に対する作業療法における基本的知識を学ぶ。疾患に共通して用いられる手技を実技を交えて実施する。また、治療原理や作業療法の実施に必要な考え方を疾患ごとの特徴を踏まえ、事例を交えて学ぶ。

■ 到達目標

1. 作業療法に必要な推論を理解できる。
2. 作業療法の治療原理を理解し、実践できる技術を習得する。
3. 各疾患ごとの治療の考え方が分かる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 慢性関節リウマチの作業療法
- 第2回 慢性関節リウマチの作業療法
- 第3回 慢性関節リウマチの作業療法
- 第4回 慢性関節リウマチの作業療法
- 第5回 末梢神経系の作業療法
- 第6回 末梢神経系の作業療法
- 第7回 末梢神経系の作業療法
- 第8回 末梢神経系の作業療法
- 第9回 脳血管障害の作業療法
- 第10回 脳血管障害の作業療法
- 第11回 脳血管障害の作業療法
- 第12回 脳血管障害の作業療法
- 第13回 脳血管障害の作業療法
- 第14回 脳血管障害の作業療法
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験・実技試験で評価する。配点は筆記試験70%、実技試験30%とする。いずれの試験も60%以上で合格とする。筆記試験・実技試験共に再試験は実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。また、授業時間内ですべてを網羅することは困難であるため、授業の予習・復習を行い能動的に取り組むこと。授業時のレポート課題は毎回提出すること。また、授業終了時に、次回の講義内容を知らせるため、事前に該当ページを読んでおくこと。小テストを予告された際には、小テストの範囲を復習しておくこと。

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学 ― 専門分野 身体機能作業療法学
 著者名：編集：岩崎テル子他
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：身体障害作業療法学（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト 4）

著者名：長崎 重信

出版社：メジカルビュー社

書 名：高次脳機能障害作業療法学（作業療法学ゴールド・マスター・テキスト）

著者名：長崎 重信、鈴木 孝治

出版社：メジカルビュー社

書 名：標準作業療法学 高次脳機能作業療法学（標準作業療法学 専門分野）

著者名：能登真一

出版社：医学書院

書 名：作業療法士のためのハンドセラピー入門（第2版）

著者名：中田 眞由美、大山 峰生

出版社：三輪書店

■ 留意事項

授業科目	身体障害治療学Ⅲ	担当者	清水 大輔・熊野 宏治		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

身体障害に対する作業療法における基本的知識を学ぶ。疾患に共通して用いられる手技を実技を交えて実施する。また、治療原理や作業療法の実施に必要な考え方を疾患ごとの特徴を踏まえ、事例を交えて学ぶ。

■ 到達目標

1. 作業療法に必要な推論を理解できる。
2. 作業療法の治療原理を理解し、実践できる技術を習得する。
3. 各疾患ごとの治療の考え方が分かる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 骨疾患の作業療法
- 第2回 骨疾患の作業療法
- 第3回 骨疾患の作業療法
- 第4回 骨疾患の作業療法
- 第5回 神経変性疾患
- 第6回 神経変性疾患
- 第7回 神経・筋疾患の作業療法
- 第8回 神経・筋疾患の作業療法
- 第9回 ターミナルケアの作業療法
- 第10回 作業療法実践の枠組み
- 第11回 作業療法実践の枠組み
- 第12回 作業療法実践の枠組み
- 第13回 作業療法実践の枠組み
- 第14回 作業療法実践の枠組み
- 第15回 作業療法実践の枠組み

■ 評価方法

筆記試験・レポート、報告で評価する。配点は筆記試験70%、レポート・報告を30%とする。いずれの試験も60%以上で合格とする。筆記試験・実技試験共に再試験は実施する。遅刻・欠席は減点扱いとする。無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。また、授業時間内ですべてを網羅することは困難であるため、授業の予習・復習を行い能動的に取り組むこと。授業時のレポート課題は毎回提出すること。また、授業終了時に、次回の講義内容を知らせるため、事前に該当ページを読んでおくこと。小テストを予告された際には、小テストの範囲を復習しておくこと。

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学 ― 専門分野 身体機能作業療法学
 著者名：編集：岩崎テル子他
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：身体障害作業療法学（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト 4）

著者名：長崎 重信

出版社：メジカルビュー社

書 名：高次脳機能障害作業療法学（作業療法学ゴールド・マスター・テキスト）

著者名：長崎 重信、鈴木 孝治

出版社：メジカルビュー社

書 名：標準作業療法学 高次脳機能作業療法学（標準作業療法学 専門分野）

著者名：能登真一

出版社：医学書院

書 名：作業療法士のためのハンドセラピー入門（第2版）

著者名：中田 眞由美、大山 峰生

出版社：三輪書店

■ 留意事項

解剖学・生理学・運動学等の基礎知識や各疾患の知識が必須であるため、事前に知識を整理しておくこと。
また、授業時間内ですべてを網羅することは困難であるため授業の予習・復習を行い能動的に取り組むこと。

授業科目	精神障害治療学Ⅰ	担当者	足立 一		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

教科書を用いた講義と演習。
モデルケースを使用した演習。
作業療法実践者からの報告。

■ 到達目標

精神障害者に対する作業療法評価・治療に必要な基本的視点と方法を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
精神医学の復習
- 第2回 疾患別作業療法 統合失調症①
- 第3回 疾患別作業療法 統合失調症②
- 第4回 疾患別作業療法 統合失調症③
- 第5回 疾患別作業療法 気分障害①
- 第6回 疾患別作業療法 気分障害②
- 第7回 疾患別作業療法 神経症性障害①
- 第8回 疾患別作業療法 摂食障害
- 第9回 疾患別作業療法 人格障害
- 第10回 疾患別作業療法 精神作用物質使用による精神および行動の障害
- 第11回 疾患別作業療法 器質性精神障害
- 第12回 疾患別作業療法 てんかん
- 第13回 疾患別作業療法 発達・知的障害
- 第14回 疾患別作業療法 その他
- 第15回 作業療法実践報告

■ 評価方法

計4回の小テスト(40%)と定期試験(60%)の結果で総合的に評価する。
※遅刻・欠席、授業態度によって減点する場合もある。

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

定期的に小テストを行うため、毎回授業で学習したことはしっかり復習すること。
定期的なレポート課題について授業時間外で作成すること。

■ 教 科 書

書 名：作業療法学全書改訂第3版第5巻作業治療学2精神障害
著者名：社団法人日本作業療法士協会監修 富岡詔子・小林正義編集
出版社：協同医書出版社

書 名：作業療法学ゴールド・マスターテキスト6精神障害作業療法学
著者名：長崎重信監修 山口芳文編集
出版社：株式会社メジカルビュー社

■ 参考図書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 精神医学
著者名：奈良勲 鎌倉矩子 監修
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	精神障害治療学Ⅱ	担当者	足立 一		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

教科書を用いた講義と演習。
モデルケースを使用した演習。
実践者からの報告。

■ 到達目標

精神障害者に対する作業療法評価・治療が実践できる。

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
精神医学の復習
精神障害治療学Ⅰの復習
- 第2回 精神医療と作業療法の歴史・現状
- 第3回 精神障害者の捉え方・障害構造論
- 第4回 精神障害リハビリテーション治療理論①（精神分析学）
- 第5回 精神障害リハビリテーション治療理論②（認知行動療法）
- 第6回 精神障害リハビリテーション治療理論③（集団）
- 第7回 精神障害作業療法評価①（面接・観察）
- 第8回 精神障害作業療法評価②（検査測定）
- 第9回 精神障害作業療法の実際①
- 第10回 精神障害作業療法の実際②
- 第11回 精神障害作業療法の実際③
- 第12回 精神障害作業療法の治療計画①
- 第13回 精神障害作業療法の治療計画②
- 第14回 精神障害作業療法の治療計画③
- 第15回 精神障害作業療法の治療計画④

■ 評価方法

小テスト（20％）、レポート（30％）、定期試験（50％）の結果で総合的に評価する。
※遅刻・欠席、授業態度によって減点する場合もある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

定期的に小テストを行うため、毎回授業で学習したことはしっかり復習すること。
定期的なレポート課題について授業時間外で作成すること。

■ 教 科 書

書 名：作業療法学全書改訂第3版第5巻作業治療学2 精神障害
著者名：社団法人日本作業療法士協会監修 富岡詔子・小林正義編集
出版社：協同医書出版社

書 名：作業療法学ゴールド・マスターテキスト6 精神障害作業療法学
著者名：長崎重信監修 山口芳文編集
出版社：株式会社メジカルビュー社

■ 参考図書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 精神医学
著者名：奈良勲 鎌倉矩子 監修
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	発達障害治療学Ⅰ	担当者	小林 哲理		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

発達障害領域の作業療法についての基礎知識と治療理論を説明する。
 作業療法の評価と目的について、子どもの生活における遊びや作業課題全般への関わりをもつ視点で学習する。
 感覚・知覚・認知・行動の発達と障害との相互関係を考慮した治療計画の立て方を演習する。

■ 到達目標

発達障害における生活の困難さを理解し、子どもの潜在能力を引き出す作業療法の役割を理解し、他者に説明できる。子どもに必要な遊びや作業が可能になるために必要な評価を説明し、その一部を実施することができる。評価から得られた情報を統合・解釈し治療を計画し、他者に説明できる。

■ 授 業 計 画

- | | | |
|------|--|--|
| 第1回 | オリエンテーション〔授業の流れ（講義前シート記入→講義→豆テスト→講義後シート記入→提出）の説明、評価方法等〕、 | イントロダクション（発達障害領域の作業療法） |
| 第2回 | 子どもの発達と作業療法Ⅰ | 姿勢・運動発達とその背景①（粗大運動・微細運動） |
| 第3回 | 子どもの発達と作業療法Ⅰ | 姿勢・運動発達とその背景②（口腔運動発達） |
| 第4回 | 子どもの発達と作業療法Ⅰ | 姿勢・運動発達とその背景③（正常筋緊張、原始反射の統合と立ち直り平衡反応の出現） |
| 第5回 | 子どもの発達と作業療法Ⅱ | 感覚統合機能の発達① |
| 第6回 | 子どもの発達と作業療法Ⅱ | 感覚統合機能の発達② |
| 第7回 | 子どもの発達と作業療法Ⅲ | 認知・思考機能の発達 |
| 第8回 | 子どもの発達と作業療法Ⅳ | コミュニケーション機能の発達 |
| 第9回 | 子どもの発達と作業療法Ⅴ | 子どもの心理・社会的発達と遊び① |
| 第10回 | 子どもの発達と作業療法Ⅴ | 子どもの心理・社会的発達と遊び② |
| 第11回 | 子どもの発達と作業療法Ⅵ | 子どもの心理・社会的発達とセルフケア |
| 第12回 | 発達障害領域の作業療法評価Ⅰ（評価の焦点、流れ、情報収集および面接・観察の視点） | |
| 第13回 | 発達障害領域の作業療法評価Ⅱ（発達像を把握するための検査①） | |
| 第14回 | 発達障害領域の作業療法評価Ⅱ（発達像を把握するための検査②） | |
| 第15回 | 発達障害領域の作業療法評価Ⅲ（評価結果と障害構造の分析） | |

■ 評価方法

筆記試験（60%）、授業シート・豆テスト（40%）、その他、出席状況・授業態度（無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習：授業前に教科書の該当箇所を読み、授業における習得目標を明確にする（授業前シートに記入する）
 復習：豆テストでの誤答箇所について正答できるようにしておく

■ 教 科 書

書 名：作業療法学ゴールドマスターテキスト7 発達障害作業療法学
 著者名：監修：長崎重信 編集：神作一実
 出版社：株式会社 メジカルビュー社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	発達障害治療学Ⅱ	担当者	小林 哲理		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

前期で学んだ作業療法の役割、評価と治療計画の作成方法を踏まえて、疾患障害年齢別に作業療法における援助技法を学習する。環境設定、活動の選択と段階づけ、実際の治療における援助技法、チームアプローチについて演習する。

■ 到達目標

障害がある子どもの疾患別、年齢別、作業療法の実際についてモデル事例を通じて理解する。遊びや作業を可能にする援助技法の基本を習得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 疾患・障害別発達障害領域作業療法の実際
(感覚統合機能、姿勢と運動及び心理・社会的機能へのアプローチ概論) ①
- 第2回 疾患・障害別発達障害領域作業療法の実際
(感覚統合機能、姿勢と運動及び心理・社会的機能へのアプローチ概論) ②
- 第3回 脳性まひ①
- 第4回 脳性まひ②
- 第5回 脳性まひ③
- 第6回 脳性まひ④
- 第7回 重症心身障害
- 第8回 二分脊椎
- 第9回 運動発達遅滞
- 第10回 Down 症候群
- 第11回 精神・心理的発達の障害①
- 第12回 精神・心理的発達の障害②
- 第13回 精神・心理的発達の障害③
- 第14回 精神・心理的発達の障害④
- 第15回 家庭生活支援 ペアレントトレーニング、障害児の子育て支援

■ 評価方法

筆記試験 (60%), 授業シート・豆テスト (40%)、その他、出席状況・授業態度 (無断欠席や遅刻はマイナス評価)、の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

予習: 授業前に教科書の該当箇所を読み、授業における習得目標を明確にする (授業前シートに記入する)
復習: 豆テストでの誤答箇所について正答できるようにしておく

■ 教 科 書

書 名: 作業療法学ゴールドマスターテキスト7 発達障害作業療法学
著者名: 監修: 長崎重信 編集: 神作一実
出版社: 株式会社 メジカルビュー社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	老年期障害治療学Ⅰ	担当者	井口 知也 他		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

高齢者の加齢による身体的、心理的、社会的な変化や老年期障害に対する評価、治療に関する基礎知識を学ぶ。老年期特有の障害に対する作業療法アプローチの概要やマネジメントを教授する。

■ 到達目標

- 1) 高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について理解する。
- 2) 高齢者の心身機能、その特性について理解する。
- 3) 老年期障害の生活・障害構造、社会資源を理解し、それらに対する具体的援助を考えられる。
- 4) 老年期作業療法で活用できる検査・測定方法を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 高齢社会に伴う諸問題
- 第2回 高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について1
- 第3回 高齢者の生きてきた時代背景・社会の推移について2
- 第4回 高齢期の特徴1
- 第5回 高齢期の特徴2
- 第6回 介護保険制度
- 第7回 老年期作業療法の実践（基本的枠組み）
- 第8回 老年期作業療法の実践（特定高齢者、一般高齢者について）
- 第9回 老年期障害のマネジメント1
- 第10回 老年期障害のマネジメント2
- 第11回 老年期疾患別作業療法（認知症）①
- 第12回 老年期疾患別作業療法（認知症）②
- 第13回 老年期疾患別作業療法（整形疾患）
- 第14回 老年期疾患別作業療法（中枢神経疾患）
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する

レポートおよび発表 40%，定期試験 60%するが、いずれも60%以上ないと合格としない。

なお、欠席、遅刻早退は減点対象（無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義の際、前回の内容に関しての小テストを実施したり、レポートを提出する。また、講義前に予習として教科書を読んでくること。小テストやレポートの内容および予習範囲は講義の最後にアナウンスする。

■ 教 科 書

書 名：作業療法学全書第7巻 老年期

著者名：村田 和香 編集

出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

書 名：老年期障害領域の作業療法

著者名：山田 孝 編集

出版社：中央法規

書 名：作業療法学全書第13巻 地域作業療法学

著者名：太田 睦美 編集

出版社：協同医書出版社

書 名：認知症の作業療法

著者名：小川 敬之，竹田 徳則 編集

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

個々の文脈にある人間と生活という視点に立ち，作業の意味をしっかりと捉えること．その上で，高齢者にとっての作業とは何かを考え，生活を支援する者としての作業療法士の役割の意味を吟味してほしい．

授業科目	老年期障害治療学Ⅱ	担当者	井口 知也 他		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

高齢者の特性に合わせた評価の方法，高齢者に対して使用頻度の高い生活評価，身体機能評価、認知機能評価，心理機能評価の実施方法などについて演習を実施する．評価から得られた情報をもとに全体像を把握する方法を学び，個々の文脈に沿った意味ある作業を提供し実践できる手だてを教授する．

■ 到達目標

老年期での作業療法実践に必要なとなる技術の習得を目指す．

■ 授業計画

- 第1回 老年期障害治療学Ⅰの振り返りと老年期障害治療学Ⅱのオリエンテーション
- 第2回 老年期作業療法の実際（プロセス）
- 第3回 老年期作業療法の実際（検査測定）
- 第4回 老年期作業療法の実際（計画立案と実施，再考）①
- 第5回 老年期作業療法の実際（計画立案と実施，再考）②
- 第6回 入所系サービスにおける作業療法
- 第7回 施設系サービスにおける作業療法
- 第8回 通所，訪問系における作業療法
- 第9回 認知症高齢者に対する事例検討1
- 第10回 認知症高齢者に対する事例検討2
- 第11回 中枢神経疾患に対する事例検討1
- 第12回 中枢神経疾患に対する事例検討2
- 第13回 整形疾患に対する事例検討1
- 第14回 整形疾患に対する事例検討2
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する

レポートおよび発表 40%，定期試験 60%するが，いずれも60%以上ないと合格としない。

なお，欠席，遅刻早退は減点対象（無断遅刻・無断欠席は－10点、事前連絡のある遅刻・欠席は－5点とする）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義の際，前回の内容に関しての小テストを実施したり，レポートを提出する．また，講義前に予習として教科書を読んでもらうこと．小テストやレポートの内容および予習範囲は講義の最後にアナウンスする．

■ 教 科 書

書 名：作業療法学全書第7巻 老年期

著者名：村田 和香 編集

出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

書 名：老年期障害領域の作業療法

著者名：山田 孝 編集

出版社：中央法規

書 名：作業療法学全書第13巻 地域作業療法学

著者名：太田 睦美 編集

出版社：協同医書出版社

書 名：認知症の作業療法

著者名：小川 敬之, 竹田 徳則 編集

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

個々の文脈にある人間と生活という視点に立ち、作業の意味をしっかりと捉えること。その上で、高齢者にとっての作業とは何かを考え、生活を支援する者としての作業療法士の役割の意味を吟味してほしい。

授業科目	作業療法治療学実習Ⅰ	担当者	清水 大輔		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

教育課程で習得した種々の評価技法を実際の対象者に実施し、身体的・心理的・社会的状況を系統立てて報告する

■ 到達目標

- ①対象者に合わせた評価が適切に行えること
- ②情報を整理し、統合することができること
- ③対象者の全体像をレポートにまとめ、報告ができること

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
評価の復習
- 第2回 評価の復習
- 第3回 対象者Ⅰ（脳血管障害者）の情報公開・評価計画の立案
- 第4回 対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施①
- 第5回 実習後フィードバック①
- 第6回 対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施②
- 第7回 実習後フィードバック②
- 第8回 対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施③
- 第9回 対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施④
- 第10回 実習後フィードバック①
- 第11回 対象者Ⅰ（脳血管障害者）評価実施⑤
- 第12回 実習後フィードバック②
- 第13回 事例まとめ
- 第14回 事例報告会Ⅰ
- 第15回 事例報告会Ⅱ

■ 評価方法

以下の素材と割合で総合的に評価する。
レポート：50% 報告：30% 実習態度：20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

対象者に実施する評価内容を事前に学生同士で10回以上練習しておくこと。また、検査・測定はオリエンテーションで目的を述べられるように事前に説明できるようにしておくこと。実習中に対象者から受けたフィードバック内容は必ずレポートし、練習すべき事項は復習すること。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

実習に適した態度・服装・身だしなみで社会性を持って協調的な姿勢で取り組むこと。この科目は作業療法評価で習得した知識・技術が不可欠である。事前準備や復習を必ず行っておくこと。

授業科目	作業療法治療学実習Ⅱ	担当者	井口 知也		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

教育課程で習得した種々の評価方法および治療技法を、実際の対象者に実施し、ICF の観点から系統立てて、報告する

■ 到達目標

1. 作業療法治療学実習Ⅰで習得した知識・技術をもとに、臨床場面で対象者のニーズに合わせた作業療法案が立案できる
2. 立案した作業療法計画を実践できる
3. 実践結果をフィードバック出来る
4. 上記の実践を報告できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
障害特性の学習、情報収集案作成
- 第2回 障害特性の学習、情報収集案作成
- 第3回 情報の分析と統合
- 第4回 情報の分析と統合
- 第5回 作業療法プログラム立案
- 第6回 作業療法プログラム修正・立案
- 第7回 実習フィードバック
- 第8回 事例報告書作成
- 第9回 障害特性の学習、情報収集案作成
- 第10回 情報の分析と統合
- 第11回 作業療法プログラム立案
- 第12回 作業療法プログラム修正・立案
- 第13回 実習フィードバック・事例報告書作成
- 第14回 事例報告
- 第15回 事例報告

■ 評価方法

レポート：50%，報告：30%，取り組み態度：20%（欠席，遅刻早退も評価される）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義ごとにレポート課題を設定するので、次回の講義開始までに提出する。また、予習として担当事例の医学的情報や評価に必要な検査・測定方法を調べて練習すること。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	作業療法技術論Ⅰ	担当者	足立 一		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日常生活活動を中心に学生間の行動を観察し、かつ面接を通して情報を整理する演習中心の授業となる。

■ 到達目標

- 1) 作業療法士としての面接と観察ができる。
- 2) 作業療法士として面接と観察から得られた情報の整理ができる。

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
自己開示とは？
- 第2回 コミュニケーションとは？
- 第3回 基本的会話技能の演習と観察
- 第4回 傾聴することの演習と観察
- 第5回 身体構造の観察
- 第6回 作業療法面接と観察の演習①
- 第7回 作業療法面接と観察の演習②
- 第8回 行動の観察
工程レベルの分析と動作レベルの分析
- 第9回 行動観察の演習①
- 第10回 行動観察の演習②
- 第11回 作業面接とは？
- 第12回 作業面接の演習①
- 第13回 作業面接の演習②
- 第14回 作業面接の演習③
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

小テスト（30%）、レポート（70%）の結果で総合的に評価する。
※遅刻・欠席、授業態度によって減点する場合もある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

定期的に小テストを行うため。毎回授業で学習したことはしっかり復習すること。
定期的なレポート課題について授業時間外で作成すること。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	作業療法技術論Ⅱ	担当者	山田 隆人		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、作業療法支援を検討することを目的としている。面接や観察等の作業療法評価を実施し、得られた情報から対象者にとって意味のある作業を明らかにする。さらに、得られた情報から作業遂行上の課題を明らかにし、記録する。

■ 到達目標

- ・対象者にとって意味のある作業を明らかにする面接・観察手段を身につける
- ・面接・観察から得られた情報を適切な専門用語を用いて記録できる
- ・収集した情報を ICF に基づいて整理し、作業遂行上の課題を明らかにする
- ・日常生活の遂行における課題を整理できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 作業療法面接
- 第2回 面接のための準備
- 第3回 面接演習
- 第4回 作業療法での面接（COPM）
- 第5回 情報の集約
- 第6回 姿勢の理解
- 第7回 動作の分析・重心の理解
- 第8回 動作の分析・動作の過程
- 第9回 日常生活活動の分析
- 第10回 情報の集約・記録
- 第11回 作業療法での観察（AMPS）
- 第12回 作業療法での観察（AMPS）
- 第13回 臨床場面を観察および記録
- 第14回 臨床場面を観察および記録
- 第15回 臨床場面を観察および記録

■ 評価方法

提出課題（100%）、出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義終了時に課題を提示する。次回の講義までに課題を遂行しておくこと。

■ 教 科 書

書 名：作業療法がわかる COPM・AMPS スターティングガイド
 著者名：吉川ひろみ
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	作業療法技術論Ⅲ	担当者	山田 隆人		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法では作業を用いて支援を行います。また、色々な人々を巻き込んで作業を進めます。本講義では、障がいを持つ方への支援方法としてスポーツ活動を選定し、スポーツ活動の支援方法の理解を深めます。

■ 到達目標

- ・障がいを持つ方々の生活を理解する
- ・障がいを持つ方々への支援方法を理解する
- ・障がいを持つ方々のスポーツ活動の支援を実践する

■ 授 業 計 画

- 第1回 スポーツ活動の指導者・支援者の役割
- 第2回 スポーツの概念と歴史
- 第3回 スポーツ活動中に多いケガと対処方法
- 第4回 障がいを持つ方々の生活状況
- 第5回 障がいを持つ方々のスポーツ活動の支援
- 第6回 行動分析
- 第7回 スポーツ活動の支援計画
- 第8回 障がいを持つ方々のスポーツ活動の支援
- 第9回 コーチングの技術
- 第10回 スポーツ活動の支援計画
- 第11回 障がいを持つ方々のスポーツ活動の支援
- 第12回 トレーニング
- 第13回 スポーツ活動の支援計画
- 第14回 障がいを持つ方々のスポーツ活動の支援
- 第15回 スポーツ活動支援の振り返りとまとめ

■ 評価方法

提出課題（100%），出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価），の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義終了後の課題を提示する。次回の講義まで遂行しておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

学外での演習を行います。障害を持つ方々の時間や利用施設の都合により、日程変更する場合があります。演習時は、運動しやすい服装で行います。利用施設により靴等の指定がある場合があります。

授業科目	臨床ゼミナールⅠ	担当者	吉田 文 他		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

様々な作業活動を用い、様々な環境の中で行われる作業療法を専門の講師から学ぶ。
各テーマに従って学んだことを基礎として、学生自身が得意なまたは興味のある作業活動・作業療法について、その意味を考え、どのように臨床で展開できるかを検討する。

■ 到達目標

1. 様々な作業活動を用い、様々な環境で行われている作業療法について説明できる
2. その作業活動の意味や治療効果、その作業療法の必要性について述べるができる
3. 自分の得意な作業活動または興味のある作業活動について、作業療法における意味・治療効果、臨床での用い方について検討することができる

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション 動物介在療法と作業療法①
- 第2回 動物介在療法と作業療法②
- 第3回 介助犬と作業療法①
- 第4回 介助犬と作業療法②
- 第5回 介助犬と作業療法③
- 第6回 介助犬と作業療法④
- 第7回 動物リハビリテーション①
- 第8回 動物リハビリテーション②
- 第9回 動物リハビリテーション③
- 第10回 動物リハビリテーション④
- 第11回 音楽療法と作業療法①
- 第12回 音楽療法と作業療法②
- 第13回 ダンスセラピーと作業療法①
- 第14回 ダンスセラピーと作業療法②
- 第15回 司法関連施設における作業療法、まとめ

■ 評価方法

出席点20%、提出物30%、最終レポート50%
毎回違うテーマで授業を行うため出席を基本とする。遅刻・早退－2点、欠席－5点の減点とする。但し事前に連絡があり、やむを得ない遅刻・早退・欠席と認められた場合は考慮することがある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- * 毎回、提示する課題（復習と予習、A4で1～2枚程度）を次回授業時または定められた期限内に提出すること

■ 教 科 書

不要

■ 参考図書

書 名：別冊総合ケア 医療と福祉のための 動物介在療法

著者名：高柳友子他

出版社：医歯薬出版

書 名：よくわかるアニマルセラピー ― 動物介在療法の基礎とケーススタディ

著者名：メリー・R. バーチ

出版社：インターズー

書 名：BSAVA 犬と猫におけるリハビリテーション、支持療法および緩和療法

著者名：長谷川篤彦 監修

出版社：学窓社

書 名：犬のリハビリテーション

著者名：北尾貴史 他監訳

出版社：インターズー

書 名：犬と猫のリハビリテーション実践テクニック

著者名：枝村一弥他 訳

出版社：インターズー

書 名：パーキンソン病はこうすれば変わる！

― 日常生活の工夫とパーキンソンドダンスで生活機能を改善

著者名：橋本 弘子

出版社：三輪書店

書 名：こころを癒す音楽

著者名：北山修

出版社：講談社

書 名：音楽療法入門（上） 理論編

著者名：日野原重明 他

出版社：春秋社

書 名：音楽療法入門（下） 実践編

著者名：日野原重明 他

出版社：春秋社

書 名：介助犬を知る

著者名：高柳哲也

出版社：名古屋大学出版会

書 名：介助犬を育てる少女たち ― 荒れた心の扉を開くドッグ・プログラム

著者名：大塚敦子

出版社：講談社

書 名：介助犬僕に生きる力をくれた犬：青年刑務所ドッグ・プログラムの3か月

著者名：NHK プリズンドッグ取材班

出版社：ポット出版

書 名：月刊 作業療法ジャーナル47巻7号 増刊号

著者名：高畑進一 他

出版社：三輪書店

書 名：介助犬僕に生きる力をくれた犬：青年刑務所ドッグ・プログラムの3か月

著者名：NHK プリズンドッグ取材班

出版社：ポット出版

■ 留意事項

授業科目	臨床ゼミナールⅡ	担当者	吉田 文		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

基礎作業療法実習で行うグループ実習を通して、記録の書き方を学ぶ。記録の目的、記録形式の理解、記録の実践、記録の分析、教員からのフィードバックへの応答など、臨床実習を踏まえた作業療法に役立つ記録方法を身につける。記録から作業療法対象者への理解を促進する。基礎作業療法学実習と連動して授業が進行していく。

■ 到達目標

1. 記録の目的について述べることができる
2. 形式を理解し、記録を書くことができる
3. 作業療法の視点から記録を実施することができる
4. 記載した内容について考察し、次の作業療法評価計画・作業療法治療計画を立てられる
5. 記録への質問・フィードバックに対し応答できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション、スケジュールの説明
- 第2回 記録の目的
- 第3回 記録の形式
- 第4回 記録の利用
- 第5回 記録の分析
- 第6回 実習記録①を書く
- 第7回 実習記録についてグループディスカッション、学生同士のフィードバック
- 第8回 実習記録のまとめ、教員からのフィードバック
- 第9回 実習記録のまとめ、教員からのフィードバック
- 第10回 実習2回目における作業療法評価・支援計画
- 第11回 実習記録②を書く
- 第12回 実習記録についてグループディスカッション、学生同士のフィードバック
- 第13回 実習記録のまとめ②
- 第14回 実習記録のまとめ②
- 第15回 授業の振り返り

■ 評 価 方 法

出席点20%、提出物30%、最終レポート50%

実習記録をもとにグループディスカッションを行う等出席を基本とする授業のため遅刻・早退-2点、欠席-5点の減点とする。但し事前に連絡がありやむを得ない遅刻・早退・欠席と認められた場合は考慮することがある。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- * 毎回、提示する課題（復習と予習、A4で1～2枚程度）を次回授業時または定められた期限内に提出すること

■ 教科書

書 名：標準作業療法学専門分野 基礎作業学

著者名：小林夏子、福田恵美子 編

出版社：医学書院

書 名：ICF 国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－

著者名：世界保健機関（WHO）

出版社：中央法規

■ 参考図書

書 名：標準作業療法学専門分野 臨床実習とケーススタディ

著者名：小林夏子、福田恵美子 編

出版社：医学書院

書 名：理学療法士・作業療法士の SOAP ノートマニュアル

著者名：柳沢 健 監訳

出版社：協同医書出版

書 名：SOAP パーフェクトトレーニング―POS を活用するすべての医療者のために

著者名：柳沢 健 監訳

出版社：協同医書出版

■ 留意事項

授業科目	臨床ゼミナールⅢ	担当者	辻 郁		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

専門基礎科目及び作業療法評価学，作業療法治療学等専門科目で学んだことを基盤とする。

1. 国家試験問題を活用し，これまで得た知識をグループ学習によって強化する。 2. 人の生活機能(障害)を構造的に捉えることを習得するため，事例報告からの情報収集を行い，ICFに沿って事例分析及び統合を行い，その結果を報告する。

■ 到達目標

1. 国家試験過去問題から専門基礎科目を学習し，理解できる
2. 事例を読み込んでICFに沿った分析と統合を行える

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション ICF 確認テスト 国家試験過去問題試験
 第2回 国家試験過去問題グループ学習 1
 第3回 国家試験過去問題グループ学習 2
 第4回 事例分析 1-1
 第5回 事例分析 1-2
 第6回 事例分析 1-3
 第7回 国家試験過去問題グループ学習 3
 第8回 国家試験過去問題グループ学習 4
 第9回 国家試験過去問題グループ学習 5
 第10回 事例分析 1-4
 第11回 事例分析 1-5
 第12回 事例分析 1-6
 第13回 国家試験過去問題グループ学習 6
 第14回 国家試験過去問題グループ学習 7
 第15回 結果報告とまとめ

■ 評価方法

筆記試験（ミニテスト・定期試験）：60％ 事例分析のポートフォリオ：40％ 各々60％以上を獲得した場合合格とする

欠席，遅刻・早退は減点の対象（一回につき，事前届出なし：-10点，事前届出あり：-2点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

本科目はすべてグループ学習を基本とし，具体的な学習計画を立てたうえでの進行であるため，それぞれの課題を予習として仕上げておくこと。授業の翌回にミニテストを実施するので，復習しておくこと

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：国際生活機能分類 ― 国際障害分類改訂版 ―
 著者名：世界保健機関（WHO）
 出版社：中央法規

■ 留意事項

これまでの学習内容が実践への橋渡しとなるよう，自ら積極的に取り組むこと
 自ら取り組むことで，学習の楽しさや作業療法の面白さ，大切さが実感できることを期待する

授業科目	臨床ゼミナールⅣ	担当者	辻 郁		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床現場での実習直前の準備のための科目とする
特に国家試験問題を基盤にした知識の定着化を図るためにグループ単位で学習する

■ 到達目標

専門基礎科目で学んだ知識が定着している
グループ学習の方法を掴んでいる

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 国家試験過去問題グループ学習 1
- 第3回 国家試験過去問題グループ学習 2
- 第4回 国家試験過去問題グループ学習 3
- 第5回 ミニテスト及び解説
- 第6回 国家試験過去問題グループ学習 4
- 第7回 国家試験過去問題グループ学習 5
- 第8回 国家試験過去問題グループ学習 6
- 第9回 ミニテスト及び解説
- 第10回 国家試験過去問題グループ学習 6
- 第11回 国家試験過去問題グループ学習 7
- 第12回 国家試験過去問題グループ学習 8
- 第13回 ミニテスト及び解説
- 第14回 臨床評価実習に向けての準備 1（自己課題と対策方法の明確化）
- 第15回 臨床評価実習に向けての準備 2（課題解決への取り組み）

■ 評価方法

筆記試験（ミニテスト・定期試験）：80％ グループ学習のポートフォリオ：20％ 各々 60％以上を獲得した場合合格とする
欠席，遅刻・早退は減点の対象（一回に付き，事前届出なし：－10点，事前届出あり：－2点）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループ学習を基本とし，具体的な学習計画を立てたうえでの進行であるため，それぞれの課題を予習として仕上げておくこと
学習した内容を復習し，その内容をポートフォリオに追加しておくこと

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

これまでの学習内容が実践への橋渡しとなるよう，自ら積極的に取り組むこと
自ら取り組むことで，学習の楽しさや作業療法の面白さ，大切さが実感できることを期待する

授業科目	在宅ケア論	担当者	山田 隆人		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	4 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法支援は、対象となる方々が居住する地域やその住民へ働きかける場合がある。本講義では、障がいを持ち在宅で暮らすことを支援すること、ケアに着目する。障害を持ち暮らす方々のライフステージ毎に課題は異なる。加えて、それらライフステージ毎の法制度や生活支援サービスについて学ぶ。

■ 到達目標

- ・ライフステージ毎の在宅での課題や問題をあげることができる
- ・在宅で暮らすことの支援を挙げることができる

■ 授業計画

- 第1回 在宅の意味を考える、在宅とは
- 第2回 在宅で暮らしを支援する障害者総合支援法・介護保険法の制度を学ぶ
- 第3回 ライフステージと支援、ライフステージに合わせた支援を学ぶ
- 第4回 障害を持ち地域で暮らす方々の生活を調べる
- 第5回 現場で活躍しているケアワーカーの実践の話を聞き、在宅におけるケアを理解する 1
- 第6回 障害を持ち地域で暮らす方々の生活を調べる
- 第7回 現場で活躍しているケアワーカーの実践の話を聞き、在宅におけるケアを理解する 2
- 第8回 障害を持ち地域で暮らす方々の生活のまとめ
- 第9回 社会支援サービスについて調べる 1
- 第10回 社会支援サービスについて調べる 2
- 第11回 社会支援サービスについて調べる 3
- 第12回 釈迦支援サービスについてまとめる
- 第13回 生活支援サービスの現状を確認する
- 第14回 生活支援サービスの課題を確認する
- 第15回 全体のまとめ

■ 評価方法

提出課題（100%），出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価），の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各講義で課題を提示する。次回の講義までに提示した課題を実施しておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

学外での活動を含みます。講師の都合により、講義の進行が変わる場合があります。

授業科目	地域作業療法学Ⅰ	担当者	橋本 卓也 他		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

さまざまなニーズをもつ障害児・者や高齢者等が地域社会の中で“いきいき”と、そして質の高い生活を送ることができるために作業療法士は何を提供することができるのか？彼らの豊かな生活を支えるために必要な作業療法の機能・役割について学ぶ。また、ライフステージにおける生活の変化と、それらに対応した法制度等とを関連づけながら地域作業療法についての考察を深める。

■ 到達目標

- ①地域作業療法の理念・目的及び機能・役割を理解できる。
- ②ライフステージ及び障害等に起因する生活の変化にび応じた作業療法の実際を理解する。
- ③地域作業療法の展開過程における多職種・他機関との連携について理解できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション
地域リハビリテーションと地域作業療法について
- 第2回 地域作業療法の機能と役割
- 第3回 地域作業療法を实践する「地域」について
- 第4回 地域社会と生活課題について
- 第5回 ライフステージごとの生活特性と健康・生活ニーズについて（乳幼児期～思春期）
- 第6回 ライフステージごとの生活特性と健康・生活ニーズについて（青年期～老年期）
- 第7回 地域作業療法の対象となる人たちへの支援の視点（介護予防を含む）
- 第8回 地域作業療法におけるリスクマネジメントについて
- 第9回 発達障害者への就労支援について
- 第10回 発達障害者への就労支援の実際（ゲストスピーカー）
- 第11回 自立支援と住環境整備について
- 第12回 自立支援に向けた福祉機器の適応について
- 第13回 地域作業療法における評価の視点について
- 第14回 地域作業療法に関連する制度・施策Ⅰ
- 第15回 地域作業療法に関連する制度・施策Ⅱ

■ 評価方法

定期試験 80% レポート20% その他、出席率、授業中の態度等も評価の対象とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業項目について参考図書等をみて予習（読んでくる）してくること。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：地域作業療法学
著者名：太田睦美
出版社：協同医書出版社

書 名：地域作業療法学
著者名：小川恵子
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業への積極的な参加を望む。

授業科目	地域作業療法学Ⅱ	担当者	橋本 卓也 他		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

人々の生活の環境因子としての地域概況から医療・保健・福祉等に関する情報を把握し、作業療法の視点から地域の健康・生活ニーズを推測するとともに、その解決方法を考察する。ACT モデルの実践者からその現状・方法等を学び既存の精神科作業療法を振り返る機会をもつ。

■ 到達目標

- ①既存のデータから地域の人びとの健康・生活課題を推測できる。
- ②導きだされた健康・生活ニーズに対して作業療法視点から解決方法が立案できる。
- ③地域作業療法の全体像が理解できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 高齢者リハビリテーションの現状と課題
- 第2回 介護保険制度領域における作業療法の実践と課題（訪問リハビリテーションについて）
- 第3回 介護保険制度領域における作業療法の実践と課題（通所リハビリテーションについて）
- 第4回 地域作業療法におけるコミュニケーション技法について
- 第5回 訪問リハビリテーションの実際（神経難病者に対する訪問リハビリテーション）ゲストスピーカー
- 第6回 地区（地域）診断について
- 第7回 既存のデータから地域の医療・保健・福祉等に関する課題を整理する（グループワーク）Ⅰ
- 第8回 既存のデータから地域の医療・保健・福祉等に関する課題を整理する（グループワーク）Ⅱ
- 第9回 既存のデータから地域の医療・保健・福祉等に関する課題を整理する（グループワーク）Ⅲ
- 第10回 地区診断について（発表）
- 第11回 地区診断について（発表）
- 第12回 社会保障制度の枠外におかれている人たちへの作業療法の可能性（触法障害者等）
- 第13回 地域作業療法における他職種連携・チームアプローチについて
- 第14回 包括型地域生活支援アプローチ（ACT モデル）について
- 第15回 包括型地域生活支援アプローチ（ACT モデル）の実際（ゲストスピーカー）

■ 評価方法

授業中に課すレポート・発表等にて評価する（100％） その他、出席率、授業中の態度も評価対象とする

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に参考図書等を紹介するので読んでくること。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業への積極的参加を望む。

授業科目	日常生活活動学	担当者	山田 隆人		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法は人の生活行為を広く社会の場において支援する。それら支援を行うには、ADL の概念を理解する必要がある。さらに、ADL 支援を行うためには、対象者の生活機能を評価、生活行為への支援方法を検討し、実施していく。本講義では、これら ADL の支援を行うための過程を学ぶ。

■ 到達目標

- ・ ADL について理解する
- ・ ADL 評価に関して一連の手続きについて理解する
- ・ ADL 支援計画立案の構造について理解する

■ 授 業 計 画

- 第 1 回 ADL の基礎
- 第 2 回 ADL の評価
- 第 3 回 ADL の治療理論
- 第 4 回 起居移動
- 第 5 回 整容
- 第 6 回 更衣
- 第 7 回 排泄
- 第 8 回 入浴
- 第 9 回 睡眠・栄養・運動
- 第10回 炊事
- 第11回 掃除
- 第12回 買い物・経済管理
- 第13回 事例検討 1
- 第14回 事例検討 2
- 第15回 事例検討 3

■ 評価方法

筆記試験 (70%), 提出課題 (30%), 出席状況 (無断欠席や遅刻はマイナス評価), の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前に教科書の該当ページを全て読んでくること。
確認のための課題・テストなどを実施する場合がある。

■ 教 科 書

書 名：標準作業療法学 日常生活活動・社会生活行為学
著者名：編集 濱口豊太
出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：“作業”の捉え方と評価・支援技術
著者名：社団法人 日本作業療法士協会 監修
出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	卒業研究論文	担当者	作業療法学専攻教員		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3～4年	総単位数	4単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

作業療法領域における具体的なテーマを設定し、研究計画を立て、それに沿って必要な情報や資料を収集し、整理し、結果を導き出さす。研究の基本手法を実践から学ぶ。その集大成を卒業論文として完成させる。研究の結果を報告する。

■ 到達目標

作業療法における問題を科学的根拠に基づいて解決する姿勢と能力を高める
卒業論文を完成させ、報告できる

■ 授業計画

ゼミ単位で進行する
オリエンテーション
研究テーマの決定 / 先行研究論文の抄読
研究計画書の作成
研究データの収集
収集したデータの整理・解析
結果についての考察
論文作成
報告準備
報告

■ 評価方法

ゼミへの出席率：40% 論文内容：30% 報告姿勢（質疑応答を含む）と内容：30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

研究の進行に沿って、課題を仕上げ、ゼミではディスカッションによって考えをまとめることが出来るように準備すること

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

自らが興味を持って取り組んでいることなので、積極的であってほしい。
研究の大変さと楽しさ、達成感、さらには、作業療法の面白さ、大切さが実感できることを期待する

授業科目	臨床見学実習	担当者	作業療法学専攻教員		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 実習前学習，臨床見学，終了後のまとめと報告会で構成する
2. 実習施設：一般病院，リハビリテーション病院など大学が依頼し決定した施設
3. 臨床現場での実習期間：5日間（2月）
4. 実習形態：同一施設で臨床実習指導者の指導体制のもと作業療法実践現場や関係部署の見学を行う

■ 到達目標

1. 作業療法の実施状況を観察し，記録できる
2. リハビリテーションの流れの中の作業療法（士）の役割を理解できる
3. 作業療法士を目指す学生として適切な取り組みが出来る

■ 授 業 計 画

- 第1回 全体オリエンテーション
- 第2回 実習前課題
- 第3回 実習前課題へのフィードバック
- 第4回 実習前技能演習1
- 第5回 実習前技能演習2
- 第6回 臨床見学実習（5日間）
- 第7回 臨床見学実習のまとめ
- 第8回 臨床見学実習報告会

■ 評価方法

- 実習への取り組み態度（40％）
- 実習事前学習・終了後のまとめへの取り組み態度（30％）
- 提出物と報告内容（30％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- 各回に担当教員および臨床実習指導者の指示に従って，予習復習を行うこと

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

1. 実習は対象者や関係者，実習施設の好意により行われるため感謝と礼儀を忘れないこと
2. 日頃から健康管理に努め，特に臨床実習期間は健康に留意すること
3. 全体を通して，身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合，また，無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として実習を中止する

授業科目	評価学実習	担当者	作業療法学専攻教員		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	3 年	総単位数	3 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 実習前学習，臨床実習，終了後のまとめと報告会で構成する
2. 実習施設：一般病院，リハビリテーション病院など大学が依頼し決定した施設
3. 臨床現場での実習期間：3週間（2月）
4. 実習形態：同一施設で臨床実習指導者の指導体制のもと対象者の作業療法評価を行う

■ 到達目標

1. 作業療法評価の位置づけと過程がわかる
2. 対象者の作業療法評価（情報収集，検査測定，統合と解釈，作業療法プログラムの立案）が出来る
3. 上記を適切に記録できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 全体オリエンテーション
- 第2回 実習前課題
- 第3回 実習前課題へのフィードバック
- 第4回 実習前技能演習1
- 第5回 実習前技能演習2
- 第6回 臨床評価学実習（5日間）
- 第7回 臨床評価学実習のまとめ
- 第8回 臨床評価学実習報告会

■ 評 価 方 法

- 実習への取り組み態度（50％）
- 実習事前学習・終了後のまとめへの取り組み態度（25％）
- 提出物と報告内容（25％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回に担当教員および臨床実習指導者の指示に従って，予習復習を行うこと

■ 教 科 書

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

1. 実習は対象者や関係者，実習施設の好意により行われるため感謝と礼儀を忘れないこと
2. 日頃から健康管理に努め，特に臨床実習期間は健康に留意すること
3. 全体を通して，身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合，また，無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として実習を中止する

授業科目	総合臨床実習Ⅰ	担当者	作業療法学専攻教員		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	4 年	総単位数	8 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 実習前学習，臨床実習，終了後のまとめと報告会で構成する
2. 実習施設：一般病院，リハビリテーション病院など大学が依頼し決定した施設
3. 現場での実習期間：9 週間
4. 実習形態：同一施設で臨床実習指導者の指導体制のもと対象者の作業療法を行う

■ 到達目標

1. 作業療法士としての知識・技術・臨床推論・態度など基本的資質を習得できる
2. 指導者の指導のもと，一連の作業療法を実践できる
3. チームにおける作業療法の役割と機能がわかる
4. 義務と責任および倫理観を修得できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 全体オリエンテーション
- 第2回 実習前課題
- 第3回 実習前課題へのフィードバック
- 第4回 実習前技能演習1
- 第5回 実習前技能演習2
- 第6回 総合臨床実習（4 週間）
- 第7回 総合臨床実習学内演習（1 週間）
- 第8回 総合臨床実習（5 間）
- 第9回 総合臨床実習のまとめ
- 第10回 総合臨床実習報告会

■ 評価方法

- 実習への取り組み態度（50%）
- 実習事前学習・終了後のまとめへの取り組み態度（25%）
- 提出物と報告内容（25%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- 各回に担当教員および臨床実習指導者の指示に従って，予習復習を行うこと

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

1. 実習は対象者や関係者，実習施設の好意により行われるため感謝と礼儀を忘れないこと
2. 日頃から健康管理に努め，特に臨床実習期間は健康に留意すること
3. 全体を通して，身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合，また，無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として実習を中止する

授業科目	総合臨床実習Ⅱ	担当者	作業療法学専攻教員		
学 科 名	作業療法学専攻	学 年	4 年	総単位数	8 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 実習前学習，臨床実習，終了後のまとめと報告会で構成する
2. 実習施設：一般病院，リハビリテーション病院など大学が依頼し決定した施設
3. 現場での実習期間：9 週間
4. 実習形態：同一施設で臨床実習指導者の指導体制のもと対象者の作業療法を行う

■ 到達目標

1. 作業療法士としての知識・技術・臨床推論・態度など基本的資質を十分習得できる
2. 指導者の指導のもと，一連の作業療法を2例以上実践できる
3. チームにおける作業療法の役割と機能が十分にわかる
4. 義務と責任および倫理観を修得できる

■ 授業計画

- 第1回 全体オリエンテーション
- 第2回 実習前課題
- 第3回 実習前課題へのフィードバック
- 第4回 実習前技能演習1
- 第5回 実習前技能演習2
- 第6回 総合臨床実習（4 週間）
- 第7回 総合臨床実習学内演習（1 週間）
- 第8回 総合臨床実習（5 週間）
- 第9回 総合臨床実習のまとめ
- 第10回 総合臨床実習報告会

■ 評価方法

- 実習への取り組み態度（50%）
- 実習事前学習・終了後のまとめへの取り組み態度（25%）
- 提出物と報告内容（25%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各回に担当教員および臨床実習指導者の指示に従って，予習復習を行うこと

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

1. 実習は対象者や関係者，実習施設の好意により行われるため感謝と礼儀を忘れないこと
2. 日頃から健康管理に努め，特に臨床実習期間は健康に留意すること
3. 全体を通して，身だしなみや取り組み態度が不適切であると判断した場合，また，無断欠席や正当な理由がない欠席は原則として実習を中止する

授業科目	精神科リハビリテーション学	担当者	足立 一		
学 科 名	理学療法学専攻（選択）	学 年	2年	総単位数	1単位
	作業療法学専攻（必修）	開講時期	後期	選択・必修	選択/必修

■ 内 容

精神科リハビリテーションに関する教材を用いた講義及び演習を行う

■ 到達目標

精神科リハビリテーションの基本概念，回復と評価・支援の実際，関連する地域社会資源，制度についての知識を深める

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション
精神科リハビリテーションの定義
- 第2回 精神保健医療福祉の現状と歴史
- 第3回 精神疾患・障害の成因と分類
- 第4回 精神機能とその障害①（意識・知能・性格）
- 第5回 精神機能とその障害②（記憶・欲動・自我）
- 第6回 精神機能とその障害③（知覚・思考）
- 第7回 精神科治療と各種リハビリテーション①（薬物療法）
- 第8回 精神科治療と各種リハビリテーション②（リハビリテーション評価）
- 第9回 精神科治療と各種リハビリテーション③（リハビリテーション）
- 第10回 疾患別リハビリテーション①（統合失調症）
- 第11回 疾患別リハビリテーション②（気分障害）
- 第12回 疾患別リハビリテーション③（神経症性障害）
- 第13回 疾患別リハビリテーション④（てんかん）
- 第14回 疾患別リハビリテーション⑤（精神作用物質による行動の障害）
- 第15回 疾患別リハビリテーション⑥（その他）
まとめ

■ 評価方法

計4回の小テスト（40％）と定期試験（60％）の結果で総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

定期的に小テストを行うため，毎回授業で学習したことはしっかり復習すること。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	医学総論（公衆衛生・精神保健含む）	担当者	板倉 徹・板倉登志子 松井理直・山本永人 ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な医学的知識について学ぶ。

■ 到達目標

言語聴覚士国家試験に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

第1回 専門基礎分野 解剖学・生理学・病理学（板倉徹）
 第2回 専門基礎分野 臨床神経学・新家系医学（板倉徹）
 第3回 専門基礎分野 音響学（松井理直）
 第4回 専門基礎分野 音響学（松井理直）
 第5回 専門基礎分野 音声学（松井理直）
 第6回 専門基礎分野 音声学（松井理直）
 第7回 社会保障制度・関係法規（山本永人）
 第8回 社会保障制度・関係法規（山本永人）
 第9回 専門分野 失語・高次脳機能障害（板倉登志子）
 第10回 専門分野 失語・高次脳機能障害（板倉登志子）
 第11回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
 第12回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
 第13回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
 第14回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）
 第15回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機俊雄）

■ 評価方法

試験100%（国家試験と同形式の試験を2回実施、問題は五者択一形式）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

言語聴覚士過去問題を中心に、各自わからないところを質問・確認し合って受験勉強を進めること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士テキスト
 著者名：廣瀬肇 監修
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識（シリーズ各本）
 著者名：医学書院

 書 名：標準言語聴覚障害学（シリーズ各本）
 著者名：医学書院

 書 名：言語聴覚療法シリーズ改訂版（シリーズ各本）
 著者名：建帛社

■ 留意事項

授業科目	解剖学	担当者	柴田 雅朗		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

頭・頸部の解剖学的な構造を学び、言語聴覚領域の学習の礎とする。

■ 到達目標

中枢神経系、末梢神経系ならびに口腔、喉頭を構成している各部の名称や機能を説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 神経系 I
1. 神経系の構成 2. 中枢神経系とは 3. 脊髄 4. 延髄と橋 5. 中脳 6. 小脳
- 第2回 神経系 II
1. 間脳（視床と視床下部） 2. 大脳（大脳皮質、大脳基底核、大脳白質）
- 第3回 脳神経
1. 脳神経の概略 2. 脳神経（三叉神経、顔面神経、内耳神経、舌咽神経、迷走神経、舌下神経）
- 第4回 脳室系と脳の血管
1. 脳室 2. 髄膜（硬膜、クモ膜、軟膜） 3. 脳脊髄液
4. 脳の血管（内頸動脈とその枝、椎骨動脈とその枝、ウィリス動脈輪、硬膜静脈洞）
- 第5回 顔面と口腔の解剖
1. 口蓋 2. 口腔底 3. 舌と味蕾 4. 舌の発生 5. 咀嚼筋 6. 嚥下に働く筋
- 第6回 喉頭の解剖と
1. 舌骨と喉頭の軟骨 2. 声帯靱帯と声帯ヒダ 3. 声門 4. 喉頭の筋 5. 喉頭の神経
- 第7回 平衡・聴覚器の解剖
1. 外耳・中耳・内耳の構造 2. 聴覚と平衡覚の伝導路と反射路
- 第8回 三層性胚盤および鰓弓と総復習
1. 三層性胚盤 2. 鰓弓 3. 鰓弓由来の筋とその支配神経

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習は必要ありませんが、復習を必ず毎回やって、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教 科 書

書 名：PT・OT・STのための解剖学
著者名：渡辺正仁 監修
出版社：廣川書店

■ 参考図書

書 名：ネッター解剖学アトラス
著者名：相磯貞和 訳
出版社：南江堂

■ 留意事項

欠席や遅刻をしないように心がけること。

授業科目	生理学	担当者	宮井 潔		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

生理学は人体機能のしくみを知る基礎的な学問であるが、かなり範囲が広く深いので、各項目ごとにできるだけ基本的な考え方や重点事項を解説する。

■ 到達目標

各分野において、それぞれ基礎となる解剖学と、臨床医学特に内科学との関連づけを理解するように努める。

■ 授業計画

- 第1回 細胞と内部環境
- 第2回 血液・生体防御
- 第3回 循環系
小テストと解説
- 第4回 呼吸機能
- 第5回 消化と吸収
- 第6回 胃臓と排泄
- 第7回 酸・塩基手衡
- 第8回 内分泌・代謝

■ 評価方法

筆記試験95% 筆記小テスト5%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義終了後、講義内容の復習をし、疑問があれば次回授業時に必ず質問する事。

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法・作業療法専門分野 生理学
著者名：石澤光郎、富永淳
出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：スタンダード生理学
著者名：二宮石雄、安藤啓司、彼末一之、木川寛二
出版社：文光堂

■ 留意事項

講義では重点のみ（主としてキーワードの説明）述べるので、それをもとに教科書などでしっかり自習してほしい

授業科目	病理学	担当者	橋本 和明		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

疾患の原因は内因と外因に大別される。内因として遺伝＋免疫などがあり、外因として種々の要因がある。その結果、人体は下記 1～8 の変化を示す。これらの各項目について講義を行う。

■ 到達目標

病気の成り立ちや仕組みを追求する病理学を学ぶことによって、患者の持つ種々の障害の本質の理解を深め、障害とそれに対する治療・リハビリテーションの考察・理解がより深く行えるようになることを目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第 1 回 退行性病変
- 第 2 回 進行性病変
- 第 3 回 奇形を含む先天異常
- 第 4 回 炎症アレルギー
- 第 5 回 循環障害
- 第 6 回 腫瘍
- 第 7 回 腫瘍
- 第 8 回 外傷性変化等

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後は復習に努め、わからない事柄は次回の講義時に質問すること。

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法学・作業療法学基礎分野 病理学 第3版
 著者名：梶原 博毅／横井 豊治 編集
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	内科学（老年医学含む）	担当者	宮井 潔		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

まず健常人の解剖・生理・生化学の基礎知識を簡単に復讐してそれを把握した上で、内科学の総論・各論の全領域にわたる基礎的な重要項目について臨床現場での経験も交えて講義する。

■ 到達目標

内科学は臨床医学の基礎であるが、その範囲は余りにも広く、内容も深いため短期間でそのすべてをマスターするのは大変むずかしい。そこで基礎的な内科学の考え方、必要最小限の知識、専門用語などを理解するよう努める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 内科学総論－病因論（遺伝・感染・腫瘍・代謝異常等）
診断学・検査学
- 第2回 内科学総論－治療医学、予防医学
- 第3回 内科学各論－血液疾患
- 第4回 内科学各論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
- 第5回 内科学各論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
小テスト及び解説
- 第6回 内科学各論－感染症
- 第7回 内科学各論－内分泌疾患
- 第8回 内科学各論－代謝疾患
- 第9回 内科学各論－循環器疾患
- 第10回 内科学各論－呼吸器疾患
- 第11回 内科学各論－胃・泌尿器疾患
- 第12回 内科学各論－消化管疾患
- 第13回 内科学各論－肝・胆・膵疾患
- 第14回 内科学各論－中毒・環境要因による疾患
- 第15回 老年医学

■ 評価方法

筆記試験95% 筆記小テスト5%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義終了後、講義内容の復習をし、疑問があれば次回授業時に必ず質問する事。

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法・作業療法専門分野 内科学
著者名：石澤光郎、富永淳
出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：新臨床内科学

著者名：高久史磨・尾形悦郎

出版社：医学書院

書 名：標準理学療法・作業療法専門分野 老年医学

著者名：大内尉義

出版社：医学書院

書 名：NEW 臨床検査診断学

著者名：宮井潔

出版社：南江堂

■ 留意事項

講義では要点（基本的な考え方・各事項の用語説明などいわば“さわり”）だけを述べることになるので、それをもとに教科書などでしっかり自習してほしい

授業科目	小児科学	担 当 者	非常勤講師		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

小児の成長・発達、形態的特徴・生理的特徴、よくみられる疾患、見逃せない疾患を中心とした小児の病気が及び予防接種・母子保健について述べる。

■ 到達目標

小児の成長・発達、小児疾病、小児保健等を理解して小児科学をよく把握すること。

■ 授 業 計 画

- 第1回 小児の発育・発達、生理の特徴
- 第2回 出生前小児科学
- 第3回 新生児学、周産期学
- 第4回 乳幼児の栄養と生活
- 第5回 母子保健、予防接種
- 第6回 小児の感染症（細菌、ウイルス）
- 第7回 中枢性疾患（痙攣、てんかん、変性）
- 第8回 中枢性疾患と運動器疾患（脳性マヒ、ジストロフィー）
- 第9回 小児内科学、循環器、呼吸器
- 第10回 小児内科学、消化器、内分泌
- 第11回 小児内科学、アレルギー、免疫
- 第12回 小児内科学、血液、泌尿器
- 第13回 発達障害
- 第14回 小児の診療の特徴、事故、救急
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記80%、小テスト20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書を熟読し、予習しておくこと。

■ 教 科 書

書 名：最新育児小児病学
著者名：黒田恭弘
出版社：南江堂

書 名：小児・思春期診療 最新マニュアル
著者名：五十嵐 隆
出版社：日本医師会

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	精神医学	担当者	山田 一郎		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

精神症状の捉え方，代表的な精神疾患の特質および対処法の基本を講義する

■ 到達目標

精神疾患の特質を理解し，患者への望ましい接近方法を習得できる

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション 心を病むということ
- 第2回 精神疾患の基本分類と診断基準
- 第3回 精神機能と精神症状
- 第4回 代表的な精神疾患と，その対応 (1) 内因性精神疾患
- 第5回 代表的な精神疾患と，その対応 (2) 外因性精神疾患
- 第6回 代表的な精神疾患と，その対応 (3) 心因性精神疾患
- 第7回 代表的な精神疾患と，その対応 (4) 人格障害等
- 第8回 精神保健の今日的課題

■ 評価方法

筆記試験 (90%) 出席・遅刻状況 (10%)

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

特になし

■ 教 科 書

書 名：専門医がやさしく語る はじめての精神医学
 著者名：渡辺雅幸
 出版社：中山書店

■ 参考図書

書 名：学生のための精神医学 第3版
 著者名：太田保之・上野武治 編
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

特になし

授業科目	リハビリテーション医学	担当者	今井 公一・辻 郁 澤井里香子 ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・理学療法の歴史や定義、理学療法過程、理論的な背景などについて学ぶ。(今井)
- ・講義形式で、作業療法の歴史や理論的背景、種々の展開例から作業療法実践の枠組みと実際を学ぶ。(辻ほか)
- ・言語聴覚療法に必要なリハ医学の基礎知識及び臨床場面で重要となる事柄を、心理的問題も含めて講義する。(澤井)

■ 到達目標

- 1) 理学療法の治療体系について説明できる。2) 理学療法の対象について説明できる。3) リスク管理など理学療法の実践について説明できる。(今井)
- 1) 作業療法の枠組みを概観できる。2) 作業療法の実践例を知ること、その専門性を理解できる。(辻ほか)
- 1) 言語聴覚療法に必要な医学的基礎知識及び代表的な疾患について、患者個人の全体像を把握しアプローチするために必要な臨床上の考え方を身につける。(澤井)

■ 授業計画

- 第1回 理学療法の歴史と定義・対象 (今井)
- 第2回 理学療法の過程と治療体系 (今井)
- 第3回 理学療法の実践 (今井)
- 第4回 理学療法の実践 (今井)
- 第5回 作業療法の歴史 (辻)
作業療法の“作業”の意味
実践の枠組み・理論的背景
- 第6回 発達過程における作業療法の実践
- 第7回 精神障害者に対する作業療法の実践
- 第8回 身体障害者に対する作業療法の実践
- 第9回 リハビリテーション医学の概念と障害学 (澤井)
- 第10回 廃用症候群・過用 / 誤用症候
中枢性神経麻痺の回復 (澤井)
- 第11回 脳卒中のリハビリ (澤井)
運動学習
- 第12回 目標設定レベルの階層性 留守居能力 (澤井)
ケアマネジメント パーキンソン病のリハビリ
- 第13回 神経疾患のリハビリ (ALS,SCD) (澤井)
ターミナルケア
呼吸リハ
- 第14回 心理的問題について(障害受容、チームワークなど) (澤井)
- 第15回 授業全体の総合的演習 (澤井)
- 第16回 授業全体の総合的演習 (澤井)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義前にプリントを配布する。講義までに必ず読んでおくこと。（澤井）
講義終了後は復習し、わからないことがあれば次回の講義時に質問すること。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：図説 パーキンソン病の理解とリハビリテーション

著者名：山永 裕明、野尻 晋一

出版社：三輪書店

書 名：動画で学ぶ脳卒中のリハビリテーション

著者名：園田 茂

出版社：医学書院

書 名：臨床リハ

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	耳鼻咽喉科学	担当者	藤木 暢也・岡野 高之 ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

耳鼻咽喉科疾患の病態と治療について講義を行う。

■ 到達目標

耳鼻咽喉科領域の機能解剖や疾患、治療について、言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 総論／鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖（1）（藤木）
- 第2回 鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖（2）（藤木）
- 第3回 鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療（1）（藤木）
- 第4回 鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療（2）（藤木）
- 第5回 聴器の構造と機能及びその疾患について（1）（岡野）
- 第6回 聴器の構造と機能及びその疾患について（2）（岡野）
- 第7回 聴器の構造と機能及びその疾患について（3）（岡野）
- 第8回 聴器の構造と機能及びその疾患について（4）（岡野）
- 第9回 外耳疾患の病態と治療（講師非公表）
- 第10回 中耳疾患の病態と治療（講師非公表）
- 第11回 内耳疾患の病態と治療（講師非公表）
- 第12回 聴力改善術（講師非公表）
- 第13回 前庭・平衡系の構造と機能（講師非公表）
- 第14回 めまい疾患（講師非公表）
- 第15回 まとめ（講師非公表）

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後には、学習内容について必ず復習をしておくこと。

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学
 著者名：中村公枝 城間将江 鈴木恵子
 出版社：医学書院

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学
 著者名：鳥山 稔
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	臨床神経学	担当者	小倉 光博		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

スライドを中心に、臨床的に頻度の高い神経疾患をわかりやすく解説する。あわせて、神経解剖、神経生理、神経症候学、神経放射線診断についても解説する。

■ 到達目標

神経解剖、神経生理などの基本的知識をもとに、臨床でよく経験する神経疾患の病態、診断、治療を理解すること。

■ 授 業 計 画

第1回 神経解剖・神経生理
第2回 神経解剖・神経生理
第3回 脳血管障害
第4回 脳血管障害
第5回 脳腫瘍
第6回 脳腫瘍
第7回 頭部外傷
第8回 頭部外傷
第9回 小児頭部外傷・先天奇形
第10回 神経血管症候群
第11回 パーキンソン病
第12回 認知症
第13回 頭痛
第14回 神経変性疾患・感染症
第15回 神経画像診断

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後は復習をし、わからないところは次回の授業で積極的に質問すること。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：絵でみる脳と神経 第3版
著者名：馬場元毅
出版社：医学書院

■ 留 意 事 項

授業科目	形成外科学	担当者	大倉 正也		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な顎顔面形成外科学

■ 到達目標

基礎知識と臨床知識の習得と理解

■ 授業計画

第1回 総論(嚥下を含む)
第2回 口唇口蓋裂
第3回 口腔腫瘍
第4回 顎変形症
第5回 顎顔面の再建
第6回 唾液腺の機能と唾液腺疾患
第7回 試験対策
第8回 試験対策

■ 評価方法

筆記試験(80%)、出席状況(無断欠席や遅刻はマイナス評価)を総合的に評価。

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

嚥下についてまず理解すること。 試験対策では、具体的に問題を解いていきます。授業中に理解し、覚えていきながら、試験に慣れるようについてきて下さい。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

欠席に注意してください。

授業科目	臨床歯科医学	担当者	山西 整		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な歯科的知識について学ぶ。

■ 到達目標

歯科的知識の習得と理解

■ 授 業 計 画

- 第1回 歯科概論
歯と歯周組織について（発生、構造と機能）
- 第2回 歯と歯周組織について 1
疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周病、歯列不正、歯の欠損）
- 第3回 歯と歯周組織について 2
疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周病、歯列不正、歯の欠損）
- 第4回 口腔、顎、顔面について
発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
- 第5回 顎関節、唾液腺について
発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
- 第6回 口腔ケアについて
歯科医学的処置（補綴、保存、歯科矯正など）について
- 第7回 口蓋裂治療と ST
- 第8回 口蓋裂治療と ST

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、疑問点は次回の講義で質問をすること

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学
著者名：道健一
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	口腔外科学	担当者	窪 寛仁		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

顎・口腔の構造と機能および顎・口腔領域の疾患について講義を行う。

■ 到達目標

言語聴覚士として必要な顎・口腔の構造および顎・口腔領域の疾患について理解する。

■ 授業計画

- 第1回 歯、口腔、顎顔面の構造と機能
- 第2回 口腔、顎・顔面領域の先天異常、変形
- 第3回 顎・口腔領域の炎症性疾患、口腔粘膜疾患
- 第4回 顎・口腔領域の嚢胞性疾患、損傷・外傷
- 第5回 顎・口腔領域の神経疾患、顎関節疾患、唾液腺疾患
- 第6回 顎・口腔領域の腫瘍および腫瘍類似疾患
- 第7回 口腔、顎・顔面領域の手術（再建）と機能回復
- 第8回 中枢性疾患や加齢による口腔機能障害

■ 評価方法

筆記試験 100%

（必要な出席日数を満たした者に試験の受験資格を与え、定期試験（筆記試験）で評価する。）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎回の講義内容に関連した問題を配布するので、授業後に自学自習することを課す。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学

著者名：道 健一編

出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	呼吸発声系医学(呼吸発声発語系の構造、機能、病態)	担 当 者	本多 知行・楯谷 一郎		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

嚥下障害分野：嚥下障害の臨床に必要な医学的知識および支援のあり方について学ぶ。(本多)
音声障害分野：音声障害の基礎及び臨床について、医学的な観点から講義を行う。(楯谷)

■ 到達目標

嚥下障害分野：嚥下障害の理解を深め、人間の根源的欲求である「口から食べる」という QOL の向上を目的として、言語聴覚士が支援できる技術と考え方を習得する。(本多)
音声障害分野：音声障害のリハビリテーションを行う際に必要となる耳鼻咽喉科学的知識を習得する。(楯谷)

■ 授 業 計 画

第1回 嚥下障害の理解のために必要な解剖・生理 (本多)
第2回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練1 (本多)
第3回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練2 (本多)
第4回 嚥下障害におけるチームアプローチと関連事項 (本多)
第5回 偽(仮)性球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ (本多)
球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ
第6回 変性疾患の嚥下障害に対する特徴とアプローチ (本多)
第7回 嚥下障害の重症度分類と最近の話題 (本多)
第8回 喉頭の解剖 (楯谷)
第9回 発声の生理機構 (楯谷)
第10回 喉頭検査法 (楯谷)
第11回 喉頭疾患の診断と治療：器質的病変 (楯谷)
第12回 喉頭疾患の診断と治療：器質的病変 (楯谷)
第13回 喉頭疾患の診断と治療：非器質的病変 (楯谷)
第14回 音響分析・音声検査法 (楯谷)
第15回 まとめ (楯谷)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

受講後は、その都度レジメやノート等を読み返し、必ず復習をしておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：「摂食・嚥下リハビリテーション」第2版
著者名：金子芳洋 千野直一監修
出版社：医歯薬出版
.....
書 名：「嚥下障害の臨床」第2版
著者名：日本嚥下障害臨床研究会監修
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	聴覚系医学（聴覚系の構造、機能、病態）	担当者	金丸 眞一		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚系の構造・機能・病態と疾患について解説する。

■ 到達目標

聴覚系の構造や機能を理解し、その疾患について言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 耳科学の概説と聴覚系の構造①（外耳・中耳・内耳）
- 第2回 聴覚系の機能①（外耳・中耳）
- 第3回 聴覚系の機能②（内耳）
- 第4回 聴覚系の機能③（聴神経と視聴中枢経路）
- 第5回 聴覚系の機能④（聴覚中枢機構、両耳聴能と方向感覚）
- 第6回 聴覚検査と耳疾患
- 第7回 聴覚器官の病態①（外耳・中耳疾患①）
- 第8回 聴覚器官の病態②（外耳・中耳疾患②）
- 第9回 鼓室形成手術
- 第10回 聴覚器官の病態③（内耳疾患①）
- 第11回 聴覚器官の病態④（内耳疾患②）
- 第12回 内耳再生医学
- 第13回 聴覚器官の病態⑤（後迷路・中枢性難聴疾患）
- 第14回 聴覚と音声・言語・音楽
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、分からないことは随時授業内で質問すること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための聴覚障害学

著者名：喜多村健 編著

出版社：医歯薬出版

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	神経系医学（神経系の構造、機能、病態）	担当者	西林 宏起・板倉 徹		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

脳神経外科疾患を含む、神経疾患から機能解剖を学ぶ。

■ 到達目標

日常臨床で遭遇する患者の神経症状、高次脳機能障害を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 頭蓋骨、硬膜、くも膜、軟膜、灰白質、白質の解剖、CT,MRI の画像読影（西林）
- 第2回 脳脊髄液系、脳血管の解剖（西林）
- 第3回 大脳皮質の機能・運動感覚野、言語関連野、視覚系、聴覚系（西林）
- 第4回 皮質脊髄路、皮質核路、体性感覚など（西林）
- 第5回 間脳（視床、視床下部）（西林）
- 第6回 大脳基底核、脳幹（西林）
- 第7回 脳神経、脊髄（西林）
- 第8回 脳血管系①（板倉）
- 第9回 脳血管系②（板倉）
- 第10回 脳脊髄液系（板倉）
- 第11回 画像診断 CT ①（板倉）
- 第12回 画像診断 CT ②（板倉）
- 第13回 画像診断 MRI（板倉）
- 第14回 画像診断 その他の画像診断（板倉）
- 第15回 まとめ（板倉）

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後は復習に努め、わからない事柄は次回の講義時に質問すること。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：絵でみる脳と神経 しくみと障害のメカニズム
 著者名：馬場 元毅
 出版社：医学書院

書 名：メディカルスタッフのための神経内科学
 著者名：河村満 編著
 出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

授業科目	臨床心理学Ⅰ（理論と分類）	担当者	藤井 章乃		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床心理学の基本である人格理論、発達理論を中心に学習する。

■ 到達目標

自己理解、他者理解を通して人間理解を深め、理想的な人間関係について考える。

■ 授業計画

- 第1回 臨床心理学の概要について
- 第2回 心とは何か？
- 第3回 カウンセリングマインドについて
- 第4回 人格理論 フロイトの精神分析理論 ①
- 第5回 人格理論 フロイトの精神分析理論 ②
- 第6回 人格理論 ユングの分析心理学 ①
- 第7回 人格理論 ユングの分析心理学 ②
- 第8回 発達理論 ロジャーズの自己理論
- 第9回 発達理論 マーラーの分離個体化理論 ウィニコットの対象関係論
- 第10回 発達理論 エリクソンの心理・社会的発達理論
- 第11回 発達について
- 第12回 精神医学について ①
- 第13回 精神医学について ②
- 第14回 心理アセスメント・パーソナリティ理論 ①
- 第15回 心理アセスメント・パーソナリティ理論 ②

■ 評価方法

筆記試験80% 提出課題20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後に、授業の振り返りとして感想を提出し、実習後には結果の分析を提出する場合がある。

■ 教 科 書

書 名：心とかかわる臨床心理
 著者名：川瀬正裕・松本真理子・松本英夫
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	臨床心理学Ⅱ（査定と心理療法）	担当者	藤井 章乃		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

心理アセスメント、心理療法を中心に、自己分析を通して自己理解を深め、援助技術を具体的に学ぶ。

■ 到達目標

臨床心理学の援助の方法を理論と実習によって学ぶことにより、実践において役立てることを目標とする。

■ 授 業 計 画

第1回 心理アセスメント 投映法
 第2回 心理アセスメント 質問紙法 実習
 第3回 心理アセスメント まとめ
 第4回 心理療法 クライエント中心療法
 第5回 心理療法 傾聴訓練Ⅰ
 第6回 心理療法 傾聴訓練Ⅱ
 第7回 心理療法 精神分析療法
 第8回 心理療法 分析心理療法
 第9回 心理療法 芸術療法Ⅰ
 第10回 心理療法 芸術療法Ⅱ
 第11回 心理療法 家族療法
 第12回 心理療法 行動療法
 第13回 心理療法 認知行動療法
 第14回 心理療法 その他
 第15回 演習

■ 評価方法

筆記試験80% 提出課題20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後に、授業の振り返りとして感想を提出し、実習後には結果の分析を提出する場合がある。

■ 教 科 書

書 名：心とかかわる臨床心理
 著者名：川瀬正裕・松本真理子・松本英夫
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	生涯発達心理学Ⅰ（乳幼児期）	担当者	工藤 芳幸		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

生涯発達心理学とは、生まれてから死ぬまでの人の一生において、環境（人や物、社会）との相互作用を通じた時系列的な変化を扱う。いわば生老病死、生成と喪失の心理学である。具体的な発達アセスメントにもつなげていく為に、新版K式発達検査2001や WISC- IVなどの検査課題も参照して進めたい。第6回までは便宜的に年齢ごとの子どもの姿を学ぶ。前半終了後に、第7回からは、アタッチメントや認知、社会性といった領域ごとの発達についての理解を深める。第13回からは、複合的な領域である概念やメタ認知機能、注意・記憶機能（ワーキングメモリ）、知能の捉え方について学ぶ。最終回は、人との関係の中で育っていくパーソナリティーや自己について取り上げたい。

■ 到達目標

乳幼児期の発達の流れを大まかに掴むことと、各領域でポイントになる項目の理解を目標とする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 オリエンテーション：胎生期・新生児期～小学校に上がる頃までの発達と成長を俯瞰する。また受講に当たっての留意事項、学習形式について話したい。
- 第2回 乳児期前半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001）、演習を通して、乳児期前半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
- 第3回 乳児期後半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001）、演習を通して、乳児期前半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
- 第4回 幼児期前半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001）、演習を通して、乳児期前半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
- 第5回 幼児期後半の子どもの発達：視聴覚教材、検査課題（新版K式発達検査2001）、演習を通して、乳児期前半の子どもの大まかな姿について学ぶ。
- 第6回 乳幼児期の復習。乳幼児期の小テストを実施し、フィードバックを行なう。
- 第7回 アタッチメントと社会性の発達：Bowlbyのアタッチメント理論を中心に、母子関係における愛着行動、人見知りのメカニズムなどについて解説する。
- 第8回 認知の発達：乳幼児の認知の発生について理論的体系を築いたスイスの心理学者・ピアジェについて取り上げる。第5回までの講義とリンクさせながら、基本的な考え方について解説する。
- 第9回 情緒の発達：大人には喜怒哀楽といった感情が確かに「ある」ことが当然と思われるかも知れない。感情もまた、乳児期からの発達過程において学習される。気分・感情・情動・情緒といった言葉で表される状態の初期発達を学ぶ。
- 第10回 遊びの発達：遊びは総合力である。子どもは手持ちの力を発揮して多様に遊ぶ。遊びを媒介にして、認知や言語、社会性や感情制御といった力を身につけていく。遊びというものについて考えてみたい。
- 第11回 言語の発達：新版K式発達検査2001、LCスケールの検査項目も参照しながら、言語発達におけるメルクマールについて解説する。
- 第12回 小テスト。講義前半で第1回から第11回までの項目について、年齢と各領域の発達をクロスさせる記述問題を実施する。後半でフィードバックを実施。
- 第13回 注意・記憶の発達：注意 (attention) 機能、記憶の発達について取り上げる。
- 第14回 知能：知能測定の歴史的背景から、現在、使われている知能テストについて解説する。WISC－Ⅲ（Ⅳ）、田中ビネー知能検査Ⅴ、K-ABCⅡについて、概要を取り挙げる。
- 第15回 パーソナリティー・自己の発達：人格形成についても遺伝子の設計図で決定されるわけではなく、後天的な学習の要因が大きい。社会的な問題解決や教科学習との関係、レジリエンスという概念などを取り挙げる。

■ 評価方法

期末試験80%、小テスト20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

15回の講義スケジュール中に小テストを2回実施しますので、各回ごとに講義内容の復習をお薦めします。

■ 教科書

書名：コメディカルのための専門分野基礎テキスト 人間発達学

著者名：福田恵美子編

出版社：中外医学社

■ 参考図書

書名：よくわかる発達心理学

著者名：無藤隆，岡本祐子，大坪治彦（編）

出版社：ミネルヴァ書房

■ 留意事項

適宜、ハンドアウトを配布します。小児関係の講義資料は他科目を含めてファイリングすることをお薦めします。障害という側面と発達的な側面の両方の理解が必要だからです。

授業科目	生涯発達心理学Ⅱ（幼児期～老年期）	担当者	森田 喜治・阪本 裕子 森定美也子 ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

森田：幼児期から中年期までの心理的発達と各時期の課題と問題との治療について
 阪本・森定ほか：老年期のエイジングとパーソナリティ、認知症の問題、死への対応について解説する。
 老年期のエイジングとパーソナリティについて理解を深め、ST が如何に対応すべきかを学んで頂きたい。

■ 到達目標

対人関係学の立場から情緒の発達の理解と課題及び、病理とその治療についての理解を深め、人間の心の成長、対人関係の成長及び葛藤についての理解を深める。
 各発達段階の課題や病理について理解し、適切なアプローチについて考えることができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 対人関係学の立場からの乳幼児における母子関係、対人関係についての解説（森田）
- 第2回 ライフサイクルにおける幼児期の課題と対人関係について、対象関係論、心理学的現象学の観点から解説する（森田）
- 第3回 ライフサイクルにおける幼児期の問題行動と治療について解説する（森田）
- 第4回 ライフサイクルにおける児童期の課題と対人関係について、対象関係論、心理学的現象学の観点から解説する（森田）
- 第5回 ライフサイクルにおける児童期の問題行動と治療について解説する（森田）
- 第6回 ライフサイクルにおける青年前期（思春期）の課題と対人関係について、対象関係論、心理学的現象学の観点から解説する（森田）
- 第7回 ライフサイクルにおける青年前期（思春期）の問題行動と治療について解説する（森田）
- 第8回 成人期、中年期の課題と問題、その家族との人間関係について治療を含めた観点から解説する（森田）
- 第9回 老年期の位置づけとコミュニケーションの基本
- 第10回 老年期の課題とコミュニケーション方法 - 認知症の特徴と対応について -
- 第11回 老年期の方へのコミュニケーション方法 - 老人保健施設での集団療法、回想法、コラージュ療法 -
- 第12回 老年期の知的機能 - 認知症について（阪本）
- 第13回 老年期の知的機能 - 認知症のケアについて（阪本）
- 第14回 死への対応 1（講師非公表）
- 第15回 死への対応 2（講師非公表）

■ 評価方法

森田：出席70% レポート30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

森定・阪本 講義前あるいは講義後にレポートを課します。各自しっかりと取り組んでください。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：ユマニチュード入門
 著者名：ロゼット マレスコッティ
 出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	学習・認知心理学Ⅰ（感覚・知覚・学習・記憶）	担当者	芦高 勇気		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学びます。前期は感覚・知覚・学習・記憶についてお話しします。

■ 到達目標

人間がどのように外の世界をとらえているのか（感覚・知覚）、またどのように新しい行動や知識を獲得していくのか（学習・記憶）を理解することを目標とします。

■ 授業計画

- 第1回 心理学とは何か？
- 第2回 感覚の分化と統合Ⅰ（感覚・知覚）
- 第3回 感覚の分化と統合Ⅱ（感覚・知覚）
- 第4回 視知覚Ⅰ（感覚・知覚）
- 第5回 視知覚Ⅱ（感覚・知覚）
- 第6回 古典的条件付け（学習）
- 第7回 オペラント条件付け（学習）
- 第8回 強化スケジュール（学習）
- 第9回 技能学習（学習）
- 第10回 社会的学習（学習）
- 第11回 記憶の過程（記憶）
- 第12回 短期記憶（記憶）
- 第13回 長期記憶（記憶）
- 第14回 記憶の神経過程（記憶）
- 第15回 前期のまとめ

■ 評価方法

出席状況・試験の結果を総合的に評価する。（試験100％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に小テストがあります。復習をしっかりとってください。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：心理学（第4版）
 著者名：鹿取 廣人，杉本 敏夫，鳥居 修晃
 出版社：東京大学出版会

書 名：認知コントロール 認知心理学の基礎研究から教育・臨床の応用をめざして
 著者名：嶋田 博行，芦高 勇気
 出版社：培風館

■ 留意事項

授業科目	学習・認知心理学Ⅱ（思考・言語）	担当者	芦高 勇気		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学びます。後期は、より高次の認知過程を必要とする思考・言語についてお話しします。

■ 到達目標

学習・認知心理学において扱われる人間の問題解決の仕方や知識の構造（思考）、また言語を獲得するにあたり必要な認知発達（言語）に関して理解することを目指します。

■ 授業計画

- 第1回 前期のおさらい
- 第2回 問題解決（思考）
- 第3回 問題解決と認知発達（思考）
- 第4回 知識（思考）
- 第5回 推論と発見（思考）
- 第6回 言語獲得（言語）
- 第7回 非言語コミュニケーション（言語）
- 第8回 前期・後期のまとめ

■ 評価方法

出席状況・試験の結果を総合的に評価する。（試験100％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業中に小テストがあります。復習をしっかりとしてください。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：心理学（第4版）
 著者名：鹿取 廣人，杉本 敏夫，鳥居 修晃
 出版社：東京大学出版会

書 名：認知コントロール 認知心理学の基礎研究から教育・臨床の応用をめざして
 著者名：嶋田 博行，芦高 勇気
 出版社：培風館

■ 留意事項

授業科目	心理測定法	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士の仕事で用いられる各種心理測定法の意味に関する理解を深めると共に、人間の心理を客観的に把握する方法の習得を目指す。

■ 到達目標

言語聴覚士として必要不可欠な心理学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる応用力を身につけること。

■ 授 業 計 画

第1回 心理テストの特徴とテストの信頼性・再現性。
 第2回 精神物理学測定法（1）－ 調整法
 第3回 精神物理学測定法（2）－ 極限法と恒常法
 第4回 尺度構成について。
 第5回 一対比較法と感覚尺度。
 第6回 Weber の法則について
 第7回 Fechner の法則について
 第8回 Weber-Fechner の法則と音響学の関係
 第9回 Stevens のベキ法則について
 第10回 信号検出理論について
 第11回 統計学の基礎
 第12回 各種統計学の考え方
 第13回 各種心理テスト法の特徴について
 第14回 認知能力とことばの心理
 第15回 心理測定法の総復習

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間：1 時間程度
 復習時間：個人の理解度による

■ 教 科 書

不要・プリントを配布する。

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	言語学Ⅰ（音声学・形態論）	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本語という言語の特徴をよく理解し、言語障害の分析に応用する。

■ 到達目標

日本語の音声・文字について、習熟する。

■ 授業計画

日本語の音声・文字といった「表現手段」について習熟する。

- 第1回 言語とは何か
- 第2回 構音器官について
- 第3回 国際音声記号の考え方
- 第4回 発声（有声・無声）と声帯の特性
- 第5回 調音方法の詳細
- 第6回 調音位置の詳細
- 第7回 日本語の母音について
- 第8回 日本語の無声阻害音の発音について
- 第9回 日本の濁音の特徴
- 第10回 その他の日本語分節音の特徴
- 第11回 アクセントとイントネーションについて
- 第12回 東京方言とアクセント核
- 第13回 日本語のそのほかの方言アクセントとイントネーション
- 第14回 文字について
- 第15回 漢字の種類とかな文字の特徴

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間：1 時間程度

復習時間：個人の理解度による

■ 教 科 書

書 名：日本語音声学入門

著者名：斎藤純男

出版社：三省堂

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	言語学Ⅱ（文法・意味・社会言語学）	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本語という言語の特徴をよく理解し、言語障害の分析に応用する。

■ 到達目標

日本語の形態現象・文法・意味について習熟する。

■ 授業計画

日本語の持つ膠着性・主辞後置性といった性質および意味現象について理解を深める。

- 第1回 形態素の概念
- 第2回 日本語の語種について
- 第3回 同意語と下位語・語彙の構造について
- 第4回 形態素と語の関係
- 第5回 日本語の複合名詞・複合動詞について
- 第6回 動詞形態素の特性
- 第7回 テンスとアスペクト
- 第8回 ヴォイスと極性
- 第9回 特殊なヴォイスとモダリティ
- 第10回 日本語の構造
- 第11回 生成文法の考え方
- 第12回 日本語の意味について
- 第13回 比喩と言語理解
- 第14回 ムードとダイクシス
- 第15回 その他の意味現象

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間：1 時間程度

復習時間：個人の理解度による

■ 教 科 書

不要・プリントを配布する。

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	音声学	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

音声の構音と音響特性について正確な知識を習得する

■ 到達目標

発音記号・音節とモーラ・アクセントとイントネーション・音声の音響特性について習熟する

■ 授業計画

音声と言語現象について理解を深める

- 第1回 音声器官の復習
- 第2回 IPA 発音記号と構音障害の発音記号について
- 第3回 舌の特性
- 第4回 調音方法の分類
- 第5回 子音の詳細 (1)
- 第6回 子音の詳細 (2)
- 第7回 母音について
- 第8回 二重調音と二次的調音
- 第9回 各種音声変異について
- 第10回 日本語の分節音 (1)
- 第11回 日本語の分節音 (2)
- 第12回 日本語の分節音 (3)
- 第13回 母音無声化について
- 第14回 日本語のモーラと音節
- 第15回 重音節の意味
- 第16回 アクセントとイントネーション
- 第17回 東京方言名詞アクセントの特徴
- 第18回 動詞・形容詞のアクセント
- 第19回 イントネーションの詳細
- 第20回 リズム・ポーズ・話速
- 第21回 プロミネンスとインテンシティ
- 第22回 音韻論：音素の考え方
- 第23回 相補分布と最小対立
- 第24回 弁別素性と音韻理論の基本
- 第25回 音声と形態現象
- 第26回 動詞を巡る形態現象
- 第27回 ヴォイス・アスペクト・テンス・モダリティ
- 第28回 母音の音響特性に関する復習
- 第29回 子音の音響特性に関する復習
- 第30回 アクセントと基本周波数

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間：1 時間程度

復習時間：個人の理解度による

■ 教 科 書

書 名：日本語音声学入門
著者名：斎藤純男
出版社：三省堂

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	音響学 I (一般音響学)	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

音の周波数・音圧に関する基本事項を理解する。

■ 到達目標

周波数・波長の計算、dB の計算方法とその意味することに精通する。

■ 授業計画

聴覚障害を理解する上で不可欠な概念である周波数・音圧について理解する。

- 第1回 音とは何か
- 第2回 振動の伝播と音圧波形
- 第3回 原波形の見方：音圧波形と粒子速度波形
- 第4回 周波数の可聴範囲と周波数・周期の計算
- 第5回 波長と周波数の計算
- 第6回 周波数レベル：オクターブの概念
- 第7回 音の高さ：mel 尺度
- 第8回 音の強さと音圧
- 第9回 デシベルの基本計算
- 第10回 強さレベルと音圧レベル
- 第11回 聴力レベルと聴覚検査関係
- 第12回 感覚レベルと聴覚障害
- 第13回 等ラウドネス曲線と音の大きさ
- 第14回 ソーン尺度と音圧との関係
- 第15回 複合音の特性

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間：1 時間程度
復習時間：個人の理解度による

■ 教 科 書

不要・プリントを配布する。

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	音響学Ⅱ（音響音声学・聴覚心理学）	担当者	松井 理直		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

音声の音響的特徴について理解する。

■ 到達目標

日本語音声のフォルマントをはじめとした音響特性について正しく理解する。

■ 授業計画

音声の音響的特性について

- 第1回 調波複合音と非調波複合音
- 第2回 倍音と missing fundamental
- 第3回 聴覚の時間説と場所説
- 第4回 線スペクトルと連続スペクトル
- 第5回 短時間スペクトルについて
- 第6回 音源フィルタ理論
- 第7回 声帯のスペクトルの特性
- 第8回 共鳴という現象
- 第9回 閉管と開管の共鳴特性
- 第10回 中舌母音の共鳴特性の計算
- 第11回 日本語5母音の音響特性
- 第12回 スペクトログラムと接近音の音響特性
- 第13回 摩擦音と破裂音の音響特性
- 第14回 音声知覚について
- 第15回 マスキングとデジタル音声処理

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間：1 時間程度

復習時間：個人の理解度による

■ 教 科 書

不要・プリントを配布する。

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

授業科目	言語発達学	担当者	齋藤 典昭		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

子どもの発達の中でも0歳～学齢までの言語の発達について学びます。前言語期・単語獲得期・前期構文獲得期・中期構文獲得期と進んでいきます。コミュニケーションはことばの前からあるのだろうか？どんなことばから覚えていくのだろうか？話せるようになるのはいつ頃か？字を読んだり書いたりできるのはいつ頃か？ことばを育むにはどうしたらよいのか。これらのことは、ことばの障害とどのような関係にあるのか。といったことを学びます。

■ 到達目標

1. 年齢を聞いて、その年齢の言語発達について説明できる
2. 子どもを観察し、その子の言語発達について概要を評価できる
3. 言語発達についての基礎知識を獲得したことで、言語発達障害が理解できる

■ 授 業 計 画

- 第1回 ガイダンス
発達の区分について
課題：0歳～12カ月の言語発達チャート訳出
- 第2回 0カ月～12カ月の言語発達チャート 解題
課題
- 第3回 Language - Speech - Communication の違い
表象と象徴と AAC の根拠
課題
- 第4回 Language のルールと呼ばれるものについて
AAC の機器紹介
0カ月～6カ月のことばの育ち
課題
- 第5回 0カ月～6カ月のことばの育ち
喃語について
課題
- 第6回 喃語について
DVD 視聴
6カ月～12カ月のことばの育ち
- 第7回 初語について
ポインティングの重要性について
- 第8回 言語音知覚の発達
課題
- 第9回 復習：前言語期のことばの発達
課題
- 第10回 語彙獲得の第1段階
12カ月～18カ月のことばの育ち
- 第11回 語彙獲得の第2段階
18カ月～24カ月のことばの育ち
課題
- 第12回 24カ月～36カ月のことばの育ち
会話・語り、かんしゃく、構音ほか
課題

■ 授業計画

- 第13回 3歳～4歳のことばの育ち
課題
- 第14回 4歳～5歳のことばの育ち
会話の発達
課題
- 第15回 語りの発達
語意味の獲得
Red Flags

■ 評価方法

課題提出10%, 授業準備10%, 筆記試験80% で評価する.

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

当校の Learning Management System である Moodle とインターネット上にあるブログを活用しますので、操作に慣れておいてください.

授業計画の詳細ほかの情報もそちらに載せますのでよろしくお願いします.

ブログの指定した部分を読んで内容の要点を把握しておいてください.

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学

著者名：今泉 敏ほか

出版社：医学書院

書 名：教材：ブログ playing with words 365 の記事 speech and language 101 など

著者名：Katie

出版社：<http://www.playingwithwords365.com>

■ 参考図書

書 名：子どもとことば

著者名：岡本夏木

出版社：岩波新書 黄版

書 名：ちいさな言葉

著者名：俵 万智

出版社：岩波書店

書 名：言葉をおぼえるしくみ

著者名：今井むつみ, 針生悦子

出版社：ちくま学芸文庫

■ 留意事項

授業科目	リハビリテーション概論	担当者	大西 環・齋藤典昭・大根茂夫 工藤芳幸・中村靖子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーションの概要についての講義と言語聴覚障害の方との対話会を行う。

■ 到達目標

リハビリテーションの考え方について知る。

言語聴覚障害者とのコミュニケーションについて理解を深め、コミュニケーションに関する自己の課題を知る。言語聴覚障害の方との対話を通して、リハビリテーションへの取り組みや生活の実際を知る。

■ 授業計画

- 第1回 リハビリテーションとは
リハビリテーションの考え方とその概要
- 第2回 対話会の実施にあたって
対話会の意義と取り組むべき課題について
- 第3回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第4回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第5回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第6回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第7回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第8回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
対話会を振り返って－コミュニケーションの課題－

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループで対話会の準備を行う。また、終了後は対話会のビデオを見ながらレポートを作成する。
参加される方の時代背景（戦前・前後、それ以降）について調べておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	社会保障制度	担当者	山本 永人		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

わが国の社会保障制度の基本的な枠組みを解説する。あわせて社会福祉の理念や ICF の理解等国家試験対策も念頭に授業を構成する。

■ 到達目標

対人援助職としての言語聴覚士に求められる、基本的な社会保障の意義やありかた、その方法を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 社会福祉の定義とその専門性
- 第2回 社会福祉の基本的な理念
- 第3回 ICF（国際生活機能分類）の考え方とその方向性
- 第4回 わが国の社会福祉の歴史
- 第5回 わが国の社会保障制度の枠組み
- 第6回 社会保険制度①（医療保険）
- 第7回 社会保険制度②（年金保険）
- 第8回 社会保険制度③（労働保険）
- 第9回 高齢者福祉と介護保険①
- 第10回 高齢者福祉と介護保険②
- 第11回 公的扶助制度
- 第12回 障害者の福祉サービス①
- 第13回 障害者の福祉サービス②
- 第14回 児童の福祉
- 第15回 社会福祉の援助技術

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

それぞれの授業に該当する教科書の予習をお願いします。とくに、社会保険制度はやや難解なので参考図書に指定したものも適宜応用してください。また、単に授業をこなすのみならず、なぜ社会保障の制度や社会福祉が生まれてきたかの考え方やその背景を考察する習慣をつけてください。それとともに国家試験対策としての視点も重要です。

■ 教 科 書

書 名：よくわかる社会福祉（第10版）
 著者名：山縣文治・岡田忠克編
 出版社：ミネルヴァ書房

■ 参考図書

書 名：はじめての社会保障（第12版）
 著者名：椋野美智子・田中耕太郎著
 出版社：有斐閣アルマ

■ 留意事項

毎回、虫食い方式のプリントを配布します。国家試験対策に活用してください。

授業科目	医療福祉教育・関係法規	担 当 者	山本永人・柴田浩志・藤井達也		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

社会福祉関連の関係法規について解説する。(山本)

言語聴覚士に関連する法規、言語聴覚士法の成り立ち、聴覚障害者福祉に関する講義を行う。(柴田 藤井)

■ 到達目標

国家試験に必要な関係法規の基本的な知識を習得する。

言語聴覚士法制定までの道のりや聴覚障害者福祉の歴史と現状について知る。

■ 授 業 計 画

第1回 聴覚言語士法・社会福祉法(山本)

第2回 障害者福祉に関連する関係法規(山本)

第3回 児童福祉に関連する関係法規(山本)

第4回 公的扶助に関連する関係法規(山本)

第5回 聴覚障害者福祉の歴史と現状(柴田)

第6回 聴覚障害者を巡る状況 福祉分野の取り組みと課題(柴田)

第7回 言語聴覚士法の歴史(藤井)

第8回 職能組織について(藤井)

■ 評 価 方 法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

社会保障制度の授業と関連して授業を行います。とくに、関連法規に関しては、国家試験対策としてもできるだけ原文に触れる習慣を作ってください。

■ 教 科 書

書 名:よくわかる社会福祉(第10版)

著者名:山縣文治・岡田忠克編

出版社:ミネルヴァ書房

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	言語聴覚障害学概論	担当者	大西 環・齋藤典昭・大根茂夫 工藤芳幸・中村靖子・森田婦美子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・神経系、発声発語器官、頭頸部解剖学への導入
- ・言語聴覚療法の各領域の臨床について現任者が講義を行う。
- ・I 期実習ガイダンス

■ 到達目標

- ・神経系や発声発語器官、頭頸部の概要を理解する。
- ・さまざまな臨床現場における言語聴覚療法の臨床を知る。
- ・実習に先だち、言語聴覚士として必要な各領域の知識や技術の基礎的事項を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 言語聴覚障害とは
- 第2回 神経系の解剖学
- 第3回 発声発語器官の解剖学
- 第4回 頭頸部の解剖学
- 第5回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る (1)
- 第6回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る (2)
- 第7回 言語聴覚士の役割とは ディスカッション
- 第8回 言語聴覚士の役割とは ディスカッション
- 第9回 言語聴覚士の役割とは ディスカッションと課題学習
- 第10回 言語聴覚士の役割とは ディスカッションと課題学習
- 第11回 言語聴覚士現場の声をきく会から学んだこと 発表
- 第12回 I 期実習ガイダンス バイタルサインのみかた (1)
- 第13回 I 期実習ガイダンス バイタルサインのみかた (2)
- 第14回 I 期実習ガイダンス 感染症について (1)
- 第15回 I 期実習ガイダンス 感染症における注意点 (2)

■ 評価方法

小テスト 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループでの課題を課す。積極的に参加すること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル
著者名：小寺富子監修
出版社：協同医書出版社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	言語聴覚障害診断学	担当者	森田婦美子・高木卓司 ST専任教員 ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた評価法について解説する。
- ②臨床現場に出るために必要な知識や技術、リハビリテーションの考え方について学ぶ。特に評価に必要な事柄に焦点をあてて講義する。

■ 到達目標

- ①ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた適切な評価法である標準ディサースリア検査を適切に実施できるようにする。
- ②臨床現場で「評価」を行うために必要な知識と技術を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した評価について（講師非公表）
- 第2回 発話の聴覚的評価（講師非公表）
- 第3回 呼吸機能の評価（講師非公表）
- 第4回 発声機能の評価（講師非公表）
- 第5回 鼻咽腔閉鎖機能の評価（講師非公表）
- 第6回 口腔構音機能の評価（舌・口唇）（講師非公表）
- 第7回 口腔構音機能の評価（交互反復運動、筋力）（講師非公表）
- 第8回 症例報告書の作成とまとめ（講師非公表）
- 第9回 嚥下実習の目標設定について
日本のリハケアの現状紹介～スウェーデンとの比較を通して～（高木）
- 第10回 経管栄養と経口摂取の違い、経口摂取、倫理的意義について（高木）
グループディスカッション及び現場の視点、世間の価値観からの解説
- 第11回 嚥下実習（ST専任教員）
- 第12回 評価実習ガイダンス カルテのみかた（森田）
- 第13回 評価実習ガイダンス 小児臨床講義（ST専任教員）
- 第14回 評価実習ガイダンス 成人臨床講義（ST専任教員）
- 第15回 評価実習ガイダンス レポートの書き方ほか（ST専任教員）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に指定テキストの評価項目に目を通しておくことを推奨する。
評価実習ガイダンスでは、グループワークを課す。その活動を通して、「評価」に関する学習、検査の練習などを十分行うこと。

■ 教 科 書

書 名：標準ディサースリア検査
著者名：西尾正輝
出版社：インテルナ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	言語聴覚障害特論	担当者	山本一郎・名徳倫明・江頭智香子 五味田裕・大西 環 ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた訓練法について解説する。（講師非公表）
- ・口腔の果たす2大機能である食べるということ、話すことについてその発生と発達について学ぶ。（山本）
- ・言語聴覚療法や摂食・嚥下療法を行うに当たって知っておくべき薬の知識について学ぶ。（名徳 五味田）
- ・虐待問題について講義を行う。（江頭）
- ・国家試験を想定し、領域別問題に取り組む。（大西）

■ 到達目標

- ・ディサースリア（運動障害性構音障害）の障害レベルに応じた適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。ディサースリアの検査の評価データから総合的な分析を適切に行ない、訓練立案が出来るようにする。（講師非公表）
- ・発生と発達の視点から口腔機能を学び、様々な病態に対処できる知識を養う。（山本）
- ・薬に関する基礎知識を身につける。（名徳 五味田）
- ・虐待問題について理解を深める。
- ・国家試験の受験にあたって受験対策を立て、実践できるようになる。（大西）

■ 授 業 計 画

- 第1回 総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した訓練について（講師非公表）
- 第2回 呼吸機能の治療アプローチ（講師非公表）
- 第3回 発声機能の治療アプローチ（講師非公表）
- 第4回 鼻咽腔閉鎖機能の治療アプローチ（講師非公表）
- 第5回 口腔構音機能の治療アプローチ（講師非公表）
- 第6回 発話速度の調節法1（講師非公表）
- 第7回 発話速度の調節法と構音訓練など（講師非公表）
- 第8回 まとめ（講師非公表）
- 第9回 顔面・口腔の発生
口腔機能の発達（山本）
- 第10回 唇顎口蓋裂児における哺乳・摂食障害とその対処法（山本）
- 第11回 唇顎口蓋裂児者における異常構音の分析と治療について
エレクトロパラトグラフィー（EPG）を用いた異常構音の分析と治療について（山本）
- 第12回 薬の基礎知識①用法・用量など（名徳）
- 第13回 薬の基礎知識②副作用・相互作用など（名徳）
- 第14回 薬の薬理作用（摂食・嚥下に影響する薬剤）（名徳）
- 第15回 輸液の基礎と栄養（名徳）
- 第16回 STの臨床と薬剤 1（五味田）
脳血管障害、精神科領域、神経内科領域の薬物治療について
発達障害の薬物治療
- 第17回 STの臨床と薬剤 2（五味田）
生活習慣病と薬物治療
下剤、睡眠導入剤、薬物乱用、喫煙による健康被害など
- 第18回 子ども虐待 歴史、制度の変遷、虐待の種類（江頭）
- 第19回 虐待に関わる発達の課題（被虐待児の心理的特徴等）（江頭）
- 第20回 虐待を取り巻く社会的背景（江頭）
- 第21回 虐待に対しての対応 被虐待児の支援について（江頭）

■ 授 業 計 画

- 第22回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～ (大西)
領域別問題の実践とフィードバック 1
- 第23回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～ (大西)
領域別問題の実践とフィードバック 2
- 第24回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～ (大西)
領域別問題の実践とフィードバック 3
- 第25回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～ (大西)
領域別問題の実践とフィードバック 4
- 第26回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～ (大西)
領域別問題の実践とフィードバック 5
- 第27回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～ (大西)
領域別問題の実践とフィードバック 6
- 第28回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～ (大西)
領域別問題の実践とフィードバック 7
- 第29回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～ (大西)
領域別問題の実践とフィードバック 8
- 第30回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～ (大西)
領域別問題の実践とフィードバック 9

■ 評 価 方 法

成績は、定期試験100%の結果にて評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に指定テキストの基礎編（前半）に目を通しておくことを推奨する。

■ 教 科 書

書 名：標準ディサースリアテキスト
著者名：西尾正輝
出版社：医歯薬出版

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	失語症Ⅰ（基礎）	担当者	大西 環		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症とはどのような言語障害であるか、基礎的な内容を中心に講義を行う。

■ 到達目標

失語症の言語症状やタイプ分類等、失語症の基礎および観察の仕方を理解する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 失語症とは
定義とその障害の特徴
臨床の流れ
- 第2回 失語症の言語症状 流暢性発話と非流暢性発話
- 第3回 失語症の言語症状 認知神経心理学的モデルについて
- 第4回 失語症の言語症状 発話症状（各症状と用語の解説）
- 第5回 失語症の言語症状 発話症状（各症状と用語の解説）
- 第6回 失語症の言語症状 聴覚的理解障害（各症状と用語の解説）
- 第7回 失語症の言語症状 読み書きの障害（各症状と用語の解説）
- 第8回 失語症のタイプ分類 古典分類の各タイプについて解説
- 第9回 失語症のタイプ分類 古典分類の各タイプについて解説
- 第10回 失語症のタイプ分類 皮質下性失語、交叉性失語、小児失語 ほか
- 第11回 純粹失読と失読失書
- 第12回 症状の観察の仕方
- 第13回 症状の観察の仕方
- 第14回 復習
- 第15回 まとめ

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後は復習し、疑問点は次回の授業時に質問すること。

■ 教 科 書

書 名：脳卒中後のコミュニケーション障害
著者名：竹内愛子、河内十郎 編著
出版社：協同医書出版社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	失語症Ⅱ（評価）	担 当 者	大根 茂夫・中村 靖子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症の治療・訓練・指導に必要な各種失語症検査法の概略を学ぶ。
検査から評価の仕方、結果の解釈の仕方、訓練法の立案を学ぶ。
各種失語症検査を標準的な実施方法で実施できるように演習を行う。

■ 到達目標

各種失語症検査の概要を知る。
各種失語症検査および関連検査を標準的な方法で実施できる。
検査結果から、結果の解釈、問題点の抽出、訓練の立案ができる。
評価報告書が書ける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 急性期・回復期・維持期の失語症患者の容態、医学的情報の収集の仕方、面接の仕方
- 第2回 スクリーニング検査の意義と実施方法
- 第3回 標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
- 第4回 WAB 失語症検査の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
- 第5回 失語症鑑別診断検査の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
- 第6回 重度失語症検査の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
- 第7回 標準失語症検査補助検査（SLTA－ST）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
- 第8回 SALA 失語症検査の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
- 第9回 失語症語彙検査の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
- 第10回 実用コミュニケーション能力検査（CADL）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
- 第11回 標準抽象語理解力検査の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
- 第12回 掘り下げ検査（失語症構文検査、トークンテスト）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
- 第13回 掘り下げ検査（語音弁別検査、モーラ分解・抽出検査）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた
- 第14回 鑑別診断、経過と予後、訓練・援助の方針の決定
- 第15回 評価サマリーの書き方

■ 評価方法

筆記試験（100点満点）、実技試験（100点満点） 筆記試験、実技試験とも60点以上が合格

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で各種検査法の手技の説明を受けた後、学生同士でペアを作り、お互いに検査者、被検者になり検査練習を行うこと。ペアを変え、3例以上の検査を行い、記録用紙を担当教員に提出すること。検査練習は空き時間を有効に使うこと。
すべての検査マニュアルを熟読し暗記すること。

■ 教科書

書 名：標準失語症検査マニュアル 改訂第2版

著者名：日本高次脳機能障害学会（旧 日本失語症学会）

出版社：新興医学出版社

書 名：なるほど!失語症の評価と治療 –検査結果の解釈から訓練法の立案まで–

著者名：編著 小嶋知幸 執筆 大塚裕一 宮本恵美

出版社：金原出版株式会社

■ 参考図書

書 名：失語症 Q & A 検査結果のみかたとリハビリテーション

著者名：種村 純

出版社：新興医学出版社

■ 留意事項

必要に応じて各種失語症検査の実施方法を習得するための補講を行います。

授業科目	失語症Ⅲ（訓練）	担当者	林 正弘		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症を改善させる訓練法の習得、さらに失語症の障害構造の仮説を設定し、その考察に基づいた対処や訓練の選択方法を学習します。

■ 到達目標

単なる知識ではなく、実際にアプローチをするための評価から、訓練プランの立案までを学習します。

■ 授 業 計 画

- 第1回 臨床の中での失語
- 第2回 失語症臨床の目標
- 第3回 評価の目的と着眼点
- 第4回 失語症訓練の歴史とエビデンス
- 第5回 訓練法1 伝統的刺激法
- 第6回 訓練プランの構築方法
- 第7回 ビデオ症例1
- 第8回 訓練法2 遮断除去法
- 第9回 ビデオ症例2
- 第10回 失語にまつわる諸問題 ビデオ症例3
- 第11回 発話障害（発語失行）
- 第12回 訓練法3 機能再編成法
- 第13回 ビデオ症例4
- 第14回 訓練法4 実用的代償法
- 第15回 訓練計画と訓練手続き

■ 評価方法

出席状況と筆記試験

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

配布資料による予習、復習 症例 VTR での評価練習

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	失語症Ⅳ（臨床講義）	担 当 者	大根茂夫・中村靖子・大西 環		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

①失語症者の機能障害・能力障害・社会参加、QOLについて考え、支援のポイントを学ぶ。②失語症者に対し、スクリーニング検査、総合的失語症検査、掘り下げ検査を実施し、評価、訓練プログラムの立案、訓練までを行い、グループで報告書を作成し発表する。適宜次の内容を指導する。（失語症回復の理論と介入の実際、回復時期に合わせた援助、ゴール設定とプログラム立案、訓練の実施、評価報告書の作成）

■ 到達目標

各種失語症検査が標準的な実施方法で実施できる。
検査結果から評価（結果の解釈、問題点の抽出）ができる。
問題点に対し具体的な訓練法を立案できる。
訓練に必要な教材を作成し、訓練を実施できる。
評価報告書を作成し発表できる。

■ 授 業 計 画

第1回	臨床講義1回目	セッションの準備
第2回	臨床講義1回目	失語症者に検査を実施する
第3回	臨床講義1回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第4回	臨床講義2回目	セッションの準備
第5回	臨床講義2回目	失語症者に検査を実施する
第6回	臨床講義2回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第7回	臨床講義3回目	セッションの準備
第8回	臨床講義3回目	失語症者に検査を実施する
第9回	臨床講義3回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第10回	臨床講義4回目	セッションの準備
第11回	臨床講義4回目	失語症者に検査を実施する
第12回	臨床講義4回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第13回	臨床講義5回目	セッションの準備
第14回	臨床講義5回目	失語症者に検査を実施する
第15回	臨床講義5回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック 最終会終了後にグループ毎に症例レポートを作成する。

■ 評価方法

症例レポート 50% 筆記試験 50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

基本的にはグループ活動であるので、各自が積極的に意見を出し合い、レポートにまとめること。他人任せにしない。

本授業は総合的な学習であるので、失語症Ⅰ～Ⅲで学習した内容が基礎となる。実際の患者様に検査を行い、評価・訓練を考えていくためには、基礎知識が重要であり、Ⅰ～Ⅲの復習とともに、さらに基礎知識を広げていくことが必要である。また、積極的に研究論文を読み込んでいく必要もある。

■ 教 科 書

書 名：失語症臨床ガイド症状別－理論と42症例による訓練・治療の実際
著者名：竹内愛子編集
出版社：協同医書出版社

■ 参 考 図 書

書 名：失語症者の実用コミュニケーション臨床ガイド
著者名：竹内愛子編集
出版社：協同医書出版社

■ 留 意 事 項

活発なグループワーク・質問・討議を期待します。

授業科目	高次脳機能障害Ⅰ（概論）	担当者	森岡 悦子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、高次脳機能のうち特に注意機能と記憶機能について、知識、評価方法、分析方法を理解し、高次脳機能障害の症状の基本的な捉え方を学ぶ。

■ 到達目標

注意機能と記憶機能について基本的内容を説明できるようになる。また、評価結果を分析することで、症状の全体像をとらえることができるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害の概要：高次脳機能に関わる中枢神経系の機能と大脳の情報処理
- 第2回 注意機能の基本概念
- 第3回 注意機能の特性と他の高次脳機能への影響
- 第4回 注意機能の評価と分析
- 第5回 記憶の種類と記憶障害の病態
- 第6回 記憶のメカニズムと障害部位による症状の違い
- 第7回 記憶障害の評価と分析
- 第8回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験80%、授業内提出10%、小テスト10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業の中で、特に重要な箇所を確認するので、次の授業までによく復習してきて下さい。また、予習が必要な場合は適宜伝えますので、準備をしてきて下さい。

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学
 著者名：藤田郁代 監修
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

授業科目	高次脳機能障害Ⅱ（評価）	担当者	森岡 悦子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、高次脳機能障害の基礎的な症状を理解するとともに、評価およびその分析方法を学び障害機序を考察することにより、臨床的視点から障害を理解する。

■ 到達目標

高次脳機能障害の各検査を正しく実施することができるようになる。また、その検査結果を適切に分析できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害の概論の復習
- 第2回 高次脳機能に関わる中枢神経系の機能と大脳の情報処理
- 第3回 失行、行為・行動の障害：病態
- 第4回 失行、行為・行動の障害：評価
- 第5回 失認と関連症状（1）：視覚モダリティにおける失認、視覚性失認と視覚性失語
- 第6回 失認と関連症状（2）：相貌失認と地誌的検討識障害
- 第7回 失認と関連症状（3）：大脳損傷による聴覚障害と触覚障害
- 第8回 視空間障害（1）：半側空間無視、構成障害、バリント症候群
- 第9回 視空間障害（2）：視空間障害の評価（目的と実施手順の理解）
- 第10回 視空間障害（3）：視空間障害の評価結果の分析
- 第11回 身体意識と病態認知の障害：ゲルストマン症候群と病態失認
- 第12回 遂行機能障害：概要と前頭葉との関連
- 第13回 遂行機能障害：評価と分析
- 第14回 脳梁離断：脳の側性化と脳梁の連絡
- 第15回 外傷性脳損傷による高次脳機能障害、認知コミュニケーション障害

■ 評価方法

定期試験80%、演習への取り組み20%で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業の中で特に重要な箇所を確認するので、次の授業までによく復習してきて下さい。また、予習が必要な場合は適宜伝えますので、準備をしてきて下さい。

■ 教 科 書

書 名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学
 著者名：藤田郁代 監修
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	高次脳機能障害Ⅲ（臨床）	担当者	森岡 悦子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義は、検査結果と脳画像の情報を基に、高次脳機能障害の機序を考察し、症状の把握において臨床的応用力を高めることを目的とする。

■ 到達目標

脳画像の情報から病変を特定し、高次脳機能障害の評価を適切に分析し症状を考察し、障害機序に基づいて症状把握ができるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害の症状、評価・分析（復習）
- 第2回 高次脳機能障害の症状、評価・分析（復習）
- 第3回 認知症の症状、評価・分析
- 第4回 画像診断学（1） 脳画像検査の種類と特徴 水平断における主な脳溝と脳回の同定
- 第5回 画像診断学（2） 水平断、冠状断、矢状断における主要領域の同定
- 第6回 画像診断学（3） 脳画像と評価結果から高次脳機能障害の症状と障害機序を考察する（典型例）
- 第7回 画像診断学（4） 脳画像と評価結果から高次脳機能障害の症状と障害機序を考察する（応用例）
- 第8回 まとめ

■ 評価方法

定期試験80%、小テスト20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業の中で、特に重要な箇所を確認するので、次の授業までによく復習してきて下さい。また、予習が必要な場合は適宜伝えますので、準備をしてきて下さい。

■ 教 科 書

書 名：高次脳機能障害学マエストロシリーズ ②
 著者名：三村将、早川裕子、石原健司 ほか著
 出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：CT・MRI 画像解剖ポケットアトラス 第4版Ⅰ巻 頭部・頸部
 著者名：町田 徹、小久保 亨
 出版社：メディカル・サイエンス・インターナショナル

■ 留 意 事 項

授業科目	言語発達障害Ⅰ（援助法－基礎）	担当者	齋藤 典昭・工藤 芳幸		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

対人援助職として仕事を進めていく上で必要な基礎技術（コミュニケーションスキル、観察技術、観察内容を記述する技術など）について学ぶ。第1回～第7回は齋藤、第8回～第15回は工藤が担当する。

■ 到達目標

1. 臨床実習で適切な接遇ができる
2. 基本的な行動観察や記述の視点・方法を習得する。

■ 授 業 計 画

- 第1回 上手なコミュニケーションについて学ぶ：
あいさつ、非言語的技術、言語的技術（齋藤）
- 第2回 上手なコミュニケーションについて学ぶ：
傾聴、共感、返信（齋藤）
- 第3回 上手なコミュニケーションについて学ぶ：
心理的防衛機制、コーピングスタイル、リフレーミング（齋藤）
- 第4回 上手なコミュニケーションについて学ぶ：
転移、患者さんの理解度をアップするスキル（齋藤）
- 第5回 上手なコミュニケーションについて学ぶ：
危機的状態にある患者さんの心理を理解する（齋藤）
- 第6回 上手なコミュニケーションについて学ぶ：
面接の逐語録（1、2）を読んで考える（齋藤）
- 第7回 上手なコミュニケーションについて学ぶ：
面接の逐語録（3、4）を読んで考える（齋藤）レポート課題提示
- 第8回 観察記録の文章作成法（講義・演習）（工藤）
- 第9回 観察記録の視点（保育所見学実習に向けて）・文章作成法演習（工藤）
- 第10回 観察記録のまとめ方1（保育所見学実習の記録を用いた演習・記録を再検討する）（工藤）
- 第11回 観察記録のまとめ方2（保育所見学実習の記録を用いた演習・リライトする）（工藤）
- 第12回 複数の事象の関係をまとめる・実践に向けた記録法（講義・演習）（工藤）
- 第13回 ロールプレイ or VTR 視聴を用いた観察記録演習1（ライブで記録を取る）（工藤）
- 第14回 ロールプレイ or VTR 視聴を用いた観察記録演習2（リライトする）（工藤）
- 第15回 ロールプレイ or VTR 視聴を用いた観察記録演習3（ライブで記録を取り、整理する）（工藤）

■ 評価方法

上手なコミュニケーションについては提出物10%、定着した知識を問う筆記試験40%で評価する。
記録法については提出物50%で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

齋藤担当部分については、資料の指定した部分について事前に読み内容を把握しておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：逐語で学ぶ21の技法 対人援助のための相談面接技術

著者名：岩間伸之

出版社：中央法規

書 名：治療・援助における二つのコミュニケーション

著者名：山根 寛

出版社：三輪書店

書 名：子ども理解のメソドロジー 実践者のための「質的实践研究」ガイドブック

著者名：中坪史典

出版社：ナカニシヤ出版

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅱ（概論）	担当者	齋藤 典昭・吉田 紀子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語発達障害の基礎的な概念と各障害の特性を学ぶ。

保育への参加をとおして子どもについての知識を広げ、記録を作成する。第1回～第10回は吉田、第11回～第15回は齋藤が担当する。

■ 到達目標

1. さまざまな言語発達障害の概念と特性を理解し、それぞれの言語発達障害について概要を説明できる。
2. 子どもの遊びや様子を観察して記録することができる。

■ 授業計画

- 第1回 小児の発達と言語発達障害概論
- 第2回 知的障害
- 第3回 自閉症スペクトラム障害①
- 第4回 自閉症スペクトラム障害②
- 第5回 注意欠陥多動性障害①
- 第6回 注意欠陥多動性障害②
- 第7回 学習障害／発達性ディスレクシア①
- 第8回 学習障害／発達性ディスレクシア②
- 第9回 特異的言語発達障害
- 第10回 言語発達障害のまとめ
- 第11回 保育所見学学習 観察記録提出（齋藤）
- 第12回 姿勢・運動の発達（齋藤）
- 第13回 脳性麻痺 概念（齋藤）
- 第14回 脳性麻痺 生活上の困難（齋藤）
- 第15回 拡大・代替コミュニケーション（AAC）基礎

■ 評価方法

提出物（保育所見学学習レポート）10%、筆記試験90% で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前に該当する言語障害について教科書を読んでおくこと。

■ 教 科 書

書 名：絵でわかる言語障害

著者名：毛束真知子

出版社：学研

書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害

著者名：藤田郁代 監修

出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：発達障害の子どもの「ユニークさ」を伸ばすテクノロジー

著者名：中邑賢龍

出版社：中央法規

書 名：作業療法士が行う IT 活用支援

著者名：宮永敬一，田中勇次郎 編著

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：タブレット PC・スマホ時代の子どもの教育

著者名：中邑賢龍，近藤武夫 編著

出版社：明治図書

書 名：DVD 親と教師のための 自閉症の人が見ている世界（全3巻）

著者名：朝日新聞厚生文化事業団

出版社：朝日新聞厚生文化事業団

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅲ（評価法—基礎）	担当者	山本 良平		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

精神発達に遅れやつまずきを持つ児・者に対して、正確なアセスメントを行って特性を把握し支援計画を立て、効果をみていく必要がある。そのアセスメントツールのひとつが新版 K 式発達検査2001であり、本実習では、この検査の開発とその背景、実施法を学ぶ。

■ 到達目標

新版 K 式発達検査2001の歴史、成り立ち、実施法を学び、実施結果の処理が正しくできるようになり、臨床現場での活用を目指す。

■ 授業計画

- 第1回 発達検査の歴史、K式発達検査の成り立ちと標準化
- 第2回 新版 K 式発達検査2001 検査実施手引き書・検査用紙の見方、検査用具の紹介
- 第3回 新版 K 式発達検査2001 ～乳児期～ 第1葉～2葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
- 第4回 乳児の検査；ビデオから反応記録・検査結果の整理
- 第5回 新版 K 式発達検査2001 ～幼児期～ 第3葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
- 第6回 幼児の検査①：ビデオから反応記録・検査結果の整理
- 第7回 幼児の検査②：ビデオから反応記録・検査結果の整理
- 第8回 新版 K 式発達検査2001 ～幼児期～ 第4葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
- 第9回 幼児の検査③；ビデオから反応記録・検査結果の整理
- 第10回 幼児の検査④；ビデオから反応記録・検査結果の整理
- 第11回 幼児の検査⑤；非定型発達の場合
- 第12回 新版 K 式発達検査2001 ～小学生以上～ 第5・6葉：各項目の実施手順・正答基準の説明
- 第13回 小学生以上の検査①；ビデオから反応記録・検査結果の整理
- 第14回 小学生以上の検査②；ビデオから反応記録・検査結果の整理
- 第15回 小学生以上の検査③；非定型発達の場合 検査記録と生活状況

■ 評価方法

授業中の事例ビデオ記録結果（50%），出席状況（無断欠席や遅刻はマイナス評価）（50%）などの結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

自習上の注意：

- (1) 健常児者の発達、PDD・ADHD・LDなどの発達障害、知的障害など、基本的な事項について知っておくこと。
- (2) 次の授業で学ぶ予定の範囲の実施手引き書・検査記録用紙・検査用具に目を通しておく。

■ 教 科 書

書 名：新版 K 式発達検査2001 実施手引き書
 著者名：編著者 生澤雅夫・松下 裕・中瀬 惇
 出版社：京都国際社会福祉センター

■ 参考図書

書 名：新版 K 式発達検査法2001年版 発達のアセスメントと支援
著者名：編著者 松下 裕・郷間英世
出版社：ナカニシヤ出版

■ 留意事項

各回 3 コマ連続。実習科目であることから、全授業への出席、および授業中指定された全課題の提出を求めます。

授業科目	言語発達障害Ⅳ（評価法 - 各論）	担 当 者	工藤 芳幸・齋藤 典昭		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

スクリーニング検査として「遠城寺式乳幼児分析的発達検査法」、発達検査として「乳幼児精神発達検査」「新版 K 式発達検査2001」、言語検査として「国リハ式 <S-S 法> 言語発達遅滞検査」「質問－応答関係検査」を学ぶ。
 新版 K 式発達検査2001については言語発達障害Ⅲで学んだ内容を踏まえて検査実技から所見作成までを行う。

■ 到達目標

1. 各検査の概要を述べることができる
2. 各検査を実施することができる
3. 検査所見を作成することができる

■ 授 業 計 画

- 第1回 「国リハ式 <S-S 法> 言語発達遅滞検査」 考え方と理論（齋藤）
 第2回 「国リハ式 <S-S 法> 言語発達遅滞検査」 考え方と理論，学生同士で演習（齋藤）
 第3回 「国リハ式 <S-S 法> 言語発達遅滞検査」 学生同士で演習（齋藤）
 第4回 「国リハ式 <S-S 法> 言語発達遅滞検査」 ロールプレイ（齋藤）
 第5回 「国リハ式 <S-S 法> 言語発達遅滞検査」 記録方法，検査のまとめ，評価のまとめ（齋藤）
 第6回 「質問－応答関係検査」「FOSCOM」（齋藤）
 第7回 遠城寺式乳幼児分析的発達検査法（齋藤）
 第8回 新版 K 式発達検査2001検査実技（工藤）
 第9回 新版 K 式発達検査2001プロフィール作成演習（工藤）
 第10回 検査所見作成演習（工藤）
 第11回 検査実施報告書作成演習（工藤）
 第12回 新版 K 式発達検査2001検査実技（工藤）
 第13回 新版 K 式発達検査2001プロフィール作成演習（工藤）
 第14回 検査所見作成演習（工藤）
 第15回 検査実施報告書作成演習（工藤）

■ 評 価 方 法

齋藤担当部分については課題提出物40%，グループワーク参加10% で評価する。
 工藤担当分については新版 K 式発達検査の検査結果及び報告書提出 2 回分で50%で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

新版 K 式発達検査の演習形式の講義については、言語発達障害Ⅲ（検査法）の該当箇所と検査マニュアルを復習し、実際の検査場面の記録と結果処理の仕方（採点や計算など）を確認しておいて下さい。演習は検査を実施する学生と観察室から検査用紙に記載する学生に分けます。実施する学生については、事前に担当教員との相談をして下さい。（工藤）

■ 教 科 書

書 名：言語発達遅滞の言語治療 改訂 2 版
 著者名：小寺富子
 出版社：診断と治療社

■ 参考図書

書 名：新版 K 式発達検査法2001年版 発達のアセスメントと支援

著者名：松下裕，郷間英世

出版社：ナカニシヤ出版

書 名：発達相談と新版 K 式発達検査 —— 子ども・家族支援に役立つ知恵と工夫

著者名：大島剛，川畑隆，伏見真理子 ほか

出版社：明石書店

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅴ（援助法-各論）	担当者	工藤 芳幸・ネグロンちひろ 松下真一郎・中山 清司		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

発達障害の特性と臨床的な視点・支援・介入について学ぶ。発達障害の状態像の概要とアセスメント（検査解釈を含む）、コミュニケーション支援については工藤が担当する。適宜、映像資料やケーススタディなども取り入れる予定である。松下は、自閉症スペクトラムの認知特性および、その特性による行動を先行研究より紹介し、自閉症スペクトラムに対しての多面的な理解を促したい。また、その特性を踏まえた臨床的なアプローチについて紹介する。ネグロンは代表的な介入技法のひとつである応用行動分析（ABA）に基づくアプローチについて講義をする。中山は TEACCH を背景として、ASD 児者のライフステージや地域生活支援などを講義する。

■ 到達目標

- ①各障害特性の知識（復習も含む）と一般的な説明理論の知識習得。
- ②発達臨床の視野を広げ、生活支援や環境調整、療育の考え方、アセスメント、介入技法を理解する。
- ③先行研究から得た情報を臨床にどうやって導入するかを知る。
- ④全ての講義終了後には、国家試験レベルの選択肢について7-8割は説明ができる。

■ 授業計画

- 第1回 知的障害・ASD・ADHD・LD等の発達の障害と言語臨床概論（工藤）
- 第2回 臨床発達心理学的な視点で言語・コミュニケーションのアセスメントと支援（工藤）
- 第3回 知能検査・発達検査・言語検査の解釈から支援を考える（工藤）
- 第4回 発達障害（ASD・ADHD）の特性理解と言語・コミュニケーション支援（工藤）
- 第5回 読み書きの障害・特異的言語発達障害の認知特性とアセスメント（工藤）
- 第6回 発達過程×個人の特性×環境とのあいだで起こる諸問題（工藤）
- 第7回 重度重複障害児者のコミュニケーション支援・暮らしの中での支援（工藤）
- 第8回 応用行動分析（ABA）による支援（ネグロン）
- 第9回 応用行動分析（ABA）による支援（ネグロン）
- 第10回 自閉症スペクトラムの認知特性と行動（松下）
- 第11回 自閉症スペクトラムへの臨床介入例（松下）
- 第12回 自閉症・発達障害の特性理解に基づく支援の基本（中山）
- 第13回 自閉症・発達障害の人への地域生活支援に関する事例検討（中山）
- 第14回 自閉症のコミュニケーションプログラムの開発（中山）
- 第15回 自閉症のコミュニケーションプログラムに関する事例検討（中山）

■ 評価方法

筆記試験100（工藤：80%、松下：20%）とする。※工藤の試験内で他の講師の内容も出題する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

1年次の言語発達障害Ⅱのレジュメ、テキスト（言語聴覚障害学）に目を通しておいで下さい。また、講義内で読んで置いて欲しい箇所については伝えます。

■ 教科書

書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害学

著者名：玉井ふみ・深浦順一 編

出版社：医学書院

書 名：自閉症支援のスタンダード Ver.2 ～余暇支援の展開～

著者名：中山清司ほか

出版社：自閉症 e サービス

■ 参考図書

書 名：絵カード交換式コミュニケーション・システム トレーニング・マニュアル 第2版

著者名：ロリ・フロスト（著），アンディ・ボンディ（著）

出版社：ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン

書 名：自閉症を持つ生徒のためのピラミッド教育アプローチ 特別支援に使える行動分析学ガイド

著者名：Ph.D. & ベス・サルザ-アザロフ，Ph.D. アンディ・ボンディ（著）

出版社：ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン

■ 留意事項

適宜、ハンドアウトを配布します。

授業科目	言語発達障害Ⅵ（援助法一応用）	担当者	非常勤講師		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

AAC の実際について学ぶ
 脳性麻痺児の姿勢・運動・コミュニケーション・摂食について学びを深める

■ 到達目標

1. AAC の適用について判断できる
2. 脳性麻痺の子どもに対して障害特性を理解した関わりができる

■ 授業計画

- 第1回 日本語版 PIC：シンボルの研究の概要、PIC シンボルの概要
 第2回 日本語版 PIC：PIC シンボルの指導方法と教材
 第3回 日本語版 PIC：事例：自閉症、知的障害
 第4回 日本語版 PIC：事例：失語症、脳性まひ
 第5回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ AAC 概論
 第6回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 理論
 第7回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 演習
 第8回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 理論
 第9回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 演習
 第10回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 当事者に来ていただき演習
 第11回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 当事者に来ていただき演習
 第12回 脳性麻痺 児の評価とアプローチ（姿勢・運動・コミュニケーション）
 第13回 脳性麻痺 児の評価とアプローチ（姿勢・運動・コミュニケーション）
 第14回 脳性麻痺 児の評価とアプローチ（コミュニケーション・摂食）
 第15回 脳性麻痺 児の評価とアプローチ（コミュニケーション・摂食）

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

脳性まひについて調べておくこと
 AAC のピクトグラムについてインターネット等で調べておくこと。

■ 教 科 書

不要

■ 参考図書

書 名：視覚シンボルでコミュニケーション 日本版 PIC 活用編
 著者名：藤澤和子
 出版社：ブレーン出版 ※絶版のようですが、Amazon 古本で260円ほどです

■ 留意事項

授業科目	言語発達障害Ⅶ（援助法－臨床）	担 当 者	齋藤 典昭		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

複数の子どもさんに協力していただき、一緒に遊び、その後で「子どもさんの課題」と関わる「学生の課題」について検討します

■ 到達目標

1. 子どもの多様性に気づくことができる
2. 子どもに合わせて上手に遊ぶことができる
3. 遊びを通じて子どもの能力を評価することができる

■ 授 業 計 画

第1回	設定第1回	設定遊びと自由遊び	A 班
第2回	設定第1回	設定遊びと自由遊び	A 班
第3回	設定第1回	フィードバックとディスカッション	
第4回	設定第2回	設定遊びと自由遊び	B 班
第5回	設定第2回	設定遊びと自由遊び	B 班
第6回	設定第2回	フィードバックとディスカッション	
第7回	設定第3回	設定遊びと自由遊び	C 班
第8回	設定第3回	設定遊びと自由遊び	C 班
第9回	設定第3回	フィードバックとディスカッション	
第10回	設定第4回	設定遊びと自由遊び	D 班
第11回	設定第4回	設定遊びと自由遊び	D 班
第12回	設定第4回	フィードバックとディスカッション	
第13回	設定第5回	設定遊びと自由遊び	E 班
第14回	設定第5回	設定遊びと自由遊び	E 班
第15回	設定第5回	フィードバックとディスカッション	
第16回	設定第6回	設定遊びと自由遊び	F 班
第17回	設定第6回	設定遊びと自由遊び	F 班
第18回	設定第6回	フィードバックとディスカッション	

■ 評価方法

子どもとの関わり20%，ディスカッションへの参加10%，各回の提出物70%で評価します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

子どもが対象なので、子どもへの声かけ、遊び方など関わり方について調べておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：自閉症児のための絵で見る構造化1, 2

著者名：佐々木正美

出版社：学研

書 名：発達障害と子育てを考える本1, 2, 3, 4

著者名：1－からだ，2－ことば，3－て・ゆび，4－きく・みる・かんじる，

出版社：ミネルヴァ書房

■ 留意事項

授業科目	音声障害	担当者	宮田 恵里・大西 環		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①正常な喉頭の解剖および呼吸と発声の仕組みを学ぶ
- ②音声障害の種類と評価方法を学ぶ
- ③音声治療の適応および実際のアプローチ方法を学ぶ
- ④音声外科と薬物療法について学ぶ
- ⑤特殊な音声障害や気管切開患者への対応を学ぶ

■ 到達目標

正常な喉頭および呼吸と発声の仕組みを学び、音声障害の生じる原因を理論的に説明出来るようになる。
患者の病態から音声治療のアプローチ方法について考察する力を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 声の特性、喉頭の解剖
- 第2回 呼吸と発声の仕組み
- 第3回 音声障害の診断と評価1
- 第4回 音声障害の診断と評価2
- 第5回 音声障害疾患の分類
- 第6回 音声障害の治療、音声治療の適応
- 第7回 音声治療の実際、間接訓練
- 第8回 直接訓練 症状対処的音声治療1
- 第9回 直接訓練 症状対処的音声治療2
- 第10回 直接訓練 包括的音声治療
- 第11回 音声外科と薬物療法
- 第12回 病態から考える音声治療
- 第13回 無喉頭音声
- 第14回 特殊な音声障害への対応、気管切開患者への対応
- 第15回 食道発声教室の見学

■ 評価方法

レポート20%・筆記試験80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義後に指示があった際にレポート提出

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚療法シリーズ14 改訂 音声障害
著者名：荻安誠、城本修編著
出版社：建帛社

■ 参考図書

書 名：STのための音声障害診療マニュアル
著者名：廣瀬肇監修
出版社：インテルナ出版

■ 留 意 事 項

授業科目	構音障害Ⅰ（臨床の基礎）	担当者	松本 治雄		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

構音の概念を理解し、正常構音の産生の過程を知る

■ 到達目標

構音障害の概念を理解し障害像を知り、その種類ごとに、その検査、分類、治療方法を知る

■ 授業計画

- 第1回 障害児音声の聞き取り
- 第2回 コミュニケーションに関わる要因と話すためのしくみと働き
- 第3回 日本語音声の成り立ち（母音）
- 第4回 日本語音声の成り立ち（子音）①
- 第5回 日本語音声の成り立ち（子音）②
- 第6回 日本語音声の成り立ち（子音）③
- 第7回 言語障害に関わる要因①
- 第8回 言語障害に関わる要因②
- 第9回 言語障害の検査と評価①
- 第10回 言語障害の検査と評価②
- 第11回 構音指導の方法①
- 第12回 構音指導の方法②
- 第13回 構音指導の方法③
- 第14回 構音指導の方法④
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

小テスト（10％）を期末テスト（90％）に加味して評価する予定

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

言語障害の仕事は知識だけでは役立たない。臨床の間では状況に合わせて、即断、即決、対象児者の状況に合わせて有効な対応をしていくことが必要不可欠である。そのためにはすべてのことを身体で覚え、判断していくことが求められている。学習した内容を身体で五感で受け入れ、身体として髄鞘化し、身体が覚え込むことである。授業時間中に取り上げた内容は常に反復練習して身体がマスターすることが必要である。

■ 教 科 書

書 名：改定機能性構音障害
著者名：本間慎治編著
出版社：建帛社

■ 参考図書

書 名：日本語音声学入門 「改訂版」
著者名：齊藤純男
出版社：三省堂

■ 留意事項

受講に際しては知識として頭で覚えるのではなく、聴覚、視覚、触覚、筋運動覚を駆使して臨床体験的に身体で身につけてもらうことを目指している。

授業科目	構音障害Ⅱ（機能性）	担当者	吉田 紀子・松本 治雄		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士が構音指導上基本として身につけるべき内容を、機能性構音障害について演習的に習得することを目指す。

■ 到達目標

- ・機能性構音障害の発生メカニズムを理解する。
- ・構音発達の過程と障害との関連を知る。
- ・障害音の種類を理解し、その記録法を知る。
- ・構音障害の検査、結果の分析、指導プログラムの立案をする。

■ 授 業 計 画

- 第1回 機能性構音障害とは（定義と関連要因）（吉田）
 第2回 幼児期の構音発達と構音の誤り（吉田）
 第3回 構音の聴き取りと記録法①（実習）（吉田）
 第4回 構音の聴き取りと記録法②（実習）（吉田）
 第5回 異常構音の種類と要因（吉田）
 第6回 異常構音の聴き取りと記録法（実習）（吉田）
 第7回 検査と結果の分析、指導プログラムの立案、教材製作①（吉田）
 第8回 検査と結果の分析、指導プログラムの立案、教材製作②（吉田）
 第9回 検査と結果の分析、指導プログラムの立案、教材製作③（吉田）
 第10回 検査と結果の分析、指導プログラムの立案、教材製作④（吉田）
 第11回 事例紹介①（松本）
 第12回 事例紹介②（松本）
 第13回 事例紹介③（松本）
 第14回 事例紹介④（松本）
 第15回 機能性構音障害について まとめ

■ 評価方法

提出物10%、筆記試験90%、なお出欠および授業態度を考慮する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後に復習をして、わからない事柄は次回の授業で質問すること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚療法シリーズ 改訂機能性構音障害
 著者名：本間 慎治
 出版社：建帛社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	構音障害Ⅲ（器質性）	担当者	藤原 百合		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

器質性構音障害（口蓋裂）について、基礎的知識、口蓋裂に伴う様々な問題点や、チームアプローチについて学ぶ。また、鼻咽腔閉鎖機能検査や構音検査の実施、治療計画の立て方や構音訓練について学ぶ。

■ 到達目標

口蓋裂について必要な評価・治療方法を理解できる。評価に基づき訓練プログラムを立てることが出来る。

■ 授業計画

- 第1回 ことばの生成、発話のプロセス
- 第2回 口蓋裂に関する基礎的な知識
- 第3回 口蓋裂言語の特徴
- 第4回 評価：口腔顔面の形態・機能
- 第5回 評価：発話の聴覚的印象
- 第6回 評価：鼻咽腔閉鎖機能
- 第7回 医学的治療（外科的・補綴的）
- 第8回 言語治療、口蓋裂治療チームにおける言語聴覚士の役割
- 第9回 訓練：機能的訓練
- 第10回 訓練：構音訓練
- 第11回 訓練：機器を用いた構音訓練
- 第12回 口蓋裂にともなうその他の問題（授乳、発達、聴覚、心理社会的問題）
- 第13回 症例検討（演習）
- 第14回 症例検討（演習）
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験（90%）、演習（10%）、出席状況（無断欠席はマイナス評価）、の結果を総合的に評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前に教科書を読んでくること。

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚障害学 発声発語障害学
 著者名：編集 熊倉勇美 小林範子 今井智子
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：目で見る構音障害
 著者名：藤原百合 山本一郎
 出版社：EPG 研究会

■ 留意事項

授業科目	構音障害Ⅳ（運動障害性）	担当者	熊倉 勇美		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

発声発語器官の解剖と機能、運動障害性と器質性の構音障害の評価、訓練法を学ぶ。

■ 到達目標

運動障害性構音障害と器質性構音障害（後天性）の評価・訓練が出来ること。

■ 授 業 計 画

- 第1回 発声発語器官の解剖と機能（発話のしくみの理解）
- 第2回 運動障害性構音障害とは、原因疾患と頻度
- 第3回 患者や家族の訴え、リハビリテーションの流れと ST の役割
- 第4回 鑑別診断、評価のポイント
- 第5回 各種検査法の考え方
- 第6回 検査法の実際（SLTA-ST）
- 第7回 画像を見ながら検査法を解説、実習
- 第8回 訓練の考え方と方法
- 第9回 画像を見ながら訓練法を解説、実習
- 第10回 補綴治療、AAC の役割と実際
- 第11回 器質性構音障害（舌がん術後）とは
- 第12回 舌がんとその治療（放射線治療、化学療法、外科治療など）
- 第13回 評価、検査法の考え方と ST の役割
- 第14回 訓練の考え方と方法
- 第15回 全体のまとめ

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義では、指定教科書の該当するページを示しながら解説するので、必ず確認、復習をすること。分からないことがあれば、講義中で良いので質問をすること。

■ 教 科 書

書 名：改訂 運動障害性構音障害
 著者名：熊倉勇美編
 出版社：建帛社

書 名：口腔・中咽頭がんのリハビリテーション－構音障害、摂食・嚥下障害－
 著者名：溝尻源太郎、熊倉勇美編
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	嚥下障害Ⅰ（基礎と評価）	担当者	大根 茂夫		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

正常嚥下のメカニズムや嚥下障害の評価等基本的な事項について学ぶ

■ 到達目標

嚥下障害の基礎的な知識を理解する
検査を実施できる

■ 授業計画

- | | | |
|------|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 第1回 | 咀嚼 | 1) 咀嚼筋 2) 下顎運動 |
| 第2回 | 摂食嚥下のメカニズム | 1) 先行期 2) 口腔準備期 3) 口腔期 4) 咽頭期 5) 食道期 |
| 第3回 | 嚥下・呼吸の神経・筋機構 | 1) 末梢神経機構 2) 中枢神経機構 3) 嚥下関連筋群 |
| 第4回 | 嚥下の年齢的变化 | 1) 新生児・乳児 2) 小児・成人 3) 高齢者 |
| 第5回 | 嚥下器官の解剖・生理 | |
| 第6回 | 嚥下障害の原因と分類 | |
| 第7回 | 嚥下障害の病態と症状（誤嚥など） | |
| 第8回 | 嚥下障害の合併症（嚥下性肺炎など） | |
| 第9回 | 検査・評価 摂食観察 | |
| 第10回 | 検査・評価 音声・構音検査 | |
| 第11回 | 検査・評価 簡易検査（反復唾液嚥下テスト、水飲みテスト、食物テストなど） | |
| 第12回 | 検査・評価 嚥下内視鏡検査（VE） | |
| 第13回 | 検査・評価 嚥下造影検査（VF） | |
| 第14回 | 検査・評価 その他の検査（超音波検査、嚥下圧検査、筋電図など） | |
| 第15回 | 検査・評価 嚥下機能検査におけるリスクと対策 | |

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

本授業で紹介した検査法・訓練法は、必ず、学生同士でペアとなり、お互いに検査者・被検者となり検査・訓練法の練習を行うこと。検査・訓練法の練習は空き時間を有効に使うこと。
授業内容は摂食嚥下リハの基盤となるので、すべて理解し覚える必要があるので、復習を怠らな事。

■ 教 科 書

書 名：実践嚥下内視鏡検査（VE）— 動画でみる嚥下診療マニュアル
著者名：大前由紀雄 西山耕一郎
出版社：インテルナ出版

書 名：深く深く知る 脳からわかる摂食・嚥下障害
著者名：馬場元毅 鎌倉やよい
出版社：学研メディカル秀潤社

■ 参考図書

書 名：よくわかる嚥下障害 改訂第3版
著者名：藤島一郎
出版社：永井書店

■ 留意事項

授業科目	嚥下障害Ⅱ（訓練と画像診断）	担当者	戸倉晶子・田上恵美子・ST教員		
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食・嚥下障害の基本的な訓練法について学び、訓練計画を考える
嚥下造影検査（VF）・嚥下内視鏡検査（VE）の目的、手順、解析方法について学習し、実際の画像を用いて症例検討を行う。

■ 到達目標

臨床上必要な知識を身につけ、手技を実践できるようになる
VF・VEの評価方法を習得し、嚥下障害の症状を理解できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 嚥下関連筋の解剖、呼吸・構音器官評価の復習（田上恵美子）
- 第2回 評価から訓練へ、間接訓練（呼吸・咳嗽など）演習（田上恵美子）
- 第3回 間接訓練（頸部・顎・シャキア・メンデルソンなど）演習（田上恵美子）
- 第4回 間接訓練（舌・口唇・軟口蓋・ガムラビングなど）演習（田上恵美子）
- 第5回 直接訓練（頸部聴診・意識嚥下・横向き嚥下・ひと口量・丸のみ・顎引き・頭頸部など）（田上恵美子）
- 第6回 直接訓練（複数回嚥下・交互嚥下・一側嚥下・姿勢など）演習（田上恵美子）
- 第7回 姿勢調整・介助法（田上恵美子）
- 第8回 経口移行の目安、段階的摂食訓練（田上恵美子）
- 第9回 嚥下造影検査の目的・手順について（戸倉晶子）
- 第10回 嚥下造影検査の解析①（戸倉晶子）
- 第11回 嚥下造影検査の解析②（戸倉晶子）
- 第12回 グループワーク：症例検討①（戸倉晶子）
- 第13回 グループワーク：症例検討②（戸倉晶子）
- 第14回 嚥下内視鏡検査による評価①（戸倉晶子）
- 第15回 嚥下内視鏡検査による評価②（戸倉晶子）

■ 評価方法

試験100%（筆記試験と実技試験）
実技試験と筆記試験ともに合格すること

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習・復習を行うこと。また、空き時間を利用して実技の練習も積極的に行い、知識と技術の習得に努めること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学
著者名：倉智雅子
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：脳卒中の摂食・嚥下障害 第2版

著者名：藤島一郎

出版社：医歯薬出版

書 名：目で見る嚥下障害－嚥下内視鏡・嚥下造影の所見を中心として

著者名：藤島一郎

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

実技試験は ST 専攻科教員が担当する。

授業科目	嚥下障害Ⅲ（事例と臨床）	担 当 者	田上恵美子・糸田昌隆・大根茂夫		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食・嚥下リハビリテーションの取り組みの実際について学ぶ
成人・高齢者における摂食・嚥下障害の病態診断とリハビリテーションの具体的対応法周辺事項への対応法

■ 到達目標

個々のケースについて評価し、訓練プランを立案できるようになる
病態別嚥下障害に関する臨床現場における具体的対応法の立案が可能になる

■ 授 業 計 画

第1回 変性疾患の嚥下障害学概論（田上恵美子）
第2回 ALS 事例による嚥下リハの進め方（田上恵美子）
第3回 ALS 事例に対する意思伝達演習（空書・読唇・50音表・透明板・読み上げ法）（田上恵美子）
第4回 パーキンソン病事例による嚥下リハの進め方（田上恵美子）
第5回 多系統萎縮症・筋ジストロフィー・重症筋無力症などの事例による嚥下リハの進め方（田上恵美子）
第6回 ST 訪問訓練について、その実際と課題（田上恵美子）
第7回 事例による嚥下リハの進め方（脳血管障害・廃用症候群）（大根茂夫）
第8回 事例による嚥下リハの進め方（脳血管障害・廃用症候群）（大根茂夫）
第9回 成人・高齢者の正常嚥下の理解Ⅰ（医療環境と制度を含む）（糸田昌隆）
第10回 成人・高齢者の正常嚥下の理解Ⅱ（糸田昌隆）
第11回 咀嚼・嚥下機能の神経・生理（糸田昌隆）
第12回 摂食・嚥下障害への具体的対応法（糸田昌隆）
第13回 摂食・嚥下障害への具体的対応法Ⅱ（糸田昌隆）
第14回 摂食・嚥下障害の栄養法を中心とした全身管理（糸田昌隆）
第15回 グループワーク：医療倫理（糸田昌隆）

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、質問等で疑問点の解決に努めること

■ 教 科 書

書 名：ケーススタディ摂食嚥下リハビリテーション in DVD ～50症例から学ぶ実践的アプローチ～
著者名：里宇明元，藤原俊之監修
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：事例でわかる摂食・嚥下リハビリテーション 現場力を高めるヒント
著者名：出江紳一，近藤健男，瀬田拓編集
出版社：中央法規

■ 留 意 事 項

授業科目	嚥下障害Ⅳ（チームアプローチ）	担当者	岡田 和子・林 直子・金子みどり 森田婦美子・大根茂夫 ほか		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食嚥下リハビリテーションに必要な知識と技術を演習を交えて学ぶ。
 気管切開後のリハビリテーションについて、気管切開の理由、気管切開後の症状、抜管に向けたリハビリテーションの具体的方法について学ぶ。また、気管切開後にみられる気管狭窄などの危険な症状についても理解する。

■ 到達目標

臨床上必要な知識を身につけ、手技を実践できるようになる。
 気管切開後のリハビリテーションを理解し、臨床場面で実施できるように習得をはかる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 栄養管理について（岡田和子）
- 第2回 嚥下について（岡田和子）
- 第3回 NST について（岡田和子）
- 第4回 カニューレの構造・役割・種類と取扱いについて（大根茂夫）
- 第5回 1. 気管切開とは 2. 気管カニューレについて
3. 気管切開患者の呼吸・発声・嚥下障害（講師非公表）
- 第6回 4. 気管切開患者の呼吸・発声・嚥下リハビリテーション方法
5. 訓練の実際（症例紹介）とその効果（講師非公表）
- 第7回 摂食嚥下障害のリハビリテーションにおいて病棟ナースがSTに期待すること①（林直子）
- 第8回 摂食嚥下障害のリハビリテーションにおいて病棟ナースがSTに期待すること②（林直子）
- 第9回 認知症を伴う方の食事介助①（金子みどり）
- 第10回 認知症を伴う方の食事介助②（金子みどり）
- 第11回 口腔ケアの実技演習（金子みどり）
- 第12回 吸引の技術と目的根拠の理解（森田婦美子）
- 第13回 吸引の手順の理解（森田婦美子）
- 第14回 吸引の演習①（森田婦美子）
- 第15回 吸引の演習②（森田婦美子）

■ 評価方法

出席50%、受講態度50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

嚥下障害についての実践的な講義である。臨床に役立てられるように授業内容を復習しておくこと。

■ 教 科 書

書 名：発声発語障害学
 著者名：藤田 郁代
 出版社：医学書院

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	吃音	担当者	土屋 美智子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

吃音児・者のおかれている現状を知り、検査、評価および指導・訓練など臨床に必要な基本的知識を習得する。

■ 到達目標

- 1) 吃音の症状、発生率、有病率、自然治癒率、進展段階やタイプ分類、原因論など基本的事項について理解できるようになる。
- 2) 臨床における基本的な評価・診断および指導・訓練について理解できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 吃音の基本的知識、吃音者の体験談
- 第2回 吃音症状
- 第3回 進展段階
- 第4回 【吃音臨床①】吃音の臨床における情報聴取項目および問診
- 第5回 【吃音臨床②】吃音検査法
- 第6回 【吃音臨床③】吃音症例の評価
- 第7回 【吃音臨床④】幼児の指導・訓練
- 第8回 【吃音臨床⑤】学童・成人の指導・訓練

■ 評価方法

筆記試験（100%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書の「ある吃音者の体験談」（P 2～5）を読んでおくこと

■ 教 科 書

書 名：改訂吃音
著者名：都筑澄夫 編著
出版社：建帛社

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	聴覚障害Ⅰ（概論）	担当者	矢吹 裕栄・山口 忍		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・聴覚障害学の基礎となる聴覚の器官の解剖と機能を確認し、難聴と聴覚検査との関係を学習する。（矢吹）
- ・成人聴覚障害の病態を知り、検査及び評価について学ぶ。（山口）

■ 到達目標

- ・聴こえの仕組みの基礎知識を習得する。難聴のタイプ分類と聴覚検査法の基礎を習得し、検査結果から難聴のタイプを推定できるようになる。（矢吹）
- ・聴覚障害をきたす疾患を知り、必要な検査の選択と評価を理解する。（山口）

■ 授 業 計 画

- 第1回 基礎用語の確認 （矢吹）
音とは何か、「きこえる」と言うこと。
- 第2回 聴覚器の解剖 （矢吹）
外耳・中耳の解剖と機能
- 第3回 聴覚器の解剖 （矢吹）
内耳の解剖・機能
- 第4回 前半のまとめと復習 （矢吹）
- 第5回 聴覚障害とは何か （矢吹）
- 第6回 難聴の分類 （矢吹）
- 第7回 聴覚検査法1 （矢吹）
- 第8回 聴覚検査法2 （矢吹）
- 第9回 聴覚障害の実態（山口）
- 第10回 聴覚障害をきたす疾患（山口）
- 第11回 聴覚障害への対応（山口）
- 第12回 補聴器の仕組みと適応（山口）
- 第13回 人工内耳の仕組みと適応（山口）
- 第14回 聴力検査の復習と結果の見方（山口）
- 第15回 まとめ（山口）

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

聴覚器の解剖と働きについて、復習すること。聴覚路の図を、毎日見て暗記すること。聴覚検査名と目的、障害を来す疾患名を覚えること。補聴機器の種類と仕組みについて、説明できるようにしておくこと。講義中に質問し、口頭で応答を求めます。

■ 教科書

書 名：聴覚検査の実際（改訂 3 版）

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

著者名：中村 公枝 城間 将江 鈴木 恵子

出版社：医学書院

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第 2 版

著者名：鳥山 稔

出版社：医学書院

書 名：聴覚活用 of 実際

著者名：田中美郷 廣田栄子

出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	聴覚障害Ⅱ（聴覚検査法）	担当者	福田章一郎・矢吹裕栄・田村 薫 野田 祥子・長 知子・山口 忍		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・聴覚障害が言語、心理および社会性の発達にどのような影響を与えるかを具体的な教材などを通して紹介し、聴覚障害児・者の発達および社会生活上の困難さの理解を促す。（福田）
- ・前期の学習内容を整理し、基礎知識の関連を確認する。また、人工内耳の原理とマスキングに関する基礎を学習する。（矢吹）
- ・聴覚の検査法とその評価、及び聴覚発達を中心とした援助について講義を行う。（田村、野田、長、山口）

■ 到達目標

- ・難聴発見から介入に必要な聴覚評価、digitalHA および人工内耳などの補聴、保護者のカウンセリングとそれらに必要な療育法およびコミュニケーション手段について具体的に解説する。（福田）
- ・聴覚器・疾患・検査結果の関連を整理する。人工内耳の仕組みを理解する。また、マスキングの考え方を習得する。（矢吹）
- ・聴覚障害を有する対象者に基本的な検査が実施でき、その結果を評価するとともに、発達を含めた援助を提案することができるようになる。（田村、野田、長、山口）

■ 授 業 計 画

- 第1回 乳幼児の難聴の基礎と聴覚に関する全般について解説する（福田）
- 第2回 聴覚障害児の早期発見と新生児聴覚スクリーニングの目的と意義について解説する（福田）
- 第3回 難聴の原因やリスクファクターと遺伝および症候性難聴の特徴について解説する（福田）
- 第4回 乳幼児の聴覚検査の種類とその特徴ならびにそれぞれの方法および留意点について解説する（福田）
- 第5回 乳幼児の補聴の必要性和その方法および評価法ならびに補聴手段の種類と特徴や補聴補助システムについて解説する（福田）
- 第6回 聴覚障害児への初期介入および療育法の種類と内容について聴力程度、発達などを考慮しながら解説する（福田）
- 第7回 聴覚障害の原因疾患（矢吹）
- 第8回 聴覚器・疾患・検査結果の関連（矢吹）
- 第9回 人工内耳の仕組み1（矢吹）
- 第10回 人工内耳の仕組み2（矢吹）
- 第11回 マスキングとは（矢吹）
- 第12回 マスキングの考え方（矢吹）
- 第13回 マスキングの考え方2（矢吹）
- 第14回 標準聴力検査について（野田または田村）
- 第15回 標準聴力検査の検査演習（野田または田村）
- 第16回 Bekesy 検査について（野田または田村）
- 第17回 Bekesy 検査の演習（野田または田村）
- 第18回 閾値上聴覚検査について（野田または田村）
- 第19回 閾値上聴覚検査の演習（野田または田村）
- 第20回 聴性脳幹反応の測定方法（野田または田村）
- 第21回 聴性脳幹反応の検査演習（野田または田村）
- 第22回 インピーダンスオージオメータについて（野田または田村）
- 第23回 語音聴力検査について（野田または田村）
- 第24回 聴覚検査結果の解説 検査の目的とその意義について 症例提示①（長）
- 第25回 聴覚検査結果の解説 検査の目的とその意義について 症例提示②（長）
- 第26回 幼小児の聴力検査（山口）
- 第27回 幼小児の聴力検査（山口）
- 第28回 臨床の実際－発達遅滞例の聴力評価－（山口）
- 第29回 臨床の実際－補聴機器フィッティングの考え方－（山口）
- 第30回 まとめ（山口）

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

聴覚障害児・者の困難について、復習すること。純音聴力検査、語音聴力検査・閾値上検査はST室の検査機器を用いて、互いに測定し合い、手順を覚えること。インピーダンスオージオメトリーは、ブロープ装着が可能になるよう、練習すること。乳幼児の聴力検査の種類と内容、適応年齢について覚えること。補聴機器のフィッティングの原則について説明できるようになること。講義中に質問し、口頭で応答を求めます。

■ 教科書

書名：聴覚検査の実際（改訂3版）

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版

著者名：鳥山 稔

出版社：医学書院

書名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

著者名：中村 公枝 城間 将江 鈴木 恵子

出版社：医学書院

書名：聴覚活用の実際

著者名：田中美郷 廣田栄子

出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	聴覚障害Ⅲ（各論）	担当者	田中 美郷・大森千代美 箕谷 健三・山口 忍		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必須

■ 内 容

聴覚障害児を社会的歴史的視点で如何に理解して育てるか。それに必要な基礎知識（田中）
 聴覚障害乳幼児の発見と療育の実際（大森）
 聴覚学習、補聴支援機器の装用指導、聴覚障害者の教育課程など（箕谷）
 聴覚障害の臨床の目的と実際について学ぶ。（山口）

■ 到達目標

聴覚障害児の持つ問題を医学面、心理面、成育環境面にわたって全人的に診れるようになること。（田中）
 聴覚障害乳幼児の発見と療育について必要な知識と技能を学ぶ（大森）
 聴覚障害教育の実態を知り、聴覚障害（者）の理解を深める。（箕谷）
 聴覚障害児・者の適切な援助について、検査結果をふまえ適切な援助について提案できるようになる。（山口）

■ 授 業 計 画

- 第1回 聴覚障害教育の歴史的回顾と現在の動向（田中美郷）
- 第2回 聴覚障害児をどう診るか（田中美郷）
- 第3回 聴覚系の解剖生理と高次機能（田中美郷）
- 第4回 聴覚の発達と聴覚検査（田中美郷）
- 第5回 聴覚障害児の聴覚発達・聴覚訓練（田中美郷）
- 第6回 人工内耳及び言語指導法（田中美郷）
- 第7回 コミュニケーション障害児の鑑別診断（田中美郷）
- 第8回 言語教育法（手話も含めて）（田中美郷）
- 第9回 聴覚障害児の医療と教育：STの役割（田中美郷）
- 第10回 50年にわたる臨床研究から得られた結論と提言（田中美郷）
- 第11回 聴覚障害乳幼児の発見について（大森）
- 第12回 聴覚障害乳幼児のこころを育てる療育とは（大森）
- 第13回 聴覚障害乳幼児の療育の実際1（大森）
- 第14回 聴覚障害乳幼児の療育の実際2（大森）
- 第15回 聴覚障害教育について（聴覚障害教育の歴史、聴覚障害教育の教育課程と現状など）（箕谷）
- 第16回 聴覚障害児の補聴器装用指導について（聴覚学習、補聴器フィッティングの基本的な考え方）（箕谷）
- 第17回 聴覚管理と補聴器管理、保護者支援などについて（箕谷）
- 第18回 聴覚障害の心理的援助1（山口）
- 第19回 聴覚障害の心理的援助2（山口）
- 第20回 聴覚障害の遺伝子診断（山口）
- 第21回 聴覚障害の検査と評価1（山口）
- 第22回 聴覚障害の検査と評価2（山口）
- 第23回 聴覚障害の検査と評価3（山口）
- 第24回 聴覚障害の検査と評価4（山口）
- 第25回 聴覚障害児ケースワーク1（山口）
- 第26回 聴覚障害児ケースワーク2（山口）
- 第27回 聴覚障害児ケースワーク3（山口）
- 第28回 聴覚障害児ケースワーク4（山口）
- 第29回 聴覚障害児ケースワーク5（山口）
- 第30回 まとめ（山口）

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書指定されている「聴覚障害の実際」のⅠ．基礎編を、第1回～10回の集中講義前に読了しておくこと。同じく「聴覚障害の実際」のⅡ．実践編を、集中講義第11回～14回の集中講義前に読了しておくこと。1年時に学習した検査、補聴機器のフィッティングの考え方、言語発達について復習したうえで、講義に臨むこと。講義中質問し、口頭で応答を求めます。

■ 教科書

書 名：聴覚検査の実際（改訂3版）

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版

著者名：鳥山 稔

出版社：医学書院

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

著者名：中村 公枝 城間 将江 鈴木 恵子

出版社：医学書院

書 名：聴覚活用の実際

著者名：田中美郷 廣田栄子

出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	補聴器・人工内耳	担当者	竹田 利一・北野 庸子 柴田 尚美・山口 忍		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

補聴器のフィッティングにおいての総合的な知識、補聴器適応の決定、補聴器の調整選択、補聴器適合検査の指針（竹田）

人工内耳の仕組みや適応、マッピング、臨床の実際について学ぶ。（柴田 北野 山口）

■ 到達目標

補聴器のフィッティングにおいての総合的な知識、補聴器適応の決定、調整と選択の基礎、補聴器適合検査結果の評価について理解する。（竹田）

人工内耳の原理を知り、適応や装着、リハビリテーションの手順について説明できる。人工内耳装用者に対して適切な関わり方ができ、適切なリハビリテーション・調整を提案することができる。（柴田 北野 山口）

■ 授 業 計 画

- 第1回 補聴器の種類と仕組み（竹田）
- 第2回 補聴器の性能（補聴器の最新デジタル機能）（竹田）
- 第3回 補聴器に関する測定、JIS、カプラの違い、実耳測定、補聴器特性検査装置を使った実習（竹田）
- 第4回 補聴器調整器の使い方、調整器の意味（竹田）
- 第5回 イヤモールドに関する講義（竹田）
- 第6回 補聴器のフィッティングの考え方（リニア、ノンリニア増幅）（竹田）
- 第7回 補聴器の適応と選択、補聴器装用指導（竹田）
- 第8回 補聴器装用効果の評価と補聴器適合検査の指針2010の解説（竹田）
- 第9回 人工内耳の原理、仕組みや適応基準について（柴田）
- 第10回 音声処理方式とマッピング、人工内耳リハビリテーション（成人・小児）について（柴田）
- 第11回 難聴幼児の母親指導（北野）
- 第12回 難聴を有する大学生の支援（北野）
- 第13回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）
- 第14回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）
- 第15回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

1 年時および2年時前期に学習した補聴機器の仕組み、フィッティングの考え方、適応について復習して講義に臨むこと。第13回～15回は、補聴機器の知識に加え、聴覚障害を来す疾患、検査の適応と内容、手順、聴覚障害のもたらす困難さを社会的・歴史的視点からどうとらえるか、言語発達と聴覚障害の関連など、これまで学んだすべての事を総括する。講義中質問し、口頭で応答を求めます。

■ 教 科 書

書 名：補聴器のフィッティングの考え方

著者名：小寺一興

出版社：診断と治療社

書 名：聴覚検査の実際（改訂 3 版）

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第 2 版

著者名：鳥山 稔

出版社：医学書院

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

著者名：中村 公枝 城間 将江 鈴木 恵子

出版社：医学書院

書 名：聴覚活用の実際

著者名：田中美郷 廣田栄子

出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

授業科目	視覚聴覚二重障害	担当者	森 尚彫・大城克彦・大西 環		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

視覚聴覚二重障害について概説する。(森)
 神経難病患者のコミュニケーション支援(大城)
 視覚障害者の福祉施設の見学と講義(大西)

■ 到達目標

視覚聴覚二重障害の概要、特徴等を知り理解を深める。(森)
 神経難病(主としてALS)に対する文字盤・各種機器を使ったコミュニケーション支援を理解する。(大城)
 視覚障害者を取りまく現状を知り、理解を深める。(大西)

■ 授業計画

第1回 視覚障害、聴覚障害の概説とそれらによる視覚聴覚二重障害について(森)
 第2回 視覚聴覚二重障害におけるコミュニケーションモード、事例の紹介、過去の国家試験の解説等(森)
 第3回 神経難病(主としてALS)を対象としたAAC概論(大城)
 第4回 各種コミュニケーション機器の紹介、体験(大城)
 第5回 各種入力装置のフィッティング(実技)、在宅・病棟におけるナースコールの理解(大城)
 第6回 制度の理解、コミュニケーション機器導入の手続き、まとめ(大城)
 第7回 視覚障害者福祉の歴史と現状 1(日本ライトハウス)
 第8回 視覚障害者福祉の歴史と現状 2(日本ライトハウス)

■ 評価方法

出席状況 100%

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

各授業の後で復習を行っておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	臨床実習Ⅰ	担当者	大西 環・齋藤典昭・大根茂夫 工藤芳幸・中村靖子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

I 期臨床実習（見学実習）
期間：1 週間（40時間以上）

■ 到達目標

言語聴覚士の業務の流れを理解し、関連職種との連携を理解する。

■ 授業計画

実習協力施設・病院にて、ご指導を頂くスーパーバイザー（SV）の言語聴覚療法を見学させて頂く。
毎日実習日誌を作成し、提出する。
SV から与えられた課題のレポートなどを作成する。
実習のまとめを作成する。
詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ② SV からの種々の情報
 - ③ SV 記載の成績表・所見
 - ④ 実習日誌
 - ⑤ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表準備の状況
 - ⑥実習報告会までの教員指導時の取り組み
- ①～⑥を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。
実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル
著者名：小寺富子監修
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の 4 / 5 に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	臨床実習Ⅱ	担当者	大西 環・齋藤典昭・大根茂夫 工藤芳幸・中村靖子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	5 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅱ期臨床実習（評価実習）
期間：5 週間（200時間以上）

■ 到達目標

臨床実習Ⅰ及び学内で学んだ検査手順や評価に関する知識を基に、言語聴覚療法における検査、及び評価を実際に行い、指導援助プログラムの立案までが指導を受けながら可能となる。

■ 授業計画

実習協力施設、病院様にて、ご指導いただく SV の指示、監督のもと、患者（児）様に検査を行い、その結果を分析して他の所見と併せて総合評価を行う。さらにその評価に基づき、指導援助プログラムを立案する。

実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などをする。

実習のまとめとして、症例報告書を作成する。

詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ② SV からの種々の情報
 - ③ SV 記載の成績表・所見
 - ④ 症例報告書
 - ⑤ 実習日誌
 - ⑥ 出席状況
 - ⑦ 実習報告会までの教員指導時の取り組み
- ①～⑦を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。
実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル
著者名：小寺富子監修
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の 4 / 5 に満たないものは、科目履修の認定はされない。

授業科目	臨床実習Ⅲ	担当者	大西 環・齋藤典昭・大根茂夫 工藤芳幸・中村靖子		
学 科 名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	6単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅲ期臨床実習
期間：8週間

■ 到達目標

検査及び評価に基づき、指導援助プログラムの立案を行い、言語聴覚療法を指導を受けながら実施できる。言語聴覚士としての役割を理解し、言語聴覚療法の臨床において必要な知識と技術を習得する。また、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。

■ 授業計画

実習施設・病院で、臨床実習指導者（スーパーバイザー・SV）のご指導・監督のもと、患者（児）様の検査、評価、指導訓練プログラムの立案、訓練等実際の言語聴覚療法を経験する。
実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などを作成する。
実習のまとめとして、症例報告書を作成する。
詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
- ② SV からの種々の情報
- ③ SV 記載の成績表・所見
- ④ 症例報告書
- ⑤ 実習日誌
- ⑥ 出席状況
- ⑦ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
- ⑧ 実習報告会までの教員指導時の取り組み
- ①～⑧を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

I 期臨床実習、II 期臨床実習で明らかになった自己の課題を解決すべく、しっかり準備をして臨むこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	健康生活支援学概論	担 当 者	藤岡 重和・柴田 雅朗		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1年or2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

健康に生活していくための支援の基礎知識として、病気にならないための方法論を感染予防、疾病予防の観点から学ぶ。感染・疾病予防に関する体内外環境の重要性を概説した後、感染症の疫学、微生物との関わり、感染防御機構、病態、検査と診断に関する基礎知識を習得する。また、代表的な感染症について、病原微生物と感染経路、臨床像、検査、診断と治療法を教授する。疾病予防では、特に生活習慣病の予防と軽減を目的として、植物や野菜などに含有されている天然成分に注目し、これらに科学的な裏付けを行い（遺伝子・タンパクレベルでの生理活性の証明と作用機序）、疾病予防に寄与できる新たな知見を導き出す。

■ 到達目標

感染症と微生物の関わり、感染防御機構、感染症の病態と臨床像に関する基礎知識を習得し、感染予防について自ら考察できる能力を培う。また、生活習慣病についての発症機序を詳細に学び、それら経路に有効な天然成分とその作用機序を科学的に学び、健康維持・疾病予防に役立つ新たな知見を深める。

■ 授 業 計 画

- 第1回 感染・疾病予防の体内外環境の重要性、 感染症の疫学 （藤岡重和）
- 第2回 微生物と感染症 （藤岡重和）
- 第3回 感染防御機構、感染症の病態 （藤岡重和）
- 第4回 感染症の検査、診断、治療 （藤岡重和）
- 第5回 呼吸器感染症、消化器感染症 （藤岡重和）
- 第6回 尿路感染症、性感染症、皮膚、粘膜の感染症 （藤岡重和）
- 第7回 高齢者の感染症、母子感染 （藤岡重和）
- 第8回 新興感染症、感染症トピックス （藤岡重和）
- 第9回 生活習慣病の病理（柴田雅朗）
- 第10回 アポトーシスと疾病 （柴田雅朗）
- 第11回 血管新生とリンパ管新生 （柴田雅朗）
- 第12回 脈管新生と疾病 （柴田雅朗）
- 第13回 東南アジアのトロピカルフルーツマンゴスチンの健康パワー（柴田雅朗）
- 第14回 マンゴスチンの分子生物学的作用（柴田雅朗）
- 第15回 脈管新生を標的とした治療の基礎研究 （柴田雅朗）

■ 評価方法

（藤岡）各講義での課題レポート 40%（各回レポートを100%で評価しその平均の40%） 筆記試験 10%
（柴田）レポート 25% 口頭試問 25%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

終了した講義について復習をしっかりとして下さい。

■ 教 科 書

--

書 名：「病気がみえる 循環器 第3版」

著者名：医療情報科学研究所 編

出版社：メディックメディア

書 名：がんの分子生物学 メカニズム・分子標的・治療 第2版

著者名：Lauren Pecorino 著

出版社：メディカル・サイエンス・インターナショナル

書 名：「循環器疾患のサイエンス」

著者名：小室一成 編

出版社： 南山堂

■ 留意事項

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学概論	担 当 者	石倉 隆・藪中良彦・伊禮まり子		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1 年 or 2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

生活機能を支援する科学的根拠に基づいた論理を構築するための成人及び小児の脳神経疾患に関するリハビリテーション技術、知識の涵養を目的とする。脳神経疾患リハビリテーションにおける脳科学の重要性を踏まえ、身体機能に係る脳神経生理、脳機能解剖、画像読影法や evidence based rehabilitation (EBR) 実践法を講義したうえで、疾患別の症候、リハビリテーション評価、治療について科学的根拠ある理論を講義するとともに、より実践的な知識の定着を目的に検討会を実施する。また、模擬症例を提示し、それまでに学んだ知識を用いてカンファレンスを実施する演習を行う。

■ 到達目標

- ・身体機能に係る脳機能解剖、脳神経生理を理解する。
- ・身体機能に係る脳機能解剖、脳神経生理の知識をもとに脳画像に投影できる。
- ・EBR の実践方法を理解する。
- ・脳神経疾患の神経生理学、神経病理学、症候学を理解する。
- ・脳神経疾患の根拠あるリハビリテーションを構築できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 脳神経疾患リハビリテーションにおける脳科学の重要性
- 第2回 身体機能に係る脳機能解剖学
- 第3回 身体機能に係る神経生理学、運動生理学
- 第4回 身体機能に係る脳画像読影法
- 第5回 脳神経疾患リハビリテーションにおける EBR 実践法
- 第6回 脳神経疾患リハビリテーション評価法（成人）：講義と検討会
- 第7回 脳神経疾患リハビリテーション評価法（小児）：講義と検討会
- 第8回 脳卒中の病理学と症候障害学：講義と検討会
- 第9回 脳卒中のリハビリテーション方法論：講義と検討会
- 第10回 神経変性疾患の病理学と症候障害学：講義と検討会
- 第11回 神経変性疾患のリハビリテーション方法論：講義と検討会
- 第12回 脳性麻痺の病理学と症候障害学：講義と検討会
- 第13回 脳性麻痺のリハビリテーション方法論：講義と検討会
- 第14回 模擬症例によるリハビリテーションカンファレンス 1
- 第15回 模擬症例によるリハビリテーションカンファレンス 2

■ 評価方法

- リハビリテーションカンファレンスの討議内容 40%
- リハビリテーションカンファレンスレポート 60%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各講義前に、次回の講義内容とそれまでに学習しておくべき課題を提示する。
また、模擬症例のリハビリテーションカンファレンスには、PPTによるプレゼンテーションとレジュメの作成を事前に行うこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

別途、紹介する。

■ 留意事項

リハビリテーションカンファレンスには、病院等の了解を得るとともに個人情報の保護に努めること。

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学概論	担 当 者	中村憲正・境 隆弘・佐藤睦美		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1 年 or 2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

生活機能を支援する科学的根拠に基づいた論理を構築するための運動器疾患並びにスポーツ傷害に関するリハビリテーション技術、知識の涵養を目的とする。運動器疾患並びにスポーツ傷害のリハビリテーションにおけるバイオメカニクスの重要性を踏まえ、スポーツ動作について講義したうえで、疾患別の症候、リハビリテーション評価、治療について模擬症例での演習を通じて科学的根拠ある理論を構築する。

(中村憲正)

運動器疾患のリハビリテーションにおけるバイオメカニクスを基礎に疾患別の症候、評価、治療について科学的根拠ある理論を構築できる知識を涵養し、模擬症例の検討を通じて理解を深める。

(境隆弘)

スポーツ・リハビリテーションにおけるバイオメカニクスを基礎に上肢疾患の症候、評価、治療について科学的根拠ある理論を構築できる知識を涵養し、模擬症例の検討を通じて理解を深める。

(佐藤睦美)

スポーツ・リハビリテーションにおけるバイオメカニクスを基礎に下肢疾患の症候、評価、治療について科学的根拠ある理論を構築できる知識を涵養し、模擬症例の検討を通じて理解を深める。

■ 到達目標

- ・運動器疾患およびスポーツ傷害のリハビリテーションにおけるバイオメカニクスを理解する。
- ・科学的根拠ある運動器疾患およびスポーツ傷害のリハビリテーションの実践方法を理解する。
- ・運動器疾患およびスポーツ傷害のリハビリテーションを構築できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 運動器疾患のリハビリテーションにおけるバイオメカニクスの重要性 (境隆弘)
- 第2回 関節運動学と運動力学 (境隆弘)
- 第3回 骨折と脱臼のリハビリテーションの解説と模擬症例検討 (中村憲正)
- 第4回 骨と関節の感染症に対するリハビリテーションの解説と模擬症例検討 (中村憲正)
- 第5回 脊椎・脊髄疾患、外傷に対するリハビリテーションの解説と模擬症例検討 (中村憲正)
- 第6回 股関節疾患、外傷に対するリハビリテーションの解説と模擬症例検討 (中村憲正)
- 第7回 頭部外傷に対するリハビリテーションの解説と模擬症例検討 (中村憲正)
- 第8回 スポーツ傷害のリハビリテーションにおけるバイオメカニクスの重要性 (佐藤睦美)
- 第9回 膝のスポーツ・リハビリテーション (佐藤睦美)
- 第10回 膝のスポーツ・リハビリテーションの模擬症例検討 (佐藤睦美)
- 第11回 足のスポーツ・リハビリテーション (佐藤睦美)
- 第12回 足のスポーツ・リハビリテーションの模擬症例検討 (佐藤睦美)
- 第13回 肩・肘のスポーツ・リハビリテーション (境隆弘)
- 第14回 肩・肘のスポーツ・リハビリテーションの模擬症例検討 (境隆弘)
- 第15回 まとめ (境隆弘)

■ 評価方法

- 運動器疾患リハビリテーションに関する課題レポート 50%
- スポーツ傷害リハビリテーションに関する課題レポート 50%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

日頃、臨床業務で遭遇する各疾患について、予習としては疑問点や治療計画などを持ち寄ること。復習としては、授業で得た知識を臨床業務で実践し、効果を知ること。

■ 教 科 書

■ 参 考 図 書

書 名：「理学療法 Mook 9 スポーツ傷害の理学療法第2版」
著者名：福井勉・小柳磨毅 編
出版社：三輪書店

■ 留 意 事 項

授業科目	認知・コミュニケーション障害支援学概論	担当者	松井 理直・森岡 悦子 山口 忍・井口 知也		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1 年 or 2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

高次認知およびコミュニケーションの心的過程とその障害について理解する

■ 到達目標

言語・聴覚・コミュニケーション・高次認知過程の障害について理解を深めること。

■ 授業計画

- 第1回 音声器官と調音について（松井）
- 第2回 調音の生理学的分析方法について（松井）
- 第3回 音声理解の認知過程とその障害（松井）
- 第4回 高次脳機能の成り立ちと神経心理学的の基礎
- 第5回 大脳の認知機能とコラム構造、ネットワーク理論
- 第6回 前頭葉－大脳基底核系機能疾患の神経メカニズム
- 第7回 前頭葉機能と動機的セイリアンス障害について
- 第8回 運動器である筋の微細構造（山口）
- 第9回 筋の酵素組織化学（山口）
- 第10回 聴覚障害のもたらすもの（山口）
- 第11回 医療の発展がセラピストに与えるもの（山口）
- 第12回 認知症の病態理解とコミュニケーションについて（井口）
- 第13回 認知症者に対するコミュニケーション方法①（アルツハイマー型認知症, 脳血管性認知症）（井口）
- 第14回 認知症者に対するコミュニケーション方法②（前頭側頭型認知症, レビー小体型認知症）（井口）
- 第15回 認知症者に対するコミュニケーション方法③（APCD を用いたニーズ評価）（井口）

■ 評価方法

授業中の勉学態度 30%、レポート 70%。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習・復習に3～4時間程度。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：認知症ハンドブック
 著者名：中島健治，天野直二，下浜 俊，富本秀和，三村 将（編集）
 出版社：医学書院

■ 留意事項

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学特論	担 当 者	石倉 隆・藪中良彦・伊禮まり子		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1 年	総単位数	4 単位
		開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

脳神経疾患によって惹起される身体障害の障害像を科学的に分析し、その評価法や治療法を探究する。脳神経疾患身体障害支援学特論では、主として脳卒中、神経変性疾患、脳性麻痺で生じる神経学的症候を取り上げる。脳神経生理、脳機能解剖、脳画像読影法、神経学的症候のメカニズム、リハビリテーション評価、治療について演習することで科学的根拠ある理論をより深く追求し、理解を深める。また、脳神経科学の先端研究についても講義する。

(石倉 隆)

臨床場面で実践的知識として必要な脳神経疾患に関する脳機能解剖の理解をもとに、脳画像読影法を脳神経疾患身体障害支援に重要なポイントを中心に講義する。また、これらの知識・技術を用いて、神経学的症候のメカニズムを脳科学に基づいて理解し、リハビリテーションの可能性を模索する。さらに、神経リハビリテーションで注目されている経頭蓋脳刺激について概説する。

(藪中良彦)

脳性麻痺児の独歩に関係する筋力や感覚障害に加えて、脳性麻痺児の最大の障害である協調運動障害の大きな要素である Selective Motor Control について、最新の知見を講義する。また、これらの知識を用いて、脳性麻痺児の独歩獲得のために有効なアプローチについてディスカッションを行う。

(伊禮まり子)

姿勢制御の神経機構について、特に動的姿勢制御に焦点を当てて講義する。また、動的状態での脳機能測定法について概説するとともに、特に脳電位について、その測定法、分析法、評価法を教授し、リハビリテーションへの応用の可能性を探る。

■ 到達目標

- ・神経学的症候のメカニズムを科学的根拠に基づいて説明できる。
- ・その際、脳神経疾患に関する脳神経生理、脳機能解剖、脳画像などの知識、情報を活用できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 大脳皮質興奮性修飾のメカニズム；経頭蓋脳刺激法を中心に
- 第2回 経頭蓋脳刺激法演習
- 第3回 脳性麻痺児の独歩に影響している因子
- 第4回 脳性麻痺児における Selective Motor Control とそのメカニズム
- 第5回 動的姿勢制御の神経機構と脳機能測定
- 第6回 脳電位測定演習
- 第7回 脳卒中の分析の視点（評価結果と身体障害、リハビリテーションの神経科学的分析）
- 第8回 脳卒中模擬症例における身体障害のリハビリテーションの科学的根拠
- 第9回 神経変性疾患の分析の視点（評価結果と身体障害、リハビリテーションの神経科学的分析）
- 第10回 神経変性疾患模擬症例における身体障害のリハビリテーションの科学的根拠
- 第11回 脳性麻痺の分析の視点（評価結果と身体障害、リハビリテーションの神経科学的分析）
- 第12回 脳性麻痺模擬症例における身体障害のリハビリテーションの科学的根拠
- 第13回 特別研究に係る経頭蓋脳刺激法演習
- 第14回 特別研究に係る脳性麻痺児の機能障害評価演習
- 第15回 特別研究に係る脳電位測定演習

■ 評価方法

第7回～第12回講義の発表に係る

- ・神経学的症候の科学的考察内容（8点×6回分）
 - ・神経学的症候に対するリハビリテーションの科学的考察内容（8点×6回分）
- で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各講義前に、次回の講義内容とそれまでに学習しておくべき課題を提示する。
また、各疾患の臨床症状、評価、リハビリテーションについての科学的根拠を講義前に整理すること。

■ 教科書

■ 参考図書

別途、紹介する。

■ 留意事項

症例提示するときには、病院等の了解を得るとともに個人情報の保護に努めること。

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学特論演習	担当者	石倉 隆・藪中良彦・伊禮まり子		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	2年	総単位数	8単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

脳神経疾患に起因する身体障害を対象とする学生の社会へ還元する知識・技能に照らして、脳神経疾患身体障害支援学特論で修得した知識を実践可能な高度専門知識・技能へと昇華させる。生活機能を支援する最新知識を最新の研究成果、CPCや症例報告を批判的に考察することで養い、科学的根拠に基づいた論理が構築できる能力とそれに基づく最新の的確な介入が実践できる技能をカンファレンス、実践を通じて演習する。

(石倉 隆)

- ・経頭蓋脳刺激法を用いた大脳皮質興奮性修飾の科学的根拠を文献や実験を通して明らかにする。
- ・学生の臨床・臨地現場の症例を評価、分析し、脳神経疾患身体障害支援学特論で得た知識を応用するとともに、カンファレンスでその論理を展開する。脳神経疾患身体障害支援学特論で培った脳科学の知識をもとにした科学的な分析能力や批判的吟味的能力を現場で実践可能な技能へ発展させる。

(藪中良彦)

- ・脳性麻痺児の独歩獲得に影響する因子及びそれらの因子を客観的に測定する手段を文献を通して明らかにする。
- ・学生の臨地現場のGMFCSレベルⅡ及びⅢの脳性麻痺児症例を評価、分析し、脳神経疾患身体障害支援学特論で得た知識と脳神経疾患身体障害支援学特論で培った知識を基に、カンファレンスで機能障害と活動障害の関連について論理を展開する。脳性麻痺児に関する最新の知見をもとにした科学的な分析能力や批判的吟味的能力を現場で実践可能な技能へ発展させる。

(伊禮まり子)

動的姿勢制御と脳機能との関係について、文献や実験を通じて明らかにする。得られた知見をリハビリテーションにどのように応用できるかについて討論するとともに、脳神経疾患身体障害支援学特論で得た脳機能測定法を現場で実践させるための評価法・分析法について検討する。

■ 到達目標

- ・実際の症例に対し、神経学的症候のメカニズムを科学的根拠に基づいて説明できる。
- ・実際の症例に対し、根拠あるリハビリテーションを構築できる。
- ・その際、脳神経生理、脳機能解剖、脳画像などの知識、情報を活用できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 経頭蓋脳刺激法に係る最新知見の分析1
- 第2回 経頭蓋脳刺激法に係る最新知見の分析2
- 第3回 経頭蓋脳刺激法に係る最新知見の分析3
- 第4回 経頭蓋脳刺激法に係る最新知見の分析4
- 第5回 脳性麻痺児の独歩獲得に係る最新知見の分析1
- 第6回 脳性麻痺児の独歩獲得に係る最新知見の分析2
- 第7回 脳性麻痺児の評価方法に係る最新知見の分析1
- 第8回 脳性麻痺児の評価方法に係る最新知見の分析2
- 第9回 動的姿勢制御時の脳機能測定法に係る最新知見の分析1
- 第10回 動的姿勢制御時の脳機能測定法に係る最新知見の分析2
- 第11回 動的姿勢制御時の脳機能測定法に係る最新知見の分析3
- 第12回 動的姿勢制御時の脳機能測定法に係る最新知見の分析4
- 第13回 脳卒中CPC分析1
- 第14回 脳卒中CPC分析2
- 第15回 脳卒中症例報告分析1
- 第16回 脳卒中症例報告分析2

■ 授業計画

- 第17回 神経変性疾患 CPC 分析 1
第18回 神経変性疾患 CPC 分析 2
第19回 神経変性疾患症例報告分析 1
第20回 神経変性疾患症例報告分析 2
第21回 脳性麻痺 CPC 分析 1
第22回 脳性麻痺 CPC 分析 2
第23回 脳性麻痺症例報告分析 1
第24回 脳性麻痺症例報告分析 2
第25回・第26回 学生の臨床活動における症例提示、リハビリテーションカンファレンス 1
学生の現場から症例を提示、検討会で科学的根拠に基づく障害像とリハビリテーション、生活機能支援の分析を実施する。
第27回・第28回 学生の臨床活動における症例提示、リハビリテーションカンファレンス 2
学生の現場から症例を提示、検討会で科学的根拠に基づく障害像とリハビリテーション、生活機能支援の分析を実施する。
第29回・第30回 学生の臨床活動における症例提示、リハビリテーションカンファレンス 3
学生の現場から症例を提示、検討会で科学的根拠に基づく障害像とリハビリテーション、生活機能支援の分析を実施する。

■ 評価方法

各学生の修士論文テーマに則したレポートを課す。100%
各学生の修士論文の専門性に照らし、評価教員を決定して評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

C P C、症例報告の分析を事前に実施すること。
臨床活動における症例の P P T、レジュメを事前に作成すること。

■ 教科書

■ 参考図書

別途、紹介する。

■ 留意事項

症例提示には、病院等の了解を得るとともに個人情報の保護に努めること。

授業科目	脳神経疾患身体障害支援学特別研究	担当者	石倉 隆・藪中良彦・伊禮まり子		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

脳神経疾患身体障害支援学特論、特論演習で学修した知識や臨床推論能力をもとに、高度専門職業人として社会で活躍していくための学修の成果として「修士論文」あるいは「課題研究の成果」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究の成果」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、社会に還元できるものにする。脳神経疾患身体障害支援学特論、特論演習で学んだ知識、技能をさらに深く学修しながら、研究を通じて現場に成果を還元する「修士論文」、科学的根拠ある臨床経験を設定課題に沿ってまとめる「課題研究報告書」の作成を指導する。

(石倉隆 藪中良彦 伊禮まり子)

修士論文：脳神経疾患による身体障害にかかる研究を通じて専門領域を深化させ現場に還元できる研究成果を目指す。研究課題は、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。例①：脳神経疾患により興奮性が低下した大脳皮質に、経頭蓋的に刺激を与えることで、大脳皮質興奮性修飾を試みる。運動関連領野をターゲットとした片麻痺の軽減、補足運動野をターゲットとしたパーキンソン症候群の軽減などの臨床応用を目的に、健常者でその有効性を確認していく。例②：実用的に独歩可能な GMFCS レベルⅡの痙直型両麻痺児と10歩の独歩は可能であるが実用的に独歩を使用できない GMFCS レベルⅢの痙直型両麻痺児の間の機能障害の違いを横断的に調査し、実用的な独歩獲得への各機能障害の影響の程度を調査する。例③：健常者を対象に、床傾斜刺激による姿勢筋の適応的抑制に最適な刺激強度を明らかにし、その適応過程における運動準備状態の変化について事象関連電位を用いて検討する。

(石倉隆 藪中良彦)

課題研究：脳神経疾患による身体障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究」は、課題テーマに沿った3症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。3症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的・科学的考察、現場に直結する結論などを求める。なお、課題研究指導の過程で、当該学生の課題研究に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

■ 到達目標

修士論文

- ・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
- ・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
- ・研究成果についての的確にプレゼンテーションできる。
- ・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

- ・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
- ・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
- ・課題研究の成果についての的確にプレゼンテーションできる。
- ・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

修士論文

- 第1回～第15回 研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する
- 第16回～第30回 ディスカッションを繰り返し、研究計画書を作成する
研究計画書に基づき予備実験や予備調査を実施して研究計画の妥当性を検討、研究計画書を完成させる
- 第31回～第45回 完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う
- 第46回～第60回 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する
- 第61回～第75回 論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

課題研究

- 第1回～第15回 課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する
- 第16回～第30回 ディスカッションを繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出する
課題研究計画書の承認後、臨床・臨地での活動を開始する。
- 第31回～第45回 臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる3例以上の症例報告をまとめる
- 第46回～第60回 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
3例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する
- 第61回～第75回 必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評価方法

修士論文：研究過程と修士論文の内容を総合的に勘案して評価する。

課題研究：3例以上の症例報告書および課題研究報告書の内容によって評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

（修士論文）

研究計画書の作成、それに伴う文献検索と考察、実験のシミュレーション、修論作成など、多くの時間が自学に費やされる。学修内容などは、適宜、指示する。

（課題研究）

日々の臨床活動が課題研究に直結する。その中で生じた疑問を文献的に考察したり、研究計画書に則ってデータを収集したりと、多くの時間が自学に費やされる。学修内容は、適宜、指示する。

■ 教科書

■ 参考図書

別途、紹介する。

■ 留意事項

特別研究は、修士論文も課題研究も厳正な倫理審査で受理された研究計画書に則って実施する。研究不正行為が絶対にないように留意すること。研究不正行為については、十分に指導するとともに、その行為が発覚した場合には厳しく罰する。

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学特論	担 当 者	中村憲正・境 隆弘・佐藤睦美		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1 年	総単位数	4 単位
		開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

運動器障害の解明に有用な動作解析技術と結果の解釈を理解し、運動器疾患で生じる運動器へのストレス解明のための知識とするとともに、運動器の修復過程と有効なリハビリテーションについて学ぶ。また、スポーツ傷害についても学ぶことで、スポーツに起因する身体障害のみならず、障害者スポーツの在り方も考えうる知識を培う。

(中村憲正)

運動器疾患やスポーツ傷害を惹起するメカニカルストレスを学ぶことで予防、治療の知識とするとともに、運動器疾患やスポーツ傷害の症候を明らかにする各種検査法とその結果の解釈、その症候の修復過程を科学的根拠あるリハビリテーション模索の基礎知識とする。

(境 隆弘)

運動器疾患のリハビリテーションにおける評価、治療法を検討し、学生が提示する運動器疾患症例の評価と治療をモデルに検討会を開催し、科学的根拠あるリハビリテーションにつなげる運動学、運動力学、運動器疾患のメカニズムを理解する。

(佐藤睦美)

スポーツ傷害のリハビリテーションにおける評価、治療法を検討し、学生が提示するスポーツ傷害症例の評価と治療をモデルに検討会を開催し、科学的根拠あるリハビリテーションにつなげるスポーツ傷害のメカニズムを理解する。また、生活機能支援としての障害者スポーツのあり方について論じる。

■ 到達目標

- ・運動器疾患・スポーツ傷害のメカニズムを科学的根拠に基づいて説明できる。
- ・その際、X-p、CT、MRIなどの知識、情報を活用できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 メカニカルストレスと運動器 (中村憲正)
- 第2回 運動器疾患、スポーツ傷害に関する画像読影法 (X-p、CT、MRI) (中村憲正)
- 第3回 運動器疾患、スポーツ傷害に関する理学的所見検査法 (中村憲正)
- 第4回 運動器の修復過程 (保存療法) (中村憲正)
- 第5回 運動器の修復過程 (観血的治療) (中村憲正)
- 第6回 関節運動学と運動力学の理解 (境隆弘)
- 第7回 運動器疾患のメカニズムの理解 (境隆弘)
- 第8回 運動器疾患のリハビリテーションにおける評価法；第1回～第7回講義を踏まえて (境隆弘)
- 第9回 運動器疾患のリハビリテーションにおける治療法；第1回～第7回講義を踏まえて (境隆弘)
- 第10回 症例提示と検討会 (境隆弘)
- 第11回 スポーツ動作の理解 (佐藤睦美)
- 第12回 スポーツ傷害のメカニズムの理解 (佐藤睦美)
- 第13回 スポーツ・リハビリテーションにおける方法論；第1回～第5回、第11回、12回講義を踏まえて (佐藤睦美)
- 第14回 障害者とスポーツ (佐藤睦美)
- 第15回 症例提示と検討会 (佐藤睦美)

■ 評価方法

(中村憲正)
課題レポート 100%
(境 隆弘)
第10回検討会での科学的考察内容 100%
(佐藤陸美)
第15回検討会での科学的考察内容 100%
※3名の教員評価の平均を最終評価とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業テーマに沿った専門書や文献を、洋邦問わず、目を通すこと。

■ 教科書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学特論演習	担 当 者	中村憲正・境 隆弘・佐藤睦美		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	2年	総単位数	8単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

運動器疾患・スポーツ傷害に起因する身体障害を対象とする学生が社会へ還元する知識・技能に照らして、身体障害支援学特論（運動器疾患・スポーツ傷害）で修得した知識を実践可能な高度専門知識・技能へと昇華させる。生活機能並びにスポーツ復帰支援を実施するうえでの課題解決のための方法論を文献検索やカンファレンスを通じて演習する。症例研究を批判的に抄読し、疑問点を解決することで、症例を深く追求する推論能力を養う。また、模擬症例を分析し、特論で得た知識を応用するとともに、カンファレンスでその論理を展開する。さらに、臨床・臨地現場から症例を提示し、カンファレンスを開催するとともに、顕在化した問題点を科学的に解決する。

（中村憲正）

整形外科疾患症例の最新の報告から病態を理解し、実践的臨床推論の知識とするとともに、模擬症例や学生が臨床・臨地現場で経験した症例の検査結果から臨床推論して、生活機能支援の礎となる論理的思考を養う。

（境 隆弘）

運動器疾患の最新の報告から障害像を理解し、展開されるリハビリテーションの科学的根拠を探る。また、運動器疾患シミュレーションの動作解析を演習し、導出された結果を分析する技能を養う。これらの知識、技能および実際に学生が経験した症例の評価結果から科学的根拠あるリハビリテーションを模索する臨床推論能力を培う。

（佐藤睦美）

スポーツ傷害の最新の報告から障害像を理解し、展開されるリハビリテーションの科学的根拠を探る。また、スポーツ傷害シミュレーションの動作解析を演習し、導出された結果を分析する技能を養う。これらの知識、技能および実際に学生が経験した症例の評価結果から科学的根拠あるリハビリテーションを模索する臨床推論能力を培う。

■ 到達目標

- ・実際の症例に対し、運動器疾患・スポーツ傷害のメカニズムを科学的根拠に基づいて説明できる。
- ・実際の症例に対し、根拠あるリハビリテーションを構築できる。
- ・その際、X-p、CT、MRIなどの知識、情報を活用できる。

■ 授業計画

- 第1回 運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援における整形外科の重要性は何か？（中村憲正）
- 第2回 最新の整形外科疾患症例研究を批判的に吟味し、論理的に考察する（中村憲正）
- 第3回 批判的に吟味し、論理的に考察した最新の整形外科疾患症例研究を発表してその病態を検討する（中村憲正）
- 第4回 模擬症例Aの提示：画像、検査評価結果を提示（中村憲正）
- 第5回 模擬症例Aの詳細分析（中村憲正）
- 第6回 模擬症例Aの検討会（中村憲正）
- 第7回 模擬症例Bの提示：画像、検査評価結果を提示（中村憲正）
- 第8回 模擬症例Bの詳細分析（中村憲正）
- 第9回 模擬症例Bの検討会（中村憲正）
- 第10回 学生の臨床・臨地活動における整形外科疾患提示、カンファレンス（中村憲正）
臨床現場からの症例を提示、検討会で病態を科学的に分析する。カンファレンスでの分析は、修士論文につながる着目点が明らかになるように発表する。
- 第11回 学生が提示した症例の着眼点の文献的考察、エビデンステーブルの作成（中村憲正）
※（修士論文選択学生）分析しようとする課題に関連した着眼点
- 第12回 学生の提示症例の着眼点整理、発表（中村憲正）
※（修士論文選択学生）分析しようとする課題に関連した着眼点

■ 授業計画

- 第13回 運動器疾患による身体障害支援におけるリハビリテーションの重要性は何か？（境隆弘）
第14回 最新の運動器疾患症例研究を批判的に吟味し、論理的に考察する（境隆弘）
第15回 批判的に吟味し、論理的に考察した最新の運動器疾患症例研究を発表して
その障害解釈と科学的根拠あるリハビリテーションを検討する（境隆弘）
第16回 3次元動作解析装置オペレーション技術演習（佐藤睦美）
※彩都スポーツ医科学研究所（彩都キャンパス）
第17回・第18回 運動器疾患シミュレーションによる動作解析演習（境隆弘）
※彩都スポーツ医科学研究所（彩都キャンパス）
第19回 運動器疾患シミュレーションによる動作解析結果の検討会（境隆弘）
※彩都スポーツ医科学研究所（彩都キャンパス）
第20回 学生の臨床・臨地活動における運動器疾患症例提示、リハビリテーションカンファレンス（境隆弘）
臨床現場からの症例を提示、検討会で科学的根拠に基づく障害像とリハビリテーション、生活機能支援の分析を実施する。リハビリテーションカンファレンスでの分析、考察は、修士論文、課題研究につながる着目点が明らかになるように発表する。
第21回 学生が提示した症例の着眼点の文献的考察、エビデンステーブルの作成（境隆弘）
※（修士論文選択学生）分析しようとする課題に関連した着眼点
※（課題研究選択学生）着目する臨床課題に関連した着眼点
第22回 スポーツ傷害による身体障害支援におけるリハビリテーションの重要性は何か？（佐藤睦美）
第23回 最新のスポーツ傷害症例研究を批判的に吟味し、論理的に考察する（佐藤睦美）
第24回 批判的に吟味し、論理的に考察した最新のスポーツ傷害症例研究を発表して
その障害解釈と科学的根拠あるリハビリテーションを検討する（佐藤睦美）
第25回・第26回 スポーツ動作シミュレーションによる動作解析演習（佐藤睦美）
※彩都スポーツ医科学研究所（彩都キャンパス）
第27回 スポーツ動作シミュレーションによる動作解析結果の検討会（佐藤睦美）
※彩都スポーツ医科学研究所（彩都キャンパス）
第28回 学生の臨床・臨地活動におけるスポーツ傷害症例提示、リハビリテーションカンファレンス（佐藤睦美）
臨床現場からの症例を提示、検討会で科学的根拠に基づく障害像とリハビリテーション、生活機能支援の分析を実施する。リハビリテーションカンファレンスでの分析、考察は、修士論文、課題研究につながる着目点が明らかになるように発表する。
第29回 学生が提示した症例の着眼点の文献的考察、エビデンステーブルの作成（佐藤睦美）
※（修士論文選択学生）分析しようとする課題に関連した着眼点
※（課題研究選択学生）着目する臨床課題に関連した着眼点
第30回 学生の提示症例の着眼点整理、発表（佐藤睦美）
※（修士論文選択学生）分析しようとする課題に関連した着眼点
※（課題研究選択学生）着目する臨床課題に関連した着眼点

■ 評価方法

学生が提示した症例のカンファレンス内容の科学的分析内容 50%（中村：第11、12回演習 境：20,21回演習 佐藤：29,30回演習）
※各教員50点満点で採点し、その平均
学生が提示した症例のエビデンステーブルの内容 50%
※各教員50点満点で採点し、その平均

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

症例検討のための準備を周到に行うこと

■ 教科書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体支援学特別研究	担当者	中村 憲正		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

再生医療を題材に運動器修復のメカニズムを細胞、分子レベルで解析する。

- ・幹細胞の調整法、増幅法の習得。
- ・幹細胞の組織分化法の習得。
- ・幹細胞の三次元培養法を人工組織との適合性の観点から理解する。
- ・動物実験（解剖、移植手術、術後管理）を習熟する。
- ・データ処理と統計学：データ解析、解釈に必要な統計技法の基本を理解する。

修士論文：研究テーマは、運動器修復・再生に関するもので、実際にその成果を臨床医療に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。研究の多くの時間を大阪大学整形外科教室との共同で行うために時間調整が必要となる場合がある。

■ 到達目標

- ・運動器疾患・スポーツ傷害領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
- ・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
- ・研究成果についての的確にプレゼンテーションできる。
- ・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授 業 計 画

修士論文

- 第1回～第15回 研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する。
研究テーマの関連文献収集をすると共に、その内容を十分理解し、先行研究の批判を行った上で、新たな知見を得るための研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する。
- 第16回～第30回 作業仮説および対立仮説を立て、理論と現象の両面から結果を予測する。
作業仮説に基づき、先行研究に関する批判的な再検討を行う。
完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出し、発表する。
- 第31回～第45回 研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する。
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う。
- 第46回～第60回 中間発表を行い、複数の教員や研究者からの意見を聞き、研究の再検討を行う。
研究手続きの修正を行った上で、実験、調査によるデータ収集を継続する。
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する。
- 第61回～第75回 論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する。
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける。

■ 評価方法

研究過程 20%、修士論文の内容 80% という割合で評価を行う。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

研究計画書の作成、それに伴う文献検索と考察、実験のシミュレーション、修論作成など、多くの時間が自学に費やされる。学修内容などは、適宜、指示する。

■ 教科書

■ 参考図書

教科書・参考図書については、適宜紹介し、必要な資料については時間中に配布する。

■ 留意事項

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学特別研究	担 当 者	境 隆弘		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

身体障害支援学特論、特論演習で学修した知識や臨床推論能力をもとに、高度専門職業人として社会で活躍していくための学修の成果として「修士論文」あるいは「課題研究の成果」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究の成果」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、社会に還元できるものにする。身体障害支援学特論、特論演習で学んだ知識、技能をさらに深く学修しながら、研究を通じて現場に成果を還元する「修士論文」、科学的根拠ある臨床経験を設定課題に沿ってまとめる「課題研究の成果」の作成を指導する。

修士論文：運動器疾患による身体障害にかかる研究を通じて専門領域を深化させ現場に還元できる研究成果を目指す。研究テーマは、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。例：研究課題として、膝十字靱帯再建術後の安全かつ有効なトレーニングをフォースプレートによる運動力学的解析および筋電計による電気生理学的分析、その他の工学的手法を用いて分析するなどが考えられる。

課題研究：運動器疾患による身体障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究の成果」にまとめる。「課題研究の成果」は、課題テーマに沿った3症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。3症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的・科学的考察、現場に直結する結論などを求める。なお、課題研究指導の過程で、当該学生の課題研究に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

■ 到達目標

■ 授業計画

(修士論文)

- | | |
|-----------|---|
| 第1回～第15回 | 研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する |
| 第16回～第30回 | ディスカッションを繰り返し、研究計画書を作成する
研究計画書に基づき予備実験や予備調査を実施して研究計画の妥当性を検討、研究計画書を完成させる
完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する |
| 第31回～第45回 | 研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う |
| 第46回～第60回 | 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する |
| 第61回～第75回 | 論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける |

■ 授業計画

(課題研究)

- 第1回～第15回 課題研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する
- 第16回～第30回 ディスカッションを繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
課題研究計画書の承認後、臨床・臨地での活動を開始する。
- 第31回～第45回 臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる3例以上の症例報告をまとめる
- 第46回～第60回 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
3例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する
- 第61回～第75回 必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評価方法

修士論文：研究過程と修士論文の内容を総合的に勘案して評価する。
課題研究：3例以上の症例報告書および課題研究報告書の内容によって評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

修士論文、課題研究とも、科学的根拠に基づき、執筆作業をすること。

■ 教科書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項

授業科目	運動器疾患・スポーツ傷害身体障害支援学特別研究	担 当 者	佐藤 睦美		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

身体障害支援学特論、特論演習で学修した知識や臨床推論能力をもとに、高度専門職業人として社会で活躍していくための学修の成果として「修士論文」あるいは「課題研究の成果」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究の成果」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、社会に還元できるものにする。身体障害支援学特論、特論演習で学んだ知識、技能をさらに深く学修しながら、研究を通じて現場に成果を還元する「修士論文」、科学的根拠ある臨床経験を設定課題に沿ってまとめる「課題研究の成果」の作成を指導する。

修士論文：運動器疾患による身体障害にかかる研究を通じて専門領域を深化させ現場に還元できる研究成果を目指す。研究テーマは、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度を求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。例：研究課題として、「膝十字靱帯再建術後に膝へのストレスが少ない着地動作」をフォースプレートによる運動力学的解析および筋電計による電気生理学的分析、その他の工学的手法を用いて分析するなどが考えられる。

課題研究：運動器疾患による身体障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究の成果」にまとめる。「課題研究の成果」は、課題テーマに沿った3症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。3症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的・科学的考察、現場に直結する結論などを求める。なお、課題研究指導の過程で、当該学生の課題研究に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

■ 到達目標

修士論文

- ・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
- ・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
- ・研究成果についての的確にプレゼンテーションできる。
- ・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

- ・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
- ・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
- ・課題研究の成果についての的確にプレゼンテーションできる。
- ・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授 業 計 画

(修士論文)

- | | |
|-----------|---|
| 第1回～第15回 | 研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する |
| 第16回～第30回 | ディスカッションを繰り返し、研究計画書を作成する
研究計画書に基づき予備実験や予備調査を実施して研究計画の妥当性を検討、研究計画書を完成させる
完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する |
| 第31回～第45回 | 研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う |
| 第46回～第60回 | 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する |
| 第61回～第75回 | 論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける |

■ 授業計画

(課題研究)

- 第1回～第15回 課題研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する
- 第16回～第30回 ディスカッションを繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
課題研究計画書の承認後、臨床・臨地での活動を開始する。
- 第31回～第45回 臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる3例以上の症例報告をまとめる
- 第46回～第60回 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
3例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する
- 第61回～第75回 必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評価方法

- 修士論文：研究過程と修士論文の内容を総合的に勘案して評価する。
- 課題研究：3例以上の症例報告書および課題研究報告書の内容によって評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

修士論文、課題研究いずれにおいても、先行研究を十分に渉猟し、科学的根拠に基づいた論文、報告書を作成するよう心がけて欲しい。

また、修士論文においては、統計学的解析手法についても自己学習を進めておくこと。

具体的な学習の内容については、適宜指示をする。

■ 教科書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項

授業科目	認知・コミュニケーション障害支援学特論	担当者	松井 理直・森岡 悦子 山口 忍・井口 知也		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1 年	総単位数	4 単位
		開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

認知機能障害や言語・コミュニケーション障害の障害像を科学的に分析し、その評価法や治療法を探究する。特に構音障害・聴覚障害・障害の前提となる高次脳機能の構造や理論など基礎知識を深く理解したうえで、認知コミュニケーション障害領域の生活機能支援を包括的に実施できる知識を培う。各種症例を分析するための科学的手段に精通し、障害機序を考察するために必要な基本的知識の涵養を目指す。また障害が生活にもたらす影響について理解する。

■ 到達目標

- ・各種障害例の検査結果を基に症状を分析できる。
- ・分析した症状を基に障害機序を考察できる。
- ・障害が生活にもたらす影響について考えることができる。

■ 授業計画

- 第1回 音声と聴覚について
- 第2回 音声の生理学的・音響学的分析手法とその診断
- 第3回 聴覚障害の成り立ちと音響学的補聴の考え方について
- 第4回 聴覚障害に関わる脳機能と生理学的メカニズム
- 第5回 聴覚障害に関わる社会性
- 第6回 補聴器の仕組みと考え方
- 第7回 人工内耳の仕組みと考え方
- 第8回 聴覚障害児の生活における支援
- 第9回 聴覚障害児の生活における支援
- 第10回 高次脳機能の成り立ちと神経心理学的捉え方について
- 第11回 高次脳機能障害に係る脳機能系（認知機能とコラム構造、大脳の機能的階層、ネットワーク理論）
- 第12回 高次脳機能障害に係る脳解剖と脳画像読影法
- 第13回 注意・記憶機能とそのネットワーク
- 第14回 失語症言語学を基礎とした症状の理解と障害機序
- 第15回 高次脳機能障害に対する生活支援

■ 評価方法

授業中の理解度 30%、最終的なレポート提出 70%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習には先行研究の理解・論文執筆などにより、週 20 時間程度を要する。
復習は、技術の習得度合いにもよるが、週 10 時間程度を要する。

■ 教 科 書

■ 参考図書

教科書・参考図書については、適宜紹介し、必要な資料については時間中に配布する。

■ 留意事項

授業科目	認知・コミュニケーション障害支援学特論演習	担当者	松井 理直・森岡 悦子 山口 忍・井口 知也		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	2 年	総単位数	8 単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

認知・コミュニケーション障害を対象とする学生の社会へ還元する知識・技術に照らして、認知・コミュニケーション障害支援学特論で修得した知識を実践可能な高度専門知識・技能へと昇華させる。生活機能支援を実施する能力を培うため、前提となる基礎領域の知識を活用して、課題解決の方法論を文献検索やカンファレンスを通じて学修し、実践を通じて演習する。言語の心的過程・聴覚の機能・高次脳機能・コミュニケーションに関する理論とその障がいの特性、障がいを補う機器の性能や効果、限界を知ることにより、より適切で高度な生活支援技術を実践的に学べ、経験則ではない科学的なアプローチにつながる。よって、これらを実践的に学ぶことにより、対象者に科学的根拠のあるコミュニケーション支援技術を提供する能力を培うと共に、内外の主要文献や資料を裏付けとした臨床的推論が可能となる。

研究協力施設において、実際の聴覚障害例の評価、リハビリテーション、検証を実施し、障害機序と介入を関連づけ、発達・再学習過程を論理的に考察し、聴覚障害が生活にもたらす影響と支援方法を文献を通して情報収集し考察する能力を育成する。カンファレンスを通して、問題点を具体的に解決する能力を涵養する。

■ 到達目標

- ・ 臨床活動における課題について文献を通して情報収集し検証点を明らかにすることができる。
- ・ 研究協力施設での臨床において、障害機序と介入を関連づけ、変化を論理的に考察できる。
- ・ 認知コミュニケーション障害が生活にもたらす影響と支援方法を文献を通して考察することができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 言語とコミュニケーションの概観
- 第2回 言語理論の基礎
- 第3回 言語理解の心的過程
- 第4回 聴覚処理過程の基本
- 第5回 音声と聴覚
- 第6回 音声に関する生理学的研究方法
- 第7回 構音障害のリハビリテーション
- 第8回 聴覚障害の評価と、分析の方法
- 第9回 聴覚障害例の症状と検査所見
- 第10回 聴覚障害の障害機序の検討
- 第11回 障害機序に即したハビリ・リハビリテーションの考え方
- 第12回 発達や再学習過程から見た、ハビリ・リハビリの検証
- 第13回 症例1（研究協力施設の臨床例、以下同様）の状態・検査とその結果
- 第14回 症例1の臨床像から、ハビリ・リハビリの課題抽出とアプローチ
- 第15回 症例1の臨床像とそのハビリ・リハビリテーションを立案し、検証方法を検討する
- 第16回 症例1の臨床像に類似する例の長期的経過について、先行研究を検索し考察する
- 第17回 症例1の検査・評価・ハビリ・リハビリについて、科学的根拠をもって説明する
- 第18回 高次脳機能障害の評価と分析の方法
- 第19回 高次脳機能障害例の症状と脳画像所見
- 第20回 高次脳機能障害の障害機序の検討
- 第21回 障害機序に則したリハビリテーションの立案
- 第22回 経過から障害機序とリハビリテーション介入を検証する
- 第23回 症例2の症状、脳画像、評価結果から臨床像をまとめ、先行研究から問題点を明確化する
- 第24回 症例2の臨床像から、必要な掘り下げ検査の検討する

■ 授業計画

- 第25回 症例 A の掘り下げ検査の結果を分析し、障害機序を検討する
- 第26回 症例 A の障害機序に則したりハビリテーション方法を立案し検証方法を検討する
- 第27回 症例 A の生活にもたらす高次脳機能障害の影響と支援方法を文献を通して考察する
- 第28回 スポーツを通じた作業療法の現状と将来の問題
- 第29回 障害者スポーツの実践場面に関する分析手法
- 第30回 研究の倫理面の再検討

■ 評価方法

授業中の勉学態度 30%、最終レポート 70%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習には先行研究の理解・論文執筆などにより、週 20 時間程度を要する。
復習は、技術の習得度合いにもよるが、週 10 時間程度を要する。

■ 教科書

■ 参考図書

教科書・参考図書については、適宜紹介し、必要な資料については時間中に配布する。

■ 留意事項

授業科目	認知・コミュニケーション障害支援学特別研究	担当者	松井 理直		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

認知・コミュニケーション障害支援学特論、特論演習で習得した知識、技能をもとに、実際の臨床現場における障害の事例に対して適切な考察と診断を行い、「修士論文」の完成を目指す。「修士論文」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果を直接臨床現場に還元できるものにする。また、障害を考察する上で、様々な科学的分析手法に習熟することも目的の1つである。指導対象とする機器類や工学的技法の例を以下に挙げる。

- ・動的パラトグラフィ（EPG）による調音動態の測定法とその解釈。
- ・音声のフォルマント分析：音響的特徴から構音障害の特性を解釈する。
- ・音声合成：調音結合をはじめとする音声の特徴について理解する。
- ・マイボイス：ALS など構音が困難な対象者様の代替音声作成技術について習熟する。
- ・言語理解実験：条件文など複雑な文の理解過程を実験的に測定する技法を習得する。
- ・データ処理と統計学：線形混合モデル分析など、分散分析に代わる統計技法の基本を理解する。

修士論文：研究テーマは、言語障害・音声障害・音声に関わる聴覚障害に関するもので、実際にその成果を臨床現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

■ 到達目標

認知・コミュニケーション障害支援学特論、特論演習で習得した知識、技能をもとに、実際の臨床現場における障害の事例に対して適切な考察と診断を行い、「修士論文」の完成を目指す。修士論文は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果を直接臨床現場に還元できるものにする。また、障害を考察する上で、音響学的・生理学的検査機器に習熟することも目的の1つである。指導対象とする機器類の例を以下に挙げる。

修士論文：研究テーマは、言語障害・音声障害・音声に関わる聴覚障害に関するもので、実際にその成果を臨床現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

■ 授 業 計 画

修士論文

- | | |
|-----------|--|
| 第1回～第15回 | 研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する。
研究テーマの関連文献収集をすると共に、その内容を十分理解し、先行研究の批判を行った上で、新たな知見を得るための研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する。 |
| 第16回～第30回 | 作業仮説および対立仮説を立て、理論と現象の両面から結果を予測する。
作業仮説に基づき、先行研究に関する批判的な再検討を行う。
完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出し、発表する。 |
| 第31回～第45回 | 研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する。
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う。 |
| 第46回～第60回 | 中間発表を行い、複数の教員や研究者からの意見を聞き、研究の再検討を行う。
研究手続きの修正を行った上で、実験、調査によるデータ収集を継続する。
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する。 |
| 第61回～第75回 | 論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する。
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける。 |

■ 評価方法

修士論文：研究過程 20%、修士論文の内容 80% という割合で評価を行う。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習には先行研究の理解・論文執筆などにより、週 20 時間程度を要する。

復習は、技術の習得度合いにもよるが、週 10 時間程度を要する。

■ 教科書

■ 参考図書

教科書・参考図書については、適宜紹介し、必要な資料については時間中に配布する。

■ 留意事項

授業科目	認知・コミュニケーション障害支援学特別研究	担 当 者	山口 忍		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

認知・コミュニケーション障害支援学特論、特論演習で学修した知識、技能をもとに、高度専門職業人として社会で活躍していくための学修の成果として「修士論文」あるいは「課題研究の成果」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究の成果」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、社会に還元できるものにする。認知・コミュニケーション障害支援学特論、特論演習では認知・コミュニケーション障害支援を包括的に学んだが、これまでに学んだ知識や技能を用いて、学生の主たる対象者に特化した課題を設定し、認知・コミュニケーション障害支援学特論、特論演習で学んだ知識、技能をさらに深く学修しながら、「修士論文」、「課題研究の成果」にまとめる。

聴覚障害の症例において、機能評価、症状分析から障害メカニズムを考察し、治療介入による構築・再編成の可能性を模索し、認知・コミュニケーション障害の支援にどのように貢献できるのかを探る。

修士論文：聴覚障害にかかる研究を通じて専門領域を深化させ現場に還元できる研究成果を目指す。研究テーマは、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

課題研究：聴覚障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された対話・言語機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究の成果」にまとめる。「課題研究の成果」は、課題テーマに沿った3症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。3症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的・科学的考察、現場に直結する結論などを求める。なお、課題研究指導の過程で、当該学生の課題研究に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

■ 到達目標

修士論文

- ・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
- ・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
- ・研究成果について的確にプレゼンテーションできる。
- ・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

- ・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
- ・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
- ・課題研究の成果についての的確にプレゼンテーションできる。
- ・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授 業 計 画

修士論文

- | | |
|-----------|--|
| 第1回～第15回 | 研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する。 |
| 第16回～第30回 | ディスカッションを繰り返し、研究計画書を作成する
先行研究に基づき研究計画の妥当性を検討し、研究計画書を完成させる
完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する |
| 第31回～第45回 | 研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う |
| 第46回～第60回 | 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する |
| 第61回～第75回 | 論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける |

■ 授業計画

課題研究

- 第1回～第15回 課題研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する
- 第16回～第30回 ディスカッションを繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
課題研究計画書の承認後、臨床・臨地での活動を開始する。
- 第31回～第45回 臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる3例以上の症例報告をまとめる
- 第46回～第60回 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
3例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する
- 第61回～第75回 必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評価方法

修士論文：研究過程と修士論文の内容を総合的に勘案して評価する。
課題研究：3例以上の症例報告書および課題研究報告書の内容によって評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業科目	認知・コミュニケーション障害支援学特別研究	担 当 者	森岡 悦子・井口 知也		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

認知・コミュニケーション障害支援学特論、特論演習で学修した知識、技能をもとに、高度専門職業人として社会で活躍していくための学修の成果として「修士論文」あるいは「課題研究の成果」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究の成果」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、社会に還元できるものにする。認知・コミュニケーション障害支援学特論、特論演習では認知・コミュニケーション障害支援を包括的に学んだが、これまでに学んだ知識や技能を用いて、学生の主たる対象者に特化した課題を設定し、認知・コミュニケーション障害支援学特論、特論演習で学んだ知識、技能をさらに深く学修しながら、「修士論文」、「課題研究の成果」にまとめる。

高次脳機能障害の症例において、機能評価、症状分析から障害メカニズムを考察し、処理機構を構築するとともに、治療介入による再編成の可能性を模索し、認知・コミュニケーション障害の支援にどのように貢献できるのかを探る。

修士論文：高次脳機能障害にかかる研究を通じて専門領域を深化させ現場に還元できる研究成果を目指す。研究テーマは、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

課題研究：高次脳機能障害にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究の成果」にまとめる。「課題研究の成果」は、課題テーマに沿った3症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。3症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的・科学的考察、現場に直結する結論などを求める。なお、課題研究指導の過程で、当該学生の課題研究に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。（森岡・井口）

■ 到達目標

修士論文

- ・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
- ・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
- ・研究成果についての的確にプレゼンテーションできる。
- ・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

- ・専門領域の課題テーマについて文献の適切な収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
- ・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
- ・課題研究の成果についての的確にプレゼンテーションできる。
- ・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授 業 計 画

修士論文

- | | |
|-----------|--|
| 第1回～第15回 | 研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する。 |
| 第16回～第30回 | ディスカッションを繰り返し、研究計画書を作成する
先行研究に基づき研究計画の妥当性を検討し、研究計画書を完成させる
完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する |
| 第31回～第45回 | 研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う |
| 第46回～第60回 | 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する |
| 第61回～第75回 | 論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける |

■ 授業計画

課題研究

- 第1回～第15回 課題研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する
- 第16回～第30回 ディスカッションを繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
課題研究計画書の承認後、臨床・臨地での活動を開始する。
- 第31回～第45回 臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる3例以上の症例報告をまとめる
- 第46回～第60回 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
3例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する
- 第61回～第75回 必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評価方法

- 修士論文：研究過程と修士論文の内容を総合的に勘案して評価する。
- 課題研究：3例以上の症例報告書および課題研究報告書の内容によって評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習・復習に3～4時間程度。

■ 教科書

■ 参考図書

教科書・参考図書については、適宜紹介し、必要な資料については時間中に配布する。

■ 留意事項

授業科目	健康生活支援学特論	担当者	藤岡 重和・柴田 雅朗		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1 年	総単位数	4 単位
		開講時期	後期	選択・必修	選択

■ 内 容

感染予防や疾病予防は、健康増進と要介護状態を防止する基盤である。要介護状態に至る過程では体力のみではなく、生活機能を低下させた原因が存在する。その大きな要因が感染や疾病であることは自明である。この特論では、健康に生活し要介護状態に陥らないための病気にならない知識と方法論を学ぶ。感染予防では、疫学的、科学的根拠を提示し、感染症予防の理論と方法論を探究する。次に、各種の感染症について感染症予防の基礎を理解する。これらの学習を通じて、感染予防の観点から健康生活を支援できる知識を培う。

■ 到達目標

(藤岡) 各種感染症のメカニズムおよび予防法を理解する。
(柴田) 生活習慣病の病理とそれら発症機序となるシグナル経路の解析法とその理論を説明することができる。また、補完代替医療とは何かを理解し、その現状を捉えることができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 感染症予防の理論と方法 1 (藤岡重和)
- 第2回 感染症予防の理論と方法 2 (藤岡重和)
- 第3回 感染症予防の理論と方法 3 (藤岡重和)
- 第4回 呼吸器感染症、消化器感染症予防 (藤岡重和)
- 第5回 尿路感染症、性感染症、皮膚、粘膜の感染予防 (藤岡重和)
- 第6回 人獣共通感染症、寄生虫感染予防、母子感染予防 (藤岡重和)
- 第7回 感染防御機構と予防接種 (藤岡重和)
- 第8回 院内感染対策 (藤岡重和)
- 第9回 生活習慣病とは (柴田雅朗)
- 第10回 疾病予防のための生体内酸化ストレス解析法とその理論 (柴田雅朗)
- 第11回 疾病予防のためのアポトーシス解析法とその理論 (柴田雅朗)
- 第12回 疾病予防のための脈管新生解析法とその理論 (柴田雅朗)
- 第13回 疾病予防のための細胞周期・タンパクリン酸化解析法とその理論 (柴田雅朗)
- 第14回 疾病予防のための免疫能解析法とその理論 (柴田雅朗)
- 第15回 補完代替医療の有効性とその問題点 - 発表と検討会 (柴田雅朗)

■ 評価方法

(藤岡) 各講義での課題レポート 40% (各回レポートを100%で評価しその平均の40%) 筆記試験 10%
(柴田) レポート 25% 口頭試問 25%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

終了した講義について復習をしっかりと下さい。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：「カラーアトラス 基礎組織病理学 第4版」

著者名：A. スーパーブンス 他著

出版社：西村書店

書 名：「病気がみえる 循環器 第3版」

著者名：医療情報科学研究所 編

出版社：メディックメディア

書 名：がんの分子生物学 メカニズム・分子標的・治療 第2版

著者名：Lauren Pecorino 著

出版社：メディカル・サイエンス・インターナショナル

書 名：「循環器疾患のサイエンス」

著者名：小室一成 編

出版社： 南山堂

■ 留意事項

授業科目	健康生活支援学特論演習	担 当 者	藤岡 重和・柴田 雅朗		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	2 年	総単位数	8 単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

健康生活支援学特論（感染・疾病予防）で学んだ、健康に生活し要介護状態に陥らないための病気にならない知識と方法論、つまり、感染予防、疾病予防の方法論を基盤に、社会に還元できる実践的技能を養うと共に、健康に生活していくための疾病予防、感染予防の具体的実践方法の模索を行う。内外の主要な文献や資料をもとに科学的根拠ある疾病予防、感染予防の方法論を演習するとともに、院内感染対策活動を実際に体験することで、社会で実践できる感染予防技術を培う。

■ 到達目標

（藤岡）米国疾病予防管理センター、日本感染症学会の各種感染症対策ガイドラインを講読し、感染症予防の具体的実践方法を習得する。次に、種々の感染症例提示と討議、協力医療施設での症例検討、分析、感染対策活動を通して社会で実践できる感染予防技術を培う。

（柴田）天然成分による生活習慣病の予防効果に関する内外の論文を理解でき、研究論文に対して科学的に肯定あるいは否定できる考察力を養い、論文の良し悪しを見抜く能力を修得する。その結果として得られた知見をデザイナーフーズ表にまとめ、対象者に適用できる形にまとめることができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 米国疾病予防管理センター感染症対策ガイドライン講読（藤岡重和）
- 第2回 米国疾病予防管理センター感染症対策ガイドライン講読（藤岡重和）
- 第3回 日本感染症学会感染症対策ガイドライン講読（藤岡重和）
- 第4回 感染症 CPC 文献抄読会：学生が選択した文献抄読（藤岡重和）
- 第5回 感染症 CPC 文献検討会：抄読会で顕在化した問題を検討（藤岡重和）
- 第6回 模擬呼吸器感染症例提示、症例分析（藤岡重和）
- 第7回 模擬尿路感染症、性感染症例提示、症例分析（藤岡重和）
- 第8回 模擬皮膚・粘膜感染症、人獣共通感染症、寄生虫感染症例提示、症例分析（藤岡重和）
- 第9回 模擬母子感染症例提示、症例分析（藤岡重和）
- 第10回 第10回～12回を病院演習第1日目午後半日で演習する。
協力医療施設における症例分析：症例 A の臨床経過、臨床検査結果を提示（藤岡重和）
- 第11回 協力医療施設における症例分析：症例 A 検討会（藤岡重和）
- 第12回 協力医療施設における症例分析：学生の疑問点を分析、感染予防方法を探求する（藤岡重和）
- 第13回 第13回～15回を病院演習第2日目午後半日で演習する。
協力医療施設における症例分析：症例 B の臨床経過、臨床検査結果を提示（藤岡重和）
- 第14回 協力医療施設における症例分析：症例 B 検討会（藤岡重和）
- 第15回 協力医療施設における症例分析：学生の疑問点を分析、感染予防方法を探求する（藤岡重和）
- 第16回 第16回、17回を病院演習第3日目午後半日で演習する。
担当教員監督のもと、院内感染対策活動に参加し、感染予防の具体的実践方法を学修する。
- 第17回 協力医療施設における院内感染対策活動参加（藤岡重和）
担当教員監督のもと、院内感染対策活動に参加し、感染予防の具体的実践方法を学修する。
- 第18回 第18回、19回を病院演習第4日目午後半日で演習する。
協力医療施設の院内感染対策カンファレンス参加（藤岡重和）
担当教員監督のもと、院内感染対策カンファレンスに参加し感染予防の具体的実践方法を学修する。
- 第19回 協力医療施設の院内感染対策カンファレンス参加（藤岡重和）
担当教員監督のもと、院内感染対策カンファレンスに参加し感染予防の具体的実践方法を学修する。
- 第20回 症例 A の分析発表、文献的考察、討議（藤岡重和）

■ 授業計画

- 第21回 症例 B の分析発表、文献的考察、討議（藤岡重和）
- 第22回 症例 A、B の分析発表、文献的考察、討議からレポート作成・指導（藤岡重和）
- 第23回 感染対策活動等報告、レポート作成・指導（藤岡重和）
- 第24～27回 生活習慣病の理解を深めるための論文抄読会および討論（消化器系）（柴田雅朗）
※「生活習慣病と主要部位のがん」（九州大学出版会）を用いて疾患毎に抄読する。
- 第28回 教員による論文紹介とその解説（柴田雅朗）
- 第29～33回 生活習慣病の理解を深めるための論文抄読会および討論（呼吸器系および生殖器系）（柴田雅朗）
※「生活習慣病と主要部位のがん」（九州大学出版会）を用いて疾患毎に抄読する。
- 第34回 教員による最新の論文紹介とその解説（柴田雅朗）
- 第35～38回 生活習慣病と天然成分の因果関係を学ぶための抄読会および討論（柴田雅朗）
※「がんの疫学」（東京大学出版）を用いて、臓器毎に天然成分と発がん予防についての章を抄読する。
- 第39回 教員による最新の論文紹介とその解説（柴田雅朗）
- 第40～43回 生活習慣病と天然成分の論文抄読会および討論（柴田雅朗）
※ α -マンゴスチンと生活習慣病の論文（英文）を詳細に読み説いていく。
- 第44～45回 各疾病予防に効果のある食品・成分のデザイナー・フーズ表の発表と検討（柴田雅朗）

■ 評価方法

（藤岡）各講義での課題レポート 40%（各回レポートを100%で評価しその平均の40%） 筆記試験 10%
（柴田）レポート 25% 口頭試問 25%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

終了した講義について復習をしっかりとして下さい。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：生活習慣病と主要部位のがん
著者名：日本がん疫学研究会がん予防指針検討委員会 編
出版社：九州大学出版会

書 名：がんの疫学
著者名：田島和雄 他編
出版社：東京大学出版会

書 名：がんの分子生物学 メカニズム・分子標的・治療 第2版
著者名：Lauren Pecorino 著
出版社：メディカル・サイエンス・インターナショナル

書 名：「循環器疾患のサイエンス」
著者名：小室一成 編
出版社： 南山堂

■ 留意事項

授業科目	健康生活支援学特別研究	担 当 者	柴田 雅朗		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

生活習慣病を中心とした疾病について、健康生活支援学特論演習（感染・疾病予防）の中から惹起された研究アイデアに基づき、新規天然物質の有効性の有無や、既存の天然物質の新たな生理活性などを、細胞などの生物系モデルを用いて、形態学的ならびに分子生物学的に追究し、かつその作用機序を解析し、「修士論文」にまとめる。

■ 到達目標

研究過程から修士論文をまとめるまでに以下のことを学ぶ。

- ・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
- ・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
- ・研究成果についての的確にプレゼンテーションできる。
- ・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授 業 計 画

- | | |
|-----------|---|
| 第1回～第15回 | 研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する |
| 第16回～第30回 | ディスカッションを繰り返し、研究計画書を作成する
研究計画書に基づき予備実験や予備調査を実施して研究計画の妥当性を検討、研究計画書を完成させる |
| 第31回～第45回 | 完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
研究計画書に基づき実験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う |
| 第46回～第60回 | 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、再実験ないしは追加実験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する |
| 第61回～第75回 | 論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける |

■ 評価方法

修士論文、課題研究報告書を主査および副査が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

生活支援学概論、生活支援学特論、生活支援学特論演習で学修した内容をよく復習しておくこと。
研究テーマの関連文献収集と当該分野における最新情報の把握が重要です。担当教員より、必要に応じて参考図書、文献を提示するので、研究分野における最新情報を把握しておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項

授業科目	健康生活支援学特別研究	担当者	藤岡 重和		
学 科 名	保健医療学研究科	学 年	1～2年	総単位数	10単位
		開講時期	通年	選択・必修	選択

■ 内 容

健康生活支援学特論、特論演習で学修した知識、技能をもとに、高度専門職業人として社会で活躍していくための学修の成果として「修士論文」あるいは「課題研究の成果」の完成を目指す。「修士論文」や「課題研究の成果」は、修士号を得るための一つの過程ではなく、その成果が直接、社会に還元できるものにする。健康生活支援学特論、特論演習では健康維持増進、感染予防、疾病予防を包括的に学んだが、これまでに学んだ知識や技能を用いて、学生の主たる対象者に特化した課題を設定し、健康生活支援学特論、特論演習で学んだ知識、技能をさらに深く学修しながら、「修士論文」、「課題研究の成果」にまとめる。

修士論文：感染予防にかかる研究を通じて専門領域を深化させ現場に還元できる研究成果を目指す。研究テーマは、その成果が大学院修了後に現場における生活機能支援に還元できるものとする。また「修士論文」は、学生の職域における学術的特色や独創性、貢献度などを求める。なお、研究指導の過程で、当該学生の修士論文に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。例：感染予防における消毒薬、ワクチン、薬剤の有効性に関する課題を探索し、各種の感染予防のための方策の有効性を明らかにする。また、感染予防の観点から、微生物学、分子生物学的手法も取り入れ、感染症の原因となる病原微生物の検出、感染経路の同定、感染症診断のための技術開発を行い、研究成果を広く社会に還元する。

課題研究：感染予防にかかる臨床・臨地の実践から導き出された生活機能支援に有用な介入や活動あるいは臨床・臨地実践の疑問を解決する方法論を科学的根拠に基づき考察し、「課題研究の成果」にまとめる。「課題研究の成果」は、課題テーマに沿った3症例以上を臨床現場で選択して実践介入し、そこから得られた知見を症例報告としてまとめる。3症例の実践経験から得られた知見を統合し、課題テーマを解決する結論へと導き、「課題研究報告書」にまとめる。「課題研究報告書」は、実際に展開された臨床的推論の明確さ、介入等による変化についての論理的・科学的考察、現場に直結する結論などを求める。なお、課題研究指導の過程で、当該学生の課題研究に該当する研究方法論や研究倫理を指導する。

■ 到達目標

修士論文

- ・専門領域の研究テーマについて文献の適切な収集、必要な実験・調査の的確な方法論構築ができる。
- ・研究結果について、論理的思考ができ、その思考を論文にまとめることができる。
- ・研究成果についての的確にプレゼンテーションできる。
- ・研究成果を社会に還元する術を説明できる。

課題研究

- ・専門領域の課題テーマについて、文献の収集、科学的根拠に基づいた介入実践ができる。
- ・介入実践の経過や結果を論理的に考察でき、その思考を報告書にまとめることができる。
- ・課題研究の成果についての的確にプレゼンテーションできる。
- ・課題研究の成果を社会に還元する術を説明できる。

■ 授業計画

修士論文

- 第1回～第15回 研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
研究テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに研究デザインを考え、研究計画書原案を作成する
- 第16回～第30回 ディスカッションを繰り返し研究計画書を作成する
研究計画書に基づき予備実験や予備調査を実施して、研究計画の妥当性を検討、研究計画書を完成させる。完成させた研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
- 第31回～第45回 研究計画書に基づき実験、調査または臨床試験を実施してデータを収集する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行う
- 第46回～第60回 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、実験、調査、臨床試験を実施してデータ収集を継続する
収集したデータを解析して論理的な解釈を行い、論文を執筆する
- 第61回～第75回 論文執筆とともに、追加実験、再分析、文献再収集等、必要な対策を実施する
論文を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

課題研究

- 第1回～第15回 課題研究遂行に必要な研究方法論と研究倫理を指導する
課題テーマの関連文献収集と整理および取り扱う分野における最新情報把握
関連文献や先行知見をもとに臨床・臨地活動の方法も含めて課題研究計画書原案を作成する
- 第16回～第30回 ディスカッションを繰り返し、課題研究計画書を作成する
課題研究計画の臨床・臨地活動との整合性を検討、課題研究計画書を完成させる
完成させた課題研究計画書を研究科委員会および研究倫理委員会へ提出、発表する
課題研究計画書の承認後、臨床・臨地での活動を開始する。
- 第31回～第45回 臨床・臨地現場における実践を積極的に実施し、課題テーマの考察を深める
臨床・臨地活動の成果として課題研究の基盤となる3例以上の症例報告をまとめる
- 第46回～第60回 中間発表を行って複数の教員や研究者から意見を聞き、軌道修正する
軌道修正を行いながら、臨床・臨地活動を実施して課題テーマの考察を継続する
3例以上の症例報告をもとに考察した課題テーマを整理し、論理的な解釈を行い、報告書を執筆する
- 第61回～第75回 必要に応じ臨床・臨地活動を継続して、現場に還元する知識・技能を整理、報告書を完成させて提出し、審査による最終評価を受ける

■ 評価方法

修士論文、課題研究報告書を主査および副査が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

生活支援学概論、生活支援学特論、生活支援学特論演習で学修した内容をよく復習しておくこと。
研究テーマの関連文献収集と当該分野における最新情報の把握が重要です。担当教員より、必要に応じて参考図書、文献を提示するので、研究分野における最新情報を把握しておくこと。

■ 教科書

■ 参考図書

適宜紹介する。

■ 留意事項